
LastDarkness

風美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LastDarkness

【Nコード】

N7370C

【作者名】

風美

【あらすじ】

傀儡師、倉渕祐作を討ち取り、ようやく国立魔術アカデミーに平穏が戻ってきたはずだった。そこに現れたのは教皇騎士団の少年。白い刃が朽葉悠斗に襲いかかる。どうやらまた巻き込まれてしまったらしい。そして満月の夜に悠斗は”彼女”と出会う。魔術・魔法・神話が絡むバトルアクション。

プロローグ

ある夏の日のことだった。

空きやだった隣家に清水家が引っ越してきた。

朽葉悠斗、当時五歳。母親曰く、テレビの特撮ヒーローに見向きもせず、図書館で借りた純文学を読みながら、国会の生中継を『ふつ、大人は馬鹿ばかりだな』と鼻で笑う子どもだったらしい。

……自分のことながら気色悪いガキだと思う。

清水家は母親と娘の二人家族。

悠斗少年は父親のいない家族のことを最初こそ不思議がったものだが、次第に打ち解けて行った。とは言え五歳児同士で恋心なんて芽生える訳はない。

と言うより、清水家の娘さんは完全にアウトオブ眼中。

清水家の若奥さんは黒髪の未亡人で、近所の高校に入って学生になっても十分通用する。それほど若々しくて、おまけに美人である。悠斗少年は毎晩『どうすれば清水家の未亡人をモノにできるか』について真剣に考えているのであった。

そんな少年の初恋に気付いた清水家の娘さんは、焦燥感を募らせて行った。五歳児に女の勘があるのか、甚だ疑わしいものだが、少なくとも自分にこれっぽっちの関心も向いていないことは自覚していた。

内気だった少女は公園デビューに失敗し、番長格の七歳児に目を付けられた自分を救ってくれたのが悠斗少年だった。

髪の毛にガムを付けられたり、スカートをめくられたり、かくれんぼで放置プレイ。これらを客観的に見ていた大人はこう評した。

『あら、あの子はあの女の子のことが好きなのね』と。

しかし、たかが五歳児にそこまでの判断能力はない。

少女にとって番長は恐怖の象徴。番長が狙っている女の子だから、他の子は何だか話し難い。なら女の子と遊べば良いのに と、そ

これまでの思慮が行かないのが（しつこいようだが）五歳児である。そもそも、この公園をシメる番長は惚れっばい性分で、遊びにくる女の子をことごとく苛めてきた。だから、女の子が寄り付かなくなっただのである。

このままだと少女もこの公園を去ったのだらう。

その前に話しかけたのが、悠斗少年だった。

「ねえ、君のお母さんの名前って何？」

それが少年の第一声だった。

初恋は実らないものだ。

でも少女はポジティブシンキング。

無意識に恋敵である母親にすがり付く少女。『どうすれば悠斗君の子どもができるかなあ？』などと訊ねてみると、母親は微妙に笑みを引き攣らせる。親としてはあまり……と言つか絶対に答えたくない質問である。

母親は冷静とは言い難いが沈着な性格なので、この手の質問に対してのシミュレートは万全を期していた。

『私はどうやって生まれたの？』と訊ねられれば、『それは橋の下から拾ってきたからお母さんにも分からないの』と答えられるほどである。

ここで冷静ではない母親の性格が仇となった。ちよっと方向性を変えただけの質問に、完全に思考が真っ白にされてしまう。

母親は百科事典を持ち出し、はしたない知識を愛娘に教え込んだ。『大丈夫、最初は男がリードしてくれる』なんて、もう放送コードを度外視した言葉まで出てくるほどである。

まあ、（しつこいが）ただの五歳児に理解できる訳がない。

そんな母親の言葉の中で、少女が理解したことがたった一つ。

『お互いのことを良く知らずに、そんなことをしては駄目ですよ』と。

なので、少女は自分の秘密を打ち明けることにした。まずはお互

いのことを良く知ることが先決だ。

清水涼子、二十七歳、未亡人。ブラのサイズはDカップ。好物は白玉あんみつ。苦手な物はゴキブリ。他にも汗やガソリンなどの不快臭が苦手で、異臭がする物体の半径十メートル圏内には近付こうともしないらしい。

清水　えーっと、誰だっけ？

悠斗少年は清水家の娘さんの名前を覚えていない。呼びかけるときは『おい、お前』なので、特に問題はなかった。

少女との会話の内容は『最近思うんだけど、自殺マニュアルを有書図書にするのはどうよ？』だとか、『あの汚職議員、愛人を五人も困っていたらしいぞ。もし涼子さんに手を出していたらと思うとゾツとする』だとか、『アニメの第一話って作画に気合入ってるから面白いけど、ストーリーは意味不明だと思わないか？』と実に多彩である。

そんなボキャブラリーに富む少年に、少女は知性を感じて両目をキラキラとさせている。少女は少年が背中に薔薇の花を背負っているように見えていた。無論、錯覚であることは言うまでもない。

「あのね、私の家系って」

「ああ、火の車なのか。なおさら涼子さんが心配だな」

と言う五歳児。その家計ではない。

「魔法使いなんだよ……って、ええっ！？　火の車って車が燃えているの？」

「ガソリンが入っているから良く燃えるはずだ。いや、最近は電気で動いているのか」

「ガソリンって飲み物？」

「ドリンクと響きが似ているが、飲んだら死ぬな。まず間違いなく平然と答えながら、悠斗少年は会話の中の違和感をどうするか迷った。『魔法使いだと？　さては貴様、電波か？』と言っても、どうせ理解できないのだろう。子どもは全員電波のようなものだし、

と常々考えている少年である。

しかし、家系ということは涼子さんも　なのだろうか。
ならば、それは捨ててはおけない。

「見せてみる」

「うんっ！」

少女は満面の笑みを浮かべ、右手を大空に伸ばした。

『大地を潤せ、典雅の水！』

局所的な大雨が二人に降り注ぐ。

「で、俺を濡らしてどうするよ？」

「あ、あはは……」

ずぶ濡れにされて不快そうに口元を歪める少年に、少女は引き攣
った笑みを漏らした。

プロローグ（後書き）

この小説を読む上での注意点みたいなもの。

後書きは最新話のみ。古いものは消してしまいます。
自分の場合なのですが、読んでいる途中に後書きが入り、
話が中断してしまうのが嫌いなので。

以上、初めての方はよろしくお願いします。

01：国立魔術アカデミー

「ぎゃあああああああああああ！！」

国立魔術アカデミーの男子寮に、あられもない悲鳴が響き渡った。時刻は深夜帯。もし悲鳴が『アーツ！』とかだったなら、男子全員が色めき立ったはずだ。……自分の尻を隠しながら、自室に逃げ帰ったことだろう。

この男子寮の学生たちが飢えているのは間違いないが、衆道（男色のこと）に走るほどプライドを捨てていない。女子寮への潜入作戦を試みているのは、プライドを投げ捨てていると言えるのだが。

四月十日、午後三時。だが、ここにいる奴らは口を揃えてこう言うだろう。

『四月九日、午後二十七時』と。

娯楽室のテレビの周りに集まるのはアニメオタクたち。

部屋の片隅では麻雀が繰り広げられている。イカサマをしていた奴が素っ裸にされ、身動きができないように全身をロープで縛られ（なぜか亀甲縛りだった）、女子寮の玄関に運び出されている。

小腹が空いた奴らは食堂に集まり、その場で酒盛りを始めてしまった。酒に酔った奴らは娯楽室に雪崩れ込み、さらなる酔っ払いを量産する。

さらば、我らの麗しき春休み。

生徒たちは別れを惜しんで最後の盛り上がりを見せている。

「ぎゃあああああああああ！！」

盛り上がりの最たるものは時折響いてくる男子の絶叫だ。

女子寮の方角から『薙ぎ払え、真空の刃！』と呪文を唱える声がある。また女子寮に侵入しようとした生徒が撃退されているようだ。朽葉悠斗はこの世の終わりのような光景から目を逸らすと、何事もなかったかのように入り口の広間に移動した。ソファに腰を下ろすと、小脇に抱えていた魔導書を開く。

とは言いつつ、もう日本生活は十年に達しようとしている西洋人である。

「ここは日本だ。良かったな、好きなだけ触れている」

「悠斗の上着が欲しいんだよ！」

「黙れ、酔っ払い」

裸じゃなかったら着せてやったのだが、とは言葉にせずに悠斗は自室に戻ることにした。

十

国立魔術アカデミーの学生寮は、本校舎から徒歩五分の距離にある。四方を強力な結界で覆っているのはアカデミーと同じである。

結界は防御効果もさることながら、領域に特殊効果を付与することも見逃すことはできない。寮長曰く、『魔力を持たない一般人には見えない領域』を作り出しているとのこと。

……今年こそは平和な学生生活を送りたいものだ。

校門を横切った朽葉悠斗はしみじみとそう思う。厄介事を嫌うなら、そもそも魔術なんて世界に首を突っ込むべきではなかったのだが、すぎたことを言っても仕方がない。

視線を背後の校門に戻せば、生徒会の腕章を付けた者たちが、真新しい制服を着た者たちに色取り取りの造花を配っている。生徒会の連中も朝から大変だな、と苦笑してクラス表が張り出されている掲示板へと足を運ぶ。

掲示場所に、人の影はほとんどなかった。

込み合うことを予想して早めに登校したのは正解だったらしい。

これから入学式を行うので通学路は新入生ばかりで、私服の自分は少しばかり目立っているのだが、周囲から浮いても気にしないことにしている。どうせ、この学校には自分よりも目立つ連中が腐るほ

どいるのだから。

「……あの、すいません」

新入生と在校生の見分け方は、そう難しくはない。

この学校には規定の制服と言うものがあり、男子は濃紺のブレザーにグレーのスラックス、女子はベージュに赤のチェックが入ったスカートを着ている。私服を着ているのは新二年生か三年生だ。

悠斗に声をかけたのは、制服を着た少女だった。

新入生だ。

「入学式ってどこで行われるのでしょうか？」

「あゝ、結構ややこしいぞ」

「道順が、ですか？」

「いや、そうじゃなくてだな……」

少女の雰囲気は純和風で、着物が良く似合いそうだった。

髪型は背中の中ほどまで伸ばされた黒髪のロングストレート。物腰は落ちて着いていて育ちの良さを感じさせる。性格は大人しそうだが、芯が強そうだ。ここぞと言うときに自分の主張を曲げたりしないタイプのように見える。

「とりあえず、ついて来て」

「……あつ、はい。よろしくお願いします」

校門で生徒会に引き渡した方が楽だろう。これから彼女に降りかかることを考えると、気の毒に思わなくもないが、苦労するのはすべての新入生に言えることだ。

と言うのも、国立魔術アカデミーの入学式は……。

「あの、お名前をお聞きしても良いでしょうか？」

「朽葉悠斗、今年から二年だ」

「朽葉さん……ですね。あつ、私の名前は百合原綾香です」

悠斗が振り返ると、綾香はにっこりと微笑んだ。

二人は校門までたどり着く。生徒会の連中は大忙しで二人に気付かない。昨年、生徒会の手足となっていた執行部が廃部されたので、今年は多めに手伝いを用意していたようだが、このような仕事に不

慣れなようで、かえって邪魔になっていた。

「茜崎、こつちにも花をくれないか？」

「ッ！……なんだ、朽葉か。脅かさなくてくれよにやー」

大方生徒会の連中に怒鳴られていたのだろう。ビクリと震えた金髪少年は、悠斗の顔を見ると安堵の息をする。

素行不良のため、生徒会（の副会長）に弱みを握られている少年は、こんなときに助っ人に引き出される。

「まあ、とにかく助かったぜよ。人手は多いに越したことはないからにやー」

「誰が手伝ってやると言った？ 俺はその造花をくれと言っているんだ」

「……マジ？」

少年は涙目で悠斗にすがり付く。

「嘘を言っても仕方がない」

「ええっ！？ この最悪な空気を見て少しは同情したくならないのかにやー！？ 貴様は鬼か！？ それとも悪魔なのかにやー！？」

「今年から平和に生きることに関心したんだ」

波乱の中心にある生徒会にはもう近付きたくない。

溜息を吐きながら、少年の手から造花を分捕る。

父の日に送られるカーネーション。花弁は開いていない。今は蕾の状態である。

「ほら、百合原」

「あつ、ありがとございます。でも、これは？」

「新入生全員に配られているものだからな。本来なら生徒会が渡すべきなのだが、見逃してしまったのだろう。許してやってくれ」

「それは構わないのですが……この花に何かの意味があるのでしょうか？ あと百合原ではなく綾香と呼んで下さい」

悠斗は困惑した。百合原の苗字に何かあるのだろうか。

話が進まないのとおりあえず頷いておく。

「では綾香、この学校の入試ってどんなものだったか覚えているか

？」

「はい、もちろんです。筆記テストと実技テストで、筆記は魔術理論の初歩を、実技は魔術理論の実践を確かめるものでした」

「簡単だったか？」

「……あまり偉そうなことは言いたくないんですけどね」

綾香は微妙そうな顔をした。あまりに入試が簡単なために『国立魔術アカデミーもこの程度か』と慢心する者がいるため、謙虚になるのは悪いことではない。それを思い知らされるのがこの入学式である。

「そう、あんなテストで実力順にクラス編成を組める訳がない。死にかけないと発動しない魔法もあるからな。だから、この入学式は新入生の潜在能力がどれだけのものか確かめるためにある」

「で、ここで出てくる造花が第二の入試って訳だにやー」

「……人の台詞を取るな」

横から乱入して綾香の手にある造花を奪い取った少年は「あつ、俺は茜崎克己ね。よろしくう！」と自己紹介している。綾香は「はい、こちらこそ」と真面目に頭を下げていた。

「俺は悠斗みたいに頭でつかちじゃないからにやー。要点だけを説明するよん」

「あの……『にやー』とは？」

「気にしないでやってくれ。ちょっと病気なんだ」

悠斗の言葉に綾香は可哀想なものを見る目をした。

それには気付かず、克己は説明を続ける。

「まずはこの造花に開錠の魔術を使うにやー。んで、中に入っていた課題をこなすと入学式の会場が判明するのだね。ちなみに、この造花には映像記録魔術が使われているから気を抜かないことだよん」

「で、記録された映像を見てクラスを分ける」と

「でも、毎年無事に課題を達成できるのは数人だけなんだけどにやー」

ちなみに去年は三人だった、と悠斗は補足する。

綾香はゴクリと生唾を飲んだ。たかが入学式にそこまでの仕掛けをするのかと、今さらになってアカデミーの特殊性を実感している様子だった。

だが、大変なのは新入生だけではない。

入学式なのに、どうして上級生が登校しているのか。

始業式は明日である。クラス編成を確かめるためではない。

では、なぜなのか。

「開錠の魔術ですね……」

綾香は克己が手にしていた造花に右手を向けた。

「真実を開け、開錠の光！」

唱えられる呪文に反応し、カーネーションの蕾が開いた。

中にはトランプサイズのカードが一枚。朱色の文字で書かれた課題に、悠斗は思わず眩暈を感じた。

「新入生を二十人以上倒せ」

それは昨年悠斗が引いたカードとまったく同じものだった。

02：魔術師の戦い方

新入生を倒せという課題があるなら。

上級生を倒せ　なんて課題もある。

校門で綾香と分かれた悠斗は、クラス表を確認してから隠れ場所を探した。帰宅したいのは山々だが、上級生は規定の時間まで校内に留まらなければならない。中には「（個人名）と協力して（個人名、大抵は教師の名前）を探し出せ」のような課題もあるので、新入生のすべてが敵ではないのだが。

……今年こそは平和な日常を。

悠斗は頭痛に耐えながら図書室に入った。まさか、このような場所で暴れる馬鹿はいないだろう。貴重な魔導書を燃やしてもすれば、学園側が怒り狂うからだ。とりあえず、この場所なら奇襲は避けられる。

と考えていたのだが……。

図書室の入り口で魔導書を開いていた少女が、不敵に微笑んでいた。

「場所を変えないか？」

金髪に碧眼の西洋人である。それにしても体格が小さくて（特に胸囲が）小動物のようだった。西洋人のすべてが大柄というのは偏見なのだろう。

『図書室に入った者を、五人倒せ』

少女はふふんと鼻で笑った。

「ちなみに、もう三人倒しているぞ。この学校の生徒も大したことはないな」

少女の慢心が手に取るように分かる。

悠斗は苦笑するのを我慢し、屋上に足を運んだ。

吹き抜ける風が、春の陽気を感じさせる。

悠斗が振り返ると、少女はもう臨戦態勢に入っていた。

「アリス・キリングゲート。キリングゲートファミリーの長女だ」
「……なるほど」

クロードの妹ってことか。

二日酔いのために朝食を残していた金髪碧眼の少年を思い出し、悠斗はまたも苦笑する。それが感に触ったのか、アリスはむっと眉をひそめた。

「子どもだと思つて侮るなよ。キリングゲートの血系魔法は」

「『フラッディ・クリスタルシールド
血液水晶』だろ？」

「！」

両目を見開いたアリスは一步退いた。心理的に揺さぶりをかける単純な手法に、こつも簡単に引つかかってくれるとはアリスも人が良い。

「どうしてそれを！」

「ドイツの魔術カルテルを牛耳っているキリングゲート家には、代々受け継がれた魔法がある。血液の流動操作、個体と液体の状態操作、個体にした血液に金属並みの強度を与える物体強化を付与する血系魔法。中々強力な魔法だよな」

「うるさいッ！ もう黙れ！」

「黙ったまま魔術が使えるなら黙ってやるさ」

「もう良い！ 行くぞ！」

「せつかちだな」

『打ち砕け、水龍の尾！』

悠斗は上方から襲い掛かってくる圧力に、軽くステップして避けた。直後、先ほどまでの立ち位置に濁流が降り注ぎ、コンクリートの地面が砕け散る。

「まあ、落ち着けよ。話は最後まで聞くものだ」

「うるさい、黙れ！ 私を動揺させようとしても無駄だぞ！」

「……こんなもので十分か。」

悠斗はそれまで浮かべていた不敵な苦笑をかき消した。

『鍛えろ、練金の力』

足元に落ちているコンクリート片を掴み取る。先ほどアリスの魔術で砕かれたものだ。

『刺され、水龍の牙！』

降り注いだ液体が、一本の槍になって悠斗の心臓を狙う。直撃すれば死んでしまうほどの一撃だった。

しかし、悠斗はコンクリート片で水の槍を受け止めた。

「容赦のない攻撃だ。だが、問題はない」

「馬鹿な！ ただの物体強化だと！？」

「どんな魔術も使いどころさえ誤らなければ役に立つものだぞ。これは覚えておくと良い」

厚さ三十センチの鉄板をも貫いてしまう魔術だが、使いどころを間違っている。アリスが冷静だったなら、一本の槍ではなく数本の矢を放っていたはずだ。

「まあ見てみるよ。『鍛えろ、練金の力』」

砕け散って手の中に残ったコンクリート片は、小粒なものが五つ。そのすべてに物体強化を行き渡らせる。

「またそれか！ 芸のない奴だな！」

「そんな考え方だから、大技ばかりに頼ってしまうんだ」

一発の大技よりも十発の小技の方が役に立つと言うのが悠斗の自論だった。人間相手には大口径の輪胴式拳銃リボルバーよりも、装弾数の多い自動拳銃オートマチックの方が実用的である。それと同じだけだ。

『爆ぜよ、破碎の力』

「つく、『塞げ、水龍の鱗』」

悠斗が投擲したコンクリート片に、アリスは咄嗟に防御のための魔術を使う。

アリスの足元から水流が吹き上げ、それに衝突したコンクリート片が爆発する。だが、アリスのところまでは届かない。

「ぶっ、どうだ。これが実力の なっ！」

水流が消え去った瞬間に、さらに一つのコンクリート片がアリスへ飛来する。

「余所見していると怪我するぞ……って、もう遅いか」
ただ単純に、投擲のタイミングをずらしたただけだ。しかし、コンクリート片は防御をすり抜けてアリスに直撃した。

十

魔術を誰から教わったのか

そう訊ねると、帰ってくる答えは様々だ。『お父さん』『お母さん』『親父』『オカン』『お爺ちゃん』『お婆ちゃん』『くそ爺』『くそ婆あ』『叔父さん』『叔母さん』etc…
つまり、その大半が身内なのである。

その原因に、血系魔法というものがある。それは代々その家に継承されていく魔法で、魔術とはまったく異なつたものだ。

そもそも、魔術と魔法はどう違うのか。
それを説明するのに、言葉はあまり必要ない。

魔術は努力によつて習得することができるが、魔法を持っているかどうかは生まれたときに決まる。魔術には詠唱が必要だが、魔法には詠唱が必要ない。

この程度の違いしかない。
話を戻そう。

魔法使いは魔術師である。血で継承される魔法を守るために、魔術を覚えていると言っても過言ではない。魔法使いの一家に生まれたい者は、生まれたときから魔術の英才教育がスタートする。
だから、魔術の指導者は身内なのである。

百合原綾香は吹き飛ばされる少年に、哀れみの視線を送った。

「……強すぎ……る」

いいえ、それは貴方が弱すぎるのよ。

「でも、ごめんなさい」

血反吐を吐いて倒れる新入生の少年に、心の中で重ねて謝罪する。同じクラスになったら嫌だな、と思いつつ周囲を見回すと、見物していた野次馬たちが弾かれたように後ずさった。

「……これで八人目」

「じゃあ俺が九人目になるのか？ でも、俺はさっきまでの奴らとはちが」

そう言った少年は、その言葉通り吹き飛ばされて地面に突っ伏した。

「……これで九人目」

「つて、おいおい。どうやって攻撃したんだよ？」

背後で見物していた たしか茜崎といった少年が口を挟む。

「詠唱なしってことは、魔法か？」

「ええ、その通りです。でも、トリックの内容は教えられませんからね」

綾香はふつと微笑んだ。茜崎は笑みを引きつらせる。

場所は校門からそう離れたところではない。校舎と校門の中間地点といったところだ。

『新入生とのエンカウント率が高いからここがお勧めだよー』との茜崎のアドバイスに従ったのだが、十分で九人を倒せたことからその言葉は間違いではなかったようだ。

「でもまあ、あいつならどんな魔法でも見破ってくれるけどにやー」
動揺したことをひた隠しにして、ふざけたように笑う金髪の少年。

あいつ？

綾香は内心の動揺と若干の好奇心を悟られないようにしながら、通りすがりの新入生に視線を集中させた。

「……十人目」

「うおおっ！ もうちょうど折り返し地点なんだにゃー！」

茜崎が飛び上がる。その肩に手が置かれた。

朽葉悠斗だ。肩に担いでいた金髪の少女を茜崎に乱暴に投げ渡すと、周囲を見回して肩をすくめた。

「ちょ、この女の子は何者ですか！？」

「負傷者の治療は生徒会の仕事だろ？」

「もしかしてこの女の子と戦ったの？」

「……………まあな」

悠斗は茜崎から視線を外した。

「それにしても、中々頑張ってるみたいだな。死屍累々とはこのことか」

「そうなんだな。それも魔法で一撃必殺……………いや、一撃一殺なんだぜよ？」

「……………ふむ」

顎に手を当てて面白そうに笑う悠斗に、なぜだか綾香は苛立ちを感じた。侮られている、そう思ったのだ。

百合原家の血系魔法は本来長男に受け継がれるはずのものだった。それを受け継いでしまった長女は、いつも分不相応だと言われ続けてきた。

いいでしょう。

それなら見せてやる。自分がただの魔法使いではないことを。

「その貴方、少しよろしいですか？」

「んっ、俺？」

呼び止められた少年は、立ち止まって周囲を見回した。綾香は両目を細めて視線を手中する。

「何か用……………って、うわぁ！」

「……………十一人目」

何が起こったのかも分からず吹き飛ばされ、ガクリと倒れる少年。生徒会の助っ人が担架で少年を運び出す。

その様子を見ていた悠斗が、ボソリと呟いた。

「なるほどな」

興味を失ったように踵を返す。

「……えっ？」

綾香は困惑した。驚愕もせず、恐怖もしない。

ただこの場所から立ち去る動きに、綾香は訳が分からなくなった。

どうして？

無性に悲しかった。その程度の実力かと鼻で笑われたような気がした。自分は間違ったことをしたのだろうか。

「まっ、待ちなさい！」

気が付けば、綾香は彼を呼び止めていた。

03：魔眼の攻略

「まっ、待ちなさい！」

背中にかけられた綾香の声に、悠斗はなぜだか悲痛な響きを感じた。

あの魔法は大したものだった。アリスのように手加減していれば、その場で意識を刈り取られるほどのものだ。真剣にならなければ敗北するだろう。そこまで考えてから気付く。

彼女の相手は新入生だ。

これでは自分が綾香と戦いたがっているみたいではないか。

「……なんだ？」

自嘲、そのために返答は不機嫌な声になる。

綾香はビクリと震え、しかし氣力を奮って声を上げた。

「この場で貴方に決闘を申し込みます！」

周囲の野次馬たちから「おおっ！」と声上がる。

決闘 それは西洋の騎士が名誉のために戦うものだ。挑戦者が裁判などで無実を証明できない際に行われる。と聞けば美しく思えるかもしれないが、実際には生命の危険が伴っていて血生臭いものだったという。

現代において、決闘は法律などで禁止されている。

魔術師の世界での決闘はこれらの決闘とは趣が違う。

過去、魔術師たちに徹底した個人主義が染み付いていた時代。彼らはお互いの縄張りを主張し、利権を奪い合い、ひたすら歪み合っていた。

しかし、命懸けで戦うのは不味い。魔術師が戦争でもすれば、確実に表の世界の連中（一般人たち）に気付かれるからだ。

だから、魔術師は決闘で勝者の主張を『正』、敗者の主張を『誤』とした。

なお、死人を出すことはご法度で、相手を殺してしまつたらその場で反則負けとなる。五人以上の魔術師が立会人になり、状況により決闘を中止にしたり、多数決で片方を反則負けにすることもある。現代では魔術師たちが歪み合うことはなくつたが、お互いの主張が対立した際には決闘が行われる。

国立魔術アカデミーでの決闘は、生徒会主催で行われる。

場所は闘技場。立会人は生徒会から二名、教師二名、決闘する二人の同意で一般生徒が一名選ばれる。

生徒会長の立花健一郎、副会長の山岸雪子、教師の大賀礼司と川崎美野里、ただの生徒の茜崎克己。

五人に見守られている朽葉悠斗は、人知れず溜息を吐いた。立会人のすべてが知り合いだが、相手側が不利だということはない。むしろ、公平を規すために普段よりも厳しくなるはずだ。

とは言え彼らも悠斗の立会人になるのは初めてではないので、よほどのことをしない限りは口を挟んではこないだろう。

野次馬たちの数は五十人ほど。

ここにいる新入生は自らの課題を諦めている様子だ。

「では始めましょうか、朽葉先輩」

百合原綾香は笑顔を浮かべていた。自分の優位を疑わないアリスとは違う。優位を当然のように受け入れ、なおかつどのようなすれば悠斗を倒せるのかと策を練っている顔だ。

「負けるんじゃないぞ、朽葉悠斗」

「応援してくれるのか？」

気絶から回復したアリス・キリングゲートが悠斗に声をかける。意外だと思つて軽口を叩くと、アリスの顔が真っ赤になった。

「ばっ、馬鹿を言うな！私を倒した男がこんな小娘にやられてしまったら、私はこの小娘よりも弱いということになるだろうが！」

「それはどうかな？ 思うに、君の魔術は彼女の魔法と相性が良いはずだぞ」

「どつ言つことだ？」

「見ていれば分かる」

悠斗は不敵に微笑むと、綾香と向かい合った。

「じゃあ、始めようか」

言葉と同時に、悠斗の姿が綾香の視界から消えた。

『爆ぜろ、破碎の力』

まず足元の地面を爆発させ、空中に浮き上がる。その際に地面の破片を掴み、そのまま相手の背後を取って破片を投げ付ける。それが朽葉悠斗が得意とする戦闘スタイルだった。

生徒会長、立花健一郎は眼鏡を外し、胸ポケットに仕舞った。服装自由のこの学校で毎日制服を着ているのは彼だけだろう。

「朽葉君の戦闘スタイルは『慎重』の一言に尽きる」

副会長、山岸雪子が振り返る。彼女は二年生で、健一郎の後輩だった。その隣では彼女の幼馴染の茜崎克己が「にゃーにゃー」鳴いている。

雪子は自分が話しかけられた訳ではないと悟ると、視線を悠斗に戻した。

「物体強化と物体破壊、最初はこの二つだけで戦おうとする」

「確かにそのようだな。だが、あのような戦いでは無駄に力を消費するだけではないのか？」

アリス・キリングゲートが不機嫌そうに答えた。

「あのような戦い方では、雑魚を倒すのにも時間がかかる。強敵を相手にするときの様子見には最適かもしれないが、制圧力という点から見れば威力に乏しい。すぐに集中力が切れて地面に這いつくばるのがオチだ」

「最初は僕もそう考えていた」

背後を取られた綾香が『圧力となれ、風の圧塊！』と防御の魔術を唱える。投げ付けられた破片は次第に速度を落とし、地面に落ち

て爆発した。

悠斗が着地と同時に地面に手を付き、バク転する。

『爆ぜろ、破碎の力』

手を付いた地面が爆発。綾香の視界を一瞬遮った。

「魔法は使わないのか？ いや、使えないんだよな」

粉塵の中から悠斗が嘲笑う。

『吹き飛ばせ、風の扇！』

綾香は空気の圧力派で煙幕になっていた粉塵を吹き飛ばした。

そこに悠斗の姿はない。

「どこに消えた！？」

「『エア・スキュラ風魔の魔眼』はもう見切った」

「ッー！」

背後からかけられた声に、綾香の背筋が緊張する。

アリスが健一郎に目を向け、どうしてなのかと目線で問う。

「地面を爆破した瞬間、また宙に浮き上がっていたんだよ。彼の心理戦の術中にはまっているなら、気付けないだろうね」

「心理戦？」

「そう、心理戦だ。朽葉君は全然本気を出していない。そして、相手にも本気を出させない」

「でも、朽葉はまだ物体破壊しか使っていないんだぞ！？」

金髪の少女が怒りを隠さずに言い放つ。敵は本気を出さず、自分
は本気を出させて貰えない 彼と対峙した者たちにとって、これ
ほど屈辱的なことはないだろう。これほど完全な敗北はない。

「以前僕が朽葉君と将棋をしたとき」

「いきなり何を言い出す？」

「まあ黙って聞いてくれ。朽葉君は飛車角落ちで三十七手で王を殺
した。チェスならもつと早く終わっていたらしい。そのとき、得意
魔法に頼っている魔術師なら三手で終わる と言っていたよ」

「……………」

そう、朽葉悠斗は天才だ。真に恐れるべきは類まれなる智謀であ

る。

「風魔の魔眼は、視線を集中した地点の気圧を変化させる。急激な気圧の変化で空気が爆発したように感じる訳だが、欠点が一つある。それは爆発させる地点の気圧が標準大気圧の1気圧¹約1013ヘクトパスカルであること。空中の敵には使えない言うことだ。吹き飛ばされた奴に追撃を放たなかったことからこう考えた訳だが、おそらく間違っていないだろう。本来の用途は周囲の気圧を下げて人体を爆破することにあるのだろうが、流石にここで死人は出せないからな」

「……………」
地面を爆破すれば多少なりとも気圧が変化する。浮き上がった悠斗に魔眼は使えない。

「以上、風魔の魔眼の攻略を終了する」

健一郎は綾香が絶句し、表情から戦意が失せていることを確認するとその場を去った。山岸雪子は無言で生徒会長の後を追いかけた。

「……………負けました」

膝を付いた綾香が、敗北を宣言する。

もう野次馬たちは闘技場を後にしており、この場には悠斗と綾香、アリスと克己しか残っていない。その克己もベンチで昼寝していた。綾香の頬を透明な液体が流れる。

「ぐすつ……………ふえつ……………」

「おいおい」

悠斗は頭をかいた。そもそも、どうして決闘していたのかも分からないのだ。女心は複雑だ、の一言で切り捨てるほど悠斗は無情ではないが、かと言ってどう励ましたものか。

「まあ、そんなに落ち込むなよ。チャンスはまだあるんだから」

「……………チャンス……………ひつく……………ですか？」

「ああ、そうだ。まだ俺が卒業するまで二年もあるからな。そうだな……………来年のこの日、再戦するか。今度は俺を本気にさせてみる」

「……やっぱり、本気じゃなかったんですね」

「……まあな」

「お強いんですね。貴方みたいな殿方は、初めてです」

少女は泣き顔に微笑を浮かべた。

「俺みたいなのが何人もいたら困るんだけどな」

「……確かに」

数秒後、二人は同時に笑いあつた。

04：解き放たれた者は

国立魔術アカデミーは国内有数の教育機関でありながら、研究機関という側面を持っていた。

この世界では魔術の存在は公にされておらず、魔術師は自らの存在をひた隠しにしている。魔術を使える者は非常に少数で、その研究は個人個人が行っているだけでは全然はかどらない。

そんな過去の悪習を取り除くために、1950年に立てられたのがこの魔術アカデミーである。この施設はそれまで一部の魔法使いが口伝で伝えていた魔術を体系化し、魔術というものを一気に普及させてその門戸を大いに広げることになった（と言っても、まだまだ狭き門ではあるが）。

本校舎から徒歩二分の距離に、教員たちの研究棟が建てられている。

その二階の片隅にある大賀研究室では、先日特殊な魔術道具が持ち込まれたばかりだった。研究者たちが目の色を変えるほどの一品で、別の研究室からも若手研究員が大勢派遣された。

そして、これから十数人体勢の一大実験が行われる。

大賀礼司はゴクリと生唾を飲み込み、部屋の中央に設置された装置を見詰めていた。魔力循環装置　使用した魔術を何度も使用するために、純化するための装置である。

装置に繋がれているのは黒曜石のような黒く輝く宝石だった。

この宝石にはかなりの魔力が封印されていることが、今までの研究で証明されている。だが、その魔力の取り出しには注意が必要で、しかも難しいことが判明していた。

具体的には、10の魔力を取り出すためには、10の魔力が必要になる　という状態なのである。

これでは足し引き0の、まったくの無駄だ。たとえ1億もの魔力

が込められていても、まったく意味を為さない。

そのため、大賀は一度使用した魔力を再利用することにした。10の魔力が20に、20の魔力が40に。こうすることで、仮想的ながら無限の魔力を再現することができるようになったのである。

「大賀先生、いよいよですね」

装置の入力装置に手を添えた若手の研究員が、汗を流しながら言った。

「ああ、この一月、毎日徹夜で頑張った甲斐があった。だが、まだ喜ぶときではない。今日を無事に終えたら、みんなと一緒に酒でも飲みに行こうではないか」

自分の発言こそ、皆をぬか喜びさせてしまっていることに大賀はまったく気付いていなかった。これが研究者だと言ってしまうえばそれまでだが。

寶石から取り出した魔力は、再び取り出せるように別の寶石に封印する手はずになっている。理論的にはまったくの隙がないつもりである。だが、実験には失敗が付き物だ。

「さあ、これより実験を開始する。高見君、装置を起動してくれ」

「はい！」

若手の研究員がスイッチを押した瞬間、研究室が爆発した。

「ぎゃあああああああああ！！」

研究員たちの叫び声が、何重にもハミングして寮生たちのところまで響いてきたらしい。

十

始業式の日、朽葉悠斗とクロード・キリングゲートは校長室に呼び出された。

本来なら半日で帰宅し、惰眠を貪る予定だったのに　と悠斗は

不機嫌全開の面持ちで校長を睨み付けている。新クラスでの生活は、不安は残るが努力次第では共存の道も有り得るのでは、と希望的に観測するしかなかった。言うなれば落ち込んでいたのだ。これは不貞寝するしかない、そうだろう、いやそうだろう!?

……失礼。

「で、校長先生。俺たちに何の用事ですか？」

「ふむ、実は昨日、大賀研究室が壊滅してな」

「なるほど、ご愁傷様です。おやすみなさい」

「……大賀研究室が壊滅してな」

校長は悠斗の言動をサラリと無視し、おもむろに頷いて話し出した。

まるで自分はRPGの説明キャラだと言わんばかりの様子に、悠斗は抵抗する気力も消え失せた。白ヒゲの爺さんが、このアカデミーの最高責任者である。何だか猛烈に頭痛がした。

「大賀研究所に持ち込まれた魔術道具は、多大な魔力を秘めた宝石でな。だが、その宝石は厳重に封印されていた。文献にも残つたらん代物で、研究員たちは宝箱を開けるつもりだったのだろう」

「宝箱には罫が付き物なんですけどね」

クロードが面白そうに相槌を打つ。

「ワシも最初は罫かと思った。だが、実際にはそうではなかった。

どうやら、その宝石にはかな〜り危険な生物が封印されていたようなのじゃ」

「古代生物？」

「さあな」

「そんな無責任な」

「だってワシには責任なんてないも〜ん」

悠斗は無言で踵を返した。校長が「待て待て、話はこれからじゃ」と悠斗の腰に抱き付いた。

「ともかく、君たちには逃げ出した生物を捕まえてもらいたいのじゃ。場合によっては殺しても構わん」

「まだ逃げていないということは、相手は学園の結界を越えられないのか？」

「そうじゃのお……まあ、それも時間次第だろう」

「なるほど、では俺とクロードでそいつをどうにかすれば良いんだな？」

校長は頷きかけて、ふと思い出したように首を横に振った。

今思いついたようだが、どうせロクなことではない。

「激闘！？ 朽葉悠斗 VS クロード・キリングゲート！！どつちが先に不思議生物を倒せるのか！？」

「……………」

「……ふむ、これではインパクトが足りんな。なら、朽葉悠斗&百合原綾香 VS クロード&アリス兄妹ならどうじゃ？」

「なっ、まっ、まさか妹とペアを組めと仰られるのですか！？」

クロードはかなり嫌そうだった。馬鹿め、そんなに嫌がつている様子を見せてしまったら、校長は喜んでその案を採用するだろうに。

「で、賞品は？ まさか無償でやれとは言わないよな？」

「そうじゃな……では学食の食券1万円分でどうじゃ？」

「……………3万」

「1万5千」

「2万」

「……ふむ、仕方がない」

二人は妥協した。交渉成立の握手を交わし、泣きそうな顔をしているクロードを放置して校長室を後にする。

と言つかクロード、そんなに妹のことが嫌いなのか？

「と言つ訳で、俺に付き合え」

悠斗の言葉に、遠巻きに様子を窺っていた女子たちが「キヤーキヤー」と悲鳴を上げた。

「どつ言う事情なのか、まったく分からないんですけど……………」

百合原綾香は半眼になって悠斗を睨み付ける。

わざわざ女子寮に乗り込み、寮長に彼女を呼び出させたのはかなり不味かったらしい。純粹培養お嬢様量産施設の女子校ではないのに、この視線の数はどうしたことだろう。

と言うか、自分が立っている場所は大勢の男子が踏み込めず死体をさらすことになった聖地である。昼間ならまったく警戒していないと言うことだろうか。考えてみれば当然のような気がする。罾を設置するにしても、仲間の女子が引っかけたは元も子もない。「じゃあ言い方を変えよう」

悠斗は軽く咳払いした。綾香は嫌な予感がして後ずさる。

「俺にはお前が必要だ」

「……貴方、本物の朽葉先輩なの!？」

「本物だ。そして俺にはお前が必要なんだ! 頼む、綾香! 俺と付き合ってくれ」

今度こそ女子たちが悲鳴を上げる。

「……まあ、冗談はこの程度にして……いや、悪かった、だから魔眼はやめて」

「………はあ、今日の先輩はテンションがおかしいですよ」

綾香は背後を睨みつけてから、大きな溜息を吐いた。

05：封印された女神

幼少時代、父親に拳銃を向けられたことがある。恐怖心を克服するための訓練で、父は頭の横を狙って引き金を引いた。だが、キリングゲート家の長男を殺す訳にはいけないので、その狙いは甘かった。

幼少時代、妹に拳銃を向けられたことがある。トラウマを植えつけるための調教で、妹はクロードの股間を狙い打ちにした。下僕候補を殺す訳にはいけないので、弾丸はゴム弾だったしその狙いは甘かった。

拳銃が下手糞だったので太股や膝に命中していた。

とは言え、股間に命中すれば生殖機能を失うことは間違いない。

クロードを不能者にしてしまうということは、キリングゲート家の長男が自分の血を残すことができなくなるのだが、五歳児に（以下略）だった。

六歳のクロードは父親に泣き付き、妹を引き離してくれと懇願する。

その願いが叶い、クロードは無事日本への留学を果たしたのである。

ドイツの実家では妹が着々と実権を握っていったのだが。

クロードは今日何度目かになる溜息を吐いた。

それを聞かされる度に、妹のまなじりがつり上がっていくのだが、鈍感な少年はそんなことには気付かない。

「まさか、アリスがアカデミーに入学していたとはね」

「悪いか、馬鹿兄貴。と言うか死ね」

「死なないよ。でも、実家はどうしたの？ キリングファミリーの実権を掌握したんでしょ？」

キリングゲート家の後継者はクロードだったのだが、それも三年前までのことだ。

クロードの両親は一度も実家に戻ってこない軟弱な長男よりも、仕事の手伝いをしてくれるアリスの方が有能だと判断し、一家の後継者を娘にすげ替えた。まあ、クロードには魔術カルテルを仕切るほどの力量がないので、それで良かったと思っっているのだが。

「仕事は信頼できる側近に任せてる」

「それで大丈夫なの？」

「一家から逃げ出した貴様に、一家を案じる資格はない」

「……まあ、そうだろうね」

クロードは今日何度目かになる溜息を吐いた。

でもね、アリス。僕だって逃げてばかりだった訳じゃないんだよ？

その声は、妹には届かない。

十

「ところで朽葉先輩ってどんな魔術が使えるんですか？」

二人でアカデミーの私有地、雑木林を探索しているとふと思いついたように綾香が訊ねた。悠斗は微弱な魔力の残滓を追いかけるなら、どのようにこたえるべきか考える。

答えたくない　は駄目だろう。

来年もう一度決闘する（予定）の相手なので、あまりこちらの手の内は明かしたくないのだが、これから共闘するのに下手に誤魔化せば、信頼関係に亀裂が生じてしまう。

「斬ったり刺したり潰したり？」

「なぜに疑問系なんですか？ そんなことじゃなくて、属性ですよ属性。私の場合は風属性ですけど、先輩は無属性しか使ってないじ

「やないですか」

「あー……」

悠斗は悩んだ。

その程度のことなら悠斗のクラスメートに聞けば分かるだろう。自分はそれなりに有名なようだから、綾香の同級生にも知られているかもしれない。

まあ、このぐらいなら教えても構わないか。

そう思って口を開こうとして。

「ッ！ 危ない！」

悠斗は地面に綾香を押し倒した。

「えっ、ちょ、先輩！？ いきなり何をするんですか！！」

「いいから黙ってる！」

「えっ、まさか」

魔術による砲撃　カウントダウン開始。

5、4、3、2、1……。

魔術による防御は間に合わない。

最善の選択として、悠斗は綾香を押し倒した。

「来るぞ！」

「えっ、ええ！？ まって、先輩！ まだ心の準備が！」

下のほうから意味不明な罵詈雑言が飛んでくる。直後、真紅色のレーザーのような光が悠斗の真上を通り抜けていった。右から左に薙ぎ払われた極太レーザーは、周囲の大樹を薙ぎ払い、辺りを更地にしていく。

なんて破壊力だ。

我知らず身震いする。

「ふむ、今のを避けたか。中々の反応だな」

「褒められても嬉しくないな。どうせ手加減していたんだろ？」

「……まあな」

相手は憮然と言う。小柄なアリスよりも、さらに小柄な少女だった。日本人形のような黒髪の少女である。薄紅色に牡丹が入っ

た模様の着物を着ていて、絵巻に出てくるお姫様のようにだった。

「……事実、お姫様のようね」

「でも、ただの姫様と侮ってたら殺されるぞ。こいつ、結構やばい時代を生きていた神様らしい」

「か、神様!？」

素っ頓狂な声を上げる綾香に見向きもせず、少女は悠斗にだけ視線を向けて面白そうに笑った。

「なるほどな。この時代でもそれなりの術師はいるようじゃの。ところで、神武の子孫はどこにいる?」

「聞いてどうするつもりだ?」

「無論、殺しに行くだけじゃ」

悠斗は目を見張った。神代の女神とも言つべき姫さんが、どうして天皇一族に恨みを持っているのだろうか。天津神と国津神の対立時代の神様ほどに危険そうではなさそうだが。神武以降は神というより人だから、神武天皇の建国時代のお姫様と考えるべきか。

「……なるほど、そりゃ恨むわな」

「どつと言つこと?」

「吾平津姫あひらつひめに所縁ある者つてところか?」

綾香は意味不明だと言わんばかりに肩をすくめ、少女の反応を窺った。すると、少女の唇が震えているではないか。

「……………吾われの母様だ」

悠斗は頷いた。母親が捨てられて、怒らない娘はいない。それは神のような存在でも同じことだ。

「神武天皇が駒宮神社にいた頃の妻、吾平津姫がこの姫さんの母親のようだな。ちなみに、吾平津姫は神武天皇が宮崎に行くことになって身を引くらしい。と言つても、有名な人物じゃないから伝承は不確かだし、実在していたのかも不確かなんだがな」

説明不足を咎めるように悠斗を睨み付けた綾香に、悠斗は面倒そうに言う。

「でも、目の前にいるじゃない、その娘が」

「……はあ。あのなあ、この世界では神様ほど不確かなものはないんだよ。神社に祭られているなら存在しているし、祭られていない神様は存在しないんだ。で、何らかの超常現象が発生したり災害が起こったら神様の所為にされることがある訳。別に妖怪でも悪魔でも構わないが、肝心なのはそのときに器になる入れ物があるということだな」

「……まったく意味が分からないけど」

「天変地異が発生。大昔の人たちは思った。あの災害は神様が起こしたのだ。信仰心から魔術が発動。神様が物語から実体化した。オーケー？」

「あー、何となく分かったかも……」

「でも、あの神様は天皇家に害為す者だから封印された。オーケー？」

「……オーケー」

「と言う訳だ。さっさと終わらせるか」

悠斗は少女に振り返ると、両手で頬をパシンと叩いた。

待っていたぞとばかりに、少女が右手からレーザーを射出した。

06：神に与える言葉

少女のレーザーは、詠唱していないことから魔法であることが分かる。だが、相手は神だ。

一種類しか魔法が使えないと決め付けるべきではないだろう。

「ったく、これで2万円かよ……」

割りに合わない仕事だと思い、悠斗は嘆息する。

『爆ぜろ、破碎の力』

「えっ？ きゃっ!？」

悠斗は衝撃波を利用して、地面から飛び上がった。左脇に綾香を抱えたまま、数メートルを浮き上がる。

「挟撃するぞ！」

「っ！ 分かったわ！」

真紅に輝くレーザーが足元を通り抜ける。着地と同時に、悠斗と綾香は左右に分かれた。

「喰らいなさい！」 切り裂け、禍ツ風!」

綾香が真空の刃を少女に向けて放つ。真空波は少女の目の前で三つに分解し、首と両腕を狙った。

「無駄だ、小娘。『怨、黄龍』」

命中する寸前、少女の足元から「ドンッ!」と効果音を上げながら、土が盛り上がり壁を作り上げた。

『吹き払え、風の太刀!』

「だから無駄と言っているだろう。『怨、黄龍』」
再び同じ魔術で防がれる。

怨と黄龍か。

やはり日本の術師、陰陽五行を取り入れているのだろう。

五情の一つである『怨』と五獣の一つである『黄龍』を掛け合わせ、木火土金水の土を操っているようだ。

色々な属性を操れるため弱点が少ない陰陽術だが、器用貧乏にな

ることが多い。

それでも風属性を専門にしている綾香の攻撃を防いでしまった。

「綾香、他の属性は使えないか？」

「無理！ 私は風属性しか学んでいないのよ！」

「無属性は？」

「それも無理！」

これでは綾香に勝ち目はないか。入学して間もないのに、これだけの魔術が使える以上出来である。しかし今はサポート役にもなりそうにない。最悪『風魔の魔眼』で場をかき乱して貰おう。

悠斗の思考はそう判断した。

「じゃあ、今度は俺の相手をして貰おうか」

「ふむ、こっちの小娘よりはやるようだが……」

少女は右手を悠斗に向けた。

真紅のレーザーだ！

「吾の敵ではないな」

身構えた瞬間、五色が視界に広がる。その数は五本。

「くそっ！」

このレーザーには陰陽五行の属性が付与されているようだ。赤色には火属性が付与されていたのだろう。

五行で五本、すべてを回避するのは難しいと判断する。

『防御、闇の盾』

悠斗と少女の間に漆黒の壁が立ち塞がり、悠斗に命中するレーザーを吸収した。この盾はエネルギー吸収体の性質を持っている。

悠斗の魔術は少女の魔法と相性が良い。……少女にとっては最悪だろうが。

綾香が驚愕に息を呑む気配を感じる。

「綾香、畳み掛けるぞ！」

陰陽五行の影響を逃れる力、光と闇。悠斗はその闇属性のエキスパートだ。

「魔眼で霍乱かくらんしてくれ！」

「分かった！」

「『両断、闇の斧』」

「小癩めがつ！ 『怒、白龍！』」

振り下ろされた闇の斬撃を、金属の塊が受け止める。五行の金気は西洋魔術の四属性とは一味違う。攻防一体の、日本独自の魔術である。

『楽、赤龍！』

燃え盛る火炎が弧を描いて悠斗に襲いかかる。だが、防御の魔術は使わない。

「ねえ貴方、私のことを忘れていない？」

「小娘か！？」

綾香の魔眼が火炎の中心の気圧を下げた。酸素濃度が減少し、火力が低下してやがて酸欠になって消えてしまった。

「しまった！」

『突貫、闇の槍』

「くそつ、貴様ら！」

少女は両手からレーザーを放ち、貫く槍を押し留めようとする。

槍は光を切り裂きながら、少女に迫っていった。

十

「は？ えーっと、ちょっと空耳が聞こえたような気がするんだけど？」

「だから、宝石に封印されていた魔獣は僕たちが退治してしまったからゴメンねって言ったんだよ。と言っても、ほとんどアリスが片付けてくれたんだけどね」

「いや、え？ ええ！？ それって何！？ 君死ぬ！？ 死にたいの！？？」

「わー！ 悠斗が壊れたー！」

どうやら宝石に封印されていたのは古代の魔獣だったらしい。

襲われた研究者の人たちがクロードとアリスが退治した生物の死骸を確認し、間違いなくこの生物だと証言している。

では、あの姫様は何者だったのだろうか。

悠斗は手に入れられなかった2万円分の食券に未練を残し、学生寮の自分の部屋に戻った。

「どうした？」

「……………」

「お主が不機嫌な理由は知らんが、とりあえず残念だったなと言っておこうか」

「……………なあ、どうしてここにいるんだ？」

宝石に封印されていたのはこの少女ではなかった。だが、少女が突然この近辺に現れたのも事実である。

それに、どうして自分の部屋にいるのだろうか。折角見逃してやったのだ。まだ天皇家への恨み言を吐くつもりなら叩き出すつもりだった。

「はあ？ 吾はてつきり見破っているかと思っていたぞ？ 吾はこの地に封印されていたのだが、かなり大きな魔力に叩き起こされただけじゃ。長き時を封印されてきたから、力の半分は失われていたかな」

「あれで半分かよ」

「まあ、お主も半分程度の実力しか出していなかったじゃろ」

「それはそうだが……………なら、お前がこの部屋にいる理由は？」

「貴様は馬鹿か？ 面白そうだからに決まっている」

少女は悠斗は自室のベッドの上で横になっている。

優雅な着物姿なのだが、先ほど悠斗たちに叩きのめされて泥塗れ。そんな格好で白いシーツの上に寝そべればどうなるのか、そんなことは五歳児でも分かる。

「教育的指導……そうだな、教育的指導だ」

「おい！！ ちょっと目の色が危ないが大丈夫か！？」

「安心しろ、俺は正気だ」

「酔っ払いの発言！？」

「黙れ、問答無用！！ これが教育的指導だ！！」

「うわっ、何をする！！ これ以上近付くな！！」

「うるさい！！ とつとと風呂に入って来い！！」

悠斗は少女を風呂場に投げ飛ばすと、ほっと溜息を吐いた。

……似ている。

大切な人の復讐のために身を捨て、命を落としたあの少女に。

「ごめんね、と言ってこの世を去った、今なお悠斗を縛り続けているあの少女に。」

「あー、そう言えば、吾はここにおいて構わないのか？」

「……………」

放っておけば、壊れてしまう。それが分かっているのに、そんな質問をするのは意地が悪い。

「……勝手にしろ」

「……ああ、そうか。うん、そうだな」

少女はひとしきり思案すると、満足げに微笑んだ。

「ありがとう。感謝するぞ」

「……………」

思わぬ不意打ちに黙らされる。

「……ああ、感謝してくれ」

悠斗はシーツが汚れるのを構わず、布団に倒れこんだ。自分の身体も泥塗れだったことに気付いたのは、目が覚めてからのことである。

「忘れていた」

少女の着替えを用意しなければならない。学生寮の自室に女物の着替えがある訳がないので、とりあえずジャージで我慢してもらおう。後で知り合いに頼んで衣服を調達しなければならない。考える

だけで憂鬱だった。

それより、現代の風呂を使えるのだろうか。

服だつて誰かに着せてもらっていたのだろう。直系かどうかは分からないが、神武天皇の娘である。それはもう箱入りに育てられたに違いない。

「つたく、面倒臭いな……」

「ん？ 何か言ったか」

「……何でもない」

ふと浴場から少女が顔を出す。

「貴様の名は？」

「そついやまだ名乗ってなかったな。朽葉悠斗だ」

「ふむ……悠斗か。平民には勿体ない良い名ではないか」

「何が言いたいんだ？」

「貴様ごときが吾の名を口にすることすらおこがましいのだが、一応教えておいてやる。吾の名は大照津姫だ」

「……面倒だから姫だな」

「そのままではないか。言霊を操る術師ならもっと捻ってみせろ」

「そつだな。流石にそのままじゃ可哀想か」

悠斗は五秒ほど思索した。

「なら、『緋芽』なんてどうだ？」

「……悪くない」

そつ言つて、少女は浴場に戻つていった。

……これで良いんだよな、瑠璃？

悠斗は無意識の内に枕を涙で濡らし、意識を手放した。

07：不穩の気配

黎明の魔石　　太古の魔王のものと思しき魔力が込められた宝石。

その膨大な魔力は一流の魔術師数千人分にも相当し、現金価値にすれば1兆円は軽く超える。一般人にとっては無価値の石ころだが、魔術師であれば喉から手が出るほど欲する一品である。

封印の解除には問題点があったが、それも魔力循環装置で解決したように思われていた。しかし、実際には膨大な魔力を抽出することができず、代わりに出てきたものは大量の魔獣だった。

研究者たちは魔術師だったが、魔石本体を守り抜くのに手が一杯で、魔獣退治はアカデミーの学生、キリングゲート兄妹が行った。

過去の文献を漁ることにより、新たな事実が色々と浮かび上がる。魔石の封印を解除するには、当時の魔王の従者を倒さなければならぬ。これは魔王自身が自分の魔力を悪用されることを嫌ったからであろう。

だが、魔獣はもう退治された。これで封印を解除できるはずだ。そう思っていた研究者たちは、またまた裏切られることになった。今度は失敗してから気付いた訳ではない。文献から問題点に気付いただけまだマシだろう。

封印は五つの段階に分けられており、最初の段階が獣姿の魔獣。言わば最もレベルが低い存在だったのである。封印解除までに五回、魔王の従者を倒さなければならぬ。

五段階目には魔王の腹心が現れるそうだが、魔王の腹心とは、当然ながら魔族である。

アカデミーは封印を解除するには、最低でも二百人の犠牲者を出す判断した。それほどのケタになると、黎明の魔石の封印を解くのも諦められる。それよりも、悪用されると危険なので厳重に保管

するべきだ。

かくして黎明の魔石は国立魔術アカデミーの、校長と一部の教師にしか知らされていない場所に安置されることになった。

以上が黎明の魔石を廻る、長い動乱のプロローグである。

十

ジャージ姿の少女が、バイクの後部にまたがった。

振り下ろされないように、自分に身体にしがみ付けよと言つと「どうして？」と素直な疑問が帰ってくる。

「これは変な形をした馬なんだ」と答えなければならぬ自分にひたすら自己嫌悪しながら、市街地までバイクを走らせた。

少女の浮世場慣れした容姿に、周囲の人々の視線が集まる（ジャージ姿だが）。

見た目、十二歳そこらのガキなのだが、日本人形のように整った顔をしているのである。いや、日本人形と言うよりも雛人形か？ともかく、地面に届く寸前の髪は現代では見られないものだし（本当はもつと長かったのだが悠斗が切った。すごく殴られた）、それだけで注目度は上がると言うものだ。

「ふむ、で吾たちはどこに向かっているのじゃ？」

「とりあえず服屋だな。お前の我が俣のせいだ、こんな場所に来る破目になった訳だが、迷惑をかけている自覚はあるのか？」

「……………」
「……………」
「……………」

少女は初めて見る景色に好奇心全開である。

地底に届くような唸り声を上げつつ、朽葉悠斗はバイクをある店舗の入り口の前に停めた。

「ほう、なるほど。これが服屋か」

少女　緋芽は目を輝かせた。色取り取りの着物が陳列されたこの店舗は、まさしく緋芽のためにあると言えた。

こんな嬉んで貰えるのなら、知り合いから恥を忍んで借りてきた女物の服を投げ捨てられても……許せないよなあ。

それに、現代において着物はかなり高価なのである。特価商品の浴衣ならともかく、単衣とか袷とか、小袖とか肌襦袢とか、まさか十二枚重ねて着るような十二単はないだろうが、そんな聞き覚えのない物が高価でないはずがない。

「ふむ、とりあえずこの店を買い上げるぞ」

「すいません、こいつ、まだ子どもなんで」

「子どもって言うなー！」

店員さんが微笑ましそうに笑う。「可愛らしい妹さんですね」と声をかけられ、なんとなく苦笑した。

見ると、隣で緋芽が頬を膨らましている。

「まあ、一週間分で七着ぐらいなら買えるから心配するなよ。お兄ちゃん、これでも小金持ちだからな」

「自分で言っていてキモいとか思わんのか？」

「……ごめん、自分でもちよつと思つた」

緋芽は容赦しなかった。

自分で着れるものにしておけという悠斗の言葉に従いながら、この店で一番高価な物を七点もお買い上げになられたのである。……万札が数十枚も吹き飛ぶところを見るなんて始めての経験だ。

どうして自分がこんなに苦労しているのだろう。何だか泣きそうになる。

とりあえず、戦闘などで切り裂かれないように注意しておこう。固く決意する悠斗であつた。

立花健一郎は本校舎の四階にある生徒会室で、紅茶を飲みながら書類を片付けていた。副会長の山岸雪子が淹れてくれた紅茶は非常に美味である。だが、目の前の書類はひたすらに血生臭い。

……どうして世間は平和にならないのか。

思い出されるのは昨年の出来事である。本来は生徒会の指示に従うべき執行部たちが、突然反旗を翻したのだ。生徒会と執行部の対立は、一月から三月までの三学期の間、学生たちが授業を受けられないほど発展していった。

全面戦争だった。

執行部の長は魔術師の選民思想を妄信する過激派で、同時にすぐれたアジテーターでもあった。執行部を自らの私兵に洗脳し、表面きはアカデミーの自治をもっと生徒に認めると言いながら、内心ではどのようにしてアカデミーの実権を握っていくか思案しているような男だ。

倉渕祐作は優れた男だった。

その上、生徒会の連中はアカデミー側が選んだ手駒で、アカデミー側の意思が上手く反映されるようになっていると、平然と嘘を吐くほどだった。それを生徒たちが信じてしまうのが問題だったのだ。

「朽葉君、君が作ったのは平和だったのか？」

「ティーカップを机に置く。書類を手に取った。」

「それとも、つかの間の安泰だったのか？」

アカデミーを自主退学した倉渕祐作が、国内の魔術カルテルの幹部にのし上がっている。書類にはそう書かれていた。

魔術カルテルとは、魔術を非合法の商売に用いる、ある意味でヤクザよりもたちの悪い連中である。中南米の麻薬カルテルを、内側から支配したことから魔術カルテルと呼ばれている訳だ。

麻薬売買を筆頭とした暴力的な仕事を、マフィアや暴力団から奪い取った魔術師たちの組織。今、世界中の警察が魔術カルテルに悩

まされている。

「彼を殺しておけば、このようなことにはならなかった……！」

そもそも、一般人は魔術の存在を知らないのである。彼らがこれ以上増徴すれば、いずれは魔術の存在を秘匿するのが難しくなってくる。

『罪を償えるなら、許してやる。償えないようなら俺の手で終わらせるわ』

「……その言葉を信じているよ、朽葉君」

健一郎は口の中の苦々しさを誤魔化すため、紅茶に手を伸ばした。

倉淵君、君はまた革命を起こすと言っのか。

視界の片隅で心配そうな顔をしている雪子を確認しながら。

08：見えない傷跡

窓枠を乗り越えて部屋に入る。悠斗の部屋は男子寮の一階、角部屋にある。こんな場所から出入りしても死角になっていて人目に付かない。

「……………これだから女連れは嫌なんだ」

以前、部屋に女を連れ込んでいた馬鹿がいた。そいつが寮長に説教されているところに居合わせたことがある悠斗は、絶対に自分の部屋に女は連れ込まないと決意したものが。

現実はこのなものだ。

この学校にはかなりの国家予算がつぎ込まれているので、各部屋の備品が整っているのが良かった。台所があるので緋芽が飢えることはなさそうだ。……………とは言え食事を用意してやるのは悠斗である。

「……………」

「やっと気付いたか、馬鹿者」

眉をひそめる悠斗に、緋芽が鼻で嘲笑う。無駄に偉そうだったが、今回ばかりは怒る気にもなれない。

ドアの向こうから殺気を感じる。相手は二人一組ツーマンセルで行動しているようだ。

雰囲気は暴力団の構成員と似通ったところがある。だが。

「ここまで侵入できた時点で、奴らが魔術師だと言うことが分かるんだよな」

この学生寮の敷地に張り巡らされた結界は、一般人の意識を逸らす効果がある。言わば市街地に発生した樹海のようなものである。

「……………何なら吾が潰してやっても良いぞ？」

「ああ、頼む。だが殺すなよ。部屋も壊すな」

「難しい注文だな。吾にとっては造作もないが」

緋芽は小さく笑うと、ドアに右手を重ねた。

「『哀、黒龍』……………終わってたぞ」

悠斗は頷いてドアを開けた。何かにつかかって開かないドアを、無理矢理押し広げる。床に倒れていた二人の男が邪魔になっていたようだ。

……典型的なものなら黒スーツだが、さすがにそこまで馬鹿な格好はしていないようだ。

男たちの格好は黒装束。ウエットスーツのような感じた。二人は頭から血を流していて、おそらくそのために気絶したのだろう。

床が水浸しなのを除けば、まずまずの成果だ。

「陰陽五行の『水』か。それにしても便利な魔術だな」

「そうか？　だが、貴様らが使っている術にも利点はあるのだぞ？」
悠斗は部屋に戻って荷造り用のロープを取り出し、男たちを縛っていく。雑巾の猿轡を噛まして、二人の魔法を封じ込める。

ほとんどの魔術は言霊の要素を取り入れている。呪文を口に出さないと魔術が発動しないのだ。猿轡は相手が魔法使いなら意味のない拘束なのだが、魔法使いではない魔術師には有効的なのである。

「利点？」

「そうだな……貴様たちは一つの属性しか得ていないのに、攻撃も防御も一つの属性で行ってしまうからな。吾の場合は『木 防御』『火 攻撃』『土 防御』『金 防御』『水 防御』にしている。先刻は水を攻撃に使ったが、それは吾ほどの術者だからできる技だからな」

一芸を極めれば多芸を超える。

緋芽の言葉を要約するところなる。

火が防御でないのは、火克金、金属製の使い手が少ないからだろ
う。

金属製で攻撃され、火属性で防御する状況なんて滅多にないと言
うことである。

「……ああ、そう言うことか」

緋芽のは陰陽五行を防御に使いながら、レーザー光線のような魔法で敵を射抜く戦闘スタイルなのだ。攻撃と防御、その切り替えに

生じるタイムラグがほぼ0秒。いや、攻撃と防御を同時に行うのが本気の緋芽なのである。

あの時は2対1だったからどうにか勝てたが、あれで実力の半分である。1対1なら負けていた。

「ふっ、今さら吾の凄さに気付いたか」

「さて、こいつらをどうしたのか……」

「……まあそれも仕方がないことだ。平民風情は吾の神々しさに目を開けてもいられないのだからな。その素晴らしさに気付くのが遅れるのも頷ける」

男たちの所属は当てずっぽうだが……魔術カルテルだ。

なら、クロードに相談してみることしよう。悠斗は携帯電話を取り出した。

「……寝言は寝て言え」

「なんだとっ！」

「……？」

電話口の向こうでクロードが困惑していた。

十

色々と文句を言いながらも、クロードは悠斗たちに手を貸してくれた。

……五分だけ相談に乗ってただけだが。

ちなみに、緋芽はもうどうでも良いと全身で語っていた。今頃はベッドのスプリングを楽しみながら、部屋で少年マンガを読み耽っているはずだ。

『こう言うことはアリスの方が詳しいと思うんだよね。でもさ、僕は元生徒会のメンバーに相談するべきだと思うよ。悠斗が勝手に絶縁しているだけで、向こうはまだ友達だと思っているはずだよ。い

や、戦友かな？」

と言うのでアリスに電話をする悠斗。

『は？ どうしてお前が私の電話番号を知っている？ ああ、あのクソ兄か。今度会ったら眉間に鉛玉を……魔術カルテルか。この国のことは詳しくないんだ。いや、だが私とて鬼ではない。困っているようなら知り合いを紹介してやるぞ？』

キリングゲート兄妹の他人任せっぷりに辟易しながら、女子寮近くの木陰に身を潜める。

ここで落ち合う手はずになっていた。

待つこと一分、気配に気付いて振り返る。その人物の顔を見て、悠斗は眩暈を感じた。

「……もしかして、朽葉さんですか？」

生徒会副会長、山岸雪子。

セミロングの長さの黒髪をポニーテールにしている。たしか、クラスも同じだったような記憶がある。

去年の革命で会長を除く役員たちが総入れ替えされているので、昨年の悠斗の役割を知られていないのが救いだっただ。

「たしか、克己の幼馴染の……？」

「ええ、山岸です。それで、襲われたというのは事実なのでしょうか？」

雪子はこちらを心配しているようだが、同時にまだ信じきれないのだろう。ただの学生が魔術カルテルの構成員に襲撃されたなど、同じくただの学生である雪子に信じられるはずがない。

……なるほど、革命には参加せず自室に引きこもっていた訳だ。あの事件の生々しい傷跡を無視し、事実だけを思い出す。

革命の陣営は 倉渕祐作率いる執行部8人と、彼の理想に賛同した生徒82人。

立花健一郎の生徒会5人と、生徒会の顧問、川崎美野里が率いる精鋭5人。

事実を知らない生徒は学園側の通達で実家に戻ったり、学生寮に

引きこもった。その数300人以上。

90対10 中立300。

あまりに一方的な戦いのように思えるだろう。

ランチエスターの法則では、執行部側の圧勝だった。

しかし、勝利を収めたのは生徒会側である。

「事実でなければどうする？」

「貴方を軽蔑します。でも、それはないのでしょね」

「どうして？」

「立花会長が貴方を買っておられるからです。私はあの方の人を見る目は信じていますので」

「……なるほど」

しかし、あくまで”ただの学生”の言葉をそこまで信じられる訳がないのだ。

生徒が魔術カルテルから襲撃を受けた。生徒会は魔術カルテルについて情報を掴んでいる。よって、”ただの学生”の証言に真実味を見出した。こんなところだろうか？

「で、一体何が……」

「悪いな。この話、俺の妄言だったことにしてくれ。立花には何も伝えるな」

悠斗は雪子を遮るように言った。彼女は「は？」と目を点にする。

あいつにはもう、負担はかけられない。

疲れ切った健一郎に、生徒会長という役職を押し付けたのは自分たちだ。ただ一人、あの戦場から抜け出せなかった友人に、悠斗は心の中で何度も謝罪した。

……あの男たちは、俺が処分することにするか。

どうせ尋問しても大した事実は出てこないだろう。

09：刺客襲来

国立魔術アカデミー、校長室の隣室にある応接室。

革張りのソファには、二人の男と一人の女。ドアから向かって右側のソファにはアカデミー教師にして研究者の大賀礼司と、アカデミー教師にして生徒会顧問の川崎美野里が座っていた。

大賀は割腹の良い四十男で、鼈甲の眼鏡をしている。ジーンズにシャツ、肩に白衣をひっかけた格好である。美野里は二十代後半、長身でスタイルが良い女性だった。蘇芳色のスーツに白衣を羽織っていた。

「それで、例の魔石はどこに？」

左側のソファに腰を下ろした黒スーツの男が、感情のない声で呟いた。落ち窪んだ眼、痩せ細った頬、陰鬱そうな表情が印象的だった。黒田と名乗っているが、おそらく偽名だろう。

「……ここに」

大賀はポケットから十センチ四方のガラスケースに収められた、極大の宝石を取り出した。すべてを吸い込んでしまいそうな漆黑、しかしあらゆる光を反射しているように見える不思議な石だった。

「ふふっ、なるほど。これが黎明の魔石ですか」

「で、魔法庁のお方が何の用なんです？」

魔法庁　その表向きの顔は世界中の魔法の管理となっている。

血系で遺伝する魔法の継承者が少なければ、その魔法が失伝しないように『保護指定』にする。継承者が増えすぎたければ『封印指定』にする。

保護指定された魔法使いには24時間体制の護衛、重婚が認められていない国家でも一夫多妻が許されたり、結婚相手の斡旋を行ったりする。

封印指定された魔法使いは、同じ魔法が使える者同士としか結婚できなくなる。近親婚とまでは行かないが、親戚同士の婚姻が増え

る訳だ。とは言え、封印指定されるほどなら地域中に魔法が広がっている可能性が高いのだが。

「役人氣質の強い組織　魔法庁はそう認識されている。

……だが、この男はただ者ではない。

そんな生易しい世界を生き抜いてきただけでは、この眼力は備わらない。この身のこなしは備わらない。息をするだけでこの威圧感。大賀は息を呑んだ。

その様子を横目で見ていた美野里は、ふつと鼻で笑う。

彼女は魔法庁の裏の顔を知っていた。魔法庁は魔術や魔法を用いた犯罪捜査のスペシャリストだ。だが、警察組織よりもその内実はドロドロとしている。

犯罪者になる可能性があるというだけで『将来の危険因子の抹消』を敢行する。

暗殺や拷問もお手の物。目の前の男は、そう言う人間だ。

その男が、『黎明の魔石を見せて欲しい』と言い出したのである。男は研究報告を受け取り、魔法庁に運搬するだけの運び屋だった。

だが、魔法庁の役人だ。断わって関係を悪化させるよりは　と校長が大賀に頼み込んだのだった。

不安になった大賀は美野里に同伴を求めた。

「何の用？　そうですか、何の用があるのかですか？　いやいや、用なんてあるようでないようなものじゃないですか。もしかして分かりませんか？」

「は？　貴方は一体何を？」

「いえいえ、みなまで言わずとも結構。私の父は乱暴な性格ですね。少しでも口答えすれば拳骨が飛んでくる。そうそう、それで母は逃げ出したんですよね。そう言えばこの学校の校舎は綺麗ですけど、そうそう、私の母は裁縫が趣味だったんですよ、私の学校の校舎は汚くて……」

男の口上は狂気じみていた。脈絡、意味、文脈の前後感覚すら欠如している。言葉をコミュニケーションの手段ではなく、相手を怯

えさせるために使っていると言われたら誰もが納得するだろう。

大賀は我知らず席を立ち、後ずさっていた。

「大賀君、あまり動かない方がよいよ」

だから、川崎美野里は忠告した。

男がニツと笑顔を浮かべ、左手で黎明の魔石を掴み取った。そのときになって大賀は気付いた。男の左手は義手だったのである。

「そ、それをどうするんですか？」

「だから大賀君、動かない方が君のためなんだって」

大賀は美野里に目を向けた。片足を組んで、優雅に微笑んでいる。

もしかして、裏切ったのか？

この男が黎明の魔石を手に入れるために送られてきたのだ。美野里もこの男の仲間なのだ。仲間だから、これほど余裕があるのだ。

疑心暗鬼に陥った思考は、そう判断した。

「くそつ、貴様ら！」

大賀は男の左手の魔石を奪い返そうと、右足を踏み出した。

ドンツ、そんな音がして大賀の右足が吹き飛んだ。

「え？」

地雷を踏み付けたような感触。地雷なんて踏んだ経験はないが、多分こんな感じなのだろうと大賀は虚ろな思考で考えた。

「だから忠告したんだ」

美野里は男を睨み付ける。

「まさか、貴様が魔法庁の役人になっていたとはな」

「お久しぶりです。『アブソリュート・ラゲナロク絶望魔界』、川崎美野里さん」

「……その口で私の名を呼ぶな。名が穢れる」

「ふむ、やはり神道系魔術師。穢れには敏感だ」

余裕を見せ付ける男の言葉に、それまで抑えられていた感情が爆発した。

「黙れ！ 『ダイティール・サンクチュアリ神域汚辱』、草薙涼一！ 神汚しの裏切り者！」

「くくつ、私が神を墮としたなら、神を汚したのは貴方ですよ」

「貴様！」

「まあ、私は言い争いをしにきた訳ではありませんからね。主義主張が相容れないのは、五年前に証明されていますから。それよりも、本物の魔石はどこにあるんですか？」

男 草薙涼二は歪めた口元をすつと戻し、魔石を床に転がって呻いている大賀に投げ付けた。

これはただの黒い石だ。込められた魔力が高いので、並みの魔術師なら騙されてしまうだろうが、流石に草薙涼二は騙せなかったらしい。

「まあ、答えてくれないのは分かりきっていますからね。私の役目は『アブソリュート・ラグナロク絶望魔界』の発動を阻止することです。その間に送り込んだ部下たちがアカデミーの主要人物を叩いていけば、いずれ真実が出てくるでしょう」

草薙は言葉を切り、狂気の笑みを貼り付けた。

「さて、何人殺せば魔石にたどり着くのでしょうか？」

美野里は答えず、足元のダミーの魔石を拾い上げた。

十

茜崎克己はベッドの上のノートPCと格闘していた。マウスなどのポインティングデバイスは接続されていない。画面は真っ黒で、白い英文が下から上へと流れていく。

自作OSが搭載されたPCである。
ネットワーク環境は整っていない。ただの用途不明な無線LANが備わっているだけである。

今時の高校生なら『なんだこのガラクタは？』と言うだろう。この機械を操れるのは克己だけだ。

キーボードを高速でタイピングする。授業はサボりか睡眠、何事も適当にがモットーの不良少年とは思えない姿だった。

克己は不良を演じている。

口調も意味不明なものに変えたし、付き合う友人も最小限まで減らした。不良になると、色々都合が良かった。

「不良じゃなくてオタクだった訳ね？ 茜崎克己さん？」

黒いディスプレイに少年の顔が映り込んだ。

窓を叩き割り、無造作に部屋に侵入してきた少年である。振り向きもしない克己に苛立ちを感じている様子だった。

「と言うか、俺のこと知ってるですか？」

「生徒会副会長、山岸雪子の幼馴染でしょ？ ああ、そうそう。君、これから人質になつてもらおうから？」

「何のためかにやー？」

「ん〜？ 山岸雪子を犯すため？」

克己は溜息を吐いた。友人がいつも平穏が欲しがっている気持ちが少し分かる。

「ふうん、やっぱり幼馴染のことになると怒るのかな？」

「それはどうかにやー？ 俺とあいつはただの幼馴染じゃん？ それに、多分あいつは立花会長のことが好きだからねん」

雪子を立花健一郎の人質にする方が、ずっと効率的だろうに。

一時的に情報を引き出すのではなく、雪子スパイに仕立て上げるつもりなのだろう。恒久的に情報が得られる方が、組織の利益に繋がる。

克己はキーボードで『Sky-Fish』と打ち込んだ。

「欲張つても良いことはないぞ。どうせ倉渕祐作の二の舞だ」

一瞬、克己の口調が真面目になる。彼の地はこんな感じだ。それを知っている者は数人しかいないが。

「ん？ 突然どうし？！」

キーボードのEnterキーを叩く。

「！ 防げ、土壁！」

ベッドの引き出しから鋭利な三本のナイフのような物体が飛び出す。方向転換しながら少年へと襲い掛かった物体は、土色の壁に塞

がれた。

「……ゲームオーバー」

克己は『Bahamut』と打ち込んでEnterを押す。瞬間、壁を突き破って出現した巨大なアギトが少年の胴体を噛み千切った。

「……どう、して……お前が？」

少年は解答を得られずにこの世を去った。死体の処理は少年を噛み千切った怪物に任せることにする。

ナイフのような物体が滑空しながら克己の手に収まった。それは羽のある魚のシルエットをした機械だった。カジキのように先端が鋭利に尖っているが、紛れもない金属である。

『スライシィン切れき空魚』、克己はそう名付けている。

「ご苦労様だけにやー」

声をかけるが、手足と翼が付いた竜のような魚は反応しない。『バハムート地を這う大海魚』、こちらも機械仕掛けである。だが、その大きさが尋常ではなかった。

全長三メートル。建物の一階分の高さに相当する。

克己は「ああそうか」と思い出し、ノートPCを引き寄せて『Thanks』とタイプした。

巨竜（巨大魚）は頷き、再び死体処理に戻っていった。

この部屋の隣室は空き部屋になっているが、昨年川崎美野里に許可を貰って克己の物置にしている。

……しかし、壁の修理はどうしたものか。

それに、雪子が心配だ。他にも克己のように襲われている者もいるかもしれないし

「俺は悠斗ほど面倒臭がりじゃないからねん」

克己はバハムートに跨り、部屋を後にした。

茜崎克己 川崎美野里が集めた精鋭の一人。

『エレク・レウヴァイアサン電海竜王』と恐れられた魔法使いである。

10：透明な爆弾

PM4：56分、周囲は夕闇に覆われている。春先にしては冷え込む一日だった。

この10分間に女子寮の玄関を通ったのは山岸雪子だけだ。

すぐに戻ってきた雪子の表情が印象的だった。出て行くときは焦燥、戻ってくるときは怪訝。

そろそろか。

アリス・キリングフィールドは携帯の着信履歴を確認した。その一番上には登録していない番号がある。朽葉悠斗の番号だった。

「……関係ない」

アリスはその下の番号をプッシュする。

おそらく、朽葉悠斗は読み切っているのだろう。雪子に詳しいことを相談していたら、もっと時間がかかっている。朽葉悠斗にはできるだけ長く雪子を屋外に連れ出して欲しかったのだが、賭けは失敗のようだ。

上手くいけば戻ってくる雪子を捕獲できたのだが。

アリスに与えられた任務は山岸雪子の捕縛だった。

今年の生徒会は、昨年ほど恐ろしい存在ではない。むしろ天地ほどの隔たりがあると言えるだろう。革命時に書記を務めていた立花健一郎だけが生徒会に残り、他は身を退いた。二人が学園を去り、二人が行方不明になったのだ。

今の生徒会は抜け殻だ。警戒すべきは立花健一郎だけである。

その立花健一郎の急所は、山岸雪子なのではないかとアリスは考えていた。

『はい、もしもし。ああ、貴女ですか。ええ、こちらの首尾は上々ですよ。これも仙石君のお陰ですね』

「その仙石からの報告ですが、校内の閉鎖は完了したとのこと。学生寮の閉鎖は残り二分ほどかかるそうですけど」

『ふむ、さすがの仙石君でも間に合いませんでしたか。』
は便利ですが、準備に時間がかかる点をどうにかしないと実戦では使えませんね。まあ、彼の成長は草葉の陰から見守ることにして、こちらこそそろそろ始めましょうか』

草葉の陰って……まだ貴方は死んでいないでしょうに。

あの人は殺せない。あの人はすべての魔術師の天敵とも言える。

「了解、皆に指示を送ります。あと……」

『藤森君のことですね。彼が先走るのは予想通りですけど、結果はどうになりましたか？』

「電話が繋がりません。彼の身に何かあったと考えるのが宜しいかと」

どうして分かったのだろう。少し驚きながら、アリスは答えた。

あの人の頭脳は自分程度では計り知れないところにある。そんなことは、とうの昔に痛感していた。

『藤森君の任務は何でした？』

「茜崎克己という不良生徒ですが……」

『ああ、なるほど』

電話口の向こうで彼が嗤った。

何か問題のあることを言ってしまったのかもしれない。アリスは不安になった。

『なるほどなるほど、これは面映いことになりましたね。ですがこれは仕方がないかもしれません。面白い、ですが歯がゆい。彼の見目は無能そのものですからね。ですがあれは特別です。そう簡単には倒せませんよ。魔術が使えない魔術師ですから』

「魔術が使えない？」

『ああ、いえいえ、こちらの話です。ですが、茜崎君と接触したら逃げることを優先するように皆に伝えておいて下さい。あれは立花健一郎や朽葉悠斗並みの化物ですから』

「はい」

アリスは頷いた。

「では失礼します」
アリスは電話を切ると、部下たちの番号をアドレス帳から呼び出した。

十

一つ、分かったことがある。

「……ああ、そこは通行禁止だからさ。悪いけど今晚は余所に泊まってくれないかな」

辺りはすでに薄暗く、そろそろ夜が到来する。そんな時間帯、男子寮の入り口の傍にある縁石に、一人の少年が腰を下ろしていた。少年の視線は携帯ゲーム機にしか向けられていない。

中学生ぐらいの少年である。茶色く染めている髪が、童顔に似合っていた。

寮の入口で足止めされていた男子生徒たちが困惑して、お互いの顔を見合わせている。

「大丈夫、明日になったら何事もなかったかのように今までの生活に戻るよ。あははっ、革命のときに何もできなかった君たちにはそれがお似合いだね。本音を言っと全員皆殺しにしたいところだけどさ。ああ、そんなに怯えなくても良いよ」

少年は携帯ゲーム機から顔を上げた。

その雰囲気呑まれ、生徒たちが後ずさる。

「受動的な魔法は能動的な殺戮に向かないんだよね」

少年は寮の入り口、門の向こう側にいる。

門の外側には、片足を失った生徒が五人もいた。少年の忠告を聞かなかつた馬鹿者である。怒って足を踏み出した者や、少年の無垢

な表情に騙されて注意しようとした者たちだ。

一つ分かったことがある。

それは悪意ある存在が国立魔術アカデミーに襲い掛かっているということだ。

「僕の任務はアカデミーと学生寮の閉鎖。学生寮から増援がかけつけてくると、アカデミーで仕事をしている人たちが迷惑するんだよね」

「倉渕祐作の知り合いか？」

「知り合い？ いや、実際に顔を合わせたことはないなあ」

少年は肩をすくめると、言い聞かせるように呟く。

「あのねえ、RPG【ルブレインゲーム】で言えば倉渕祐作は中ボスなんだよ。倉渕はあのお方に上手く利用されてる道化【ヒーロ】ってところさ」

「なら貴様らがラスボスなのか？」

「アンタって馬鹿なの？ そんな訳ないじゃん」

少年は携帯ゲーム機をポケットに仕舞った。

「主人公は僕たち。倉渕祐作が中ボス 協力者だけど途中で向こうから裏切るって設定ね。そしてラスボスは君たち魔術アカデミーなのさ。しかしまさか、ここまで鈍いとはねえ。頭脳労働では右に出る者がいないのが朽葉悠斗だったと聞いているんだけど」

悠斗は考えた。相手は自分のことも知っているらしい。そして、真っ向から悠斗の敵だと言いつつ切っている。言動は挑発じみているし、悠斗が飛び出すのを待っているのかもしれない。

迂闊に動く危険だ。少年は自分の魔法のことを受動的だと評した。つまり、動かなければ被害はない。

……逆に言うと、身動きが取れないのだが。

「あははっ、頭も腕も足りないみたいだね。完全に『不視爆殺』【インシブル・ランドメイ】の術中に嵌ってるよ」

「……なるほど、そのようだな。確かに貴様は頭も腕も足りないよ。うだ。しかし、一つ思ったのだが、そこまで無知だと逆に爽快に見えるんだな」

「はっ、何言ってるの？ 君馬鹿？ 馬鹿なんですよ？」

「貴様の指導者は魔法名を隠せと教えてくれなかったらしい。インビシブルは不可知、ランドメインは地雷。つまり、見えない地雷か地雷というものは乗せられた足が退かされることにより爆発するはずだが、この地雷は触れただけで爆発するようだな」

実験体のような役割をさせてしまった五人の生徒には気の毒だが、これでこの少年を攻略する目処が立った。

「失言だった。お前らはラスボスなどではない。しかも、思ったより弱いらしい。たった一手で詰んでしまうお前と違って、倉渕祐作は二百八十三手まで持ち堪えたからな」

「……どうせハツタリだろ？」

「さあ、それはどうかな」

「君の前言、撤回させて貰うよ」

少年は笑みを消した。全身から殺意が吹き出し、悠斗に襲い掛かる。

『刺突、闇の矢』

悠斗は右手を前方に振り払った。幾本もの黒い矢が飛び出し、空中で爆発する。少年の魔法と相殺されたのだろう。

見たところ、少年の魔法はただ地雷というだけの物ではないらしい。地面だけではなく空中にも展開できるし、ある程度なら動かせるようだ。

『刺突、闇の矢』

『刺突、闇の矢』

『刺突、闇の矢』

初手、ひたすら撃ち続ける。

撃つて、撃つて、撃つ。矢を弾幕のように展開し、地雷を掃討していく。

「は？ ちょっと待てよ！？ なんだよそれ、反則だろ！？」

「どこが反則だ？ 気持ちは分かるが諦める。お前の失敗は俺をただの頭脳労働者だと思っ込んでいたことだ」

絨毯爆撃は人道的な問題で批判されて、近年では巡航ミサイルなどの精密爆撃に取って代わってきているが、無差別かつ広範囲に渡る爆撃を仕掛ける側は、相手側計り知れないプレッシャーを与える。「うわあああああああああ！！」

少年は踵を返して逃げ出す。

その背後から、四本の矢が両手両足を射抜いた。闇の矢は貫通と同時に消滅し、少年の傷跡から間欠泉のごとく鮮血が噴き上がる。

「降伏しろ。悪いようにはしない」

「分かった！ 分かったから助けて！」

やはり、見た目どおり子どもだったようだ。

これで情報を引き出せる。黒幕のことが分かるかもしれない。悠斗はそう考え、溜息を吐いた。

去年の自分なら、たとえそうであっても殺していた。

「……俺も随分と甘くなったものだ」

悠斗は自嘲的に笑うと、周囲の生徒たちに手伝ってもらって少年の治療と拘束を済ませた。

11：真の罪人

草薙涼二がアリス・キリングゲートからの途中報告を受けたのは、作戦開始から十五分後のことだった。草薙と川崎美野里は十五分前から、彫像のように身動き一つしていない。

一歩でも動いたら二度と止まれなくなる。二人にはそんな予感があった。

草薙と美野里の魔法は、決定的に相性が悪い。24時間、48時間、72時間　それこそ1週間経つても決着が付かないほどに。

さらに、この部屋には『インヒシブル・ランドマイン不視爆殺』が仕掛けられている。

出血で気を失っている加賀礼司のようになるほど、川崎美野里は愚かではない。

「ええ、はい。分かりました」

アリスから報告を受けていた草薙は、通話を切ると携帯を背広の胸ポケットに仕舞う。

美野里がこちらを見ていることに気付き、何となく笑いかけた。た。

「と言う訳で、生徒会書記の二名が死亡しました。アカデミー教師が六名、巻き込まれて死亡していますね。まあ、こちらも立花健一郎の反撃で三人ほどが失われましたけど」

「書記の二名は立花の傀儡だ。問題ない」

美野里は無表情に、そして無情に言い切る。草薙はそれを恐ろしいと思っていたことがあった。随分と昔のことだ。あの頃の自分は仕事に私情を持ち込んでいて、それが正しいことだと信じていた。

仲間の死。それが草薙を狂わせたのだろう。

「強がりではなさそうですね」

「ここはあの子たちのことを信じるしかなさそうだからな」

私が動けない分、あの子たちに頑張って貰うさ　美野里はそう言って微笑んだ。

クロード・キリングゲートがココアとカツ丼を、百合原綾香がクラブハウスサンドセットを注文した。綾香にココアを渡そうとしたウェイターに、クロードが苦笑して声をかける。

「カツ丼にココアはないわよ……」

支倉沙希は「奢りじゃないからね」と念押しすると、コーヒーのお代わりを頼む。

ここは、国立魔術アカデミーから徒歩十分の距離にあるレストランだった。コーヒーのお代わりが無料で、メニューの品数が多い割には味が良い。チェーン展開していない個人のレストランで、学生には入り難い雰囲気がある。そこが沙希のお気に入りだった。

「で、クロード。私に聞きたいことがあるって言ってたわよね」

すべての注文が届いた頃を見計らい、沙希が切り出した。

「ああ、悠斗から話を聞いてちょっと不安になったんで。沙希なら何か知ってるんじゃないかなー、って思ったんですけど」

「話してみなさい」

こう見えて、沙希はクロードの先輩だ。アカデミーから逃げ出した身だが、まだ在籍していることになっている。今年から三年生になるのかと思うと感慨深い。まだ一度も新クラスには顔を出していないし、これからも出るつもりはない。

革命を静観していた奴らと同じ教室で机を並べる。

それは沙希にとって悪夢そのものだった。友人たちが自分たちに殺されるのを黙って見ていた奴らと友達ごっこをする。それは一体何の冗談なのだろう。

「なるほどね……」

クロードの話を聞いて、沙希は頷いた。去年、生徒会副会長を務

めていただけの自分に相談事とは何事だろうと思っていたのだが、話を聞いて納得できた。

倉渕祐作の気配がする。

それは昨年の革命を切り抜けてきた者たちにとって、看過できない事態だった。

「まあ、倉渕なら今のアカデミーは格好の獲物に見えているでしょ」生徒会は散り散りになってしまった。

会長ともう一人の書記の行方は知れない。二人は何も言わずにアカデミーを去って行った。美野里が集めた精鋭も、二人行方不明になっている。

今年の戦力では、倉渕を相手にできるとは思えない。アカデミーに在籍していた学生を90人も従えてしまったのだ。外部の人間の方が集めやすいので、今度は前よりも敵の数が増えると考えべきだろう。

「90 対 10、それよりも酷くなりそうね」

「しかも、川崎先生と生徒会長。僕たち三人で何とかしなければならぬんです」

沙希は頷いた。今のアカデミーにはまともに戦える戦力が五人分しか残されていない。

「ええ、大変そうね」

「ええ、大変なんです。って、それだけですか！？ もっとこう、何か言うことがあるんじゃないですか！？」

「言いたいことはハッキリと言いなさい」

「……じゃあ言わせて貰いますよ」
クロードはごくりと生唾を飲み込んだ。

「アカデミーに戻って下さい。いや、元生徒会副会長『ケラヒティ・フレスベルグ空飛死鳥』、支倉沙希の力を貸して下さい」

沙希の目が細められる。鋭い眼光を向けられても、クロードは視線を背けたりはしなかった。

「……はあ」

どうしてこう、眩しい目をするのか。去年なら途中で下を向いていたはずだ。

その意思のある瞳が、沙希には目を逸らさずにはいられないほど気味が悪かった。自分の駄目な部分を見透かされているようで、心根がゾクゾクと震えるほどに。

「……もう坊やとは呼べないわね、クロード」

沙希は苦笑した。

「で、では！？」

「でも、私は領けない」

幽香なら、頷いていたかもしれない。

と言うより、悠斗が襲われたと聞けば何もかも放り出して駆けつけるだろう。

しかし、沙希は領けない。それはあらかじめ決められていたことだ。今さら戻っても、アカデミーは沙希にとって守るべき居場所ではなくなった。

「え？」

予想外の返答に、クロードは困惑した。

「え？ あれ？」

沙希は無情に言い放つ。

「私はこう考えているの。おそらく、行方不明の 大悟会長や隆太君も同じことを考えているのでしょーうね」

アブソリュート・ラグナロク

『絶望魔界』、川崎美野里。

グラン・ベヒモス

『岩窟魔獣』、立花健一郎。

ブラッディ・クリスタルシエイド

『血液水晶』、クロード・キリングゲート。

エレク・リヴァイアサン

『電海竜王』、茜崎克己。

「これだけの戦力を抱えている組織は明らかに異常よ。倉淵の演説ではないけど、アカデミーは力で生徒たちの意見を抑圧していると言われても仕方がないんじゃないかしら」と私は思うわけ。もしこの五人がアカデミーを去っていたら？ アカデミーが無能な教育機関で研究機関としても役に立たなかったら？」

誰にも目を付けられなかったかもしれない。

魔法庁の役割、危険因子の排除。それは生徒会側にも適用されるのではないか。

革命に参加した執行部側の生徒90名中、58名が死亡している。どこからどう見てもオーバークイルだ。その原因は幽香と悠斗の二人にあるのだが、健一郎も沙希も二人に責任を被せようとは思わなかった。殺戮を命じたのは自分たちだ。

「そ、それは」

クロードは呻いた。苦しそうな表情である。どうやら自覚していたようだが、誰かに言われたことがなかったのだろう。

「話はこれで終わりにしましょう」

沙希はクロードから視線を外す。綾香はようやく自分の番かと溜息を吐いた。

クロードに頼んで連れてきて貰ったのだが、本人は至極迷惑そうである。

「私が聞きたいことは一つよ。貴女、朽葉悠斗の戦いを見たことがあるのよね？」

「ええ、そうね。それで、何が聞きたいの？」

「朽葉悠斗の戦い方」

綾香は沙希を睨み付けた。

が、動じる様子を見せない沙希に、綾香は諦めて渋々話し始める。「なるほど、貴女との決闘では物体破壊しか使わなかった訳ね」

衝撃波を利用した高速移動。

しかし、それは全身を痛め付ける行為に他ならない。
あの戦い方は、他者に痛みを与えることに苦痛を感じなくなった
自分への自傷行為だ。

貴方を殺します、ごめんなさい、僕も痛いので許して下さい。

悠斗の感情を噛み砕いて解釈するところなる。ちよつと一方的な
解釈だが。

「で、二度目の戦いで使ったのは『闇の盾』と『闇の斧』と『闇の
槍』か……」

剣・槍・斧・矢・盾 悠斗の闇魔術は『見立て』にある。そも
そも、闇なんて不確かなものを操るのは人間には荷が重すぎるのだ。
そこで闇を『影』に見立てたり、物体化させたりするのだが、それ
は魔術師の解釈によって様々に変化する。

悠斗の闇を『武器』と『エネルギー』に見立てている。
それは応用性が高くて扱いやすいのだが 悠斗はまだ本気を出
していないんだ。

本気を出したくないのか、それとも出せなくなったのか。まあ、
出されて困るのは敵だけではない。あれは味方も巻き込む諸刃の剣
だ。それこそ死ぬような状況にならない限り、使わないだろう。

後輩のことは心配だが、さてどうしたものかと沙希は思案した。

12：俺を殺せ

気付いたときには、もう決定的に、あまりにも致命的に、すべてが終わっていた。

場所は女子寮の一室。背後から「動くな」と言つて喉元に刃物のような物を押し当てているのは、黒いコートを着た二十代後半の青年だった。

小綺麗なマスクの青年で、白いハチマキをしている。

「何者ですか？」

「答える義務はない」

……まあ、そうでしょうね。

襲われる原因なんて分からない。自分が生徒会副会長だからだろうか。

どうも良く分からない。良く分からないといえば、先ほどの一件も良く分からなかった。朽葉悠斗が一枚噛んでいると言うことなのだろうか。

「お前は立花健一郎用の人質にされる。立花を排除するまでは生命の安全を保障しよう。だが、抵抗したり事態を余計に悪化させると俺が判断したなら、そのときは俺自身の手でお前の命を終わらせる」
どうして襲われているのか。

やはり、立花への人質なのだ。

「どうやら間違いないようですね」

「なんだと？」

「いえ、独り言です」

青年は訝しげに眉をひそめながら、刃物を仕舞った。背後から刃を押し当てられていたのでその全長は分からなかったが、どうやら日本刀のような物らしい。

「じゃ、早速始めようぜ」

もう一つの声に、雪子は慌てて振り返った。青年の隣には三十代

のサングラスをした男性が嫌らしい目付きをして笑っている。サングラスをしているので目付きが分からないはずなのに、なぜだか嫌らしい目が思い浮かんだ。

「俺は気が進まないんだがな」

「じゃあ参加しなくても良いんだぜ？」

「ああ、そうさせてもらおう」

「ッチ、勝手にしやがれ」

男は青年に罵声を浴びせると、雪子の片に右手を置いた。

瞬間、背筋が泡立った。これからされること 脳裏に浮かぶ明確なイメージがそれまで冷静だった雪子を戦慄させる。

「いやっ、離して下さい！」

「ははっ、さつきまで澄ました顔をしていたのにな。これだから無駄に頭が良いと困ってしまう。自分がどうなるか、予想したんだろ？」

下卑た視線にさらされ、雪子はうつむいた。

「人質に逃げられたら元も子もないからな。お前は立花に惚れてるんだろ？ 惚れてる男のためならって、余計なことをされたら困るんだよ。だから、抵抗する気力がなくなるまで痛めつけると言われているんだ」

私が立花君に惚れている？

そんな馬鹿な。そんな馬鹿なことではない。健一郎はいつも違う誰かを見ている。自分ごときに振り向かせられる相手ではない。

「まあ、役得って奴だな。俺は雇い主に忠誠を捧げてる訳じゃねえからよお、こんなときに褒美を貰わないと裏切っちゃうかもしれない。その褒美つてのがお前だよ。分かるかあ、おい？」

男がニヤニヤと笑みを浮かべる。そのとき、青年が窓の外を見てから後ろに飛んだ。

「っ！」

窓ガラスが割れ、ヒュツという風切り音が室内を駆け抜ける。

銀色に光る物体が、男の右腕を切り落とした。

「ぎゃあああああああッ！！」

悲鳴を上げながら、男は青年の背後に隠れた。すぐに自分で止血するのは、さすがはプロといったところだろう。

青年は刀を抜刀し、銀色の物体に振り下ろした。だが、物体は縦横無尽に浮遊し巧みに屋外まで逃げ出した。

「雪子、こつちだぜよ！」

屋外からの声に、雪子は駆け出した。一瞬だけ逡巡し、窓から飛び降りる。その背中を何者かが抱きとめた。

「……克己？」

「無事だったかにゃー？」

そこにはふざけた顔をした、金髪の幼馴染がいた。

巨大な爬虫類にも魚類にも見える飛行生物に跨っている。その周囲を三つのナイフのような物体が飛び回っていた。克己は片手のノーTPCを絶え間なく操作している。

「どうして？ えっ、これは何！？」

「そのリアクションは最高なんだにゃー」

克己は大声で笑うと、窓の向こうからこちらを見ている二人の男たちに視線を向けた。

十

悠斗は気絶した少年を周囲の生徒たちに任せると、自分の部屋に戻った。一階の角部屋にたどり着くまでに戦闘の物音が聞こえていたが、まず部屋に戻るのが先決だろう。緋芽のことが心配だった。

そんな心配、する必要がなかったのだが。

悠斗の部屋は無事とは言い難い状況だった。大小のレーザーが壁を貫通し、土の壁が床から突き出し、爆発の残滓が残っている。スプリングが飛び出したベッドに退屈そうに腰掛けていた着物姿の少

女は、悠斗に右手を向けていた。

「なんだ悠斗か。間違つて攻撃するところだったぞ」

まあ、それはそれで面白そうだがな　と緋芽は笑いながら右手を下ろす。

床に転がっている魔術師たちは死んではないようだが、片腕を失っていたり腹部に大穴が開いていたり、すでに虫の息の状態だった。

「手加減してやったのだが、思ったよりも弱かったのな。少しでもさじ加減を間違つたら防御を貫通してしまう。まったく……この時代の術師の軟弱なことよ。それに比れば悠斗は齒ごたえがあつただがな」

そう言つて、緋芽は挑発的に笑う。誘っているつもりなのだろう。もう一度戦えば自分は勝つと言いたげな表情である。

「あの時は2対1だっただろ」

「あんな小娘は勘定に入つておらん」

綾香のことを言外に敵ではないと言っているのだろうが、『風魔^{エア}の魔眼』は悠斗たちの戦友にも匹敵する魔法だ。

潜在能力は抜群だと思ふのだが。

「で、この襲撃者は悠斗の敵なのか？」

「俺だけが目標なら別の場所で襲つてるだろ。アカデミーの生徒全員を襲撃する理由がない」

「……なるほど」

緋芽は頷くと、足を組んだ。着物姿なので色々見えそうで見えない物があるのだが、相手の見た目が幼女なので気にしないことにする。

「今凄く失礼なことを考えていなかったか？」

白い目をする緋芽を適当に宥めて、悠斗は服を着替え始めた。

ジーンズとシャツの上に、ケプラー繊維を二十枚重ねた強度を誇る漆黒のロングコートを羽織り、胴に太いベルトを巻き付ける。

「で、どうするのだ？ お前のことだからこのまま黙ってやられる

訳ではあるまい」

緋芽が腰を下ろしたベッドの下から皮のシースに収められた剣を取り出し、ベルトに差し込んだ。

「悠斗？ まさか、死ぬ気ではなからうな？」

「……かもしれないぞ」

「なんだと!？」

悠斗は緋芽を見据えた。

緋芽の表情にあるのは 怒りだ。不躰な悠斗の言動に、心の底から激怒してくれているのである。まさか、ただの居候がそこまで想ってくれているとは。

なら、託してみるか。

俺の命運を。

「一つ、頼み事がある」

「なんだ？ 吾を抱きたいのか？」

「……茶化すな」

溜息を吐く悠斗に、緋芽は不満そうに頬を膨らませた。

「もし俺が魔法を使ったら、その時は俺を殺してくれ」

13：三者の決戦

夕日が堕ちた。光が排除された世界。暗闇が満ちて視界が消滅する。

鉄筋コンクリートの校舎では、明滅する蛍光灯以外の光源はなかった。その一部は刺客たちに破壊され、教職員たちが所属している研究棟の方角などは真暗である。

第二資料室では、坂上美優が物音を立てないように潜んでいた。今年入学した美優は運悪くクラス委員にされてしまった。クラスでは百合原綾香の方が目立っていたのに（入学式の一件で）、どうして自分なのだろう。美優はちよつと真面目そうな大人しい女の子なのに。

美優に隠れているように指示したのは生徒会の書記である。今日は各クラスのクラス委員の顔合わせで、生徒会からは書記が派遣されていた。と言っても、教室の隅で様子を見ているだけだったのだが、その彼が、最初に襲撃者の存在に気付いたのだった。

身を挺して美優たちを庇い「逃げる！」と叫んだあの人は、多分もう生きてはいないだろう。

黒スーツの、明らかに本職と分かる人間を相手にただの学生が太刀打ちできる道理がない。戦闘用の魔術は、たかが数年で覚えられるものではないのだ。

この学校の生徒の多くは入学時から血系などで魔法を持っている。彼らは努力して魔法よりも下に見られがちな魔術を覚えるのである。魔法一つで戦い抜けると思い込んでいる生徒が多いので、戦力としては大したものではないと百合原綾香が言っていたが、こんな状況になると納得できることばかりだ。

足音が響く。美優は身をすくめた。

段々と近付いてくる様子に、じわじわと恐怖がせり上がる。叫び出したい心境だった。

「……………」

足音がドアの前で止まる。

ドアの向こうも室内も電気が消えているのだが、ドアのガラスに人影が映っていた。

「誰？」

人影が訊ねる。そして、人影は無遠慮にドアを開いた。

いや、正確にはドアを開けたのは人影ではなかった。その後ろを歩いていた人物である。

「どうも、こちらは茜崎！好きな文学は『チャタレイ夫人の恋人』！」

「エロ小説の間違いでしょ？」

「むっ、これだから素人は困るぜよ。あれは文学なんだにやー」

人影が青筋を浮かべた。彼女の顔は知っていた。生徒会の副会長、山岸雪子である。

もう一人は見覚えがなかった。金髪と馬鹿っぽい口調の少年だった。少年の背後に巨大な金属の物体が追従し、周囲をナイフのような物が羽音を立てて飛び回っている。

「ところで、立花会長は見かけませんでした？」

「いえ、見てませんけど……………」

「そうですか……………。克己、これからどうする？」

雪子は克己に対してだけ、口調を砕いている。馬鹿にしているのかと思ったが、どうやら違うらしい。

「どうするって言われてもなー、俺は大丈夫ぜよ。健一郎って馬鹿みたいに強いですたい。大地を喰らう獣がそう簡単にやられるとは思わないけどにやー」

「どこにいると思う？私のアテは全部外れたんだけど」

「えっ？自分たちの会長なのに本当に分からないのーのー？」

「リフレイン（反響）させるな。で、どこにいるの？」

少年は肩をすくめた。

「健一郎は土属性の魔術師。なら、屋内にはいねえよ」

口調を変え、踵を返す。

「克己？」

「アイツのところに行くなら勝手にしろ。もう俺は面倒になったから降りるぜ」

少年の言葉に、雪子は両目を丸くした。慌てて少年の肩をつかもうと手を伸ばすが、その手は空を切る。駆け足で巨大な物体に跨った少年に、雪子は信じられないものを見るように驚愕していた。

「貴方はまた、私を見捨ての？」

「……さあな」

視線は五十メートル背後、廊下の最奥。

「GO! 『地を這う大海魚』!」

機械仕掛けの巨大魚は、咆哮を上げて走り去った。

十

校長を逃がした

その報告がアリスのところへ届いたのは、山岸雪子を取り逃がした時間とほぼ同時だった。雪子は茜崎克己の力添えがあるようだし、あの人も仕方がないと許してくれるだろう。

だが、校長の方は許せなかった。

アリスはすかさず作戦を失敗した者たちを処分し、あの人に謝罪した。

しかし、あの人は笑って答えた。

『仙石に片足を吹っ飛ばされた大賀という教師がいるのですが、彼が洗いざらい吐いてくれましたね。川崎美野里の前でしたから、情報を引き出すのは少々骨が折れましたが、彼のような魔術師は戦士ではないですからね。軍隊の諜報員を拷問するより楽ですよ』

本当に拷問したことがあるのだろうか。あの人の素性は知れないが、

驚くべきことをサラリと言つてのけるのが心臓に悪い。

「では、黎明の魔石の在処が分かつたんですね？」

『そう言うことです。魔法庁の役人なら、その在処を上へ報告して撤収なんですけど』

「魔法庁の役人ならですか」

『ええ、魔法庁の役人なら』

「ではこれより魔石回収の任務に当たります」

アリスの言に、あの人は愉快げにククツと嗤った。

『場所は本校舎にある生徒には知られていない地下室。一階職員室の教頭の机の下に入り口があるようですから』

「了解」

アリスは電話を切った。

こちらの被害は大きいが、確実に結果は出てきている。失敗しても、こちらが有利に傾くということだ。天運はこちらにある。少なくとも警戒すべき川崎美野里、立花健一郎、朽葉悠斗の三人の足止めは成功している。

用済みになつた校長を、捕縛ではなく抹殺するように部下たちに指示を送る。

次に傭兵たちに連絡を入れた。どうやら大半は負傷して撤退しており、今では一人しか前線に残っていないらしい。その一人も単独行動していて、こちらからの連絡を拒否している。

何のために前払い金を出したと思つている！

「待たせたな。行くぞ」

内心の苛立ちを隠し、アリスは周囲の部下たちに声をかけた。いずれも黒スーツにサングラスという個性のない格好をしている。消耗品として扱われる下部構成員は、どんな組織でも同じ格好をしている。軍隊服のようなものだ。

「どうした？」

その部下たちが、何も反応しない。様子を見てみると、一人の部下の身体が破裂した。同時に三人、一気に物言わぬ屍にされる。

「ありがとう、百合原さん」

『エア・スキュラ風魔の魔眼』、百合原綾香だ。

おそらく周囲の気圧を下げたのだろう。飛行機に菓子のような密閉された袋を持ち込むと、内部の空気が気圧で膨らむ。その応用なのだろうが、大した威力だった。

「人を殺すのは初めてでしょ？ ちょっと休んでおいた方が良いでしょう。綾香の顔色は蒼白だった。吐気を我慢しているような、苦しそうな顔である。」

「いえ……私も」

「必要ないよ。僕は戦うつもりはないからね」

ただの兄妹喧嘩さ

そう言っつて、クロード・キリングゲートは悲しそうに微笑んだ。

十

草薙涼二は引き出せるだけの情報を大賀から搾り取ると、彼の頭蓋骨を靴の踵で踏み潰した。

「グウエツ！」と小さく呻き声を上げて、大賀は絶命した。許可なく気絶したので本来ならそれこそ死にたくなるほどの苦痛を与えてから殺したいところだったが、時間がないのでやめておいた。

「では、そろそろ私は帰ります。今日は見たい映画があるので。知ってます？ 吹き替えなんですけど、面白い洋画ですよ」

「そう言えば、今日は金曜日だったな。これで13日なら大笑いしているところだよ」

「残念ながら12日ですね。今日は始業式から2日目ですよ。新入生たちの中には退学する者も出てくるのではないですか？」

川崎美野里は鼻で笑った。

「昨年は死んだ者が多いんでな。学年ごとの人数が合わなくて困っ

てたんだ」

「冷たいお方だ」

草薙は睨み付けてくる美野里に背を向ける。

ドアを開けると春先にしては冷たい外気が襲いかかった。

「……………」

どこに行く、と美野里が声をかけた。そんな声も、彼の耳には入らなかった。

「…………… やれやれ。ドイツ人のお嬢さんに足止めを頼んでおいたはずなんですけどね。無能な味方は有能な敵より始末に追えません」

「…………… お前は、『ダイテュー・サンクチュアリ神域汚辱』か？」

「覚えていてくれましたか？ 去年は無能な甥がお世話になりました」

草薙は悠然と微笑み、芝居がかった仕草で一礼した。

日本刀を草薙の喉元に突き付けている少年 朽葉悠斗は絶句していた。悠斗の背後には着物姿の少女が控えている。

「どうして貴様がここにいる！？」

「甥が残した仕事を片付けに」

「あのガキはお前と倉漕は敵のようなものだと言っていたぞ！」

悠斗は悲痛な声で叫んだ。

草薙はそれを笑い流す。

甥の倉漕祐作を魔術カルテルに紹介してやったのも草薙である。

たしかに、親戚としては仲が悪いが、利害が一致すれば手伝ってやることもある。

「お前は何者だ！？」

着物姿の少女が、悠斗に「落ち着け」と声をかける。だが、それすら聞こえていない様子だった。

「さあ、何者なんでしょうね」

倉漕祐作の叔父、草薙涼二は肩をすくめた。

彼の表の身分は魔法庁の小役人である。十年ほど昔はスパイの真似事をして、魔術カルテルの世界に首を突っ込んだ。今では列記と

した二重スパイである。どちらも自分のために利用してきた。

「ところで、私は忙しいんですが、やることがあるならさっさと済ませてくれませんか？ その刀は飾りではないのでしょうか？」

黎明の魔石を手に入れることが、草薙の野望の達成に繋がる。

邪魔する者は 排除するだけだ。

14：勝利と敗北

兄弟喧嘩は自傷行為から始まった。

クロードはナイフを取り出し、刃先を右手に突き立てた。同時にアリスも右腕を傷付ける。二人の右腕から赤い血が流れ出て、雫が地面に落下した。

地面には死体四人分の血液が溜まっている。

二人の血液を吸い込んだ血だまりは、支配権をめぐって拮抗した。クロードが集めた血液は200リットル。

アリスが集めた血液も200リットル。

「実力は互角か……。この国で怠けていた訳ではないようだな」

「僕もそれなりの不幸を味わっているからね」

アリスが集めた鮮血が、三つ又の槍に形を変える。西洋の武器、トライデントと呼ばれる長得物である。

アリスは槍を手にした。

「その言葉、私に勝つまでは認められないな」

クロードが集めた鮮血が、六角形の盾に形を変える。西洋の防具、カイトシールドと呼ばれる騎士盾である。

クロードは盾を手にした。

「認めなくても結構だよ。不幸自慢は趣味じゃないんだ」

「……馬鹿兄貴の癖に、口が上手くなつたものだ。以前は父に怯えて妹の陰に隠れている軟弱者だったのに」

「何年前のことを言っているのかな？ 八年あれば人は変わる。そんなことも分からないくらい愚かだったとは思わなかったよ」

挑発的な言動をするクロードに、あくまで冷静な表情のアリスが槍を放った。

トライデントとカイトシールドが激突する。鋼鉄の強度を持つ二つの武具は、同時に碎け散った。

水属性の魔術では、数トンの質量が扱える。だが、二人の武具は

たかが数十キログラムだ。……なのに、どうして血液凝固の魔法を使うのか。

その理由は速度にある。

武具が崩壊し、再構成されるまでの時間 0・3秒。

クロードが形成した武器は重量のある西洋剣、ファルシオン。アリスが形成した防具は小型の丸盾、バックラー。

二つは衝突し、同時に崩壊する。

「中々やるな。馬鹿兄貴の癖に」

「馬鹿馬鹿言わないでくれないか。定期テストでは優秀なんだ」

「減らず口を ツ！」

武具が再構成されるまでの時間は 0・2秒。

アリスが形成した武器は振り返ったアラビアの剣、シャムシール。クロードが形成した防具は縦長の大盾、タワーシールド。

二つが激突し、やはり同時に破壊する。

「こつ実力が拮抗していると、勝負が付かないね」

「降参して逃げ出しても構わないんだぞ。こちらにも追いかけるほどの余裕はないんだからな」

「……困ったな」

クロードは武器を形成しながら呟いた。

一瞬の内に引き分ける攻防を、数十回繰り返す。『ブラッディ・クリスタルシェイド血液水晶』の持ち主同士が戦ったことなんて、今までになかったのもどうも調子が掴めない。

こんなとき、悠斗なら魔法に頼りすぎるなど言っただろう。

だが、魔術を使うにしても詠唱している間に斬られるのがオチだった。

卑怯な手を使えば、今すぐにも決着を付けられる。

だが、喧嘩するにしても正々堂々としたい。

こんな方法を使って勝てば、反則負けだと思われるかもしれない。たとえ他人に許されても、クロードの良心が許さない。

「でも、悠斗なら」
卑怯だと思われる一手こそ、最善の一手なのだと言っていたことがある。

クロードは気を引き締めた。二つの武器が崩壊するのを見計らい、新たに武器 いや、防具を形成する。

「……チエックメイト」
「なっ！」

新しい防具はアリスの武器を破壊した。クロードの手には、まだ防具が握られている。

それは武器とも防具とも言える物だった。

武器破壊の剣にして盾 ソードブレイカー。

刃こそ鈍重だが、先端は鋭く尖っている。クロードのソードブレイカーが、アリスの喉の薄皮一枚を切裂いた。

十

バハムートと聞くと、空を飛ぶ竜を思い浮かべる者がいる。だが、それはゲームなどから植え付けられたイメージで、神話では地面でのたうつ巨大な魚として描かれている。

茜崎克己の『バハムート地を這う大海魚』は、魚と竜の二つの性質を併せ持っている。と言うより、魚として作ってみたのだが攻撃方法が体当たりだけだったので、急遽口と牙を凶悪にして首を長くしてみたのだ。ついでに短時間だが空を飛ぶための羽を付けている。

エレク・リウァイアサン
「『電海竜王』、茜崎克己だな？」

克己と相對しているのは、雪子を捕獲しようとしたときの青年だ

った。

「……人に名前を尋ねるときは」

「『カッティング・ホルト真空迅雷』、朽葉海斗だ」

克己の言葉を遮って青年は名乗った。無機物である『スカイフィッシュ切れき空魚』の気配に気付いた人物だ。油断していて戦える相手ではない。

……って、ちょっと待て。

「お前、朽葉って言ったよな？」

「貴様の考えていることは想像が付く。だが、俺と朽葉悠斗に血の繋がりはない」

「本当か？ 朽葉って珍しい苗字だぞ」

怪訝そうに眉をひそめる克己に、海斗は無感動に言った。

「ただの義兄だ」

「……マジかよ？」

海斗は無言で斬りかかった。

「っておい！」

バハムートが巨体を動かし、胴体で刀身を受け止める。

克己はノートPCを開き、スカイフィッシュを突撃させた。

華麗なフットワークで回避する海斗の動きは、たしかに悠斗と似通ったところがあった。剣捌きも言われてみれば似ているような気がしてくる。

「なるほど。それが貴様の本当の口調か」

「オマケに心理戦まで仕掛けてくるのかよ!？」

「何なら物体破壊で跳躍して見せようか？」

海斗の口調に冗談の響きはなかった。ただ淡々と真実を語っているようである。こちらを動揺させる腹積もりではなさそうだ。

「剣術と魔術を掛け合わせた実戦剣術、朽葉流の動きはお家伝来のものだからな。真似をしているのは義弟の方だ」

「……って、ちょっと待てよ。どっちが朽葉家の後継者なんだ？」

てつきり克己は、悠斗が朽葉の本流だと思っていた。

海斗は意外そうに目を見開くと、小さく苦笑する。

「俺が本流で、悠斗はただの養子だぞ。なんだ、聞かされてなかったのか？ 剣術も魔術も駄目だったアイツが井の中の蛙をやっているらしいが、悲しいことにそれは本当だったらしい」

「悠斗を井の中の蛙だと!？」

克己は激昂し、スカイフィッシュを三つ同時に動かした。

異なる方向から高速で接近する攻撃は、まず人間の視覚では追いきれない。必ず一つは命中する攻撃である。

だが

「 遅い」

たった一度、朽葉海斗が振り下ろした日本刀が、すべての飛行魚を叩き落した。

「……今何をした？」

「これが朽葉家の魔法、カッティング・ボルト『真空迅雷』だ。我が家の家伝書に『その

太刀筋、凡人には見えず、常人には見切れず、達人にはかわせず』とある。どうやら貴様は凡人だったようだな」

海斗は刀を鞘に納めると、踵を返した。

次の瞬間、バハムートの胴体に亀裂が入り、真っ二つに分解した。

15：燃える拳

茜崎克己は青年の背中に声をかけた。

「おい、逃げるのかよ？」

「勝負は決した。もはや負け犬に用はな　なにつ！」

背後を振り返った朽葉海斗は、両目を大きく見開いた。必殺の一撃で葬ったはずの巨大魚が、両断された部分を接続しながら起き上がっているのだ。

克己はノートPCに修復命令を打ち込みながら、海斗に笑いかけ

「まさかこのバハムートを斬つちまうとは思わなかったぜ。ジェラルミン製の装甲なんだ。ちつとは自信を持っても良いんじゃないかねえか？」

「……何故だ？」

「おいおい……何故って言われてもな。コイツは生きてないから、としか答えようがないんだが……」

克己は魔術を使えない。たまたま魔法を手に入れてしまっただけだ。だから克己は本来の魔法の使い方を理解していないから、このバハムートやスカイフィッシュが正しい使い方なのか分からない。

磁力を操る魔法。

同磁界の金属を繋げ、反発する力を利用して動く金属の生物たち。

「……そうか。なるほど」

海斗は溜息を吐くと、刀を鞘に仕舞った。

「どうやら貴様は凡人でも常人でも達人でもないようだな」

「じゃあ俺って何者なんだ？　　って、おいおい！　なんで刀を

納めてるんだよ！」

「俺の目的は果たした。傭兵は信用第一だからな。ただの学生に邪魔されて任務を失敗したとなつては、俺の名が汚れることになる。だが、貴様はただの学生ではないようだ」

戸惑う克己に、海斗は微笑みかけた。今までの無表情とは異なる、生きた感じのする表情だ。どちらかと言えば、悠斗よりも人間味のある性格をしているかもしれないと克己は考えさせられたほどだ。

「一つ、気を付けておけ。俺の雇い主、草壁涼二は」

「ああん？ 今度は何だよ？」

「良いから聞いておけ。草壁涼二は野心家だ。だが、あの男は誰かに操られた道化でしかない」

「って、まさか 黒幕が別にいると言うのか!？」

克己は耳をそばだて、絶句した。

十

黒衣がひるがえり、銀色の光が閃く。悠斗が握っているのは全長1メートルの大刀、胴田貫である。物体強化の魔術で補強しているので、生半可な衝撃では曲がりもしない。

「はあっ！」

それを片手で受け止めたのは、黒スーツの草薙だった。

左手の義手が刃を握り込み、膝蹴りが悠斗を襲う。

『斬撃、闇の剣!』

二人が密着した状態から、悠斗は魔術を放つ。漆黒の剣が現れ、敵を切裂こうとした。

「無駄ですよ」

しかし、剣は草薙の身体に触れるとあつと言う間に霧散する。スーツは切裂いたようだが、身体はまったくの無事だった。

「……気を付ける、悠斗。あれが『ダーティー・サンクチュアリ神域汚辱』だ」

開け放たれたドアの向こうから、廊下側のこちらに声をかけたのは川崎美野里だった。ソファに腰を下ろし、身動き一つせずに観戦している。

「草薙の皮膚に触れた魔術や魔法は魔力に分解される。お前の物体強化もアイツに触れた瞬間、解除されるぞ」

悠斗は一つ頷き、朧貫を青眼に構えた。チラリと背後を見ると、不機嫌そうな顔をした緋芽がいる。

先ほど悠斗が取り乱したことを咎めているのではない。あの頼みごとをしてから、彼女はずっとこの調子だ。

「一つ言っておこう。草薙涼二は神を殺している」

美野里はそう言うと、自分の役目は終わりだと肩をすくめて黙り込んだ。

草薙は両手を構える。ボクシングのようだが、指が握り込まれていない。総合格闘術の一つだと推測しながら、悠斗は仕掛ける気を窺っていた。

「なるほど……神殺しか」

「怯えましたか、少年？」

悠斗は答えず、斬りかかる。気迫の籠った一撃だった。

凶星。

それを見た草薙は嘲笑する。まだまだ若いと馬鹿にされているようだった。

事実、悠斗は怯えていた。まだ物体破壊こそ使用していないものの、草薙は悠斗の切り込みを左手の義手一つで捌いている。時に受け流し、時に叩き落とし、時に掴み取る。

悠斗には剣術の才能はない。魔術の才能もない。魔法も出来損ないだ。だが、努力だけは人一倍してきたつもりだ。

血の涙も滲むような努力を重ねてきた気迫の剣術を、草薙は鼻で笑いながら左手の義手で掴んだ。

「しまった！」

草薙の生身の右手が刀身に触れる。刀に込められた魔力が抜け落ちた。

物体強化の魔術が解除されたのだ。

「やはり朽葉家の出来損ないでしたか。期待していたんですがね。とんだ時間の無駄だし　　っ！」

『両断、闇の斧！』

「　　っく、小癩な！」

草薙は舌打ちしながらバックステップを取る。だが、そこも悠斗の魔術の射程圏内だ。漆黒の大斧が、頭蓋を叩き割らんと振り下ろされる。

目標は草薙の義手だった。彼の戦闘では、いかに物理攻撃を防ぐかが課題なのだ。魔術を身体で無効化し、金属製の義手で物理攻撃を受け止める　　言わば鉄壁の守り。しかしそれなら、身体には物理攻撃で、義手には魔術で攻めれば良いだけの話だ。

見たところ、草薙は何の魔術も使用していない。

魔術を無効化してしまう性質のために、おそらく自分自身も魔術を使えないのだ。

「義手を魔術で破壊してから、身体を物理攻撃で破壊する　　ですか？」

驚愕の表情を浮かべていた草薙は、ふっと息を吐いた。

「開放、レーヴァテイン！」

義手を斬撃に合わせる。　　馬鹿なっ、と絶句する悠斗の前で、義手から赤色の炎が噴出し、魔術が相殺された。

「　　驚いていますか？　　これが私の剣『スルトの魔剣』レーヴァテインですよ。見ての通り、私の魔法は私自身の魔術を封じてしまいますからね。ですから、魔法を使っているときでも攻撃できるように工夫を重ねた訳ですよ」

あまりにも迂闊。自分の弱点を知っているなら、その対策をしているはずなのに。普段の自分なら気付いていたのに、どうして見抜けなかったのか。

「私の能力で魔法は魔力に分解され、この義手に蓄えられる。この義手は魔力の貯蓄と、魔力のエネルギーを熱エネルギーに還元する

機能を備えています」

「まさか、お前は左腕を　！」

「ええ。貴方の想像する通りだと思いますよ」

草薙はくくつと嗤う。左腕の義手を愛おしそうに頬ずりし、狂気の笑みを浮かべた。

自分の左腕を切り落としたのだ。

ただ、弱点を克服するために。

「馬鹿な……そんなことが……」

「だから貴方は出来損ないなんです。朽葉家の面汚し、不完全な魔法使い、一族の崩壊を招いた子ども。そう言われた理由が良く分かります。ですが心配はいらないようです。これからの朽葉家は海斗君が支えていくそうです」

「……その言葉、撤回しろ。さもなくば、殺す」

「は？ 私を殺すと？ 貴方程度の人間が私を殺すと？」

「もう一度言う。撤回しろ」

「……愚かな、ククツ、なんと愚かな」

声を上げて、笑い始めた。

「クハツ、ハハハツ！　ハハハハツ！」

草薙は目を丸くし、数秒間の硬直から立ち戻った。俯いて苦しそうに声を絞り出した少年を、心底面白い喜劇を見ているかのように爆笑した。

「……悠斗、本当にやるのか？」

「……ああ」

それまで不機嫌そうに様子を見ていた緋芽が、不安げに訊ねた。

コクリ、と……それまで黙っていた美野里が頷いた。

「使うなら勝手にしろ。だが、周りは巻き込むな」

その言葉に、悠斗の身体が一瞬硬直する。

その隙を逃す草薙ではない。

「余所見している暇があるんですか！」

左腕が腹部を直撃し、呼吸が詰まった。吹き飛ばされながら、悠斗はイメージする。門の向こうで暴れ狂う三頭の獣を御する方法を

そのとき、場違いなほど聞きなれた声があった。悠斗の脇を高速で通り抜けた黒い影が、草壁の義手を切り落とす。

「朽葉流殺法 円水」

「……まさか」

自分と同じ黒コート姿、日本刀を手にしている二十代後半の青年。草壁は相手の顔を見ると、驚愕を通り越して笑い出した。

「まさか、あの朽葉家の『神雷』が裏切るんですか!？」

「雇い主があまりに酷かったからな。申し訳ないが、この度は金銭にてアカデミーに雇われることになった。それに」

朽葉は刀を八双に取った。

「俺の大事な義弟を傷付けた」

暴れ狂う紫電が草薙涼二に叩き付けられた。

16：水面下の因縁

科学実験室の扉の前で、三人の黒服が困惑して顔を見合わせていた。

一人は学生の始末を、二人は魔石の回収を命じられていた。草薙涼二の作戦に抜かりはない。一方が失敗する可能性を考慮に入れて、何重にも入念な作戦を練っているのだ。

「どう言うことだ？」

後からきた二人が、先にきていた一人に問いかけた。開かれたドアの奥には、土気色の壁が立ちはだかっているのである。黒色に近い泥炭の、粘性のありそうな壁だ。

「立花が生徒たちを連れてこの部屋に逃げ込んだ。開けてみるとこんなことになっていた……」

「……魔法か？」

「……さあ？」

首を捻る男に、後からきた男は訊ねた。

「ところで、相棒はどうしたんだ？」

彼らの行動は、基本的に二人一組である。すると、先にきていた男の相棒は返り討ちに遭ってしまったのだろうか。

「いや、それが……この壁に呑みこま……」

男の言葉は最後まで続けられなかった。急に泥の壁が隆起し、廊下にあった男三人を飲み込んでしまったのだ。

骨がバキバキと碎ける音だけが、静かに響いた。

軍事の世界では怪我をして動けなくなった者を放置し、助けようとした者を狙撃するという戦法がある。残虐極まりないが、効率的な作戦だ。

泥炭の内側では、立花健一郎が溜息を吐いていた。生徒会の生き残りと、偶然校内に居合わせた生徒、総勢十二人を守りながらの戦いだ。幸い、健一郎の戦い方は受動的なので、防衛線は苦ではない

のだが。

「常時魔法展開は流石に疲れる……」

これを最後に使ったのは、倉渕祐作との決戦以来だ。攻撃に加われなかった自分の無力をあれほど呪ったことはなかったが、どうやら今は役に立っているらしい。

暴食の魔獣、ベヒモス 近付く者を無造作に喰らう怪物。神に喰われるために造られ、あらゆるものを喰らいすぎて神に殺された雄牛。リヴァイアサンと対になる怪物だが、こちらは大地を司っている。

また、獲物が近付いてきたようだ。

健一郎の魔法『グラン・ベヒモス岩窟魔獣』は部屋の四方に展開している泥炭だ。厚さや硬度は任意に変更できるので、使い方次第では砲弾さえ弾き返す壁になる。

とは言え、欠点はある。

悠斗とクロード、幽香の三人組にこっぴどく敗北したときのことを思い出し、健一郎は苦笑した。

1対3だったとか、そんなことは言えなくなるほどの惨敗だった。悠斗はただ指示しただけだし、クロードも幽香も簡単な魔術しか使っていない。しかし、たった十五秒でこの防壁が打ち破られたのである。

だから僕は、魔法を過信しない。

健一郎はいつでも魔術を詠唱できるように、心の準備をした。

「……この壁は、健一郎だね」

「クロード？」

その聞きなれた声は、先の戦友のものだった。

扉の部分だけ魔法を解除してみると、その向こうにはクロードとアリス、綾香がいた。

朽葉海斗の電撃の一太刀は、寸前で妨害されて届かなかった。空気が爆発し、衝撃波が廊下を駆け抜ける。海斗が舌打ちし、二の太刀を放とうと刀を構えなおすが、その前に草薙はガラスを割って階下に飛び降りた。

「GO! 『スカイフィッシュ切れ空魚』!」

風を切る銀光が草薙の背後に襲いかかる。

草薙は右腕を盾にした。容赦なく襲いかかる刃が、残りの腕を切り落とす。

ゴツ、と骨を絶つ音がして朱色の血が飛び散った。血の雫が地面に落ちたときには、もう草壁の姿はどこにもなかった。

「……逃げたか」

チツと舌打ちしたのは海斗の背後から現れた茜崎克己だった。

克己は悠斗たちの視線に気付くと、

「うわっ、ちよっと待って! 今のやり直し!」

意味不明なことを叫びだし「逃がしたんだにゃー」と呟いた。何とも気まずい空気が流れ、美野里が咳払いしながら言った。

「部屋の見えない地雷が消えているな」

おそらく、位置を変えて草薙を守ったのだろう。これでは地雷と言うより機雷である。

しかも、どうやらあの少年は意識を取り戻してから逃げ出してしまったらしい。周囲の生徒に頼むには、少々荷が重すぎたようだ。まあ、あまり期待はしていなかったが。

「ところで、どうしてアンタがここにいる?」

不服そうに訊ねる悠斗に、海斗は目を合わさずに答えた。

「雇い主を見限っただけだ。ついでに、そのガキに頼まれてな」

「給料は校長が出してくれると思うんだにゃー」

悠斗は頷き、踵を返した。朽葉海斗とは同じ空気を吸っていると感じが悪くなってくる、そんな相手である。

「おい、悠斗。あの男は何者だ？」

緋芽の機嫌も相変わらず悪そうだった。いや、それよりもやはり分かるか」

「ああ、神代の記憶を思い出したぞ」

「……そうだよ、アイツは神喰いだ」

と言うより、朽葉家のシステムがそうなっているだけだが　と悠斗は苦々しそうに吐き捨てた。

「なるほどな。吾と同列のように見えたが、奴には堕ちた気配があった。何代にも渡って神を取り込んでいれば、穢れるだろうな」

「穢れ……か。いや、まだ穢れてはいないぞ」

悠斗が絶望的なほど深い溜息を吐いたことに、緋芽は気付かなかった。不機嫌顔を崩して小さく微笑みかける。

「まあともかく、お前を殺すことにならなくて良かったぞ。事情は分かんが、色々とあるのだろう？」

「……まあな」

俺は堕ちた神より始末に悪い。

十

山林の中、草薙涼二は木陰に屈んで小休止を取った。

左腕がないので右腕の止血には戸惑った。アカデミーの校舎から五百メートルと離れていない。その気になれば追っ手を差し向けることができるのだろうが、彼らも彼らで痛手を負っているはずだ。

しかし、途中までは上手く行っているはずだったのだ。どうして失敗したのか、どれだけ考えても分からない。おそらく、答えのない問いなのだろう。時の運が向こうに味方したのだ。

作戦の目的は魔石の回収だけではない。朽葉悠斗が暴走するまで

追い詰めるのも作戦の一つだった。簡単な話、魔法を使わせれば朽葉悠斗は周囲を巻き込みながら自滅するのだと、甥の祐作が語っていた。

「頭脳だけの魔術師程度、簡単に追い詰められると思っていたのだが。」

「お互い無様ですね。こちらは散々でしたよ。」

「右腕を失った草薙さんよりはマシですが、僕も気分は最悪ですね。」
仙石和希は縄目の残る手首を摩った。そこらじゅうにアザや切り傷を作っている。

「それは、朽葉悠斗にされたのですか？」

「いえ、ただの学生ですよ。足を吹っ飛ばした奴の恋人らしいですよ。包丁まで持ち出されたときには焦りましたが。」

「魔封じを使う前に拷問ですか？」

「と言うより憂さ晴らしですがね、と和希は苦笑した。魔術を教えている学校と言えども、在籍している学生の実力はこんなものだ。魔術師を拘束するための道具『魔封じの手枷』のことも知識にないのだろう。」

「そこが、魔法庁の役人とは違うところですかね？」

「いえ、魔法庁も似たようなものでしたよ。」

草薙は諦観した表情を浮かべ、立ち上がった。

「魔術を持つ者は、他者に絶望しか与えられない。だから、私はこの悪制の改変を望み、行動しているのです。その道に立ちほだかる者がいたなら、たとえ女子どもであろうとも叩き潰すだけです。」

「淡々と覚悟を呟く草薙に、和希は安心して溜息を吐いた。」

そのとき、場違いなほど気楽な声が二人に届いた。

「ああ良かった。まだやる気は失っていないみたいですね。」

オールバックにした銀髪に、ホワイトタイガーのコートを羽織った少年だった。白いシェードで目を隠し、首から白いロザリオをぶら下げている。衣服や装飾品の類はすべて純白の格好である。

「お久しぶりです、叔父上。」

少年の名は倉渕祐作。朽葉悠斗や立花健一郎、クロード・キリングレートや茜崎克己などの怪物クラスの魔術師たちと、たった一人で渡り合える怪物を超える怪物だ。

「しかし、その様子だと彼は魔法を使わなかったようですね。清水瑠璃を失ったことが、それほど衝撃的だったのでしょうか？」

草薙は何も答ええない。

祐作は、微笑みながら気配を消した。

気配が完全に消え去ったとき、溜息を吐いた草薙が、

「貴方の目的は何なのですか？」

と質問をした。

暗闇から囁き声が漏れる。

「『ニースヘック嘲笑する虐殺者』になった朽葉悠斗を、僕自身の手で殺すことですよ」

暗闇では目立つはずの白い姿をしているのに、祐作の姿は一度も視界に捉えられなかった。

17：平穩はまだ

スズメが二匹、窓枠に舞い降りて歌声を披露している。愛らしい小鳥に、女子の一部が小さく悲鳴を上げ、無粋な男子は鬱陶しそうに欠伸をする。

授業中である。

三十人が限界の講義室には、十人の生徒が間隔を開けて席に着いている。

教卓では世界史担当の教師が古代中国について説明していた。普通の学校と違うところは、唐王朝は多くの魔術師を登用していて、遣唐使とは大和国が魔術の知識を得るためのものだったのだ。などと独自の理論を展開しているところだった。

先日はカエサルは魔術師だった　と言っていた。

眉唾物の知識だが、面白くはない。

国立魔術アカデミーの世界史は卒業するために必要な単位ではないのだが、悠斗は卒業するために必要な単位　上級魔術理論と上級魔術実戦の単位をすでに所得している。

上級魔術理論と上級魔術実戦の講義は、これらの基礎となる初級魔術理論、中級魔術理論、初級魔術実戦、中級魔術実戦を修得しないと理解できないのだが、アメリカの学校にあるスキップ制度のように最初に上級魔術理論及び実戦を修得してしまえば、卒業まで自由に授業を組むことができる。

アカデミーは高等学校なのだが、単位制の大学のようなものである。

……しかし、随分と静かだな。

平和なのだ。先日、あのようなことがあっても、根本的に無関係だった連中の頭の中にはもうあの事件のことが忘れ去られている。無論、関わってしまった者の一部は自主退学してしまったのだが。

チャイムが鳴る。悠斗は席を立った。

昼休みである。教室に戻ろうかと思ったのだが、何となく帰宅することにした。

途中、クロードの妹とすれ違った。

「おい、無視なのか？」

「……………いや、これは故意だから無視ではない」

「余計に夕チが悪いわ！」

キーン、と耳の奥底が痛くなるほどの罵声を浴びせられ、仕方なく悠斗は立ち止まった。振り返ると、金髪の少女が両腕を組んでこちらを見上げている。

「で、何の用だ？」

アリスは視線を逸らし、曖昧な表情を浮かべた。

「うむ……………その、だな……………」

「ああ、ゴメン。悪いな」

「え？」

「俺は今もこれからも、女性と交際するつもりはないんだ。申し訳ないが、諦めてくれないか？」

「どう考えたら今の会話が告白になるんだ！！」

アリスは激昂し、悠斗の頭を殴ろうとした。スウエーバックで逃れた悠斗は、アリスを羽交い絞めにして耳元に息を吹きかける。すると、アリスの身体からへなへなと力が抜けていった。

「女の子が暴力を奮うのはいけないな」

「お、お前……………こういうキャラだったのか……………？」

顔を真っ赤にしながら怒りを振り絞る少女に、悠斗は苦笑いをし
て離れた。

「まあ、言いたいことは分かる」

「だから分かってな」

「でもな、クロードと俺は、最初は敵対していたんだぞ？ 元々、俺たちはバラバラで顔を合わせたら殺し合いでも始まりそんな関係だったんだ」

アリスは敵対していたのに、誰にもその理由を追及されなかった。

クロードはただ嗜めただけだし、健一郎は生徒会長として敵側の情報収集のために尋問しただけである。そして、停学や退学などの処置も取られず、このまま普通にアカデミーに通っている。

だが、敵か味方が分からない奴なんて、今さらなのだ。

肩をすくめる悠斗に、アリスはぼそりと呟いた。

「なんだ、分かってるじゃないか……」

金髪の少女は嬉しそうに、泣き笑いを浮かべた。

十

男子寮の自室に到着すると、五限目開始のチャイムが鳴った。

ベッドは緋芽に占領されているので、学習机から椅子を引つ張つてくると、暇潰しに刀の手入れを始める。刃渡り二尺七寸（約81センチ）、柄の長さが一尺（約30センチ）で合計111センチの大刀だ。

戦国時代、甲冑ごと敵を斬り伏せるために使われた胴田貫である。重心が先端付近にあり、遠心力が加わって振り回す速度が上がる。「お主は剣術使いなのか？」

ベッドから起き上がった緋芽が、目蓋をこすりながら呟いた。

いつもの着物姿ではなく、悠斗のワイシャツを寝巻き代わりにしている。

「剣術は嗜んでいる。まあ、それほど上達はしなかったが」

「そうか？ 並みの剣術使いなら相手にならんだろう？」

そうかもしれない。だが、悠斗の回りにはそれ以上の怪物が何人もいたので、良く分からなかった。

「俺は剣術も魔術も、どちらも中途半端なんだよ」

そう締め括ると刀に付着した打ち粉を息で吹き飛ばし、刀身を鞘に収めた。

「それよりも……」

悠斗は刀の鞘に手を伸ばす。この鞘には二つの暗器が仕込まれている。

馬針と呼ばれる暗器である。かつて馬が最速の交通手段だった時代。馬といえども長距離を走らされれば脚がうっ血して疲れるものである。そこで、針を突き刺してうっ血した部分から乳酸がたまって血液を抜き取る刃物が馬針である。

柄と刃が一枚の鉄板で造られる、鋭い針だ。

「盗み聞きはいけないな、茜崎」

「なあんだ、気付いてたのねん？」

また、意味不明な言葉遣いになっている。

悠斗は溜息を吐き、手元の馬針を投擲した。

「物騒な歓迎、ありがとうだにゃー」

銀色の飛行体が克己の袖口から飛び出し、主を守るための盾になる。弾かれたのは悠斗の馬針の方だった。

自動防御機能である。

普段からノートパソコンを持ち歩く訳にはいかないのに、克己はスカイフィッシュにそのような機能を組み込んでいるらしい。他にも音声入力も取り入れているのだとか。無論、簡単な指示しか遅れない訳だが。

克己は魔法使いでありながら、最先端の技術者である。

「で、何の用だ？」

悠斗のまったく歓迎していない口調にまったく動じない克己は部屋に入ると悠斗の刀を取り上げた。

「悠斗の刀、ゲットだぜ！」

「……死にたいのか？」

「美野里ちゃんが没収しろだってさー。魔法を使おうとした罰らしいだべさ」

「……今頃になって罰だと？」

殺気のコもった悠斗の声に、克己は肩をすくめた。

「おっと、これは健一郎もお兄さんも同意しているのだにゃー。文句なら彼らに言って欲しいにゃー」

「俺が反抗する可能性は、考えていないのか？」

「抵抗するならしてみれば良い……美野里ちゃんの伝言だぜよ」

悠斗は溜息を吐いた。

美野里に集められた戦力の一人なのに、悠斗と美野里は根本的なところで相容れないものがある。簡単に言うなら仲が悪い。悠斗が苦戦していても、まったく気にしなかったし助けようともしないほどに。

本当に、あの女は悠斗が反抗するのを待っているのではないだろうか。

「あと、美野里ちゃんがお兄さんを魔石の護衛させるために雇ったんだよう」

悠斗は苦笑をかき消した。美野里の目的は分からないでもない。前回、あれほど苦戦したのは戦力不足が最大の原因だ。生徒会五人と美野里隊五人の、あの黄金期なら数分ですべてが終わっていた。

昨年一年生だった者が四人。あときの半分以下の戦力では、黎明の魔石の防衛も心もとないのだろう。海斗を雇うのは、賢明な判断なのである。

だが、朽葉悠斗は朽葉海斗の劣化バージョンと言っても良い。

「完全に、用済みと判断した訳だ」

無表情に、淡々と呟く悠斗に克己は後ずさった。

「ちょよ、ちょよと待つんだね！俺に怒っても仕方がないんだにゃー！」

神喰いの代用品オルタナティブにもなれなかった失敗作には、ちょうどいい仕打ちだった。

守るべき者を失った剣に、価値はないのだろう。

18：赤き魔人

田舎のローカル線を乗り継いで、目的地に向かう。

「どこに向かうつもりだ？」

着物姿の緋芽が、ソフトクリームを食べながら悠斗に目を向ける。

「そろそろ冷静になる場所が欲しいからな」

「あかのみー……だったか？ 寺子屋はどうするんだ？」

「寺子屋じゃねえよ……まあ、しばらくは休学することになるか」

これでうるさい奴らから開放されて、少しは心に余裕が取り戻せるだろう。

このときの悠斗は、まだそう思っていた。

十

アカデミーの屋上では

クロードとアリス、綾香の三人が揃って克己にジト目を向けた。

「最低ね」

「最低だね」

「最低だな」

三者から同じ罵声を浴びせられ、克己は冷や汗をだらだらと流していた。

「いやっ、だって仕方ねえですよ！？ 美野里ちゃんの命令って絶対服従ですからさー！？」

美野里の意見はとにかく絶対なのだ。彼女に集められた五人は理解している。自分たちの魔法とは比べ物にならないほど、美野里の戦闘能力は高い。それこそ草薙のような魔法でもないと、瞬殺されてしまうほどに。

逆に言えば、草薙のような輩がいるからこそ克己たちが集められたのである。

「それで、悠斗先輩は休学届を提出したんですか？」

コクコクと頷く克己に、アリスが慥然と吐き捨てる。

「その先生も最低だが、権力に媚びへつらう貴様も最低だな」

「でも、刀を取り上げるのは仕方がないと思うよ」

明後日の方向を見て呟いたクロードに、二人の少女が啞然とした目を向ける。

「そもそも、川崎先生が求めているのは悠斗の剣じゃなくて頭だしね」

それだけではないのだが、クロードはその先は言わなかった。

元々悠斗は守るべき者のために剣を取っていた。だが、守るべき者を失った刃は、敵味方関係なく斬り付けてくる。

「でも、冷静になる時間は必要かも。あの人って、意外と脆そうだし」

「意外とじゃなくて脆いのよ」

綾香の呟きに答えたのは、この場にいる四人の中の誰でもなかった。

「誰だ！」

克己がスカイフィッシュを取り出したとき、四人の周囲に爆炎が燃え広がる。

空から舞い降りたのは、グラビティ・フレスベルク『空飛死鳥』。元生徒会副会長の支倉沙希だった。沙希の背中に、燃えるような茶髪の少女が抱き付いている。

長袖のトレーナーを着た、セミロングの茶髪の少女だ。茶髪と言うより、ほとんど赤色の髪である。無感動そうな目が、克己一人を射抜いていた。

沙希が屋上に着地する前に、少女は屋上に飛び降りて克己を蹴り飛ばした。

「あつ、痛いっ、やめっ、ああつ……！」

「……………」
少女は無言で克己を蹴り続ける。クロードたち三人は、笑みを引きつらせて後退した。

「ちょ、逃げるにやー！ 助けれー！」
脚蹴りにされて悲鳴を上げる克己。少女は無言でさらに蹴り飛ばす。

さすがにこれ以上はヤバイのではないか。骨がギシギシと軋んでいるし。クロードたち三人は顔を見合わせた。

「……………」
「ちよっと、幽香。その辺りにしてあげて」
沙希の諫言に、不承不承といった様子で少女が頷いた。すると、周囲の炎が怒りと一緒に沈静していく。

「ゆ、幽香！？ ど、どうして君がここにっ!？」

「……………」

少女は悲鳴を上げるクロードに目を向けた。

「……………」
「どうして？」

元々口数が少ない少女である。だが、その声は悲痛だった。

「……………」
「どうして、悠斗を戦わせたの？」

「……………」
「っ！」

クロードは答えられなかった。

あの執行部の革命は、三学期が丸々潰れた出来事である。あれからまだ二ヶ月も経っていない。そう言われると、心の傷から回復していないのではないかと思えてくる。

自分の物差しで勝手に悠斗を計っていた

今さらになつて、そう思うクロードである。

「瑠璃が死んで、でも、悠斗はアカデミーに残った。退学するべきだった。私と一緒に」

少女、中島幽香はクロードに右手を向ける。

「悠斗はこの学校が嫌いだよ……………」

「……………」
「っ、伏せる！」

クロードは妹と綾香を押し倒した。

『青く澄んだ水壁よ！』

クロードの魔術が三人を包み込むように展開する。

刹那、爆音が屋上に響き渡った。

「……私と同じ」

元生徒会会計、中島幽香。アカデミーに在籍していれば三年生だが、沙希と違って自主退学してしまったので籍が残っていない。

熱狂的な悠斗の信者で、悠斗を戦わせないために敵を滅ぼし尽くしてきた。

『フレア・ギガンテス
火炎魔人』と呼ばれた魔法使いである。

十

十五分の距離にコンビニが一件だけある、本物の田舎である。

バスで一時間ほど走って隣待ちのスーパーで食材を買い込むと、再び一時間ほどかけて自宅に戻る。食事はレトルトか、良くて手抜ききの男の料理だった。

二ヶ月しか住んでいない寒村だったが、住み心地はそれなりに良い。

緋芽が「どうしてこんな場所に家を建てたのだ……」とぶつぶつ言っていたが、「隠居するときのことを考えてだな……」と説明する訳にもいかないので黙っておいた。

悠斗が朽葉家を追放されたときに分捕ってきた財産で建てた家屋である。

この家でしばらく生活しようとしていたところを、川崎美野里にスカウトされた訳だ。無条件でアカデミーに入学、卒業までの授業料を免除、奨学金という名目で給料を支払う。

これらの好条件でこの家を出て行った訳だが、あの選択は間違っていたのだろうか。嬉しい再会があった。悲しい別離があった。取

り返しの付かない悲劇が起こった。

「夕餉はまだか？ さつさと用意しろ」

それと……新しい出会いがあった。

悠斗は苦笑し、スーパーで買い込んだインスタント食材を漁る。

基本的に長持ちする物以外は買っていない。

数時間前にセットしておいた炊飯器から炊きたての米をよそい、レトルトのカレールーをかけると食卓に並べた。焼酎とコップを二つ持ち出して、緋芽に怪訝な顔をされる。

「酒は飲めるか？」

「しっ、失礼な！ 悠斗、まさか吾を子ども扱いしていないだろうな！？」

「……今頃気付いたのか」

「なっ、き、貴様あ！！」

怒りだす緋芽を悠斗は笑い飛ばし、カレーを口に運んだ。

……美味しい。

本当に、どうしてこんなに美味しいのだろう。これは困る。誰かと一緒に食べるから美味しいのだとか、臭い台詞を吐くつもりはない。相息が詰まっていたのだろう。

「こんな生活も悪くはないな」

悠斗は苦笑し、テレビの電源を入れた。

ほとんどのテレビ局の映像が荒れていたので、仕方がなく国営放送のニュース番組を鑑賞することにする。BGM代わりだと割り切ってしまうえば、それなりに見れるものである。

「しかし、いつまでも平和な生活が送れるとは思わないことだ」

「……ああ、分かっているさ」

不機嫌そうに呟く緋芽に、悠斗は静かに答えた。

分かっている。そんなこと、分かりきっている。

自分は失敗作なのに、一流の魔法使いたちと同列、あるいはそれ以上に数えられている。突出した者を殲滅する魔法庁や、戦力を欲しがっている魔術カルテルにも目を付けられていると考えて良い。

この二つよりも平和な生活が送れるだろうと思ってアカデミーに行っただが、人殺しのために利用されたのは多少の誤認だったが。

…………… 克己とクロードが喧嘩をして

それに触発された真治が悠斗に戦いを挑んで……………

…………… 百合が泣き出して、四人が戦いをやめて

副会長の沙希に説教されて……………

…………… 会計の幽香と一緒に倉淵を退けて

書記の健一郎が無理をした二人に溜息を吐いて……………

…………… 大悟会長は後輩を叱るときは拳骨をお見舞いして

その様子を書記の隆太先輩が呆れて見ている……………

…………… 会計の聖先輩が困った顔をして

幼馴染と再会して

「分かってるよ。分かってる」

悲しそうに呟く悠斗に、緋芽は目を伏せた。

「それに言っただろ？ 俺を殺してくれと」

「…………… それなら良い。無粋なことを言つてすまん」

「いや、まあ事実だしな。どうせ戦いに巻き込まれる訳だし。しかし…………… アカデミーから離れてみると、苦労していたのが良く分かる」

そのアカデミーではリアルタイムで友人たちが悲鳴を上げているのだが。

一時の休息にリラックスした悠斗は、視線をテレビに向けた。

19：墮ち神、穢れ神

コンビニで暇つぶし用の雑誌を買い込むと、そのまま自宅とは逆方向に足を運んだ。装備も持たずに真夜中に山林に踏み込むのを散歩というのは、少し危険にすぎるだろう。

だが、さほど気にはならなかった。

この辺りの地形もまだ把握し切れていないし、山奥で遭難しても一週間ぐらいならサバイバル生活を送れる自信がある。食用の山菜を見分ける知識があるし、実戦したこともある。水流の探し方も覚えてる。

緋芽は布団で寝ているのだろう。

神様とは怠惰なものだと相場が決まっているものだ。

悠斗は立ち止まった。

……神社か。

こんな山奥に、塗りの剥げた鳥居が見えた。周囲に人気を感じられないが、野犬などの気配がしている。しかし、寂れたとはいえ神域に踏み込もうとはしないらしい。

悠斗は拍手を打ちながら、適当に踏み込んだ。この手の場所には不慣れである。神道についての書物を読んだことがあったが、実戦で役に立ちそうにないので忘れることにしたのだった。

そのところも、美野里は気に入らないのかもしれない。神に対する不信仰とでも言うのだろうか。あれで神主の家柄に生まれた美野里である。神喰いの海斗よりも、神墮としの悠斗の方が気に食わないのだろう。

……同属嫌悪だろうか。

まあ、好かれないとは思わないので、別に構わないのだが。

「しかし、随分と穢れた場所だな」

神域が穢れているとは、間違った表現かもしれない。しかし、神様のすべてが清純潔白ではない。怨念を鎮めるために神様にされた菅原道真しかり。

「知っているか？ 伊邪那美命イザナミノカミは死して黄泉国で腐り果てた。あれが穢れた」

「ええ、勿論です」

「なら、国生みとは伊邪那岐命イザナギノカミと伊邪那美命イザナミノカミがセツクスして行われた と言うことは知っているか？」

失敗して生まれたのが蛭子神ヒルコである。

「……………いえ」

神社の鳥居の前に座っていた巫女は、顔を赤らめた。

美野里は「知っているが、それがどうした？」と悠斗を睨みながら答えたものだが、この巫女は随分と初心なようである。

「なんだ、巫女なのに情けない。記紀ぐらい読んでおけよ」

悠斗は巫女の隣を、早足で通り抜けた。

……………と言うか、お前、死んでるぞ。

言うべきだろうかと迷ったが、やめておいた。もし自分が死んでいると自覚していたら、多分キレる。幽霊とはそんなものだ。

悠斗は賽銭箱を踏み越え、ご神体のある祭壇を開け放った。

「……………なるほど」

神社には奉納されるために刀が打たれることがある。本来なら一度も使われず、神に捧げられた清い刀なのだが、ここにあるのは血のりで汚れ切っていた。

悠斗はその刀を手に、先ほどの巫女のところまで戻った。

「つまりアンタはこれで斬られた訳だ？」

巫女は首を横に振った。

「いいえ、神主たちをこの刀で斬ったのが私なのです」

……………つまり、この巫女が殺人鬼だったというオチか。

五年ほど前のことだ。

朽葉家は剣術と魔術を取り入れた総合格闘術を持つものの、その実体は神を祭る神主家であった。しかし、普通の神主家と違うのは、奉るべき神を取り込んで一族の活性を望んでいるところである。

一族の当主となる者は、成年となる年齢に神を身体に取り込み、多大なる戦闘能力を得ることができるといえる。それが、朽葉海斗である。

故あって養子として迎え入れられた悠斗は、海斗に何かがあったときのための代用品オルタナティブだった。一族の当主候補は神を迎え入れるために独自の修行が行われる。悠斗も海斗と同じように修行を強要されていた。

神を取り込めば、強くなれる。

その情報がどこから漏れたのか分からない。朽葉家から漏れた可能性もあるし、同じようなことをしていた他家から漏れた可能性もある。

ただ、それは事実だった。

力を求める魔術師たちが神社を襲撃し、ご神体を奪い取り、神々を己に取り込もうとした。そのときに穢れた神社もある。神に捧げられた乙女を蹂躪すれば、神も汚れるのだ。

人間を守護してくれているのが神である。

傲慢で欲深く、罪深い人間に、神々は怒りの鉄槌を落とした。

そのときに神を返り討ちにしたのが草薙涼二であり、神を穢してしまったのが川崎美野里である。

「わたしはこの神社の次女でした」

「巫女は訥々と語りだした。」

「しかし、長女の姉さんはこの神社の巫女であることを拒否し、ある男と結婚していました。その姉さんが、ここの境内で数十人の男たちに穢された」

悠斗は頷いた。神を穢すなら、その程度で十分なのだ。

「神は穢れ、怒り狂いました。姉が出て行き、この神社は私が継ぐかと思われていたのです。神の代弁者たる私が、その怒りの吐け口になりました。私は神に命令されるままに、すべてを虐殺していったのです」

「まあ、堕ちた神は殺すだけだからな」

「気付いたときにはもうすべてが終わっていました。罪の意識を感じたわたしは、井戸に身を投げました。……………これが、ここで起こった悲劇の顛末です」

悲しそうに言う巫女に、悠斗は溜息を吐いた。

この巫女は穢れた神を取り込んでしまったのだ。堕ちた神と穢れた神は根本的に異なる。緋芽のような神は堕ち神で、海斗が取り込んだのもこれだ。だが、穢れた神は違う。

「貴方も同じなのですね……………。しかし、なぜ取り込まれていないのですか？」

「まあ俺は、堕ちた神を招き入れる準備をしていたからな。条件付きで理性を許されているだけだ。きっかけさえあれば、アンタみたいにみんな殺してしまうだろうよ」

「……………貴方は、強いお方ですね」

悠斗は首を横に振る。強いどころか、弱すぎて自己嫌悪していると言うのに、どうして彼女は悠斗のことを強いと言うのだろう。

「一つ、お願いしても構わないですか？」

「内容によるが……………」

「姫川咲夜のことを、守ってくれませんか？ お礼はできませんが、その刀を差し上げますから」

巫女の姿が薄くなっていく。

「姫川？ っておい、勝手にお願いされても……」

悠斗は舌打ちした。

「分かったよ。引き受けてやる。だが、俺はまだアンタの名前を聞いていないぞ」

「姫川咲美です。どうか、妹を……あの子は自分が穢れた神の巫女であることを自覚していません。手遅れになると、穢れた神を取り込んで周囲の人間を虐殺するだけの殺人鬼と化してしまう」

そう言うと、姫川咲美は完全に姿を消した。

もう朝日が上り始めていた。夜明けである。

20：赤く赤く燃える炎

生徒会室では立花健一郎と川崎美野里が対峙していた。

机の中央には漆黒に輝く宝石が置かれている。

「手段はお前たちに任せる。先日の襲撃はこの宝石を狙ったものだな。また襲撃があると思われるので、何としても守り抜いて貰いたい」

「……それは理解したのですが、そちらの方は？」

健一郎は黒コートの青年に視線を注いだ。

長身の白い鉢巻をした青年である。日本刀を帯びていて、目付きは鷹のように鋭かった。どこか、朽葉悠斗と雰囲気似ているように思えた。

「朽葉海斗。察しの通り、朽葉悠斗の義兄だ」

健一郎は頷いた。

美野里が続ける。

「悠斗はこの任務を外れるらしくてな。代わりに戦力として私が連れてきた。悠斗よりも役に立つだろうから、好きに使ってくれ」

その発言に、健一郎は眉をひそめたが結局は何も言わなかった。

この人の悠斗への嫌悪は今に始まったことではない。理由は分らなかったが、何か理由があるのだろう。それよりも、悠斗が外れるということが驚きだった。

「悠斗は、今何をしているんですか？」

「さあな。先日の敗北のショックが大きくて寝込んでいるんだろう？」

「彼は、それほど弱くはありません」

海斗が健一郎の言葉を否定するように鼻で笑う。

「俺はアイツほど弱い人間を他には知らない。まあ、俺の代用品になれるのはアイツだけだから大切な義弟なのだがな」

「貴方の……代用品ですか？」

「そつだ。一族から追放されたとはいえ、朽葉の戦闘術を仕込まれたアイツは並みの魔術師よりも強い。俺が死ねば、アイツが朽葉の後継になるだろう。宗家の血を継いでいないが、適当に一族の者と結婚させれば問題ない」

健一郎は歯軋りした。机の上の石を拾い上げると海斗に投げ付ける。

「その石を守って下さい。貴方が無能ではないのなら、奪われることはないでしょう？」

海斗は面白そうに首肯し、魔石を懐に仕舞った。

挑発的に言う健一郎を、海斗は嘲笑していた。

十

圧倒的な熱量が周囲を蹂躪し、暴れ回る。コンクリートや手摺のパイプが溶解し、音を立てて蒸発した。

最大出力で約1万度まで到達する、中島幽香の火炎魔法である。

太陽の表面温度は約6000度であることから、その火炎の恐ろしさが窺い知れる。コロナの100万度には及ばないが、これが小太陽とも呼ばれる所以だろう。

『フレア・ギガンテス
火炎魔人』、中島幽香。

爆炎の魔人が、クロードたちに怒りを向けていた。

「まあ、落ち着きなさい。このままだと死者が出るわよ」

沙希の言葉にも反応せず、幽香は地面に這いつくばっている三人に右手を向けた。

「じゃあ決闘にしましょう。これなら死者を出したら負けだから、ある意味では安心よね」

陽気な声で笑う沙希に、幽香が怪訝な目をする。

「決闘？」

「そう、決闘。1対1で正々堂々と戦い、負けた方が謝罪する現代の魔術師の戦い方よ」

「……1対3で構わない」

幽香は無表情でそう言うと、克己に目を向けた。蹴飛ばされてボロボロではあるが、まだ生きているようである。

「1対4だった……」

「あれっ？　もしかして、忘れられてたのにかにゃ！？」

危機的に叫ぶ克己に、クロードは目配せした。

了承の合図である。

なぜか不機嫌顔で駆けつけた健一郎と沙希、美野里、海斗が立会人選ばれた。

実戦魔術の講義などで利用される闘技場で、五人は戦闘準備を整えている。克己たち四人は円形になって作戦を練っていた。

中島幽香は退屈そうにしていた。

早く悠斗に会いたかったが、その悠斗が不在だったのである。不機嫌を通り越して、キレてしまった彼女は問答無用でその原因の片棒を担いだ克己と、その場に居合わせた三人に喧嘩を売ってしまった。

幽香は何となく美野里を睨み付けてみる。美野里はこちらの視線に気付いているのだろうか、そ知らぬ顔をしている。

悠斗を嫌悪している美野里のことが、幽香は大嫌いだった。

悠斗を妄信している幽香のことが、美野里は大嫌いだった。

「よし、じゃあ始めましょうか」

沙希の合図で四人が広がる。

作戦としては間違っていない。数の多さに任せる場合、一番避けなければならぬのは同士討ちだ。十分にスペースを開けておかないと味方を巻き込むことがある。

それは、相手の攻撃を一つに絞らせる意味でも効果的だ。それが、普通の魔術師であつたなら、たしかに間違いではないの
だろう。

「……愚か者」

幽香の呟きが、彼らに届いたのかどうか。

そんなこと、たしかめる暇もなく戦闘が始まった。

「スカイフィッシュ！」

巨大魚に跨つた克己が、空飛ぶ魚に指令を送る。片手のノートパソコンが忙しなく叩かれている。

幽香は『スカイフィッシュ切裂き空魚』の進路上に小さな炎を発生させた。銀色の魚は炎を迂回する。また小さな炎を進路上に置く。こうして誘導し、最終的に銀色の魚は近くにいたクロードに襲い掛かった。

草壁の片腕を切り落とすほどの威力である。

『青く澄んだ水壁！』

水で壁を作るが、スカイフィッシュは半分ほど壁を貫通し、クロードの右肩を切裂いた。軽い切り傷である。

『刺され、水龍の牙！』

クロードの背後から、アリスが飛び出して魔法を発動した。

死角から現れたアリスに、一瞬だけ対応が遅れる。水の槍が幽香に肉薄した。

だが、槍は幽香に触れる寸前に蒸発する。

「ちよつと！ 水克火はどうなってるのよ!？」

「彼女は別格なんだよ」

水は火を消し止める 五行思想の水克火の概念である。

だが、幽香に水は通用しない。

相手が幽香の場合、五行相克から考えるより五行相侮から考えた方が正しいのである。

火海水　　火が強すぎると、水の克制を受け付けず、逆に火が水を侮る。

『圧力となれ、風の圧塊！』

幽香の背後から綾香が叫ぶ。真空の塊が幽香を襲う。

「余所見している暇はないですよ、先輩！」

「……風」

幽香は真空の塊の中で、炎で小爆発を起こした。

五行の一つ、木行は風から生まれたと言われている。しかし、風は土に打ち勝つことができない。以前、緋芽が土の壁で風を防いだことがあったように、風属性の場合、木克土は当てはまらないのだから。しかし、木生火は別だ。

五行相生の木生火　木は燃えて火を生む。

風は炎を煽り、火力を上げる。

結果、綾香の魔術は幽香に利用され、小爆発は大爆発に変容する。

「きゃっ！」

爆発に吹き飛ばされた綾香が壁に身体を打ち付け、意識を失った。立会人の健一郎が綾香を引きずり退場させる。

綾香を最初に潰したのは、幽香が彼女の魔法を知らないからだ。多分、彼女は悠斗に魔法を過信することの恐ろしさについて教え込まれているのだろう。普通の魔術師なら、真つ先に魔法を使っている。

そう考えると、金髪の少女も同じことを教えられている可能性が高い。

「GO　スカイファイ……」

克己が飛ばしてくるスカイフィッシュを、防壁の熱量で溶解させる。

そのまま、右腕の砲身を向ける。指向性を持たせた火焰が巨大魚に向かって放たれた。

『果てしなく青い水流!』

『塞げ、水龍の鱗!』

二人の魔術、水の圧塊が幽香の炎を防ぐ。蒸発した水分が煙幕になつて視界を妨げた。

そして、何者かが接近する気配。

幽香の魔法は、魔眼に近いものがある。視線などの方法で座標を指定し、そこにプラズマ現象を発生させるのだ。両腕を砲身代わりにすることも可能だが、何もない空間から炎を生み出すには視界が必要である。

「……悠斗の真似事」

幽香は舌打ちした。生意気にもこの魔法の弱点を見切るつもりらしい。

だが、そう簡単に敗北するつもりはない。

『赤く赤く、爛々と』

幽香の声に反応して、周囲に拡散した魔力が燃え上がった。塔のように立ち上る火柱が、幽香を包み込んでしまう。

時間稼ぎの防御魔術である。

『赤く赤く、燦々と』

続いて放たれた魔術は、半径20メートル以内の無差別爆撃である。

太陽光のように降り注ぐ火球が、闘技場を蹂躪する。これでは視界を遮ることもまったく意味をなさない。

……幽香は魔法に頼り切っている。

だが、悠斗は言った。

お前はそのままが良いと。

幽香には悠斗が他の者に魔法だけを頼るなと忠告しているのに、どうして自分には何も言ってくれないのか、という気持ちがあった。だから、魔術の研鑽も忘れたことがなかった。

視界が晴れる。おそらく、幽香以外に立っている者はいないはずだ。

「……私の勝ちのようだな」

血塗れのアリスが、幽香に血液のナイフを向けていた。

クロードが地面に倒れている。

……そういことが。

クロードが自分の血を使って盾を作り、妹の身体を守っていたのだらう。

ブラッディ・クリスタルシェイド
『血液水晶』の生成速度は0・1秒を下回る。何度破壊されても再構成できる、ある意味で健一郎の壁を越える防御である。

しかし、盾一枚でも自分の血から作るとなるとかなりの血液が減ってしまう。破壊されたものを再利用するのはともかく、最初の一枚を用意するのも難しいはずだ。身体の30%の血液を失っただけで、人間はショック死するのである。

……クロードが死んだら、幽香の負けになるのだらうか。

まあ、もう負けている訳だが。

幽香はアリスの持つナイフを見ながら、溜息を吐いた。

21：ある男の決意

裸電球がぶら下がった陰湿な室内には、五人の男たちが剣呑な雰囲気を放っていた。早い話が殺気である。中央にいる一人の男を仕留めるために、四人がかりで挑んでいるという光景だ。

男たちは拳銃を構えていた。

それでは魔術師ではないのか　　と言うと、それは断言するべきではない。彼らを取り囲んでいる男は、あらゆる魔術を無効化してしまう怪物である。風の噂では、神を殺したと囁かれるほどだ。

『ダーティ・サンクチュアリ 神域汚辱』、草薙涼二。

現在、どの組織にも所属していない『ネームド 異名持ち』の魔法使いである。

「例えば、このような話があります。いえ、魚獲りの一つですよ。ペットボトルをぶった切り、出れなくなるように返しを作ってエサを放り込んでおくんです。いわゆる罠ですね。これを幾つも用意しておいて、魚がいきそうなポイントに放り込むんですよ。すると、魚が中に入り込むんです。もちろん、逃げられません」

差し詰めエサは私で、魚は貴方たちでしょうか。

草薙は慙懃に頭を下げた。

「ところが、エサには両腕が付いていました。無力だったはずなのに……。貴方たちの落胆は私ごとには計り知れませんがね。おつと、脱出しない方が身のためですよ？　……って、もう遅いようですね」

草壁が嘆息したとき、ドアに張り付こうとした男が爆発した。

彼らは知っていた。草壁の部下の一人に、ネームドクラスの魔法使いが二人いたことに。一人は彼の元から去ったらしいが、もう一人の行方はまだ知れないと。

「仙石君の魔法も、中々上達してきましたね。朽葉悠斗と出会わせたのは、ある意味正解だったのでしょうか。ところで私、そろそろ退屈してきたのですが？」

草壁は両腕を回しながら言う。鉛色の義手が、左右揃っていた。まだ誰の魔術も無効化していないので、その義手に魔力は蓄えられていない。刺し違えるつもりだったなら、この男たちにも勝機があっただろう。だが、彼らの実力は魔術アカデミーの卒業生程度のものである。

「貴方たちの所属はどちらなのでしょう？ 魔法庁ですか？ それとも魔術カルテルなのでしょうか？ ああ、答えないのならそれでも構いません。どうせ、どちらもこの私が叩き潰すのですから」

部屋に轟音が響き渡り、裸電球が左右に揺れる。壁の一面が焼け焦げ、男の一人が消滅していた。

いや、良く見ると壁に人の形の焦げ後が残っている。

「今回の義手は、改良版です。左の剣、レーヴァテイン『スルトの魔剣』は私自信の魔力が供給可能になっています。さらに、攻撃範囲も広がっていますから、一度に何人も殺せて安心ですね」

あくまで上品な草壁の笑顔に、男たちは凍り付いた。

比喻ではない。文字通り、一人の男が凍り付いていた。草壁が右手の手の平を男の方に置いただけである。

「そして右腕の義手、テイルフィンゲ『アールヴの魔剣』は触れた者から零下273・15度まで熱量を奪い取ってくれるのですよ。俗に言われる絶対零度ですね」

炎の魔剣と氷の魔剣。

この二つを見せられ、残された一人は完全に戦意を喪失したていた。と言っても、そんなものは両腕が揃った草薙を見たときに失せていたのだが。

「まずまずの仕上がりでしょう？ 前回の敗北で、私は少しばかり反省したのですよ。あの神に左腕を奪われたときに剣を手に入れたですが、あの時に右腕も落としておけば良かったのです。どうして今頃気付いたのでしょうか？ これは慢心だとは思いませんか？」

「ひっ、ひいつ！？ や、やめ……っ！」

最後の一人も、草壁の右腕によって凍らされてしまった。

……さて、今彼は何を言おうとしていたのでしょうか。

草壁にとつて、命乞いとは聞き飽きたものであったが、今日は気分が良い。頼みごとの一つや二つ、聞いてやっても良かったとさえ思っていた。もつとも、生かしてやる気はなかったが。

「相変わらず”正常”に狂った人ですね」

「これが、戦場で必要な狂気なのですよ。ある程度自我が崩壊しても、常人であることに留まれる者だけが戦場で生き残るのです」

「そう、正常に狂うことは大事なことです」

普段よりもさらに饒舌になっている草壁に微笑みかけているのは、車椅子に乗った女性だった。両足の膝から下が失われている。緑色のパジャマを着ていおり、セミロングの黒髪を一つにまとめていた。「例えば災害が発生したとき、スーパーやコンビニなどの店に泥棒が入りますよね？ 彼らはただ己の生命のために狂ったのです。これが、正常な狂気です。この狂気は、ひたすら宿り主を生かすために、狂わせてくれる」

「では、正常ではない狂気とは？」

「正常ではない……つまり、異常なのです。異常性とは言葉通り、常人には理解できない概念のことですね。シリアルマörder、理由なき殺人鬼。カニバリズム、飽食の時代から逆行した人肉食趣向」

女性は車椅子から降りると、凍り漬けにされた男の身体を検分し始めた。

「他にも、行きすぎた女性権利拡大主義者、過保護になりすぎた教育者、研究に没頭しすぎた学者が持っているもの。それが、行きすぎた狂気、異常なのではないでしょうか」

「つまり、何事もほどほどに……と言っことですね。ほどほどに狂え……と」

女性は頷き、車椅子に戻った。

「何か分かったのですか？」

「いえ……問題はないか調べていたのです。これでも、私が用意した義手なのですから」

彼女の名は九重香澄。草壁の義手を用意した技術者だった。

魔術と魔法についての造詣は深いが、知識だけのようである。しかし、その理論だけを吸収して魔力を込めた宝石を用意し、特殊な能力を持つ武器を作ってしまうのが彼女の頭脳の恐ろしいところだ。朽葉悠斗の頭脳が状況分析と戦略構成にあるなら、九重香澄の頭脳は構造分析と器物創造にあると言えるだろう。

「貴女には色々とお世話になりましたね。最後に無粋な客人を招いてしまい、申し訳ありません。ですが、まだまだ私にはやらなければならぬことがあります」

「死体なら研究材料になるので問題ありません。ですが、もう行ってしまおうのですか？」

香澄は草薙に潤んだ瞳を見せた。普段は女らしいところを何一つ見せない彼女だったが、気持ちが高ぶったときだけこのような瞳をするのである。

「この場所は、中々に居心地が良かったですよ。でも、長居すると離れられなくなりそうですからね」

「……………戻ってきますよね？」

さすがのように言う香澄に、草壁はどう返答するか迷った。義手を破壊されれば、もう一度来訪するだろう。だが、そのような無粋なこと、紳士を気取る草壁には言えなかった。

「ええ、勿論です。神と魔法のつまらない遊びにいつまでも踊らされている私ではありませんからね」

もう川崎美野里や倉渕祐作の手の平で玩ばれるのは飽きた。

そろそろ、相手の予想外の行動に出てやろう。草壁は香澄と口付

けを交わすと、覚悟を決めた男の顔をして部屋を後にした。

22：夢墮の舞姫

帰宅した悠斗は、そのまま布団に倒れ込んだ。

今日、隣町の図書館（この村に図書館はないのだ）で昨日訪れた神社についての資料を探し、ようやく地方紙の片隅に事件の詳細を発見したのは正午を過ぎた頃だった。

『姫川神社の神主家族五人が行方不明』

と書かれていた。どうやら、魔法庁の役人が入り込んで処理をしたようだ。後日、無人の神社が発見されて、事態が公になったと言っあらすじなのだろう。神社への襲撃事件が盛んだった当時、魔法庁も完全に事件を隠蔽するほどの余裕はなかったらしい。

どうやらあの神社は秋葉山の遠縁に当たるといえる。江戸時代以前の秋葉山の祭神は三尺坊大権現と観世音菩薩である。できれば姫川神社の祭神も、三尺坊大権現か観世音菩薩であって欲しいところだった。

しかし、姫川神社は江戸以降に分家したらしい。

「まったく、厄介なことばかりだな」

布団の上で、天上を見上げながら呟いた。

ホノカグツチノカミ
火之迦具土神

神話について多少の知識があるなら、知らないはずはないだろう。母神殺しの火神で、生後直後に父神に斬られ、その血から多くの神々が生まれたという逸話がある。

神喰いを行う場合、神社の選定には最も気を使わなければならない。

い。
何せ、有名な神ほど多くの地域で祭られているからだ。その中で本物は一つ。それ以外の神社を襲撃すれば、ただの殺人犯として司法機関や魔法庁に追われることになる。

火之迦具土神の筆頭、静岡の秋葉山本宮秋葉神宮が本物であるべきなのだが、どうしてこのような無名の神社に本物のカグツチが祭られているのだろうか。まったく、頭が痛いところである。

悠斗は白鞘の刀を持ち上げた。刃渡りは二尺一寸（約63センチ）と短く、刀身は厚みのない造りになっている。無骨さを極限まで切り詰めて、神々しさを表現しようとした刀匠の意思が伝わってくる。

しかし、その刀は 穢れきっていた。

波打つ刃紋からは黒々とした瘴気が渦巻いている。持ち主に殺戮をもたらす妖刀と言っべきである。

カグツチの巫女が使ったせい、脳裏に燃え盛る火炎の太刀が思い浮かんだ。おそらく、火の魔術と相性の良い刀なのだろう。

「随分と物騒な物だな、それは。穢れという点においては最上級の一品だぞ。ただし、常人にとっては最下級の一品なのだがな」

「やはり、そう思うか？」

悠斗は無造作に、緋芽に刀を手渡した。「重いな」と愚痴った緋芽は、指先を刀身で軽く傷付け、血でサンスクリット語の梵字のようなものを書き込んだ。

「なるほど、カグツチも堕ちたのか。まったく、この時代はどうなっているのだ？ そこら中から腐った神の気配がするのだがな」

「分かるのか？」

「まあな。原初の夫婦神は吾の先祖だ。となると、あの火神も先祖だからな。血が繋がる親族の気配は大体は把握している。イザナギとイザナミの子孫は、神武天皇の父君世代までは、ほとんど墮とされているみたいだぞ」

それは大変なのだろうが、現実感の湧かない話だ。

話半分に聞いておけば良いだろう。そう判断すると、悠斗は緋芽の手から刀を奪い取り、抜き身を鞘に収めた。

「で、何をしていたんだ？」

「うむ。このままでは危険かと思ってな。少しばかり封印をしておいた」

「封印？」

「一般人が触れたら発狂するほど危うい様子だったのだ。それに、放っておくだけでも瘴気が漏れ出すのでな。悪鬼羅刹を呼び込んで面白くないことになる。と言う訳で、封印したのだ」

悠斗が「実用性に問題はあるのか」と訊ねると、緋芽は「それは心配するな。触れただけでは問題がないだけでな。抜けば殺人鬼が一人や二人、またたく間に出来上がるという寸法なのだ」と太鼓判を押しした。

あまり過信して良いものではないようだ。

とりあえず、これからの方針は姫川咲夜を探すこと。適度に休息をして、アカデミーに復学すること だろう。

……今はそれよりも。

「ほら、さっさと準備をせんか」

緋芽に急かされ、不承不承立ち上がる。悠斗は薄手のジャケットを羽織り、念のためにペンライトを忍ばせて、財布の中身を確かめた。この辺りは明かりが少ないので、夜道を歩くときに光源が欲しくなるかもしれないからだ。

「まだか？ まだなのか？」

「いや、ちよつと待てよ」

外からは祭囃子の音が流れてくる。

村祭りが行われているのだ。村人総勢五十名が参加する、年に一度の恒例行事らしい。簡素な祭りで都会者には退屈かもしれないが、ぜひ顔を出してくれと村の青年会に誘われている。

その青年会とは平均年齢が四十歳で、もう青年とは言えない集団なのだが。

中年会というのは……ちよつと……いや、かなり嫌だ。

苦笑する悠斗に、緋芽は苛立ったように袖を引つ張った。普段は斜に構えているが、こんなときには容姿相応の態度を見せてくれる。微笑ましい光景である。

「だから、待ってって」

「いや、待てない。もう一秒たりとも待てないぞ。早くしないと……」

悠斗は救急箱から絆創膏を一枚取り出して、緋芽の指に巻きつけた。

「……すまん」

「いや、違うだろ」

微笑みかける悠斗に、緋芽は不思議そうな目を向けた。

「こう言うときは、ありがとうって言うんだよ」

「そうだな。……ありがとう、悠斗」

「どういたしまして」

二人は同時に笑い合い、村祭りに繰り出した。

十

出店などは当然見当たらない。神輿や盆踊りもない。ただ、村の女性たちが中心になって楽器を演奏し、村一番に美しい女性が舞いを演じる。それが、この村の祭りのようだった。

青年団（中年団）が集まった人々に紙コップ一杯のお神酒を配り、若者たちが中心になって舞台の最終チェックをしているところである。

夕方の五時。周囲は燃えるような夕日に照らされ、新緑が生い茂る山々は黒々としたシルエツトになっていた。

「どうですか？ 楽しんでますか？」

「まあな。中々に赴き深いものだ」

青年団の若者、鞍馬隆介は肩をすくめた。

「無理しなくても結構ですよ。友人たちは退屈すぎるといって顔も見せません。来月には隣町で盆踊りがありますし、そちらの方を楽しみにしている者が多いですよ」

「何とも即物的な考えだな」

悠斗の返答に、隆介は意外そうな顔をした。

地元の高校生である。と言っても、通学は片道で一時間、自転車を走らせているらしい。この村には十人ほど高校生がいるのだが、その中の半数は全寮制の都会の私立高校に入学している。

「そう言ってもらえると嬉しいですよ。苦労して準備をした甲斐があるものです」

「何もしていない部外者が、勝手に言っていることだ。あまり気にしないでくれ」

「妹さんは部外者だとは思われていないようですが」

緋芽はと言うと、村のオバサンたちに囲まれてキヤーキヤーと騒がれている。非常に鬱陶しそうだったが、緋芽は溜息を吐きながら受け答えしていた。

「僕はそろそろ行きますね。ああ、そうだ。今日の舞姫は僕のクラスメートなんですよ。舞い手を演じるのは今年で三回目ですね。この村の若者で綺麗な人って、そう多くはいませんから」

隆介はそう言うと、舞台の準備をしている集団に混じった。

山々の背後に夕日の残光が燃えカスのように散りばめられている。日が落ちて、急に辺りが暗くなった。すると提灯に火が灯り、辺りを薄っすらと照らし出す。その頃になると、舞台の人手は引き上げている。

笙の笛の音から始まり、厳かな雰囲気がある。場を席卷する。

祭りの始まりである。竜笛を吹いているのは隆介のようだった。

そして、舞姫が舞い降りた

運命は回りだす

過ぎ去りし過去は絶無に潰える

さあ、物語の始まりだ

ここに目覚めよ

我と一つになり

終わりの闇を探しに行こうではないか

23：火水の均衡

何人であろうと、その光景に目を奪われなかった者はいないに違いない。木材の枠組みに、朱色や黄色などの飾布で地味になるように彩った舞台に、一人の少女が悠然と歩み出た。

一瞬、百合原綾香と似ている　と思っただが、やはり別人だった。長い黒髪の少女である。巫女のような、穢れから隔絶された気配を感じた。

シャン　と鈴の音が、神聖な空気を揺らす。

太鼓が一度、鳴らされる。笛の音が止まった。

「……あれは」

白い狩衣風の衣装である。緋袴の巫女服とは異なり、白地に青色を織り交ぜた色合いをしている。これから夏が始まることを考えれば、清涼感のある衣装を選ぶのは間違いではない。

赤青白黒。そして黄。

赤は朱雀、青は青龍、白は白虎、黒は玄武。そして黄は天帝。

この五色が、古来より人々に特別視されてきた色なのである。赤色や青色、白色や黒色、そして黄色。これらの単語には形容詞に赤い、青い、白い、黒い、黄色いがある。しかし、緑色や紫色には形容詞が存在しない。

「ふむ……。たしかに素晴らしい。あれこそが神に捧げる神舞だと言えるだろうな」

緋芽は難しそうな顔をしていた。

その理由は、悠斗には何となくだが分かっていた。

あの舞は……どこか……歪んでいる。

「色だな。おそらく、これは豊作を祈願しているんだろう。形骸化して本来の目的は忘れ去られているようだが、この祭事は雨乞いの儀式だ」

「そうだ。火の気を追い払い、水の気を召集する儀式。どうやら、

数百年ほど前までは人柱が立てられていたようだな」

「人柱？ …… ああ、なるほど。本当の巫女の役割か」

雨乞いの儀式を成功させるため、この祭りの舞姫（つまり巫女だ）を儀式の後に殺害していたのだろう。残酷なことだが、時代によっては仕方ないことだ。

「あれは、本来の色彩から外れておる」

舞台上で舞っている少女は、白と青の衣装を着ている。

「火之迦具土」

「知っておったのか？ そう、あれは赤の神だ。暴虐なる火神にして母殺しの神。よくあれほどの神に吞まれて耐えておる」

関心している緋芽に目を向けながら、悠斗は推測していた。

あの舞は火を退け、水を呼び込む意味がある。現代では失われて久しいが、祭りは無意識の信仰を利用した魔術だ。形骸化したとはいえ 意味 だけは残っているのではないだろうか。

あの少女は舞姫を演じるのは今年で三年目である。

「 …… 火を退ける祭り」

偶然にも舞姫になることにより、少女は己の内側の神を退けていたのだろう。

突けばすぐに崩壊するダムのようなものだ。悠斗は姫川咲美の依頼の意味が、ようやく理解できた。

「 …… もう、限界なのか。」

この祭りでも、気休めにしかならないと言うことなのだろう。元々無理な話だったのだ。いくら村に若者が少ないとはいえ、そう毎年舞姫を勤めれるものではないだろう。そろそろ代変わりしても良い頃だ。

「姫川咲夜を守ってくれ… …か」

悠斗は厳しい視線を舞台に向けた。

青年会のオツサンたちに酒席に誘われたが、悠斗は「妹がいるので……」と丁重にお断りし、夜十一時に帰宅した。緋芽はしきりに「吾は妹ではない！」と講義したが、取り合っても時間を浪費するだけである。

ペンライトで夜道を照らしながら、慎重に自宅への帰路を進む。迂闊に足を滑らせれば、田んぼに真っ逆さまである。まあ、悠斗はそれなりに夜目が効くので、明かりは緋芽のためなのだが。

「で、これからどうする？」

「どうする……とは？」

緋芽の質問を質問で返す。少し苛立った様子で、緋芽は言い直した。

「火之迦具土の巫女のこともある。あかでみーのこともある。出る前に言っただろう。このまま平穏を満喫するのは結構だが、気付いていたら死んでいた。のような事態にならないとは限らない」

要領を得ない語り口だったが、何となく言いたいことは分かった。能動的に行動しろ、と言うことなのだろう。受動的に構えているのは、万事において最悪である。自らの手で選択肢を狭めるだけだ。しかし

「当分はこの村からは離れないつもりだぞ」

「……………正気か？」

悠斗は返事をしない。

前方に、二つの人影が 待っていた。

一人は黒スーツの男性である。痩せ窪んだ眼窩と、長身が印象的で、全身からじつとりとした殺気を放っている。もう一人は背の低い、茶髪の小学生だった。

道化と爆弾魔が、悠斗に向かって歩き始める。

「こんにちは。いいえ、こんばんわでしたね。私、挨拶をするのは久しぶりなので失礼があったら申し訳ない。最近までずっと地下室

に籠っていたので、時間の感覚がどうも曖昧でしてね。いえ、別に大した問題ではないのですよ」

「……草壁涼二」

「しかし、相変わらず陰鬱な顔をしていますね。この私が言うのも何ですがね。せめて口調だけは私のようにしてみたらどうですか？ 人生をほどほどに楽しく生きるには、ほどほどに言葉遊びをするものです」

「……目的は何だ？」

草壁は両手を広げた。そして気付いた。克己に切り落とされた右腕が、義手になって復活している。鉛色の指先が、こちらに向けられた。

「やる気か!？」

「いえ、別に私たちは貴方と敵対するつもりはないのですよ。”現在”の貴方は、さして脅威ではありませんからね。自分よりも弱い相手を潰すときは、無駄事を言わずに殺してしまふものです。とは言え、私、対話というものが大好きですから地面の蟻さんにも話しかけてしまふんですよ」

悠斗は草壁が自分を蟻扱いしているのか、判断できなかった。

本当に、ただ話をしにきただけかもしれない。だが、常時殺気を醸し出しているこの危険な男と普通の話し合いができるとは思えない。

「心配はいりませんよ。別に、貴方に死んで下さいと言いにきたのではないのですから」

草壁は広げた両腕を背広のポケットに戻した。

「前回の敗北で戦力の大半が削られてしまいましたからね。こうして私のところに残ってくれたのは仙石和希君だけでして。と言う訳で、これからのために戦力を補充することにしたんです」

そう言って、隣の少年を見る草壁。少年は無言で頷いた。

「ああ、そうか。戦力補充でも何でも良いから勝手にしろ」

「そうつれないことを言わないで下さいよ。私、魔法庁と魔術カル

テルから追われているんですよ。それは、最初は一秒で殺せる雑魚ばかりでしたけど、最近は魔術師ではなく魔法使いが向かってくるようになりました。このままでは異名持ちが派遣されるでしょう。流石の私もそれは厳しい。いえ、決して負けるつもりはないんですがね」

連日戦闘を繰り返しているのか、憔悴しているのかもしれない。先ほどから一言も発しない仙石和希といい、どうも疲労が色濃いうようである。

「で、田舎の方面まで逃げてきたと言う訳です。ここまでは探索が入らないのでね。と言うことで、この辺りで腰を落ち着けて魔術師や魔法使いを探すことにしたのですが、私、宿無しの身分でして……」

嫌な予感がした。草壁は引きつった笑みを浮かべ、両手を広げ親愛の情を示す。

「いえ、私、貴方のことが嫌いなんですよ？　ですが、背に腹は変えられないとも言いますか」

「……………帰れ」

悠斗の返答はにべもない。予想通りと言うべきか、草壁は苦笑して頷いた。

殺し合いをした奴と一つ屋根の下で生活しようと、誰が思うのだ。アカデミーで克己やクロードと殺し合いに近い喧嘩をしたことがあるが、彼らは一応は仲間である。しかし、目の前の男はどこからどう見ても敵である。

「なら、取引しませんか？」

「……………言ってみる」

かなり悩み、とりあえず話を聞いてみることにする。

草壁は満足気な顔になると、

「貴方が私の甥と戦うとき、私が加勢しましょう」と言い放った。

「……………なるほどな」

悠斗はしばし呆気にとられ、二秒間の思考で納得した。

つまり、最初からこれが目的だったのだ。

田舎まで逃げてきたのは偶然ではない。逃げる必要はあったのだろうが、その目的地を選んだ理由はこの地に悠斗が滞在しているからである。

戦力補充は必要条件ではない。補充できれば言うことはないのだろうが、最悪草壁なら一人でも問題ないはずだ。一匹狼なのである。それに、悠斗の家を拠点にするのも納得できない。簡単な結界は張られているのだが、そんなものは一定クラスの魔術師には意味を成さない。理由としては弱すぎる。

この思考が、二秒間の間に行われた。

「一緒に倉淵祐作を倒しましょう……ってことか？」

「どうせ、貴方の中で結論は出されているのでしょうか？ 私が頷いても頷かなくても、嘘とその意味と真実について、貴方の頭脳は簡単に答えをはじき出してしまつのです。なら、あえて私は頷かせてもらつ」

「倉淵祐作を殺すつもりなのか」

「ほら、いいえと答えても貴方の返答は変わらないでしょう？」

一緒に倒しましょう　いいえ　嘘を見抜く。そして殺すつもりなのかと訊ねる。

なるほど。言いて妙である。

悠斗は苦笑した。草壁も中々に頭が良い。

24：露西亞の拳銃使い

私立王聖魔術学園は1983年に創立された、日本で二番目の魔術教育機関である。生徒数は5000人を軽く超えていることから、500人の少数精鋭である国立魔術アカデミーとは教育方針を異にしている。

……国立魔術アカデミーに入学できなかった者たちを受け入れる、受け皿と考えることもできる。

そのため、魔術師の質はかなり劣っていた。卒業するまでに一つの魔術しか使えない者がかなり多いのである。これがアカデミーなら一つの属性を極めてから卒業するのだろう。才能のある者はアカデミーに取られているので仕方がなかった。

王聖魔術学園の校長室では、二人の老人がお互いを威圧していた。片方はアカデミーの校長、弥栄玄一。

片方は学園の校長、本間太一郎である。

二人とも壮年の域を超え、もう七十も後半の老木であった。

「なるほど、言いたいことは分かった」

本間太一郎は満足そうに頷いた。その表情は弥栄玄一を見下して、己が優位なのだと疑われない者のものである。

「仕方がないのじゃ。ワシの学校は魔法庁にまで嫌われているのでな」

玄一の表情は太一郎とは対照的に、苦渋に満ちていた。

先週まで玄一は魔法庁の役人たちに向けあっていたのである。先日の襲撃があり、生徒たちに不安が広がっている。そのため、魔法庁から”戦える”魔術師を派遣してもらい、アカデミーの警備を行ってもらえないかと相談していたのだ。

だが、魔法庁の返答は「そちらには異名持ちクラスネームドの魔術師が腐るほどいるじゃないか。奴らに守ってもらえば良い」である。

学生の本分は勉学である。なのに、どうして生徒たちに学校を守れと命じられるだろうか。たしかにアカデミーの戦力は過剰かもしれない。しかし、あれは倉渕祐作という異端を排除するために必要だったから集められただけだ。川崎美野里の独断だったが、玄一は間違っていたとは思わない。

「まあ、良いだろう。こちらは問題ない」

太一郎は頷き、書類に判を押した。

玄一が持ってきた書類は、転入生の受け入れ申請書である。先日
の事件で不安を覚えた生徒やその親御からアカデミーに講義が入り、
暫定的な処置が取られることになった。

成績には反映しない休学を設け、望む者は実家に戻させた。しかし、それだけでは事態は収まらなかった。前年度からの革命が、また引き合いに出されたのである。

「転入生の数は147人か」

「あと、一部の教師がそちらで勤めたいと言っている。転職活動を手伝うのはワシの仕事ではないのじゃが、受け入れてくれんかの？」
「断わる理由はない」

太一郎は嬉しそうに答える。どうせ、頭の中ではアカデミーから受け入れた生徒を育て、アカデミーを押しつけて国内一番の魔術教育機関になるための計画が練られているのだろう。

俗物め、とは思わない。経営者とはそんなものだ。国立魔術アカデミーは税金で運営されているため、玄一には学校運営の苦勞が分からない。だから、つべこべ言うにも何と言うべきなのか分からないのだ。

玄一は溜息を吐くと、席を立った。太一郎が秘書にお送りしると命じる。いつもは塩を撒けと叫ぶのに、今日は随分と殊勝なものがある。ここで心変わりされたらと不安になっているに違いない。

玄一は駐車場に停められていたフォルクスワーゲンの前に辿り着いた。

ボンネットに腰を下ろし、煙草を吸っていた柄の悪い男が玄一を

見下ろす。随分と巨大な男だった。全身の筋肉が膨張し、背広を内側から押し上げている。白髪に鶯色の瞳の西洋人であった。

野生的な雰囲気はあるが、決して獣のようではない。粗野っぽい雰囲気と上品さを併せ持った、不思議な男だった。

ミハイル・アレンスキー・ナザーロフ。

ロシア人の名前には父姓というものがあり、彼の場合は『ミハイル』が名前、『アレンスキー』が父姓で、『ナザーロフ』が苗字である。この『アレンスキー』は父親の名前から作られることから、ミハイルの父親は『アレン』であることが分かる。

「よう、ジジイ。長話だったな」

「退屈だったかの？ そりやすまんことをした」

「いや、まあ謝ることはねえよ。俺はこの国が好きだからよ」

「この国の女子の間違いであろう？」

ジト目を向ける玄一に、ミハイルは豪快な笑みを浮かべた。

視線は中庭でバレーボールをしている女学生たちに向けられている。

「そりゃ、不正解ではないが正解でもないな。俺はどの国の女でも愛せるからよお。ところでジジイ。さつきから女どもの視線も痛いんだが、ちいとばかり殺気が混じってる。心当たりはないか？」

「ないことはない」

「どっちだよ」

ミハイルは肩をすくめると「消しとくか？」と訊ねた。

どうせ、魔術カルテルからの刺客か、魔法庁の隠密だろう。どちらも正規に所属しているような輩ではないのだから、始末しても問題にはならない。

「好きにしる」

「あいよ。ならお言葉に甘えて、誠心誠意ぶつ殺させてもらっせ」
そう言っつて、ミハイルが背広の懐から取り出したのは黒光りする鉄塊だった。

デザートイーグル50AE。使用弾は50Action-Exp

ress弾。IMI社（イスラエル国立兵器廠）製、1979年に開発された当時は世界最強拳銃の名を欲しいままにした。現在は輪胴式のS&W、M500がその座を奪い取ったが、自動拳銃の世界では未だに王者として君臨し続けている。

ミハイルは口元に凶悪な笑みを浮かべた。

銃口を学園の屋上に向ける。こちらを観察していた刺客が動揺する気配がした。それと同時に、ミハイルの足元の地面が弾けた。

ライフルによる狙撃だ。銃声がこちらまで聞こえてきた。

「この俺様を狙撃した根性は認めてやるう。だが……」

ミハイルはデザートイーグルの引き金を、引き放った。

周囲の空気が絶叫し、銃口から巨大な火球が射出される。それはまるで巡航ミサイルのトマホークのように、地面すれすれを低空飛行して、学園の校舎に激突する寸前に急激に高度を上昇させた。

「……100万年早い」

学園の屋上で爆発が起こり、火の海が発生する。

魔術の詠唱も何もない。ただ、引き金を引く動作だけで、100平方メートルを地獄に変えてしまったのである。学園の生徒たちはパニックに陥り、教員たちが走り回っていた。

ミハイルはフォルクスワーゲンのドアを開け、運転席に着いた。

すでに校長は助手席に腰を下ろしていた。

「けっ、クソジジイが」

ミハイル・アレンスキー・ナザールフ。

弥栄玄一が教師をしていたときの、教え子の一人だった。

十

そこは、ボクシングのジムのようだった。

中央にロープを張り巡らせたリングがある。これで分厚いマット

が張られていたならばプロレスかもしれないと思うのだろうが、この部屋には天上からサンドバッグが吊るされているし、何よりリングの床がむき出しの木板なのだ。

部屋の床はコンクリートである。

倉淵祐作は部下からの報告を、サンドバッグを叩きながら聞いていた。殴る　ではなく叩くである。渾身のストレートではなく、俊敏なジャブだった。

「なるほど……。あの死に底ない老僕が、魔術師を連れてきましたか」

渾身のストレートは、それほどスピードが出ない。それは、腕を引き戻すための筋肉さえも殴るために使ってしまうからである。

しかしジャブは、引き戻す余裕がある。腕が竹のようにしなり、空気が切り裂かれる。

パンチとしては軽く、威力が足りないかもしれないが、人間は道具を使う生物だ。ジャブのスピードでナイフを使えば、足りない威力なんて考えるのも馬鹿馬鹿しくなる。

祐作はボクサーや格闘家ではないし、百歩譲っても戦士とは言えない。

魔術師なのである。

魔法使いなのである。

「それで、貴方は何をしにきたのですか？」

祐作は、報告していた部下に声をかけた。平伏していた部下は、身体をびくびくと震わせる。全身の汗腺から水分が抜け出しているようである。そう言えば、この部屋は数時間も換気をしていないし、祐作が運動していた所為で熱気が籠っている。脱水症状になってもおかしくない環境だ。

祐作は部下が汗を掻いている理由を勘違いしていた。

部下は、ただ祐作に恐怖を抱いているだけである。生物が持つ純粹な恐怖を呼び覚まされているだけである。視線を合わせれば殺されるかもしれないと、小便を漏らしそうになっただけである。「それで、貴方は何をしにきたのですか？」
もう一度問う。

「い、いえ……じ、自分は……」

「弥栄玄一が魔術師を連れてきたなら、どうして彼について調べていないのですか？ どうして僕に報告しているのですか？ 自分が必要ならばならない仕事に分からなくて、指示を仰ぎにきた訳ですか？ そんな無能は必要ないと、僕が考えるとは思わなかったのですか？」

「じ、自分はっ……！ 自分は！」

「一つ、教えておきましょう」

祐作は微笑んだ。

「僕は、予想外という現象を神よりも憎んでいます」

「ひうつ ツ！」

部下の頭が割れた西瓜のように破裂した。

ジャブを一発。ただそれだけである。しかし、それは常人の動体視力では残像さえ追いきれないほど速かった。

「……脆い」

血に濡れた拳を、舌で舐める。祐作は、天上を見上げた。

「脆い脆い脆い脆い脆い脆い。ああ、どうしてこんなに簡単に……！」

どれだけ殴つても、朽葉悠斗は死ななかつた。なのに、それ以外の人間はただの一発で絶命してしまう。本気の戦いと言うものを、祐作はここ半年していない。

いや、言い直そう。

朽葉悠斗との対戦のときだけが、祐作が本気を出せる瞬間である。

25：魔王を喰らう

刀を持ったまま村内を歩き回るのも物騒なので、悠斗は自宅に引き返した。

腹ごしらえに台所に入ると、草壁涼二が微妙な顔をしてラーメンをすすっているところだった。

「美味しいのか？」

「……………不味いです」

そんな会話を交わしながら、悠斗も自分の分を用意する。お湯を注ぐだけで高カロリーと過剰な塩分を摂取できる便利な食料である。災害時の非常食にもなる文明の恩恵なのだが。

「不味いのか？」

「ええ、不味いです」

低血压なのか、今朝の草壁は無口だった。普段は饒舌なので、どこか違和感がある。

「……………おはようございます」

寝ぼけ顔の仙石和希が台所に姿を現し、流し台で顔を洗い始める。男三人が集まれば、このようなものだ。

昨日、草壁との取引に応じた悠斗は住居と食料を約束した。倉渕祐作と戦ってくれるなら安いものだ。アカデミーにバレなければ、どうにでもなる。

「一つ聞いても良いか？」

「プライベートですか？ それともビジネスですか？」

「どちらかと言えばビジネスだ」

草壁が頷いたのを確認して、悠斗は質問した。

「以前のことだがアンタ、倉渕祐作のことを『利害が一致すれば協力することもある』と言っていたよな？ ってことは、アンタが『魔術カルテルへの仲介』を、倉渕が『それに見合う何か』を提供し合ったと言うことになる」

悠斗は一度、間を置いた。

「アンタは何を受け取った？」

そもそも、倉淵祐作が魔術カルテルへ斡旋されなければこのような事態に陥っていなかったのだ。悠斗にとつて、現在油断ならない人物は『倉淵祐作』『草壁涼二』『川崎美野里』の三人である。

この間まで、川崎美野里とは両者の利害が一致していた。悠斗は戦力、美野里は住居の提供である。

これは、現在の悠斗と草壁との関係に似ている。悠斗と草壁の関係が成り立っているのは、川崎美野里が悠斗の戦力を必要としなくなつたからだ。

草壁は沈黙する。少し考えをまとめ、やがて口を開いた。

「……魔法庁の、機密文書ですよ。内容は言えませんが」

どうして倉淵祐作がこのような物を手にしていたのか分からない。しかし、それは魔法庁の上層部を揺るがすには十分な情報だった。

あとは黎明の魔石というキーが手に入れば、一つの組織が地上から消えてなくなる。

草壁はこのようなことを、簡潔に伝えた。

「すると、アンタの目的は黎明の魔石ってことか」

「それほどの価値があるのか疑問なのでしょうね。そう、あれはただの強力な魔力の塊でしかない。しかし、あの厳重な封印の内側にはたしかに魔王の魔力が納められているのです」

「魔王の魔力か……」

たしか、その魔力は古代の魔獣や魔王の従者が守っているのだったか。その魔力を手に入れるにしても、苦労に見合う価値があるとは思えない。

いや、待て。

どうして価値がない物を、それほど大切に守っている？

「……まさか」

この男は神殺しの大罪人である。
なぜ殺した？

なぜ喰らわなかった？

神よりも価値のあるものが目的だったならば。草壁は聡明な男だ。目先のご馳走に食いつくほど短慮ではない。

「お前、魔王の魔力を喰らうつもりなのか!？」

「ええ、そうなんですよ」

草壁はラーメンのスープを飲み干し、紳士的に微笑んだ。

十

「すみませんね……」

草壁涼二は無言で部屋を出て行った少年に謝罪する。

この一言にどれだけの意味があったのか、草壁自身にも分からない。自己満足だと断言するには、たった一言で草壁の心が救われすぎている。だが、朽葉悠斗にとっては必要のない一言だった。

草壁は早速、悠斗を裏切ることになるのだから。

「私の目的のため、貴方を利用して貰いますよ」

草壁は背広の胸ポケットから携帯を取り出した。

悠斗は今日、おそらく姫川咲夜と接触する。

ある程度のことは事前に調べを入れている。そのことは、草壁にとつてはさして関係はない。姫川咲夜が戦力になるなら歓迎するが、手駒の一つにカウントしておくほど草壁は楽観的ではなかった。

「ああ、もしもし。ええ、私ですよ、私」

『ああ、そうか。私か。で、どこに振り込めば良い?』

「『私私詐欺』ですか? そんなつもりではないのですよ。貴女も面白くない皮肉を言いますね」

『用件を言え』

「ええ、たしかに。そんなことはどうでも良い。私たちには世間話をするほどの信頼も、無駄口を叩ける油断さえも許されませんから

ね。お互いに、水と油のように交じり合わない存在と言つのも厄介なものです。それでも、こちらは歩み寄っているつもりなんですがね」

電話口の相手が沈黙する。

草壁は言葉を切った。そして、事態を動かす一手を放つ。

「朽葉悠斗はこちらの手に落ちました。以上です」

義手の握力に負け、携帯が粉々に砕け散った。

通話が切れ、手の中に痛みが残る。すでに感じなくなった痛み。

……幻痛だ。耐えられないことはない。

「さて、川崎美野里。貴女はどう動きますか？」

26：邪神二人

通学路の片隅にある喫茶店で、午後四時の終礼を聞いた。

悠斗は姫川咲夜の高校から、最寄のバス停までのコースにある喫茶店で軽食を済ませていた。緋芽が文句を言うかもしれないが、今晚の夕食は用意できないかもしれない。

……あの小娘、レトルト食品でさえ調理できないのだ。

色々と頭を悩ませてくれる小娘である。悠斗は溜息を吐きたくない。

「……あれか」

一人で歩いている姫川咲夜を発見した。

友人付き合いは良くないのか、朝夕とも一人きりである。物悲しくも美しいので、男たちが放っておかないだろうに、他者を拒絶するような空気をまとっている。あれに話しかけるようなら、そいつはナンパ師を名乗る資格はない。

……下手をすれば、火傷どころか塵さえ残らないか。

悠斗は姫川咲夜を尾行する気配に気付いていた。おそらく、彼女自身も気付いているのだろう。だが、街中では咲夜も尾行者も手を出すことはできない。とっていたのだが。

『黒炎式式、黒死蝶』

姫川咲夜が背後に視線を向け、小言で魔術の詠唱を行った。

黒々と燃え上がる火炎が、紙ふぶきのように宙を舞う。それは紋白蝶の大きさをしている、毒蛾のように火の粉の燐粉を散らしていた。

「……ふざけるなよ」

魔術師は隠者でなければならぬ。そんなこと、アカデミーの一年生でも、教えられなくても分かっている。

蝶々は姫川咲夜の周囲を飛び回り、気を熟するのを待って一斉に放たれた。蝶は尾行者の位置に優雅に、かつ高速に飛来する。

命中、そして爆殺。

尾行者の気配が消失し、一枚の紙切れがアスファルトに落下した。式神である。修験者や陰陽師が好んで使う、妖魔使役の魔術だ。

しかし、これで色々と合点が行った。

姫川咲夜は魔術師であり、さらに、姫川咲夜は何者かに命を狙われている。

悠斗は両目を見開いた。

死角で気配を消して隠れていた悠斗を、姫川咲夜が無感動な瞳で眺めていた。

十

「色々と聞きたいことがあったんだが……」

悠斗は念のために持ち歩いていた小刀を抜いた。素肌ばジリジリと焼け付くように痺れている。彼女の魔力が空気を焼いているのだ。

「お前、もう喰われているだろ？」

小刀を向けた瞬間。

『黒炎壱式、夜燕』

姫川咲夜の殺気が形を持ち、悠斗に襲いかかった。

それは漆黒の弾丸。空気を裂き、灼熱の烈風と化した刃だった。

「ッ！ 『斬撃、闇の剣！』」

咄嗟に迎撃の魔術を放つ。同色の斬撃が、飛燕と衝突して相殺。

相殺、仕切れなかった。

「っ、なんだと！」

刃と刃が衝突し、勝ち残ったのは咲夜の魔術だった。

……立ち止まるな、動き続ける！

『爆ぜよ、破碎の力！』

悠斗はバックステップと同時に物体破壊の魔術、その衝撃波を利用して大空に飛び上がる。ズボンが破け、両足の臍が悲鳴を上げる。悠斗は歯を食い縛って激痛に耐え、宙返りして姫川咲夜の背後を奪った。

護衛対象に襲われるとは、まったくの予想外だ。しかも、相手はこちらを敵だと誤解している訳ではない。ただ、あの式神でスイッチが入ってしまったのだ。悠斗が居合わせてなければ、ここで姫川咲夜は殺戮兵器に変貌していた……と言うより、リアルタイムで兵器になっているのだが。

一つ、分かったことがある。

あの式神は、姫川咲夜を暴走させるために放たれた訳だ。

こんな状態で学校生活が送れるとは思えなかった。

「一つ聞いておくれが、まだ完全に喰われた訳ではないんだな？」
返事は期待していない。だが、悠斗には咲夜が頷いたように思えた。

……錯覚だ。どうせ、意識は失われている。今、咲夜を突き動かしているのは信仰を踏みにじられた神の人間への憎悪だけだ。

『黒炎式式、黒死蝶』

大量の蝶々が悠斗を取り囲んだ。

「火之迦具土神

ホノカグツチノカミ

お前は相手を見誤った」

悠斗は小刀を捨てた。

今、ここに神の力を借り受けよう。

『斬斬斬、ダークブリンガー』

黒色の軌跡が、蝶々の大群を通り抜けた。

すべての蝶が、音も光もなく消え失せた。

『黒炎参式、闇朱雀』

黒羽の凶鳥が羽ばたき、身体を弓なりに引き絞った。

矢のように放たれた凶鳥が、金色に輝く嘴を心の臍目掛けて襲いかかる。

『防防防、ダークリフレクター』

三重に重ね合わされた障壁が、その一撃を防ぎ切る。

『ダーク・ケルベロス三重詠唱』、朽葉悠斗。

それは、紛い物の魔法だった。

27：墮ちる黒炎

雲一つ見当たらない快晴。清々しい青空だった。

「何を見ているんですか？」

立花健一郎は話しかける。さほど興味もないことを、会話を始めるために。

「……何も」

朽葉海斗は辞職した教員が使っていた研究棟の一室を間借りしていた。

研究棟の屋上で、刀を片手に空を見上げている。学生たちにも干渉せず、これと言ったこともしていないようだった。魔術を知っている者なら、心を奪われる物が沢山あるはずなのに。

海斗は　ただ、魔石を奪う相手を。

「しかし、敵は見ていた」

　　適当に殺しているだけだった。

　　辺りは四肢を切断された死体、肢体、屍体。量産されたバラバラ死体は、その数を推し量ることさえ難しい。一体何人殺されたのか、本人にさえ分からないようだった。

「……何をしにきた？　俺の仕事ぶりでも笑いにきたのか？」

　　袋詰めにした血液がぶちまけられ、腐臭が散乱している。

　　ここは青空を見詰めながら、思索に耽るような場所ではない。

「まさか……」

　　健一郎は喉元まで昇ってきた液体を、何とか押し戻した。

「真面目に働いているようで何よりです。では、失礼しますよ」

　　かつての知り合いでも、これほど慈悲もなく人を殺しはしない。この殺人には、何も込められていない。憎悪、嫌悪、懊惱、煩悶、哀惜、憤怒、義憤、殺意さえも　すべてが虚構と虚無に彩られていた。

　　こんな場所で空気を吸っていけば、ものの数分で気が狂う。中東

の戦場を経験したソルジャーでも、吐き気を覚えるはずだ。たかが学生には、厳しすぎる。

階段を下りる健一郎に、二人の少女が立ち塞がった。

「やっぱ、アンタでも無理か……」

支倉沙希と中島幽香である。

「大丈夫？」と無表情に訊ねる茶髪の少女に、健一郎は苦笑を返した。

「心配してくれてありがとうございます、中島先輩」

「心配してない。社交辞令」

「……そうですか」

にべもない返答に、健一郎はさらに苦笑を深くした。これが悠斗なら、血相を変えているだろうからだ。

「で、何かあつたんですか？」

「うん、それがね……」

沙希は眉を曇らせた。それで、大体のことは察せられた。

「『悠斗君の離反は事実なのか？』……ですか？」

「知ってるみたいね。と言っても、今はアンタが生徒会長だから不思議なことはないか……」

「支倉先輩か中島先輩が戻ってきてくれるなら、今すぐにも生徒会長の肩書きを返上しますけどね」

健一郎の冗談じみた言葉に、沙希は申し訳なさそうに微笑んだ。

「今さら戻ってきてても、守るべき存在も理想も残ってないわよ。私は今の自由奔放な生活が気に入ってるの。だから、ゴメンね」

「……答える必要もない」

「それに、そろそろアカデミーから手を引こうと思ってるから。いつまでも腰を落착着けていると、抜け出せなくなりそうだから」

「……私も」

「そう答えると思ってましたよ。まあ、今さらですからね」

健一郎は嘆息した。この二人が今さら生徒会長なんて肩書きを欲するとは思っていなかった。それどころか、今の生徒会は生徒たち

に何とも思われていないし、川崎美野里一人に掌握されている。

「しかし、これでアカデミーは僕と克己、クロード君だけですか。

川崎先生が頼りにしているのは上の階にいる殺戮者だけですしね」

「ってことは、やっぱり悠斗は……」

「ええ、離反したらしいですね。と言っても、僕も川崎先生から聞いただけです」

「なら、多分事実みたいね。私の情報は裏社会に通じた人間から手に入れたものだから」

二つの側面から手に入れた情報を重ね合わせ、合致すれば、その情報の信用度はかなり高い。健一郎は美野里の言葉を疑ってはいなかったが、やはり消沈せずにはいらなかった。

「しかし、朽葉海斗がいるので戦力低下にはなりませんからね」

悠斗にとってはこれで良かったのかもしれないが……。

溜息を吐く健一郎を、幽香が不思議なものを見るように眺めていた。

「……分からない？」

首を傾げる健一郎に、詰まらなさそうに言い放つ。

「朽葉海斗は殺戮者かもしれない。でも、悠斗は虐殺者だよ」

幽香は踵を返し、階段を降りる。

トントンと靴音が反響する中で、健一郎の耳に一つの言葉が残った。

「健一郎はやっぱり馬鹿。あの男と悠斗を比べる？ 普通に戦力低下だよ。言う必要がないと思ってたけど、本気になった悠斗は次元が違う」

でも、残念。悠斗は相手を殺すときにしか本気にならないから。

敵陣に切り込んだ飛車が龍王に成った。

最初の蝶を魔術『闇の剣』で相殺する。五体の蝶が飛び回り、四方と上空を制圧せんと動き出す。その発端を断ち切るように『闇の矢』が展開した。

魔法は、防ぎ切れない場合のみ使用する。

だが、すべてを防ぎ切るのは難しい。姫川咲夜　いや、火之迦具土は不完全な状態であれど強敵だった。

『黒炎肆式、影麒麟』

『断断断、ダークハルバード』

影絵のごとく出現した燃え盛る神獣を、大地を断つ巨大な斬撃が両断する。

咲夜にはいかなる表情も浮かんでいない。だが、たしかに相手は焦っている。

『黒炎弐式、黒死蝶』

『突貫、闇の槍』

展開しようとする蝶々の群れに、鋭い一閃が叩き込まれた。

このとき、悠斗はすでにタイミングを掴んでいた。蝶が展開し切る前に叩けば、誘爆して一斉に潰すことが可能なのだと。

爆発で砂煙が巻き起こり、視界が遮られる。

『黒炎壹式、夜』

『爆ぜよ、破碎の力』

視界を遮り、高速移動で背後を取る。悠斗の常套句だった。

咲夜の延髄に強烈な蹴りが炸裂し、身体を捻り着地する。

「二十八手、王手」

糸の切れた人形のように、咲夜の身体が脱力する。地面に転がる直前、悠斗はその身体を抱きとめた。

「……軽いな」

それに、随分と熱い。額に触れてみると、かなりの熱があるよう

だった。

……それは俺も同じか。

意識を奪いにくる神から、懸命に抵抗していたのだ。

「それよりも」

とりあえず、場所を変えるべきだ。

ここは人目が付く。今まで誰かに見付かっていないことがすでに奇跡だ。田舎とはいえ通学路、あまり長居したい場所ではない。

「早速、私の助けが必要なようですね」

「ああ、そうだな。すまな……い……」

悠斗は義手の男が車を停めたのを見ると、急激に落下する意識を放棄した。

レンタカーが最低限の舗装をされた悪路を進んでいく。

燃え盛る夕日と田園風景。バックミュージックはラジオから流れ
てくるキンクスの一曲である。煙草の煙が運転席側で開けられたウ
インドウから逃げていく。

姫川咲夜は自動車の振動で目を覚ました。火照る身体を起こし、
周囲を見回す。

運転席に座っている男は、咲夜のことには気付いても視線を動かさ
なかった。落ち窪んだ眼窩と狂気を湛えた口元から放たれる殺気が
尋常ではない男だ。こちらに無関心なのは幸いだった。

助手席で寝息を立てているのは、咲夜と同年代の少年だった。
伸ばした前髪が目元を覆っている。凜々しい少年である。こちら
も陰りのある顔をしているが、寝顔はあどけない子どものようにも
見えた。

しかし、どうして自分はこんな場所にいるのだろう。

たしか、帰宅途中だったはずだ。いつものように、退屈な学校に
行き、退屈な日常を消化する。それが、咲夜の日常である。普通に
帰宅し、一人だけの夕食を済ませるはずなのだ。

……またか。

また意識を失っていたのか。

「……起きましたか？」

運転席の男が声をかけた。咲夜は弾かれたように男に目を向ける。
「時間にして二十分。貴方にしては珍しく憔悴していますね」

「……うるさい」

どうやら、咲夜に声をかけた訳ではないらしい。

助手席の少年は両目を擦ると、まだ疲れの残る顔で咲夜を振り返
った。

「俺だつて火之迦具土の巫女とやり合えば疲労するさ」

男は肩をすくめ、運転に戻った。

少年は男に舌打ちを送ると、両目を閉じた。

「……随分と落ち着いたものだな、姫川咲夜」

「ええ、そうかもしれない。良くあることですので」

実際、意識を失うことは良くあった。学校にいるときではなく、帰宅中に意識を失い、気付いたら家に到着している。最近はそのことばかりなので、驚くほどのことでもない。

とは言え、見知らぬ者たちに車内に押し込まれていたのは初めてだが。

「覚えていないようだな」

少年は瞑目しながら話し始める。

「なら言っておく。俺とお前は殺し合い、お前は敗北した。今回はたまたま死人はいないが、前回のことは知らない。お前が誰かを殺していたとしても、あまり興味はないな」

「……貴方は」

「殺人の善悪については、どこかの思想家か宗教家にも語ってやれ」

「いえ……」

咲夜は小さく息を吸った。

「貴方は、優しいのですね」

「……まさか」

少年は一瞬だけ息を呑み、咲夜を馬鹿にするように嘲笑した。

だが、咲夜は何とも思わなかった。『興味がない』とは一見突き放すような言葉だが、その真意は咲夜が人殺しであっても許容すると言つことである。それに、今の反応。あれは、自分を悪役にすることに慣れているようだった。

「いえ、貴方は優しい人ですよ」

だから、咲夜は安心した。多分、この人に任せていれば良いのではないか。

「……俺が教えられることはあまりない。聞きたいことも、もうどうでも良くなった。勝手に学生生活を送るなりしてくれ」

「そうですか」

「でも、一つだけ」

少年は頭を窓の外に向けた。

「俺は朽葉悠斗。どんな運命の悪戯か、姫川咲美にお前のことを守ってくれって頼まれた、ただのしがない魔術師だ」

「お姉ちゃんのことを知っていますか!？」

咲夜は声を荒げた。流石に今の言葉は聞き逃せなかった。

朽葉悠斗と名乗った少年は目を開ける。

その瞬間、男が車に急ブレーキをかけて停車させた。

「どうやら、先客のようですね」

「敵か？」

男と悠斗がドアを開け、車外に躍り出た。

十

暗闇を切り裂く真紅のレーザーには見覚えがあった。

悠斗は縁側から転がり出る少女を抱きとめる。全身傷だらけだが、致命傷は見当たらなかった。

「……悠斗……遅い」

「何が起こった？」

緋芽は無言で土間を指差した。闇夜の慣れない両目を凝らすと、抜き身の真剣を携えた女性がこちらを嘗め回すように見ていた。

狂気が溢れ出した瞳である。口元は耳まで裂け、伸びきった犬歯が下あごまで垂れている。長い舌から唾液が零れ落ち、木製の床が蒸気を上げた。

「……あれは、燃えているのか？」

女性の周囲の空気が陽炎のように揺らめいている。

「お前の考えている通り、あれは火之迦具土神だ」
ホノカゲツチノカミ

緋芽の声が、遠くから聞こえていた。

穢れた神に完全に呑み込まれた存在。

今の消耗した悠斗に、勝ち目はない。

「しかも、あの刀は」

「火之迦具土の力に良く馴染んだ刀だ。斬った物を焼く性質を持っているようだ。おかげで出血量は大したことはないのだが……」

緋芽は苦々しそうに溜息を吐くと、悠斗から離れた。悠斗も頷き、

二人は距離を取る。可燃物の多い室内ではこちらが不利だ。

「ここに居ましたか」

草壁が縁側から現れ、女性の姿を見て眉をひそめた。

「落ちて……いや、穢れていますね。しかも手遅れになっている」

しかし、彼女は何者なのだろう。

予想は出来る。選択肢は少ない。次女が死んでいるのは間違いないし、三女は生存している。すると、母が長女と言うことになる。

「厄介な神社ですね」

草壁の言葉に、緋芽が頷いた。

「ああ、まったく。神の末席が手向かうにとしては、相手が悪すぎる」

火之迦具土

伊邪那岐と伊邪那美の神生みによって誕生し、母

を殺して父に殺された神。この神を斬った十拳剣でもあれば、楽なのだろうが。

悠斗は緋芽と目配せした。

『刺突、闇の矢』

『哀、黒龍』

二人の魔術が、女性に降り注いだ。

おそらく、これでは通じない。だが、時間稼ぎにはなる。悠斗と緋芽は全力で後転し、走り出した。

女性は濁流と槍を”片手”で薙ぎ払うと、小さく笑った。

「……………ケハッ」

穢れた神の左手が、緋芽の背中に向けられる。

「緋芽！」

悠斗は声を張り上げて叫んだ。自分も草壁も、間に合わない。どう考えても、これは絶望的すぎる。何より今まで己の窮地を救ってきた頭脳が、未来を先読みしてしまう。

明確なビジョン。緋芽の背中を一万度を超えた灼熱が焼き払い、彼女は跡形もなく蒸発する。

「……………僕のことを、忘れないで欲しいな」

その災厄の主砲が唐突に、爆発した。

奥の間から、仙石和希が姿を現した。到底無事とは言えない姿である。左腕の肘から先を失っている。その断面は焼き焦げていた。想像を絶する痛みが彼に襲いかかったことだろう。

「よくも、僕の左腕を殺してくれたね。まったく、最近の神様は手癖が悪い。下々の人間のことも考えてくれよ。救いなんて馬鹿馬鹿しく感じるじゃないか。まるで神様は人間に恨まれるために存在しているようだよ」

和希は憔悴した顔で、壁に肩を預けている。

「もうね、限界なんだよ。片腕を斬られている間にさ、この家中に爆弾を仕掛けた訳。だからさ、朽葉悠斗。全部、ぶっ壊しちゃうよ」

「……………出世払いだ」

「……………左腕代で勘弁してくれ」

「分かった、それでチャラだ。だから死ぬな」

「ははっ、優しいな。唯一の逃げ場所を僕が壊すんだぜ？ それを無料だなんて、アンタは優しすぎるな」

「俺は優しくなんか……………！」

「仙石君、私は貴方のことを誇りに思います。ですが、早まらないで欲しい。貴方の命はここで落とすべきものではありません。それほどの価値が、貴方にはある」

「いやあ、草壁さんにそう言って貰えると本望ですよ」

「仙石君！」

二人の悲痛な声は、最後まで届かない。

「僕は『インヒシブル・ランドメイン不視爆殺』！ 草壁涼二の忠臣だ！」

和希は清々しい顔でゆっくりと頷き、両手を広げて天空を見上げた。そこには天井しか見えないはずなのに、まるで楽園でも見ているようだった。

「Good bye , My dirty world じゃあな、
僕の腐った世界」

「……あ」

目の前の、たかが数千万しか価値がない家が爆発する。

文字通り、崩壊する。材木が飛び散り、破片が大地に突き刺さる。

「……ああ」

しかし、死体は残らない。どこを探しても見当たらない。

ただ一人、腐った神が嗤っている。こちらを見て、嗤っている。

「ああああああああ っ！」

また、死んだ。

また、誰かが死んだ。

また、自分の所為で。

また、誰かが死んだ。

また、死んだ。

これで何人目だ？

もう、数え切れない。

もう、良いだろう？

もう、十分頑張った。

もう、疲れただろう？

もう、我慢するなよ。

後は、我に任せて休め。

汝が敵は、我が虐殺する。

燃え盛る建物の残骸を靴底が踏みにじる。静けさの中、二つの穢れた神は互いに仕掛ける機先を窺っていた。

「……………キハツ」

火之迦具土が哄笑を漏らす。その水面下で、いかなる感情の動きがあつたのか、この場にいる誰にも分からなかった。純粹な狂気かもしれないし、もしかすると恐怖していたのかもかもしれない。

「……………ふむ」

悠斗は両の手を見下ろした。

「実に三月ぶりの現界か。我が宿主の強固な精神にはお手上げだな。しかし、手元に刀がないとは、実に悲しいことである」

悠斗　いや、悠斗だった”モノ”が不機嫌そうに呟いた。それは、存在自体が邪悪な、化物という言葉すら生易しい異形。邪神と呼ぶに相応しい悪夢だった。

邪神は火神の持つ刀に気付き、大きく頷いた。

「……………なるほど。弟神の業物か。その刀、我が振るうに不足なしと見た」

それは、朽葉悠斗には相応しくない嘲笑だった。口元を歪めて、徹底的に敵を嘲笑う不遜の侮辱である。笑顔というには、次元が違いすぎた。

「ゆ、悠斗……………?」

啞然と様子を見ていた緋芽が、喉元から擦れた声を絞り出す。

振り返った邪神は「……………ふむ」と顎に手を置いて思案する。

「どうして大照津姫がここにいるのだ? ああ、そうか。たしかに我が宿主は神武の小倅と似たところがある。貴様は確か、あの人心を惹き付け大和を統一した愚帝に思慕していたのだったな」

「な　っ!　わ、吾には緋芽という名がある!　それに、神武のことなど、何とも思っておらん!」

「ふむ、なんと甘美な悲鳴かな」

邪神は嘲笑し、火神を蹴り飛ばした。蹴り飛ばされた火神は咄嗟に火の玉を呼び出し、凶悪な狩人に撃ち放つ。

しかし、それも届かない。

『死守せよ、嫉妬レヴィアタンの王』

周囲に出現した、巨大な鱗の壁が火の玉を防ぎ切る。

邪神は退屈そうに、溜息を吐いた。

「詰まらぬ。これが火之迦具土か。これが、我が弟か」

その手が、怯える神に向けられた。

「せめてもの慈悲だ。御荒れ、滅びよ」

右手の剣印が、神聖なる十字を切った。

『断罪せよ、憤怒サタトゥスの王』

火之迦具土の身体が、一瞬、ビクリと痙攣する。その身体に、十字の傷跡が刻み込まれ、黒色の血液が飛び散った。

十字が交わる位置が通常とは異なる逆十字アンチクロスだ。

「至極残念だ。火之迦具土とは言えども、この程度の器では完全な姿で現代に現界するのは無理であるようだ。我が主ほどの素質はないようだ」

邪神は緋芽に振り返った。

「此の度の宴、些か盛上りに欠ける。して、先ほどから並々ならぬ眼力で我を見るのは、何故だ？」

「なに……。ただ、約束したのでな」

緋芽が怒りを込め、火之迦具土を一瞬で滅ぼした朽葉悠斗に立ちはだかった。

「加勢は必要ですか？」

「いらん。貴様では、時間稼ぎにもならぬわ」

予想通りと言うべきか、草壁は何も言わず引き下がった。

緋芽は両手に魔力を集め、臨戦態勢に入る。

「分からぬ、分からぬな。どうして逃げぬ。先の戦、十分逃げる時間があったはず。立ち向かわぬならその命までは取らぬと言うのに」「分からなくても構わない。むしろ分かるな。吾は悠斗と約束しただけだ」

軸足を捻り、相手との歩幅を推測する。

およそ、二十五歩。緋芽が接近するなら、最低でも五秒は必要になるだろう。だが、今の悠斗ならその時間は限りなく無に近い。

「伽藍の乙姫、大照津姫。ならば、我は破滅と絶望を以て迎撃しよう。我は流浪の王、百桁の神族が束になっても葬れぬ存在である」

「能書きを垂れるな。さつさと始めろ」

『跳躍せよ、色欲の王』
アスモデウス

悠斗が虚空に消滅し、一瞬後、緋芽の背後に出現する。

しかし、緋芽はそれを予想していた。

『努、白龍』

緋芽を周囲に白刃が展開する。四方を入念に多い尽くした刃は、突然現れた悠斗の全身を突き刺した。

「まだだっ！」「楽、赤竜」！

追撃の火焰が、浮世の肉体を焼き尽くす。

しかし。

『拒絶せよ、怠惰の王』
ベルフェゴール

邪神の周囲を包囲していた火炎が、またたく間に勢いを失う。

「なっ、これは！」

「簡単なことよ。空間に存在する魔力を喰らっただけだ」

この時、すでに悠斗の全身に帯びていた傷が癒え始めていた。

神に死という概念はない。しかし、心臓を貫かれたり首を落とされればただでは済まない。すなわち、存在の消滅である。

「まだだ！」

緋芽は両手を広げ、魔法を発動した。

五色の光束が収束し、五本の光線と化して放たれる。

『死守せよ、嫉妬の王』

『喜、青龍！』

光線が鱗壁に阻まれていた隙に、地中から植物の蔦が出現し、茨の棘が悠斗の両足を喰い千切りながら拘束する。

邪神は両足を見下ろし、逃れるための魔術を発動した。

『跳躍せよ、色欲の王』

『楽、赤龍！』

緋芽は予測していた。拘束から逃れれば、すぐさま反撃に転じるためにもの近くに現れるだろうと。

しかし、邪神も予測していたのだ。

『拒絶せよ、怠惰の王』

緋芽が放った火は、たちまち火勢が殺がれていく。

『怨、黄龍！』

『咀嚼せよ、暴食の王』

地中から突き出す石柱さえも、片手で触れられただけで消滅する。

『哀、黒龍！』

『叛乱せよ、貪欲の王』

押し寄せる大量の水の支配権を奪われ、逆に緋芽に襲いかかる。

緋芽は五色の光線をすべて土属性の黄色に変え、土克水で相殺した。

「隙だらけだ。『断罪せよ、憤怒の王』」

そして、邪神は逆十字を 緋芽に振り下ろし……。

ああ、これで終わりか。

すまない、悠斗。吾は約束を……果たせそうに……。

「なにを諦めているんですか、貴女は！」

横から割って入った草壁が、遠距離から左腕を振り抜いた。

鉛色が赤熱し、そこから放たれた爆炎が放たれる十字架を焼き滅ぼす。

「分からぬ、分からぬな。どうして我に立ちはだかる」

「大したことではありませんよ。ただ、ここで仙石君が命を落としました。これ以上、私の前で誰かが死んで欲しくないだけです。それに、悠斗君を絶望させてしまった責任は、家を空けてしまった私にもあるようですし」

「それは貴方だけではありません」

緋芽だけではなく草壁、邪神が同時に振り返る。

そこにいたのは車内で力尽きていたはずの姫川咲夜だった。

「今の彼が、あの人ではないことは私にも分かります。そして、その責任の一端を私の姉が担っていることも。私には、責任を負う義務があります」

若干疲れた顔で、しかし毅然と立ち向かう。

邪神は苛立ち混じりに吐き捨てた。

「……後悔しろ」

ここにまた、二人の穢れた神が対峙した。

30：災厄の魔剣

三人に囲まれてもなお、孤独なる神は余裕のある立ち振る舞いで一同を圧倒していた。上下左右、四方八方、どこにも隙が見付からないのである。しかも、迂闊に背を向けた瞬間、葬られる気がするのだ。

最初に攻撃したのは一番未熟な咲夜だった。

「行きますっ！ 『黒炎壺式、夜燕』」

漆黒の弾丸が、邪神に放たれる。咲夜の形相は決死を通り越して悲壮感さえ漂っていた。悠斗がこうなってしまったことが、相当辛いようである。

先に仕掛けられなかった緋芽と草薙は己を恥じた。

「まったく……。これは、私らしくないですね」

草壁は自嘲して、鋼鉄の左腕を振り抜いた。

左の魔剣『スルトの魔剣』レウァアテインが、遠距離から爆風を発生させる。疾風と灼熱の巨塊が咆哮を上げて悠斗に襲いかかる。

邪神は二方向からの攻撃に、左右の目を走らせた。その背中に五色の光線が肉薄する。光の速さ、299,792,458 m/sで突き刺さる光線は、視認した瞬間に直撃する。すなわち、腕や目線などを読み取って攻撃の方向を予測できなければ喰らってしまうのである。

「吾も続く！ 一気に畳みかけるぞ！」

邪神は背中の傷を即座に修復しながら、迫りくる二つの攻撃を迎撃する。

『死守せよ、嫉妬の王』レウァアタン

霧散させないところから、余裕が失せたことが分かった。緋芽は草壁に目配せする。以心伝心とは言わないが、意思是伝わったのか草壁は白兵戦に転じた。

「ここで一つ、私の狂言に付き合って貰いますよ」

『跳躍せよ、色欲の』

「逃がしません」

「ッ！ おのれ！」

草壁の左の剣が、詠唱する暇を与えない。

「現代において、将棋の棋士ほど不幸なものはないそうです。時代が戦国の世なら、その頭脳を生かして天下さえ左右できたはずなのに、毎日毎日退屈な模擬戦ばかりさせられる。仮想の戦場で名人という仮初めの最強を奪い合っているのですよ」

朽葉悠斗の頭脳こそ、現代の戦場で生かされるために与えられたものだろう。彼が魔術の世界を知らなければ、その頭脳はいつまでも腐っていたはずだ。だからこそ、活躍の場を与えられた頭脳は輝かしい。

その輝きを奪っているのが、目の前の存在である。

「知らぬ！ そのような戯言、聞く耳は持たぬ！」

左の剣が振り下ろされる。直感的に危機を覚えた邪神は大きく後退して回避しようとした。

そこを、咲夜の魔術が追撃する。

『黒炎弐式、黒死蝶』

数匹の蝶々が邪神の身体に触れた瞬間、連鎖的に爆発した。

「戯言を弄していたのは貴方の方ですよ。朽葉悠斗はずっと、貴方のことを恐れていました。なのに、逃げれば命までは取らないですか？ そして、現在貴方は私たちのことを殺そうとしている。言行一致していないのですよ」

草壁が鋭く踏み込み、左腕の魔剣、『テイルフィンゲアールヴの魔剣』が放たれる。

その左腕は触れた物質を零下273.15度まで低下させる性質がある。

邪神は冷徹な表情を怒りに震わせ、高々と叫んだ。

「何たる恥辱！ 何たる不遜！ この上、うぬらごときに我が秘法を見せねばならぬのか！」

瞬間、世界が裏返った。

空間が崩壊し、視界に亀裂が入る。天地落雷、大空から稲妻が降り注ぎ、大地が隆起し溶岩が噴出した。そして、邪神の目の前に、巨大な亀裂が生じた。

邪神は空間の亀裂に片腕を突っ込み、おもむろに引き抜いた。現れたのは禍々しい剣である。両刃の直刀で、西洋剣のようだった。

だが、決定的に違うのは色合いである。血塗れた真紅の西洋剣で、鈍い光沢を放っている。触れれば斬れそうという次元ではなく、触れれば存在ごと否定されそうな、禍々しい剣だった。

「あれ……は……」

「知っているのですか？」

喉からあえぎ声を出した緋芽に、草壁が問いかける。

「あれは……越王勾践が作らせた、八振の剣の一つ。しかし、だが……なぜ、ここに滅魂が……」

「我が秘剣『滅魂 紅覇』。その効果の恐るべきは、触れた者の魂を消滅させるところ。斬られれば、それが致命傷ではなくとも死に至る」

邪神は剣を青眼に構えた。

三人は同時に後退した。

「そして、我が魔法は『刃桜繚乱』」

圧倒される。ただの剣一つを見せられただけなのに。

さらにこの上、魔法が出てくるのである。

邪神は歩くような速さで草壁に踏み込んだ。鋭さが足りなかったので、咄嗟にどうすれば良いのか草壁は判断に迷わされる。防御のために右腕の義手を持ち上げると同時、真紅の魔剣が斬りつけられた。

鋼鉄を切り裂き、肘の辺りまで刃が通り抜ける。

切れ味に驚くきながら、しかし、それだけではないことに草壁は肌があわ立っていた。手首から肘までの部分がズタズタに切り刻まれているのだ。

……これが生身なら死んでいた。

「っ、逃げろ！」

緋芽は無為の内に、叫んでいた。こんな化物には敵わない。一度でも斬られれば、そこで終わりだなんて、これ以上ない八百長試合だ。

「緋芽さん、危ない！」

悲鳴を上げた咲夜が見ていたのは、彼女に接近する真紅の刃だった。

いつの間に、空間跳躍の魔術を使ったのだろう。草壁を追撃せず、相手を斬りかえるなんて、完全にこちらの予想を裏切っている。まさか、このタイミングで緋芽に襲いかかるとは。

『黒炎肆式、影麒麟』

咄嗟に働いた咲夜の機転が、数秒だけ緋芽を救った。

漆黒の麒麟が、斬撃の被害者になる。その間に、緋芽は二十メートルの距離を稼ぐ。草壁が遠距離から左腕の砲撃を打ち放ち、邪神がそれを斬り払う。それでさらに二秒、時間が出来た。

これを、いつまで続ければ良いのだ。

先の見えない戦い。先にこちら側が絶望するのは明らかだった。

『黒炎参式、闇朱雀』

『怨、黄龍！』

二人の魔術。光を拒絶する凶鳥朱雀が羽ばたき、地響が起こって石柱が突き出した。上下からの挟撃。しかし、悠斗の姿をした怪物は、たった一つの魔術で戦局を玩ぶ。

『叛乱せよ、貪欲アマイモンの王』

朱雀が転進し、咲夜のところまで撤退する。もちろん、ただ戻ってきた訳ではない。主人を裏切り、手打ちにせんと凶鳥は襲いかかる。

緋芽のところにも、同様の現象が起こっていた。足元が隆起し、石柱が突き出して着物を裂いた。何とか回避できたのは、あの魔術を見るのが二度目だったからである。

「どうするのだ！ これでは万策尽きたと言っているようなものではないか！」

「事実、尽きてるでしょう。起死回生の一手があるなら、教えてもらいたいところですねえ！？」

緋芽と草壁の苛立ったやり取りを完全に無視した邪神は、剣を横に寝かせた。

見たところ『刃桜繚乱』は斬った空間の周囲をミキサーにかけるようなものなのだろう。しかし、効果範囲がイマイチ分からない。草壁の片腕を見るに、最低でも半径五十センチ以内で剣を振られた時点でゲームオーバーのようだった。『滅魂』の剣がなくとも、十分恐ろしい魔法である。

「おい、小娘！ 貴様の魔法はどうなっている！？」

「……支配権は、火之迦具土に握られているみたいです。人格を放棄するなら、何とかなるかもしれませんが」

「怪物同士を争わせて、で残った奴とまた戦えと？」

「……いえ、そんなつもりでは」

緋芽は舌打ちし、邪神と向き合った。そもそも、あの穢れた神は何者なのだろうか。古代中国の秘剣を使っていることから、日本神話の一角を担っていることすら怪しいのだが、もしかすると海外の神なのかもしれない。

どちらにせよ、絶対絶命だったが。

「でも、手がない訳ではありませんよ」

「……………本当か？」

唐突な咲夜の言に、緋芽は胡散臭げな顔をした。

魔術師としても魔法使いとしても究極に達していて、どんな傷でも自己治癒が働き、神話屈指の魔剣を所有している。これほどの神をそう簡単にどうにかできるなら、緋芽は神の名を返上しても良か

った。

「私も自信はありませんが、試してみる価値はあるかと……」

「なら、賭けてみるか」

「いえ、賭けるほどのものではありません」

咲夜は首を傾げる緋芽に微笑み、邪神と向き合った。

その整った唇から、祝詞のように言葉が紡がれる。

「古来より、怒れる神には生贄が捧げられました。天変地異を起こし民を困らせている神々を、ただの一人の人間が命を賭して説得することで、その矛を収めさせることができました。ただの人間と侮ることなかれ。私たちでも決意と覚悟次第で巨石に等しい神を動かせるのです」

「まさか お主は！」

咲夜は振り返らない。ただ、邪神を相手に微笑んでいるだけだ。

「ここで、私が貴方様に命を捧げればその矛を収めて頂けますか？」

「……………」

朽葉悠斗の表情が静かなる怒りから無表情に移行する。

考え込んでいるようだった。

「我を神と、生贄を捧げる価値のある神と申すのか？」

「……貴方は神としてさえも認められなかったのですね？」

「ああ。捨てられた流浪の神、蛭子とは我のことよ」

緋芽は活目した。火之迦具土のことを弟神と言っていたが、まさしくそれは真実だったのだ。神生みの最初に生まれ、島流しにされた神々を最も憎悪すべき病弱なる神である。

「我が出来損ないとされた理由に、生まれた瞬間から穢れていたことにある。それも当然、あの二人の親神は交合の仕方を間違ったのだ。正乗位で交わるべきところを、後ろから獣のように交わったのだ。当然、マトモな神などは生まれぬかな」

「哀れな。ならば、私が命を捧げましょう」

「意味のないこと。我はすでに邪神。今さら生贄の一人や二人では収まり切らぬ。百を殺し、千を殺し、万を殺す。それが我なのだ。」

それ以外のことなど、何一つ関心がない」

「でも、試してみる価値はないでしょうか？」

咲夜は両目を閉じた。その手には、最初の戦いで悠斗が使っていた小刀が握られている。切っ先が心臓に向けられ、なお咲夜は笑みを浮かべていた。

邪神が自害させるつもりもないとばかりに剣を振りかぶる。

緋芽が我を取り戻し、魔法を発動しようとした。

しかし、剣は振り下ろされ。

1万度の灼熱が、邪神を包囲した。

「また殺すの？」

元々色素が薄かった、茶色いセミロングの髪が爆風に揺れる。相変わらずの無表情。奥底では悲しんでいても、誰にも理解されない炎の少女。

中島幽香が朽葉悠斗を抱きしめた。

「瑠璃のときみたいに人間としての尊厳も与えずに殺すの？」

「……あ」

邪神が両手を振って、振り払おうとした。だが、幽香は離さない。

「また、悠斗の所為で誰かが死んじゃうんだよ？」

「……あ、……ああ」

段々と振り払う力が弱まっていく。

「何なら私から殺してみる？」

ビクリ、と悠斗の身体が痙攣した。

「……つ、まさか。冗談は休み休み言え」

「なっ、我が宿主！ まだ半月は寝ているはずであるっ！」

「黙れヒル野郎。いい加減、その喋り方はウザいんだよ」

奇妙な現象だった。

一つの口で、違った声が言い争いをしているのである。

緋芽は絶望していた目を輝かせた。

「悠斗！ まさか……本当に、悠斗なのか!？」

悠斗は苦笑した。それまでの、嫌味たらしい嘲笑とは異なる。

「人をお化けのように言うなよ。まあ、似たようなものか。それよりも」

「分からぬ、分からぬ!! 分からぬ分からぬ分からぬ!!! どうして貴様が目を覚ます!?! どうして余裕のある顔をする!?!」

まだ、身体の主導権の大半を我が握っているのだぞ」

「あ……そうみたいだな。手足が動かねえ」

最後の抵抗とばかりに喚き出した邪神に、悠斗は舌打ちして吐き捨てる。

「幽香、お前は黙って見てろよ。お前ほど手加減が下手な奴はいないからな。俺ごと滅ぼされたら洒落にならん」

「うん」

幽香は頷き、数歩後退した。

「おい、草壁。そのぶつ壊れた左腕はまだ使えるのか？」

「殴り合いは出来ませんが、絶対零度は作れるみたいですよ」

「なら緋芽、俺に黒龍を使え」

言われた瞬間、緋芽は無意識に身体が動いていた。

『哀、黒龍』

それほど自分が浮かれていたのかと、思う暇さえなかった。悠斗を攻撃することすら意識から離れていた。ただ、ひたすら歓喜していたのだ。

青く澄んだ水流が悠斗に襲いかかる。

『叛乱せよ、貪欲アマイモンの王』

「草壁、凍らせろ」

「了解しました」

一瞬で、高度な駆け引きが行われた。悠斗の周囲に触れる直前、水の支配権を奪う邪神の魔術が凍り漬けにされて不発に終わる。

「咲夜、参式を氷に撃て」

「はいっ！ 『黒炎参式、闇朱雀』」

漆黒の朱雀が氷壁を打ち砕く。粉々に碎かれ破片と化し、周囲に飛び散った。

「緋芽、魔法を頼む」

「ああっ、行くぞ！」

緋芽が両手を構え、五色の光線を打ち出した。氷が鏡面反射を起こし、光が幾筋にも分散する。そのすべてを防ぐことは、邪神でも難しかった。

「ぐっ、あああああああああ！！！」

「草壁、爆炎を放て。咲夜、影麒麟を突撃させる」

二人が指示に従い、氷の塊に火炎を同時に打ち込む。

氷が一瞬で蒸発し、水蒸気と化す。水が極度に熱量を持った物質と接触するとき、水蒸気爆発が発生する。衝撃波が周囲をなぎ払い、悠斗の身体を吹き飛ばした。全身が骨折。しかし神の力で治癒が始まる。

「お、おい！ 我が宿主！ 貴様は我ごと己自身を葬り去るつもりなのか！？」

「そのつもりなんだが、それがどうしたんだ？ まさか今頃、心中したくないと叫びだすのか？ 神ってのはそれほど情けない存在だったんだな」

悠斗の挑発する声に、悠斗自身が真っ青になる。

今までの善戦が、悠斗の戦略が加わっただけでこつも劣勢に返められたのである。心中するつもりでも、そうでなくても、このまま戦って勝てる相手ではないことは明白だった。

「わ、分かった！ 今回だけは私の敗北にしておく。だから、自殺しようとは思わないことだ！」

「おやおや、良いのか？ 折角死ねる機会なんだ。神ってのは不死身で不便だと思っていたんだが、俺の勘違いか？」

「黙れ、戯言を弄すな！ 我はもう寝る！ しかし良いか！？ 貴

様がまた落ちそうになっていけば、その身体を貰い受けるからな！」
悠斗は「ああ、勝手にしろ」と呟いた。もう、身体は自由に動いた。

しかし、全身の骨折が完全には癒えていない。

「悠斗！」

「悠斗さん！」

「悠斗悠斗悠斗悠斗、ああ、悠斗だ！」

「たしかに悠斗さんなんですけど……」

「悠斗！ この馬鹿者めが！ どれだけ心配させれば気が済むのだ！」

駆け寄る二人に、皮肉っぽく笑い返した。それが、悠斗らしい笑みなのだ。

31：幽玄の空

時間にして五秒。
朽葉悠斗が周囲を見回し、状況を判断するために用いられた時間である。

周囲は七色のヴェールに包まれ、ぼんやりと発光している。幻想的な空間といえば聞こえが良いが、神経が訴えてくるのは宇宙空間の無重力間のようなもので、ひたすら気持ち悪い。

「よっ、久しぶり」

そんな異様な空間で、同年代の少年が虹色を背景に片手を上げていた。邪気一つないあどけない顔をしていて、これが年上なのだから人の年齢とは分からないものである。

「隆太、先輩ですか……」

元生徒会書記、滝川隆太。身長150センチメートル、NGワードは『小さい』と『童顔』。癖のある茶髪の、一つ年上の……魔法使い。

「ちよつと聖に頼んで、お前のところに案内して貰ったのさ。そう言えば、お前は初めてだったかな。聖の『エターナル・スカイ久遠の空』を見るのは」「ええ、そうですね」

悠斗は苦笑した。

革命以降、姿を暗ました思っていたら、また唐突に顔を出す。悠斗は未だにこの先輩のことが理解できない。その理不尽さは、むしろ心地良いものだった。

「しかしまあ、随分と暴れ回ったみたいだな。『滅魂』まで持ち出してくるとは、この俺様も予想外だ。そこまでする必要はなかったんだぜ？」

「え？ ちょ、先輩、今なんて……」

「だから、そこまでする必要はなかったんだ。所詮、誰も見ていない舞台だ。役者が本気を出すには、少々勿体なかった。ホント、ち

よつと実力をを見せてくれるだけで良かったんだよ」

開いた口が塞がらない悠斗に、滝川隆太は腰に手を当てて威常高に言い放つ。

……ああ、そうか。

本当の黒幕は、この人なのか。

「でもまあ、これでお前が倉渕祐作に匹敵する化物だって分かったし、それだけでも収穫だよな。川崎美野里はもう終わりって感じだし、後は校長の弥栄玄一をどうやって潰すかも考えておかないと……」

「先輩は……」

「お前ならすぐに思い付くんだろうな。俺らが何ヶ月もかけて悩んでいる解答を、たった数秒……いや、刹那の間に思い付いてしまう。つたく、これなら表世界の将棋打ちにでもなれたらるうに、因果な世界だぜ。それにしても……」

「何をするつもりなんです？」

「……」

滝川隆太の身体が硬直した。表情が掻き消え、薄ら寒い無表情に移り変わる。

……これが、先輩の本当の顔か。

「なあ、朽葉。お前、運命って信じるか？」

唐突に、何を言っているのだこの人は。悠斗は視線を鋭くする。

隆太は返事なんて期待していないとばかりに、一人で肩をすくめて話し出す。

「つまりだ、俺たちは神なんて害虫どもよりももっと大きな何者かに、ずっと監視され玩具にされているのではないか。そう思ったことはないか？ 何もかも都合が良すぎたり、何もかも都合が悪すぎたり、人生が80年だったり、人生が17年にも満たなかったり、大切な人が死んだり、大切な人が殺されたり、大切な人が自殺したり、大切な人が殺人鬼になっちまったり、大切な人がお化けになつて枕元に現れたり、大切な人が……」

それは狂気。無表情から紡がれる言葉は、この世に吐き捨てた呪いのようだ。

一体この人に何があったのか、それは悠斗には計り知れない。ただ、隆太は正常ではない狂気を帯びている。

つまりは異常。

これは、悠斗が知っている滝川隆太ではない。

無邪気な、童顔の少年ではない。

「大悟会長が死んで、聖が自殺しようとして、俺が殺人鬼になった。ああ、ただそれだけなんだよ。何も心配することはない。そう、心配することはないんだ。大丈夫、運命はまだ俺たちを見放してはいない。邪魔者をすべて消してしまえば、俺たちは平和になれるんだ！」

「平和、ですか……？」

悠斗も願っていたことだ。だが、この一ヶ月でそれが無用な高望みであることを思い知らされた。いつまで経っても、結局魔術を捨てない限りは解放されないのだ。いつまでも、牢獄の中に囚われたままなのである。

しかし、大悟会長が死んだのか……。あの、会長が。

革命以降、生徒会側で行方を暗ませたのは大泉大悟と滝川隆太の二人だった。聖先輩の動向は、沙希が掴んでいたはずだ。その報告を聞いたのは、もう二月も前になるのだが。

それに……。

「先輩は、聖先輩を抱いたんですね？」

「……ああ。お前は俺を軽蔑するだろうな。会長の彼女だったあの人を、俺は、無理矢理、物にした。もう、俺たちは壊れてしまっているんだ。なあ、朽葉あ。お前は最初から壊れていたけど、壊れるときは悲しかったか？」

隆太は泣きそうな顔をして、震える声を搾り出した。

かける言葉は見当たらない。ただ、分かっている。

「次に出会う時、そこが俺たちの終焉です」

「ああ、頼む。俺を殺してくれるのは朽葉、お前だけだ」
二人は視線を交わし、お互いに握手のために差し出した手を振り払って立ち去った。虹色の異空間が、鈍く輝いていた。

十

身体を起こす。脳髄に残る鈍痛は、眠気が残っていただけではないのだろう。聖先輩の精神干渉の魔法で、脳神経にハッキングされたのだ。ダメージが残らないはずがない。

「……はあ」

夢とは記憶に残らないものだが。

あれは一概にテレパシーの魔法とは言い切れないものがある。相手が睡眠時に限り、対象の精神だけを異空間に飛ばすのである。そこではどのような戦闘も許されず、ただ弁論のみの戦いを強いられる。

「俺が関わらなくても、知り合いが死んでいく。そんなものなんだな」

畳敷きの和室で、敷布団が並べられていた。

緋芽、咲夜、幽香との川の字である。いつの間にか意識を失って、こんな状態にされていたのだが。

「みんな死んでも、多分、俺だけは死ねないんだろうな……」

「……知ってたの？」

幽香が、ボソリと呟く。目的語を欠いた言葉は、彼女のことを良く知らない者にはまったく理解できないものだ。まるで異国語、とは大悟会長の言葉だったか。

その大悟会長が、死んだ。

「隆太先輩から、ちよつとな。聖先輩も、どうやら生きているらしい。ただ生きてるだけかもしれないが」

「……私は、死なないよ？ 悠斗が生きている限り」

「頼むよ。お前に死なれたら、今度こそ”墮ちる”」

内なる神に、身体の支配権を強奪されてしまう。

幽香は淡々と頷いた。それを確認してから、悠斗は立ち上がる。

どこに行く、などという質問はしない。幽香は肝心なこと以外、

何も喋らない。これが悠斗を尊重していると言えるのだろうか。すべてを放棄して、自分に押し付けているような気がしてならない。

幽香は、悠斗が壊されないためなら何でもする。

それだけは確実だ。

「50年生きたら、神様に感謝しよう。うん」

一人ごちると、戸板を空けて外に出た。靴下なしに靴を履き、建

物を外から眺めてみる。

木造の和風屋敷である。大きさは壊れた悠斗の屋敷のおよそ二倍

程度だろう。五十年前の、ちよつと裕福な一般家庭のようである。

姫川神社の……離れだった。

「守ってくれた……みたいですね」

そして、背後から現れるのは姫川咲美である。薄っすらとした陽

炎のような女性だった。有り体に言えば幽霊だ。

「姉から妹を守って頂いて、感謝します」

「結果的に、守ってしまったただけだがな。アンタの姉を殺したのは、

俺じゃないし。つーか、むしろ俺の方がアイツを害そうとしていた

だろうが」

「咲夜は、貴方に惹かれています」

「だから聞けよ、人の話を」

「これからも、あの子のことを守ってあげてくれませんか？」

悠斗は溜息を吐いた。

遠くから、足音がする。金属が擦れる音、義手の駆動音だ。どう

やら、壊された義手の修理に出ていたらしい。

「もう、時間だな」

そう呟くと、咲美は泣きそうな顔をした。

「あーっ！ 分かったよ、分かった分かった。だからそんな顔はするな。守ってやるさ、小娘の一人や二人」

「ありがとうございます。貴方は……優しい方ですね……」

咲美は最後に皮肉を吐いて消えていった。

悠斗は舌打ちし、境内の小石を蹴り飛ばす。

「冗談。スターリンが賢人だと言われた方が、まだ納得できるさ」
みんな、勘違いする。本当に優しい人間なら、今頃悠斗は朽葉の籠の中でガクガクと震えているだろう。内なる神を解放しないために、座敷牢のような場所で拘束されることを是としたはずだ。

「なあ、草壁。アンタは魔王になって、何をするつもりなんだ？」

「魔術師の虐殺を」

「戯言だな」

「ですね」

二人は呟き、縁石に腰を下ろす。会話はなかった。草壁が持ってきたコンビニの袋から、酒のつまみを取り出して時間を潰した。

……月ってのは、こんなに汚れていたんだな。

32：傀儡師

ゆらゆらと黒煙が立ち上っていた。姫川咲夜は黙々と魚を焼いている。その焼き加減が最悪で、もう見ていられなかったのだ。

「お前、料理したことないだろ」

「どうして分かったんですか？」

キョトン、と……目を瞬かせる咲夜。

こちらは早朝から異臭を嗅がされて慌てて飛び起きたと言つのに、暢気というか平和というか、とにかく変わった女だ。

「フーか、いきなり焼き魚とはハードルが高くないか？ 最初は卵からだろ」

「洋食ですか？ そちらの方が難しいと思うのですが……」

「卵だから洋食つてのはどうよ？」

悠斗は欠伸を堪えながら魚の残骸を処分して、冷蔵庫の中身を点検した。姫川神社の離れは、それほど損傷が多くないので調理器具の類は揃っている。材料も咲夜が買い込んだのだろう。三日分はある。

「カップ麺で十分だと思うんだけど……。まあ、仕方ないか。大人数でインスタント食品を食つのは、かなり不気味な光景になりそうだ」

「料理、できるんですか？」

「できないことはない ってレベルだが」

「……むう」

咲夜は頬を膨らませる。

悠斗はその間にフライパンにハムを落として卵を割り、目玉焼きを量産した。これと白米だけでは不十分だろう。サラダを用意するにしても、あと一品、何か欲しいところだ。

「大根でも煮込むか。時間がかかるんだよね……」

「悠斗さん、ずるいです！」

「は？ なんだよ？」

見ると、咲夜は涙目になっている。

「男の人が料理をするなんて、間違ってます！ 女の人が作ったご飯を、黙って食べていけば良いんです！ 私が焼いた魚が食べれないって言うんですか！」

「いや、そんな無茶苦茶な……」

あんな炭素の塊、どうやって口に入れると言うのか。

「それに、お前は家に帰らないで良いのか？」

一家全員が行方不明になって、それから咲夜がどうやって生活してきたのか、悠斗はまだ聞いていない。おそらく、親戚などに引き取られているのだろう。悠斗はそう考えていた。

今ならまだ間に合う。これ以上、悠斗と一緒にいるとその運命を引きずってしまいそうだった。だからこそ、このまま一緒にいるべきではない。いつそのこと、拒絶してしまえばどれだけ楽になれるだろう。

「私は……、帰りません」

「いや、だからな……」

突き放したかった。

「私はずっと、空っぽでした。あの事件で姫川咲夜は死んで、死体になって日々を浪費していました。その私を引っ張り上げたのが貴方です」

「俺は何もしてない」

「いいえ！」

だから、その意思の籠った瞳で見詰められるのが苦しかった。「同じ苦しみを共有した人。貴方なら私の空洞を埋めてくれる。そう思えるのです」

買いかぶりすぎだ。だが、悠斗は笑わずにはいられなかった。

どうしてこう、自分の回りには馬鹿正直なほど良い奴ばかりが集まってくるのか。

悠斗は大鍋に大根と人参、牛蒡と春菊を放り込んで、醤油と味醂

をぶちまけて、鍋に蓋をした。会話にも蓋をかけた。完成するまでもう一度、寝ることにしよう。そして、考えをまとめることにしよう。

「俺の許可なく死ぬな。それさえ守れるなら、後は好きにしろ……」
これで、また一つ、背負ってしまった。
また、死ねない理由が出来てしまった。

十

沿岸部のコンビナート、その一角に廃工場がある。かつては高度成長期の流れに乗って、鉄工業が大いに栄えた地域にある。残骸だ。今では麻薬の製造工場が乱立し、そのすべてを魔術カルテルの構成員たちが守っている。

麻薬取締警察、厚生省の麻薬捜査官、その何れも踏み込めない空間である。

その入り口に、百人の魔術師たちが清冽していた。全員が銀色に輝く西洋鎧を帯びている。両手で長大な槍を支え、密集した布陣を形成している。

魔法庁の正規兵（表向きの戦力）だった。

魔法を保護し、魔術による犯罪を防止する。本来はそのような平和的な業務を請け負っているが、すべての者が対話に応じることはない。中には全力で抵抗する者たちも存在する。

それらを殲滅する　聖なる騎士たちである。

「……愚かな」

聖騎士たちを、工場の屋根から見下ろしている者がいた。

銀メッシュの髪、白いシェードで両目を隠し、白コートを羽織っている。両手には白金の手甲ガントレットを装着し、底の厚い軍用ブーツを履いていた。ブーツは特注で、やはり白色にカラーリングされている。

倉淵祐作。

元国立魔術アカデミー生徒会執行部部长。
現在は魔術カルテルの幹部である。

「ねえ、愚かですよね？」

祐作は片手で携帯を保持していた。

「彼らにとって僕たちは悪なのだそうです。では、彼らが善なのでしょうか。いいえ、断じて否。善の反対が悪だなんて、短絡的な考え方はこの際です。捨て去りましょう」

屋根から飛び降りる。

騎士たちの視線が集まった。

「善〓悪なのです。彼らが善で、彼らが悪です。僕たちが悪で、僕たちが善なのです。善悪とはすべてを一まとめにしようという画期的なアイデアなのです。僕たちこそ、真の悪にして善なのです」

祐作は携帯をポケットに仕舞った。騎士たちの背後から、三人の戦士が現れる。いずれも祐作と同年代。二人が少年、一人が少女である。

祐作は右手を頭上に伸ばし、パチンと指を弾いた。

「幕を降ろせ、喜劇は終わった」

それが合図だった。膠着が壊れ、騎士たちが槍を構えて突撃する。精鋭たちの密集隊形ファランクスが、祐作に迫る。背後の三人は、全身を貫かれていた。

魔術的に強化された超重槍ホーリーランス。それはまさに必殺の武器。ひとたび貫かれれば、その傷から流れる血は止まらないという、魔法庁の切り札。『神殺槍ミストルテイン』である。重量からの立ち回りの難しさが難点だが、集団で攻撃の壁を形成するとき、それはいかなる魔法使いも制圧する最強の矛になる。

すべてが詭弁だ。

祐作は両の手を握り締め、空気を振り抜いた。

空気の弾丸が、五人の騎士を喰らい殺す。「魔法か！」と身構える騎士たちに、祐作は大声を上げて笑いたくなくなった。これのどこが魔法だ。鍛え抜かれた肉体から生み出される、自然現象の一つなのに。

武術には遠当てという技がある。先を見ずに鍛え続ければ、人間の身体はこれぐらいのことができる。魔法や魔術がなくとも、人間の身体を壊すのは容易いことなのである。

「ああ……。なんて脆いんだ」

槍で貫かれた三人の戦士たちが、ゆっくりと立ち上がった。

祐作の拳で粉碎された騎士たちが、ゆっくりと立ち上がった。

「さあ、もつと戦おう」

祐作は両手を鳴らし、騎士たちに突撃した。

この日、魔法庁の騎士たちが全滅。

そのすべてが倉渕祐作の私兵に加えられた。

『ネクロ・ファウスト
輪廻転生』、倉渕祐作。

その両腕は空気を打ち抜くためのものではなく。
人形を手に入れるためのものなのだ。

33：悠斗の北の方

某所空港、国際便が到着し、スーツケースを抱えた一人の男が現れた。

色白だがガタイの良い偉丈夫である。西洋人の特権ともいえる大柄な肉体は、かなり鍛え上げられているのかスーツの内側から熱気が上がっているように見えていた。溢れんばかりのエネルギーを蓄えている、そんな身体である。

「アレク・キリングゲート氏ですね」

「貴様は……」

アレクと呼ばれた男は、忌々しそうに舌打ちした。

相手の男は空港のタクシー乗り場で待ち伏せていた。明らかに、殺意を放っているのが分かった。殺しても殺しても害虫のように湧いてくる刺客である。

「名乗るほどの者ではありません、が」

「喋るな、この国の魔術カルテルの犬。俺は貴様の発言を許可した覚えなどない」

「……ビジネスの話をするつもりだったのですが」

「口を開けるな。貴様と同じ空気を吸っていると思うと反吐が出る。失せる、黄色い野良犬。貴様ごとき駄犬にビジネスの話など不可能だな。どうせ、武力で言い分を吞ませるつもりだったのだから」

「……いえ、気が変わりました。貴方を生かしておけば、私の面目が丸潰れになる」

「だから喋るな。息もするな」

アレクは小脇に抱えていたスーツケースを開いた。

その瞬間、刺客の男は真紅の光を垣間見た。ルビーのような輝石である。

「これで、空気を汚すことはなくなったな」

アレクはスーツケースを閉じると刺客の男の横を通り抜け、客待

ちしているタクシーに乗り込んだ。

「国立魔術アカデミー……いや、分からないか。運転手、地図はな
いか？」

喋るな、と言いたいのを抑えて訊ねた。

場所を指定し、アレクは身体を座席に沈み込ませた。長時間のフ
ライトで疲労していた上に、魔法を使わされたのだ。限界ではない
が、骨が折れた。

タクシーが走り出す。

残された男の額に、朱色の線が走った。輪切りにされた頭部が、
ズルリと滑って地面に落下した。

十

五月初旬、

姫川神社に滞在して、そろそろ二週間になる。

悠斗は「まだアカデミーには戻らない方が良い」という忠告で、
まったく身動きが取れなくなっていた。魔法庁の主戦力が壊滅した
という風聞もある。川崎美野里が神経を過敏にさせていても不思議
ではない。

と、思っていたのだが。

「草壁涼二は、あまり信用しないで」

悠斗にあてがわれた畳敷きの一室、中島幽香は二枚重ねの座布団
に腰を下ろしていた。緋芽や咲夜、草壁に聞かれたくない話をする
とき、幽香は夜中にこっそりこの部屋にやってくる。

「川崎美野里に密告があった。草壁涼二本人から」

「……だから、信用するなと？」

悠斗の声に陰が帯びる。

「悠斗が暴走していたときも、あまり積極的に戦ってなかった。ど

んな魔術も魔法も無効化できるのに、離れて攻撃していた」

「いくら草壁の魔法が無敵じみても刀で斬られたら死ぬからな。元々期待していなかったんだ。やる気なんてなかっただろうし、あれだけ働けば上出来だ」

幽香の進言に、納得できないことはない。だが、短絡的にすぎる。草壁の視点に立って考えれば、朽葉悠斗という戦力を簡単に手放したくないはずだ。悠斗が草壁だったら、悠斗の居場所を徹底的に排除するだろう。

それでも。

いや、だからこそと言うべきか。

悠斗と幽香は変則的とはいえ主従関係に近いものがある。主に害を為す者を、味方とする考え方は受け入れられないのだ。

「だがしかし、そこまで警戒しなければならぬ相手でもないだろう」

怪訝な顔をする幽香に「分からないか？」と続ける。

「草壁の最も厄介なところはどこだ？」

「あらゆる魔術魔法を無効化する　魔法、かな？」

幽香は半信半疑で呟き、ハッと両目を見張った。

「もう攻略したの？」

「……ダイテイー・サンクチュアリ『神域汚辱』か」

悠斗は万年床になっっている布団に潜り込み、両目を閉じた。

思い出されるのは最初の一戦だ。魔術が効かないので、刀で攻撃した。あれが間違っていたのだ。物理的な攻撃を加えようとしても、左腕の義手ですべてを防がれるのである。

海斗クラスの剣士でもなければ、接近戦は捨てるべきだ。

「……お前なら、五分以内に倒せるよ」

幽香は寝たふりをする背中を無言で見詰めていた。

翌朝のことである。

世間はゴールデンウィークに入ったが、悠斗たちにはすることがなく毎日をダラダラと過ごしていた。このまま何事も起こらず、平和にすごせたらどんなに良かったことだろう。

「悠斗、今日の朝餉は最悪だぞ」

「それ、咲夜が作ったんだけどな」

そう答えると、緋芽はギロリと咲夜を睨み、無言で箸を取った。

ボロボロに崩壊した魚と大根の煮付けや、殻が混入しているだし巻き卵である。マトモに食べられるのは悠斗が昨晚セットしておいた白米と、市販の納豆ぐらいだろう。

「それで草壁、アンタはどうするんだ？」

「そうですね……。今日は仙石君の墓参りでも行きますか」

草壁は茶碗のご飯を平らげ、お代わりを要求した。

咲夜の姉、姫川咲乃と仙石和希は姫川神社のすぐ近くに埋葬されている。神式なので戒名などはなく、本来なら名前に『命』を付けたものが神道的な戒名になるのだと言う。見た目は仏式と変わりないが、墓ではなく奥津城と言うらしい。とは言え、この辺りには墓石を建てて供養するような施設はないので、正式な作法で葬れなかった。

「悠斗はどうするんだ？」

緋芽に問われ、悠斗は困窮した。暇を持って余している、と答えるのも癪である。

苦々しく首を横に振ると、緋芽は声を上げて笑った。

「なんだ。お主も甲斐性のない男よのう。三人の女子に囲まれておきながら、どれにも手を付けておらぬとは」

「……当たり前だ。俺は盛りの付いた猿か」

「猿でも不能者よりはマシだぞ。ところで以前から思っていたのだが、悠斗の北の方は誰なのだ？」

北の方 たしか、正室のことだったか。

「……お前が俺のことをどう見ていたのか良く分かった」

「ふふつ、冗談じゃて」

意地悪く微笑む緋芽に、悠斗は肩を落として嘆息する。

そんな悠斗の様子を、声もなく咲夜がジッと見ていた。

「何だ？」

「いえ……、何なら私が北の方になってもと」

咲夜がすべてを言い切る前に、横目で咲夜を睨み付けながら幽香が口を挟んだ。

「悠斗、今晚も部屋に行くから」

「か、通い妻！？ ちょ、悠斗さん！ 話を聞かせて貰いますよ！」

幽香が刺々しい口調で釘を刺し、咲夜が珍しく声を裏返らせて詰問し、緋芽が愉快そうに口元に着物の袖を当てて笑う。草壁は他人事を決め込んでいる。針のむしる状態に立たされ、冷や汗が出てきた。

「ほう、お主も隅に置けないのう」

「お前、さつきと言ってることが正反対だからな」

とりあえず、絶対この状況を楽しんでやがる緋芽に矛先を向け、悠斗は逃げるように席を立った。そのときである。新聞屋もやってこないはずの姫川神社の戸板が叩かれたのは。

「客人か……」

「待ってください、逃げるんですか！」

声を荒げる咲夜を振り切って、早足で玄関先に向かう。

立て付けの悪い戸板を横に開くと。

「お前は」

アリス・キリングゲート。友人の妹である。

「すまないが、助けて欲しい」

金髪碧眼。小柄ながら、中々の美少女である。少し冷たいというか、クールな印象がある。そんな少女が、潤んだ瞳で悠斗を見上げているのである。

34：温泉に行こう

朽ち果てた廃墟のようだな。

アリス・キリングゲートは姫川神社の離れにある茶の間に案内され、まずそう言いやがった。客観的には同意なのだが、もう二週間も滞在しているから我が家のようなもので、それなりに愛着がある。「客人にも客人の礼儀があると思うんだけどな」

悠斗がムツとしたのは、仕方がないことだろう。

「いや、私のことは客とは思わないでくれ。これからこの家に厄介になるのだからな。腹を割って話しがしたい」

「お前、意外と厚かましいのな」

こちらが舌を巻くほどの落ち着きっぷりだった。さっきのは絶対演技だろうと思わせるほどである。しかし、友人の妹なのだから追いつ返す訳にもいかないし、実際に問題を抱えているのは間違いない。「で、何があつたんだ？」

「ああ……、それはだな」

アリスが口を開こうとした矢先、咲夜がお盆で熱い緑茶を運んできた。アリスの前に湯のみを置く時にはドン、と音を立てるほどである。

「昨日のことだ。実家に置いておいた部下から連絡があつたのは」そんな咲夜の嫌味にも、アリスはまったくの無視を決め込んでいた。何事もなかったかのように、咲夜の存在をスルーしている。幽香はまだ大人しいのでそれほど波風は立たないが、この二人は倦厭の仲と言っても良いほど険悪だった。

「実家……キリングゲートファミリーのことか？」

アリスは頷いた。

「一家を継ぐのは馬鹿兄だったのだから」

「でも、逃げ出した。お前の所為らしいじゃないか」

出会ったときのクロードは、今の奴を見ると想像もできないほど

荒れていた。元々温厚だったのだが、アリスにされた仕打ちのためか狂犬のようになっていたのだ。しかし、性格に似合わないことをすると無理がくる。精神的に弱っていくのは時間の問題だった。

「あれは……仕方がなかった」

「仕方がないとは？」

川崎美野里が集めてきた仲間たち　克己（今よりはマトモだったが）と悠斗（あの頃は殺人鬼だったが）、真治や百合　まあ、全員荒れていた訳だが、この五人が助け合わなければ今の自分たちはなかっただろう。

「そもそも、魔術カルテルをたつた一つの血族が牛耳るなんて不可能だとは思わないか？　ドイツの三分の一の市場を手中に収めるキリングゲートファミリーの仕組みには大きな矛盾があるのだ」

アリスは一つ、呼吸を置いた。

「一つの血族だけではやっていけない世界なのに、一つの血族だけで支配している」

「それが矛盾か」

「ああ、決定的な矛盾だ。そして、今のキリングゲート家に起こっているのは日本で言うお家騒動だ。分かるか？　宗家やら分家やらがあつて、当主が存在する。嫡男が次期当主、次男やら三男、従兄やら叔父やらが当主や幹部の椅子を狙っている」

「……ああ」

その説明は、分かりやすい。

つまり、クロードは……。

「暗殺か」

「計画だけだったかな。次女の私を次期当主に祭り上げる魂胆が見え透っていた。だから、従うフリをして実行日に摘発、一網打尽にしてやった」

「クロードは？」

「邪魔だったから日本に追放した」

アリスの頭の良さ窺い知れる話しぶりだ。まだ年若く感情的にな

りやすいのを除けば、彼女ほど優秀な人材はいないだろう。なるほど、草壁が重用した訳である。

「……話は分かった。で、そんな昔の話がどうしたんだ？」

「一網打尽にしたつもりだった。だが、一人だけ生き残っていたらしい」

「良くある話だな。……大体は読めたよ。つまり、その死に損ないがお前の命を狙っていると言う訳か」

頼ろうにも兄は勘当されたような立場だ。

今さら助力を請うのは厚かましすぎる。

「ああ、そうだ。今年の四月、一家に乗り込んできて、過去の過ちを濯いでまたやり直したいと嘘八百を並べ立て、しかも誰もそれを疑わなかったのだ。今では客分として収まっている。私だけ、命を狙われていると感じて逃げてきた訳だよ。つまり、私も馬鹿兄と同じと言う訳だ」

アリスは自嘲的に笑った。

なるほど。それが日本留学の理由か。

「しかも、分家とはいえ、『血液水晶』フラッペイ・クリスタルシェイドの使い手でな

「強いのか？」

「私やクロードでは話にならん。草壁なら”どうにか”倒せるかもしれないな」

草壁で”どうにか”と言うほどなのか。

悠斗は湯のみの茶を飲み干し、溜息を吐いた。

六人分の昼食を仕度していると。

「そろそろ庶民の料理も飽きたのですが」

台所に入ってきた草壁が辟易とした顔で言った。人の苦勞も知ら

ないで、なんて我が侂な野郎だと思ったので「なら食うな」と、どこぞの母親のようなことを言うことになる。

「つまりだ、アンタは食事一つで俺たちの関係を悪化させようと目論んでいる訳だ。とんだ裏切り者だな。ああ、この神社で酒池肉林の宴を開くのは不可能さ。だがな、庶民の料理には庶民の料理の良い所があるんだ」

「貴方、かなり混乱していますね……？」

草壁は鬼気迫る迫力の悠斗に怯え、顔を引きつらせた。

「最近朝から晩まで心休まる暇がないんだ。昨晚なんて俺の部屋で咲夜とアリスが睨み合いだぞ。そんな中、平然とした顔で幽香が布団に潜り込んでくるんだ。緋芽は愉快そうに笑っているだけだし……もう助けてください」

唯一、心休まるのが食事を用意しているときだとは。

草壁はかなり同情してくれているようである。だが、この状況を打開する策は持っていないだろう。ああ、悲しいかな。神を退けたら女難の相が出てくるなんて、とんだやぶ蛇だ。

「なら、温泉でも行きますか？」

「………は？」

「だから、温泉ですよ。身体は休まる、メシは美味しい。いわゆる湯滋ですね」

それは分かる。だが、なぜ？ いきなり温泉なのだ？

突然の言動に、悠斗は混乱した。

「今朝、ドイツ人のお嬢さんが訪ねてきましたよね。多分、この場所はまだ割れているのでしょうか。これからもっと人数が増えるかもしれないですよ？」

たしかに、アカデミー側の連中には悠斗がこの村に滞在していることを知られているようだった。幽香か沙希辺りが口を割ったのだろうか、このまま滞在し続けるのが果たして正解なのだろうか。

いつまでも同じ場所に留まるのは、良くない傾向だ。

「……温泉か」

「決まりですね」

草壁は満足気に頷くと、携帯電話を取り出してどこかに連絡した。

……この男って、こんな奴だったんだな。

今さらながらにそう思わされる悠斗である。

35：湯船に揺れる恋話

思い立ったが吉日　とはこのことか。

悠斗はそれほど乗り気ではなかったが、草壁はその日に六人乗りのワゴン車をレンタルしてきた。旅館も予約済みだという。手際の良さに呆れながら、悠斗たち五人は出発した。

「……しかし、温泉か」

「楽しみですね、悠斗さん」

ちやつかり悠斗の隣りに陣取った咲夜が嬉しそうに言う。不満顔の幽香はアリスと最後部の座席に、緋芽は助手席に座っていた。

「いや、楽しみなのか　と言われてもな。温泉なんて入ったことがないから、イマイチ実感がないんだよな」

「入ったことがない？」

「旅行なんて行ったことがないし、小中学校の義務教育も受けてないからな」

資産家の御曹司や御令嬢が家庭教師にすべての教育を任せると、同じようなものなのだが　あまり、同一視されたくない。

朽葉では一日中ずっと戦闘訓練ばかりで、空いた時間に基礎知識を埋めていく、という教育をされていた。

「つーか、温泉って大きな風呂だろ？　俺の実家もそれなりに風呂はでっかいぞ。一度に10人ぐらい入れるんじゃないかな。まあ、効率的だからって理由が第一にあるんだけど」

「……随分と味気ない人生ですね」

「味気ない……かな。でも、朽葉に引き取られていなければ、もっと酷いところに連れて行かれたかもしれないからな。閥属性の魔術師ってのは、希少価値が高いんだよ」

下手をすれば魔術カルテルで暗殺者に仕立て上げられていた。

まあ、朽葉の一族も同じ穴の狢なのだが。

と考えていて、悠斗はハツとした。

「……不幸自慢は趣味じゃないんだよ」

自虐ほど甘美なものはないが、わざわざ咲夜に打ち明けるほどの話でもない。話しやすいのだろうか。咲夜と話していると、不思議と落ち着くようだった。

「でも、考えてみれば、私もあまり温泉には行ったことがないんですよ」

「と言うのは？」

「中学の修学旅行で宿泊したホテルぐらいでしょうか。露天風呂があつて、打ち身や腰痛などの効能が書かれている立て札があるんですよ」

「年寄りが喜びそうな温泉だな」

「実は水道水だった　というオチが付いていますけど」

そこは笑いどころなのだろうか。悠斗は意味深に首を傾げている咲夜に、どう反応すれば良いのか分からなくなつた。

草壁が笑いを堪えながら口を挟む。

「二人とも、不幸自慢ですね。冗談にしては、あまりに気が利いていない」

「あなたの冗談も、趣味が悪いけどな」

その言葉に、緋芽が「違いない」と苦笑しながら同意する。

「そう言えば、アリスも初めてなんじゃないか？　ドイツには温泉があるとは思えないのだが」

「そもそも、湯船に浸かるという風習がないからな。とは言え、楽しみというほどでもない。まだお前たちのところに来て三日も経っていないのだからな」

温泉初体験だろうに、そのアリスも心躍るものはないらしい。

あまりに唐突だったこともあるのだろう。旅行とはその日を待つことも楽しみの一つなのだとか克己が語っていたのを思い出した。

そうこうしている内に、温泉旅館に到着して　。

露天風呂の足場は、思いのほか良く滑った。手入れが行き届いていない。という次元の話ではなく、それだけ大自然に近いということだ。緑色が付着した石囲いの天然温泉である。

「ちなみに、山の動物が入りにくるといいう癒し設定があるんですよ。どうでも良い草壁のうんちくはさておき、悠斗はかけ湯をしてから湯に入った。

旅館から露天風呂まで徒歩20分。ここは男湯の『松の湯』で、300メートルほど離れたところに女湯の『梅の湯』がある。旅館には露天風呂ではないが『竹の湯』があつて、そこは男湯と女湯が仕切られている。

「しかし、アンタとこうして肩を並べるとはな」

今さらだったが、感慨深かった。色々あつてアカデミーには戻り難くなつてしまった代わりに、絶対に相容れない人物の叔父と手を結んでいるのである。無論、信用し切つた訳ではない。

それでも、今だけは。

仲間であると言つことを実感できる。

「……私も、予想外でしたよ」

草壁は、湯に浸かると両目を閉じた。

「貴方は『王佐の才』という言葉をご存知ですか？」

思い浮かぶのは諸葛孔明や竹中半兵衛だ。

王を補佐し、天下の覇権へと導く軍師の才能。

「まさか、川崎美野里に飼い殺しにされている犬が、パワーバランス戦局を一変させる頭脳を持つ軍師だったとは思いませんでした。そして、その才は未だ埋もれている。これほど勿体ないものはないでしょう」

まるで自分が活用してやる。そう言っているようだった。

悠斗は口元を歪めた。その飽くなき向上心。隣にいても、いつも油断できない好敵手。一緒にいて、これほど面白い人間はいない。

草壁との言葉の駆け引きが、いい感じに脳髓を刺激してくれる。

「しかも、貴方には人望がある。不思議と味方が集まってくるのです」

「その分、敵も多いぞ。身体の内側には未だ悪神が宿っているし、いつ暴走するか分からない状態だ。諸刃の剣を取らなければならぬいほど、アンタは切羽詰っているのか？」

「さて、どうでしょうね？」

騙し合い、騙し合い。

二人は同時に苦笑する。

「ところで、その義手は大丈夫なのか？」

「あつ」

「駄目なのかよ」

草壁は「次回は耐水性の向上に挑戦してみますよ」と虚勢を張って引きつった笑みを浮かべた。

一方、女湯の『梅の湯』では。

「ほう、これが温泉か」

着物を脱ぎ捨てた緋芽が、かけ湯もせず露天風呂に飛び込んだ。水しぶきが上がり、アリスなどは露骨に顔をしかめている。

「もつと落ち着きを持って下さいよ。周りの人に迷惑をかけちゃいけません、って教えられませんでしたか？」

咲夜の忠告に、緋芽は迷うことなく首を横に振った。

「ふん、何も分かっていないようだな小娘。吾は迷惑をかけてやっているのだ。平民の仕事を作ってやることこそ、貴族たる者の証明ではないか」

と、訳の判らない理論を振りかざす緋芽に、咲夜は呆れて溜息を吐く。

「と言う訳で、喜ぶが良い。早速迷惑をかけてやるぞ。そこな小娘……貴様に吾の着物の着付けを命じてやる」

「……自分で着れないものを着ないで下さい」

まあ、肌襦袢を被せて旅館まで運べば、後は悠斗がどうにかしてくれるだろう。

咲夜たちはきつちりとかけ湯を済まして、湯船に身体を沈めた。じんわりと染み入る温もりが、心地良い快感を与えてくれる。

「悪くないものだ。私の国で、どうして入浴文化が発達しなかったのかと残念に思えるほどだ。悠斗に尋ねれば教えてくれるだろうか？」

「……さあ、どうでしょう？」

アリスの疑問に、咲夜は曖昧に言葉を濁した。

まさかそこまでは知識にないだろうと思えるのだが、あの悠斗だから”もしや”という部分もある。ドイツ人のアリスよりドイツ文化に詳しくければ、それはそれで色々と問題のあるような気がするが「ところで小娘」

「咲夜です」

咲夜が訂正したのに、緋芽は改めようとしなかった。唯我独尊を行く、と言うのはこのことか。現代人の感覚では良く分からないマイペースぶりである。

「聞かぬでも分かり切ったことだが、お主は悠斗のことが好きなのだろう？」

「………はい、好きですよ」

少しの沈黙のあと、咲夜は断然と言い切った。

今さら答えるまでもない。高校にも通わず、咲夜を引き取った親戚の家にも戻らずに悠斗の傍にいたのである。並みの覚悟でできることではない。

「……なるほどな」

緋芽は面白くなさそうに呟いた。

「悠斗が気に入るのも納得できる。あの男は、純粋な乙女に惹かれる傾向があるからな。ふん、気に入らん。どこまで神武の小倅と似ているんだ」

一瞬見せた緋芽の表情の陰りに、咲夜はハツとした。緋芽は自嘲的に笑い「気にするな」と言葉をかける。

「まあ良い。男とは何人も女を困ってこそ一人前なのだ。吾の時代は女の屋敷に男が通ってくる　と言う凶式だったのだがな。ところで、貴様の方は悠斗のことはどう思うかの？」

今度はアリスにその矛先が向けられる。

「私か？　……それは、答えなければならぬ質問なのか？」

「まあ、そうじゃな。これから悠斗は茨の道を進む。覚悟のない者は、今の内に降りておいた方が身のためと言うもの。悠斗は『来る物拒まず去る者追わず』だから、吾が見極めておかねばならんからな」

「……だからと言って、好きか嫌いかというのは早計にすぎないだろう」

緋芽は不敵に微笑み「そうかの？」と囁いた。

魔性の笑み　そんなフレーズが咲夜の脳裏に浮かぶ。この姫様は、悠斗を守るためなら何だってするだろう。そう思えた。どんな汚れ仕事でも、引き受けるに違いない。

「たしかに早計かもしれないな。だが、お主を見ているとそうは思えんのじゃよ。貴様は冷静を装っているが、中身は子どもじゃ。悠斗に再会したときに抱きついたあれは、貴様の本心だったのではないか？」

「……………」

アリスは緋芽から顔を逸らした。

36：血液水晶

悠斗は小一時間ほど温泉を楽しみ、旅館の一室に戻ってきた。

畳敷きの十畳一間で、これを悠斗と草壁の二人で使用するのだから、中々に贅沢なものである。旅館入口のみやげ物やで購入した温泉饅頭と水羊羹を開封し、冷たい麦茶と一緒に並べてみた。

「うん、良い感じだ」

精神的に回復してきたような気がする。女性陣とは別室というだけで、これほど落ち着くのである。草壁の提案も、案外悪いものではなかった。

「悪くない……か」

水羊羹を切り分け、窓際にある小さなテーブルの上に置いた。向かい側で座布団に腰を下ろしている男が、興味深げに手を伸ばす。

「ふむ、たしかに悪くない。日本の菓子ってのはかなり特殊なんだよな。しかし、ロシアほど酷くはない。知ってるか？　ロシア人ってのは毎日毎日ソフトクリームばかり食ってるんだぜ」

「聞いたことがある。トルコ、イタリア、ロシア　世界三大アイスクリームか。と言うか、ロシア人は美味いと思ってソフトクリームを食ってるんだよ。アンタは寒い国でわざわざアイスを食べうなんて正気だとは思えない　と考えているんだろうが、ロシア人にとって正気だとは思えないのがアンタなんだからな」

「少数派ってのは、いつも風当たりが強いのだ」

巨大な重圧を発している男だった。全身から溢れんばかりのエネルギーが迸っている。筋肉が唸り声を上げているのである。似合わないスーツの内側はかなり鍛え上げられていて、拳一つが凶器のようだった。

しかしながら、懐が不自然に膨らんでいて凶器を携帯しているのが分かる。

凶器の肉体を保有しながら、鉄塊の凶器に頼っている。これほど

滑稽なことがあるだろうか。

「で、どうしてアンタが日本にいる？」

険悪な口調で火蓋を切った悠斗に、巨漢は悠然と答えた。

「そう口を尖らせるなよ。『嘲笑する虐殺者』。いや、『三重詠唱』か」

「どちらでも同じだ、『^{トール}北欧の守護者』。いや、『^{トール・ハンマー}雷槌砲車』だつたか」

「それこそ、どちらでも構わないさ」

「なるほど。今となってはどうでも良いことだな」

二人は「違いない」と苦笑した。両者とも油断ならない目付きをしていた。

「……歓迎はしない、ミハイル・アレンスキー・ナザロフ」

「久しぶりに再会したと言うのに随分な挨拶だな、朽葉悠斗」

悠斗は袖口に仕込んでいた小刀を抜き出し、ミハイルの喉元に突き付けた。

それと同時に、ミハイルは懐から拳銃を取り出し、銃口を悠斗の額に当てる。

「……腕は鈍っていないようだな。まあ、これなら心配はいらねえだろ」

ミハイルは微笑み、おもむろに腰を上げた。

「帰るのか？」

「ああ、そうするさ。あまり歓迎されていないようなんぞな。俺はただ、弥栄玄一 お前の学校の校長に様子を見て来いと言われただけだよ」

倉渕祐作の動きが活発になってきたので、その抑えに悠斗たちを使おうという魂胆なのだろう。結局、アカデミーを出ても利用されると言う訳だ。

「あと、暫くはアカデミーに戻らない方が良くんじゃないか？ これらは、まあお前だからもう予想しているんだろうけどな。あの場所はまだもう、マトモじゃねえ。弥栄の爺さんには可哀想だが、一度潰し

て立て直さなければやってられないだろ」

「魔法庁からの横槍もあるだろうし、教育機関というには戦力を持ちすぎた。それも今さらだな」

目的を持たない力は、警戒されて然るべきものだ。

「最終手段は魔法庁に一度取り込まれ、戦力だけを吸収させてから、新たに教育機関として発足させる　だな」

「だが、川崎美野里は黙ってないだろうよ」

ミハイルは吐き捨てる、今度こそ踵を返した。

「まあ、お前の知恵は弥栄の爺さんに伝えておくれ。じゃ、またな」
「戦場で再会しないことを祈ってるよ」

悠斗の皮肉に、ミハイルはクツクツと笑いながら姿を消した。

…… 本当に、いつまで経っても平和にならないものだ。

十

四人は湯上りの火照った顔を冷ましながら、旅館までの帰路に着いていた。徒歩で時間がかかるのが問題で、それをどうにかすればこの旅館ももつと流行るだろうに、と咲夜は勿体なく思った。

まあ、流行ってしまったらそれはそれで嫌なのだが。

咲夜は流行から逆進したくなるような性格をしている。マジョリティ多数派より少数派を愛する傾向にある　と言うのだろうか。人が多い場所は嫌いだし、誰もが持っている者に価値があるとは思えない。

自分だけの物　それこそが、真に価値のあるものだと思っていた。

脈絡もないことを訥々と考えていたところだった。緋芽が突然立ち止まり、片手を咲夜たちの進路上に置いて大声を発したのは。

「……止まれ！」

見ると、前方にはスーツを着た男性の姿が。

まるで、化物のような男だ。筋骨隆々と言うのだろう。2メートルの長身をプロレスラーのように鍛え上げている。小脇にスーツケースを抱えた金髪碧眼の西洋人で、その双眸は冷たい光を放っていた。

「お前は　っ！」

叫び声を上げたのはアリスである。

すると、この男がアリスを追ってきた刺客なのだろう。キリングゲート一族の分家出身で、その血系魔法を受け継ぐ使い手である。

「アレク・キリングゲートか!？」

「久しいな、次期当主。よもや日本まで逃げてくるとは思わなかったぞ」

「黙れ！　私は逃げてなどいない！」

緋芽は小さく舌打ちした。

かなり取り乱しているアリスに苛立ちを感じたようである。

「逃げて、兄に泣き付いたのだろうと推測していたが、とんだ予想外だ。手間をかけさせる。わざわざアカデミーまで足を運んだ私の苦勞はどう償ってくれるのだ？」

「まあ待て。そう殺気を放つでない」

「黙れ、黄色い猿人。貴様に発言を許した覚えはない」

咲夜は頬を引きつらせた。この男、人種差別主義者レイシストのようだった。問答無用とはこのことだ。答弁さえ許さないほどの、徹底した差別である。

アリスはこの無法を見て、少しばかり頭を冷やしたようである。

「相変わらずのようだな、アレク。少しは変わったかと思っていたが、日本では周囲の目も憚らずにこの暴言か。しかも、お前はこれから何をしようとしているのか、自分で理解しているのか？」

「次期当主を始末し、積年の恨みを晴らす」

「……もう、語るべきこともないようだな」

アリスは溜息を吐いた。

ナイフを取り出し、右腕に当てる。

「魔法を使うか。だが、次期当主はまだ『血液水晶』フラッディ・クリスタルシエイトの真の使い方を理解していないのだろうか？」

アレクは地面にスーツケースを落とし、片足で蹴り上げた。

「私の『血液水晶』を見せてやるう！」

刹那、スーツケースが爆発する。どうやら血液を携帯していたようだ。

真紅の血液が周囲に散乱し、数え切れない水滴が幾筋もの槍に変貌した。

「ッ、盾よ！」

咄嗟に、右腕の動脈から直接血液を取り出して盾を形成する。槍は盾に突撃した。ここからは崩壊と再構成の速度勝負になる。

その槍たちに、灼熱の業火が襲いかかった。

1万度の火炎の嵐である。固体化した血液でさえ、瞬時に蒸発させる熱量だった。

しかし槍は即座に液体化。触手のように曲がりくねって後退。火炎を回避する。

「……気持ち悪いね。これが真の使い方なの？」

中島幽香が毅然と立ち向かう。アレクは若干怯んだ。

「黙れ、日本人！ 『激流よ、すべてを薙ぎ払え！』」

水の奔流が爆炎を鎮火せんと襲いかかる。

『怨、黄龍』

『黒炎式式、黒死蝶』

しかし、緋芽の陰陽術が地面から突起を生み出し水を遮った。そして、石柱の隙間を小さな蝶々たちがすり抜けていく。水流と激突し、蝶々は爆発。水の勢いを押し戻した。

4対1、数の暴力である。

「……ククッ、かかったな」

しかし、この状況で不敵に笑うアレクの横顔を見て、咲夜は危機感を覚えた。

「退がって下さい！」

「言われずとも分かっている！」

緋芽が舌打ちし、着物を翻す。

「もう遅い！」

その言葉が発動の合図だったのか、果たして咲夜たちには分からない。

石柱の合間を潜り抜けた少量の水たちが、まるで生き物のように蠢き出したのだ。ブラッディ・クリスタルシエイト『血液水晶』で操る血液と、同じような動きである。さらに、透明な水が固体化して襲いかかった。

氷ではない。水なのに、個体の状態なのだ。

「ッ、間に合え！」

アリスが叫び、血液を使用する。瞬時に形成された盾が砕け散った。

だが、水は盾の数倍の質量を保有している。アリス一人が気絶しない程度に削り出した量と、魔術で呼び出した水の量では歴然の差がある。

「これがブラッディ・クリスタルシエイト『血液水晶』の二つ目の使い方だ！ 次期当主なのに知らなかったようだな！ この魔法は血液を水に溶かすことで、その水を自由自在に操ることができるようになるのだ！」

驚愕に目を見開くアリスを横目に、幽香が火炎の壁をアレクに突撃させた。

「赤く赤く、燦々と」

前方からと上方からの二つの攻撃に、アレクは攻撃を止めざるを得なくなる。

その間に、アリスが体勢を立て直した。

「4対1でこのザマか……。なんて奴だ」

緋芽は呼吸を整え、炎の向こうを狙うように片手を突き出した。

これは光線の魔法を使う体勢である。咲夜は頷き、いつでもフォ

ローに回れるように姿勢を整えた。

ここで、予想外の事態が起こった。

「無駄だ！ その程度の炎、温すぎる！」

炎壁を突き抜けて、アレクが現れたのである。下手をすれば全身大火傷で死に至るはずなのに　西洋人の巨漢はまるで無傷だった。

アレク・キリングゲートは朱色の鎧を全身に装着していた。

37：串刺処刑

朱色の拳に殴られ、緋芽の身体が宙に舞った。後方からの狙撃に徹していた咲夜が受け止める。あまりの衝撃に咲夜の体勢が崩れ、二人とも地面に転がった。

「おのれ！」

アリスは三つ又の槍、トライデントを形成してアレクに突き出した。

だが、アレクは左手で裏拳を放って槍を粉々に砕いてしまう。その左手を覆い隠すように展開した血液は、まったくの無傷だった。

「……どうして？」

以前、アリスが兄と戦ったときは二人の武器は互角であった。アリスの矛はクロードの盾を貫かなかつたし、クロードの矛はアリスの盾を貫かなかつた。矛盾の話の最後は商人が黙り込むだけだったが、その先は矛と盾の破壊なのではないか　と思えるような戦局だった。

真紅の鎧をまとったアレクは侮蔑の笑みを浮かべる。

「それすら分からない者に、ブラッディ・クリスタルシールド『血液水晶』を継承する資格はない！」

アリスは答えられなかった。アレクの言葉は間違っていない。自分の魔法すら使いこなせないのに、何が次期当主だ。

しかし、キリングゲートの一族でブラッディ・クリスタルシールド『血液水晶』をこのように使う者なんて見たことがなかった。

「どう言うことだ！？　そんなもの、見たことも聞いたこともないぞ！？」

「……当たり前だ。私自身、この魔法の奥義に至ったのは最近のことだからな」

アレクの拳がアリスに迫る。

『楽、赤龍！』

それを阻止する緋芽の陰陽術がアレクに襲いかかった。しかしア

レクは火炎球を一瞥、取るに足りないものとはばかりに盛大に無視する。

「アリス！」

緋芽の叫び声は届かない。アレクの拳がアリスの腹部を貫いた。

火炎球がアレクに直撃、しかしアレクは微動だにしない。不敵に微笑み、アリスの腹部から右腕を引き抜いた。

「アリスさん！」

咲夜が悲鳴を上げる。速度に長ける壱式の『夜燕』を放つが、それすら防御することなく防がれてしまふ。幽香の炎を突き抜けてきたのだ。生半可な威力ではまったく意味がなかった。

「ごふっ」

アリスが口から血を吐き出し、地面に膝を付いた。

歡喜の笑み。それがアレクの表情に浮かんでいる。

「ようやく、私の悲願が成るのだ！ 何度この娘に邪魔をされたことか！ しかし、これでようやく、キリングゲート家が入る！」

「貴様！」

緋芽が魔法を放つ。青色のレーザーが鎧兜に弾かれる。

そして、あと五歩のところまでアレクが迫っていた。咄嗟に幽香が火柱を発生させ、三人はその中に撤退する。

「無駄だ！」

しかし、それすらあの鎧には意味を成さないと言うのか。

アレクは火柱に右手を突っ込んだ。

「……待ちなよ」

「……つ、何者だ！？」

アレクは新たな乱入者の声に、弾かれたように振り返る。

背後では金髪碧眼の少年が妹を介抱していた。

アリスの傷口の血液が凝固している。フラッピー・クリスタルシェイド『血液水晶』で止血したのだとアレクが気付くのに、さほど時間はかからなかった。

大空から支倉沙希が舞い降りる。

「ありがとうございます、先輩。運搬係に使ってしまつて」

「妹さんのことは任せて。私が病院に連れて行くから」
「……お願いします」
クロードは小ぶりのナイフを手にしていた。
アリスの血液から作り出したナイフである。

十

昼休みを知らせるチャイムが鳴り、半数以上の生徒が食堂に向かう。クロードは鞆から弁当箱を取り出した。同じクラスの茜崎克己が声をかけようとしたところで、教師に呼び出されている。

川崎美野里だった。

クロードは溜息を吐く。

「……ご愁傷様」

友人の不幸に苦笑し、クロードは弁当を片手に屋上に向かった。悠斗がいないので、どうも気が締まらない。クラスは別なのだが、自分にはあれほど気が許せる友人はいないのではないか　と思う。そんなことをあの友人に言ったら鼻で笑われそうだが。

屋上のドアを開け放つ。耳に心地良い金属音、そして全身に吹き付ける風。

「支倉……先輩？」

啞然とするクロードの声に、支倉沙希は優雅に微笑んだ。

「久しぶり　じゃないわね。まだ半月も経ってないし」

「そうですね」

思わず、胸が高鳴った。予想外の事態に混乱するクロード。
そんな矢先、沙希はこう言い出したのである。

「じゃ、行こうか」

「は？」

質問も反論も抵抗もすべて空しく、クロードの手は沙希の手に繋

がれた。

直後、二人の身体が宙に浮き上がる。どんどんと地上から離れ、やがてグラウンドにいる人々の姿が黒い点にしか見えなくなった。あまり上がりすぎると酸素が薄くなるので、加減が難しいらしい。

『グラビティ・フレスベルグ
空飛死鳥』

それは重力無効化の魔法だ。重力の束縛から解放された物体は、高速で回転運動している地球から吹き飛ばされる。よって、完全に無効化する訳ではない。しかし宙に浮き上がる程度ならお手の物なのだ。

沙希は折り畳み傘を広げた。

「つて、どこに行くんですか!？」

「まあ、それは着いてからのお楽しみつてことで」

「ぼ、僕はこれから授業があるんですよ!？ 昼食だつてまだですし!..!」

「あー、私に掴まってないと危ないわよ。しがみ付いた方が良いんじゃない?」

言つが直後、沙希は風属性の魔術を使用した。突風が折り畳み傘に直撃し、重量が風船並みに減じていた二人の身体が吹き飛ばされる。

「こ、これ……! 時速100kmぐらい出てないですかねっ!？」

「うーん、多分200か300は出てるんじゃない?」

そして、二人は悠斗たちが宿泊している温泉旅館まで辿り着いたのである。

クロードはナイフを逆手に構えた。

二人の戦いは、音もなく始まった。朱色鎧の青年は鉄壁の守りを持つためか、余裕を崩さない。アレクの大柄な巨体に反し、ほとんど丸腰のクロードはちっぽけに見えた。

よってアレク・キリングゲートも勝負にならない　　と思っていた。

光の矢と化した拳を、クロードはそのナイフで受け止めたのである。

「　っ！」

アリスの武器は破壊された。クロードが操るのはアリスの血液から生成した武器である。しかし、アレクの拳と同様に、かすり傷ひとつ負っていない。

ブラッディ・クリスタルシェイド
「『血液水晶』の本当の使い方、見せてあげるよ」

奇しくもアレクと同じ言葉を吐き、クロードはナイフを構えなおした。

ブラッディ・クリスタルシェイド
そもそも『血液水晶』とは、赤血球96%、白血球3%、血小板1%で構成される液体と、血漿成分　水分96%、血漿蛋白質4%、そのほか微量の脂肪、糖、無機塩類で構成される血液を操る魔法である。

その本質は流動操作、状態操作、物体強化にある。つまり血液を物理法則に反して動かし、自由に液体から個体へと変化させ、なおかつその血液を鋼鉄並みの強度まで強化する。

ブラッディ・クリスタルシェイド
しかし、それに甘んじていては『血液水晶』も宝の持ち腐れ。

「血液に含まれる血球成分と血漿成分の比率は45:55。若干血漿の方が多い訳だけど、面倒だから半分ずつと考えてみよう。血漿成分の大半が水分だから、血液の半分は水ということになる」

「　っ、それぐらい私でも知っている！」

アレクが拳を打ち込む。迎え撃つは刃渡り20センチのナイフ。

「つまり、より強い武器を作るなら血漿成分は必要ないってことさ。血球成分内の赤血球は鉄分とヘモグロビン。強化するなら水よりも

鉄だよ。ちなみに」

クロードのナイフが真紅から漆黒に変化した。

「その鎧、かなり脆弱なんだけど分かってる？」

「なっ！」

拳を弾き返したナイフは無傷。しかし、アレクの拳を包み込んでいた血液は粉々に砕け散った。アレクの拳も血漿成分を除外し、鋼鉄以上の強度を持ち合わせていた武器である。

「分かってないよね、そんな色をしているんだから」

クロードはナイフを順手に返し、砕け散った拳に振り下ろした。

刃先が人差指と中指の間から肘に通り返れる。

「ぐあああああああ！」

いつものクロードでないことは誰の目にも明らかだった。普段の彼はこれほど淡々と退屈そうに、後遺症の残る怪我をさせるような少年には見えないのである。虫も殺せないような　とは言えないが、穏やかな波のような性格なのだ。

「血液が赤いのは鉄と酸素が結合して、酸化鉄になっているからだよ。なら、邪魔なのは血漿だけではなく酸素ってことになるよね。

さらに言わせてもらつと、丈夫な鋼鉄は少量の炭素が含まれているんだ。炭素鋼って知ってる？　ピアノ線も炭素鋼なんだよ」

「……クロード・キリングゲート」

「なにかな？」

「その力、そのお前の力は何なんだッ！？」

アレクは引き絞るように話した。両目が血走り、溢れる憎悪が少年に向けられる。

「紛い物の魔法で満足している君には分からないよね」

君だけじゃなくて、当主以外は全員紛い物なんだけどね　とク

ロードは語る。

「ま、紛い物？　この私が？」

「なんだよその鎧、全身を覆い隠してみつともない。部屋で怯えているガキの方がまだマシだ。で、ちょっと他人より強くなったから

主殺しに踏み切る訳か？」

「だ、黙れ！ 私を愚弄するとは」

「君こそ、黙りなよ」

クロードは吐き捨て、ナイフを投擲した。

「ぐッ！」

刃先がアレクの左肩にめり込み、ナイフが液体化して傷口に流れ込む。

そしてクロードは踵を返した。緋芽と咲夜が無意識に距離を取った。

「止めは刺さぬのか？」

「いいえ、刺しましたよ」

緋芽が怪訝にアレクに目を向ける。長身の偉丈夫はガクガクと震えていた。股下から液体が零れ落ち、地面に水溜りを作っている。

あれほどの人物がいきなりどうしたと言っただ。この怯えようは尋常ではない。

「見たことがあるようだね。そう、父さんが裏切り者を始末するときに使っている」

「待て、やめてくれ！ もうお前に手を出さない！ 妹にもだ！」

「これからのことなんて関係ないよ。あるのは君が造反したという事実だけじゃないか。だから、反省する必要はない。好きなだけ怯えてくれ」

振り返らず言い放つ。

『ウラド・ツェベシユ・カーニバル
の串刺し公の処刑』

「いやだあああああああああ！ やめろおおおおお！」

アレクは泣いていた。目から鼻から水を垂れ流して懇願する。

クロードは右手を持ち上げ、指をパチンと弾いた。

瞬間、アレクの身体が破裂した。

吹き上がった血液がシャワーとなって大地を潤す。きつい血臭に

すでに真つ青になっていた緋芽たちはさらに眉をしかめた。

唯一、幽香だけが普段と変わらず無表情である。

「クロードは……悠斗の友達？ それともキリングゲートの次期当主？」

「あの一家からは勘当されたような身分だよ。悠斗と喧嘩をした記憶もないね」

「……それなら良い」

そこにいたのは、気弱そうな少年だった。

38：舞う刀、散る屍

刃渡り二尺一寸（約六十三センチ）、大帽子辺りで反りを入れて
いる『先反り』の打刀で、拵えは鏝なしの白鞘である。姫川神社に
奉納されていた護神刀を、悠斗は車内のトランクから引っ張り出し
た。

悠斗は考えていた。

なぜ、ミハイルがこの場所を訪問できたのか。

川崎美野里は、悠斗が寒村に滞在していることを調べているはず
である。悠斗が朽葉家から分盗ってきた金で貧相な家を建てたこと
は海斗に知られている。だから、校長の傘下にあるミハイルがその
ことを耳に入れるのは納得できた。

しかしである。悠斗たちは温泉旅行を公言した訳ではない。アカ
デミーの連中さえ知らぬことのはずなのに、ミハイルが訪問した。

密告である。

「……草壁」

悠斗はそつと佇む青年に声をかけた。

温泉旅館の入口たる駐車場。悠斗が刀を取ったことに気付いてい
るはずだ。草壁の物言わぬ背中に、悠斗は語りかける。

「今度は、何を企んでいる？」

一度目は悠斗との同盟を美野里に密告した。

これは、美野里からすれば悠斗が裏切ったように思われても仕方
がないことだ。その以前から、悠斗のことを邪険にしていたとはい
え、悠斗はアカデミーに戻り辛く いや、戻れなくなってしまう
た。

「この温泉、妙に客が少ないよな。もしかして、俺たちだけなんじ
やないか？ 旅館の従業員も、必要最低限って感じた。もう一度言
う。今度は何を企んでいる？」

朽葉悠斗のスタンスは受動的である。敵が襲いかかってくるなら

ば迎撃するが、自ら率先して敵に攻撃をかけることはない。それは、彼自身が戦う理由を明確に把握していないからだろう。

しかし草壁は違う。この業界でこと草壁以上に能動的な人物はいないだろう。

少数精鋭でアカデミーに乗り込み、庇護者たるべき魔法庁と魔術カルテルを裏切りながら『黎明の魔石』を奪取しようとした。それは、彼自身が戦う理由　覇道が見えているからである。

「企てている　とは異なることを申されますね」
「惚けるな」

悠斗は草壁が倉淵と内通している可能性も疑っている。それは同盟を結んだ時点からのことだが、わざわざ自分を疑ってくれという草壁の行動に、悠斗は苛立ちを抑えきれない。

「アンタが魔法庁を潰すなら勝手にしろ。そのために黎明の魔石が必要なら、手に入れば良い。だがなぜ、いつまでも俺たちと共にいる？」

どうして、魔石を奪いに行かない？

草壁は背広のボタンを外し、上着を脱いだ。

「貴方はまだ、アカデミーに行けば魔石が手に入ると思っているのですね」

「……………」
「……………」
「……………」

「どうということだ、と悠斗は視線で促す。
草壁は両手を中腰に構えた。

「今回の目的は、単純ですよ」

両腕を振り上げる。視線は旅館の入口から伸びる道路。アスファルトで舗装された一本道で、左右は鬱蒼とした竹林だ。

「私たちと敵対する者たちを、燻り出すためです」

左の魔剣が唸った。直線状を火炎弾が薙ぎ払い、五十メートル先の敵を一掃する。

悠斗も抜刀した。刀身から熱気が迸り空気がゆらめく。

二人の視線の先では、魔法庁の聖騎士たちが隊列を組んで接近し

ていた。総勢百人の大編隊である。先陣は魔法庁の虎の子『ミストルティン神殺槍』を、横一列に並べて突撃してくる。

魔法庁の聖騎士　　のように見える。

「考えてもみなさい。今の私たちはたった六人。個々の実力は申し分ないのですが、所詮は寡兵です。そんな我々を滅ぼして得をする者がいるのでしょうか？」

「川崎美野里なら有り得る。魔石を狙っているアンタを野放しにしておくほど、あの女は甘くない」
だが　　。

どうして草壁の『レイヴァーティンスルトの魔剣』で焼き払われた死骸が、未だ起き上がるうともがき続けているのだらう。あれは、かつて見た悪夢の再現ではないか。

『ネクロ・ファウスト輪廻転生』、倉渕祐作。

どうして倉渕祐作の屍兵士たちが自分たちに襲いかかってくるのだらう。

「……すでに、川崎美野里の手に魔石はないと言っただけか？」

「ええ、そうです」

「川崎美野里と倉渕祐作が繋がっている？」

「私も今まで確証が得られませんでしたかね」

屍兵士たちが音にならない雄叫びを上げる。

悠斗は刀を構えた。敵勢はもうすぐそこまで迫っている。

『刺刺刺、ダークスナイプ』

詠唱しながら、悠斗は飛んだ。魔術が先陣を貫き、開いた隙間に身体を潜り込ませる。即座に周囲の敵を斬り伏せた。斬られた兵士が刀の力で燃え上がる。火之迦具土の力が働いているのである。

『貫貫貫、ダークランス』

紛い物の魔法。詠唱が必要ないという魔法の利点がない。

『斬斬斬、ダークブリンガー』

黒色の斬撃が死人たちの胸を両断した。すさまじい威力である。わずか数秒で、敵兵の三十体が立ち上がれなくなっていた。

「……一騎当千」

この場所は悠斗に任せれば良い。草壁はそう思い、踵を返した。

十

旅館の入口から伸びる道路は死屍累々の地獄と化している。従業員も真つ青になっていて、このままでは不味いと思いつながら草壁は車のエンジンを入れた。すると、ほうほうの体の緋芽と咲夜、幽香と意外な人物が後部座席に乗り込んだ。

「おやおや、お久しぶり……いや、初めましてですか」

クロード・キリングゲートは草壁から目を逸らした。

「……嫌われてしまいましたかね。」

自分と臆面切って話せるのは悠斗とここにいる変わったお姫様くらいだ。咲夜も口には出さないが怯えているようだし、アリスとも必要最低限のことしか会話した覚えがない。

「中々に頑張っておるの、悠斗は」

緋芽の視線の先では、悠斗が三体の屍兵を斬り倒しているところだった。同時に魔術（魔法？）で十体を葬っている。悠斗があの魔法らしきものを使っているのを今日初めて見た草壁は驚いていた。

「……知らないようじゃな」

「お恥ずかしながら、まだまだ薄学の身でして」

緋芽が首を横に振った。

「いや、知らんのも無理はなかつて。あれは神代の時代に幕を下ろした技術じゃからな」

「技術？」

「多重詠唱という。あれは元々の魔術の威力を三倍まで引き上げる

ものじゃな」

「『ダークブリンガー』は『闇の剣』を三重詠唱したものと言つてとですか？」

草壁の質問に肯定の答えが返ってくる。

「魔法使いでない魔術師が、魔法使いを打倒するときに使用した技術でな。魔法使いにとっては面白くない。だから滅ばされたのじゃよ。現代まで残っていないのも、まあ当然のことよ」

「……………」

「あまりパツとしない、そう思ったか？」

草壁は頷きはしなかったが、事実そう思っていた。

緋芽は含み笑いをすると、視線を悠斗に戻した。草壁はその様子に首を傾げるが、追求はしなかった。

パツとしないのだが、最初に草壁と戦ったときよりも強くなっている。それに、暴走状態限定だが『刃桜繚乱』と『滅魂 紅覇』もある。

咲夜は瞬きひとつもせず悠斗を見詰めている。

加勢するほど余裕がないのだろう。悔しそうだった。

「貴方はこのままで良いのですか？」

「ええ、無駄ですよ」

クロードは引きつった笑みを浮かべた。

「無駄？」

「今の悠斗、あれで怒ってますから。あれ、キレてますね」

「さっきのお主のように か？」

緋芽の揶揄に苦笑するクロード。

「あまり言わないで欲しいな。まあ、僕も一年前はあんな感じだったってこと。今の悠斗を見ていると一年前を思い出すよ」

「一年前ですか」

すると、今の悠斗が強くなっている訳ではなく、あ那时的悠斗が弱くなっていたと言つことが。

「まあ、僕も悠斗も思い出したくないことだし、追及しないで欲し

いな」

クロードはそう締め括ると黙り込んだ。

すでに百体の屍兵は全滅し、悠斗が血の海から帰還するところだった。

39：彼女の本音

温泉旅館がパトカーに囲まれていた。あまりにも無残な死体の群隊に警官の中には嘔吐する者も出てくるほどである。しかし、彼らは死体より五メートル以内には踏み込めない。

本来ならロープの内側では自分たちが証拠集めに奮闘するはずである。

だがそれも、叶わない。黒スーツの男たちが現場を封鎖し、現場の司法をことごとく排除しているのだ。

警察のほとんどの者は彼らのことを知るよしもない。警視正クラスになってようやく風の噂で聞いたことがある。というほどの知名度である。

魔法庁。

茜崎克己は川崎美野里に「魔法庁からお呼びがかかったぞ」と伝言を受け、温泉旅館の近くまでタクシーを走らせた。運転手に現場を見せないため、山奥で下車した訳だ。

魔法庁から名指しで指名されることは 光栄なことなのだろう。魔法使いという狭い世界では、魔法や魔術という才能を生かした仕事に就くことが非常に難しいのである。大抵は研究者か教師。そこから溢れた者が魔術カルテルに流れ込むこともある。

旅館入口で硬直している間抜けな警察たちを横目にロープを踏み越えた。その様子を咎めようと黒スーツが手を伸ばす。話し合いをするのではなく、強制排除である。

「やめろ」

横合いからかけられた声。黒スーツは振り返り、了解した。

「やあ、御剣さん。元氣かにやー？」

「連日徹夜なのにまだ生きてるんだ。元氣だぞ」

青年は口元を月弧に歪めた。

金髪に銀のイヤリング、ドクロのネックレスをしてボタンを外し

た黒スーツを肩にひっかけている　どこか”ちぐはぐ”な格好の青年だった。まだ二十代前半で、少年っぽい顔付きをしている。

「皮肉っすかねえ？」

「ああ、皮肉だ。つたく、学生つてのは暇で良いよな。平日に温泉か？」

「こんな殺伐とした現場で営業なんてしてないのねん。死体を見ながら温泉だなんて御剣さんも趣味が悪いにやー」

「そうとも限らないぞ。俺は今晚、ここに泊まるから」

御剣蒼夜　日本の三大魔法一族の一角を担う、御剣家の次男坊である。

この青年の実力は草壁涼二か朽葉海斗、あるいはそれ以上のものだとか克己は予想していた。克己程度の実力では刺し違えるのも難しいだろう。魔法庁にいる人材では、最高峰の戦闘力だと言える。

「で、この死体はなんですかねん？」

克己は周囲を見回して言った。銀色の鎧をまとった兵隊たち魔法庁の聖騎士たちが百人、物言わぬ屍と化した風景である。

「おそらく、倉淵にぶっ殺された雑魚共だろう。分をわきまえない上司の被害者つてところだな。可哀想に。俺の部下ならむざむざ殺させはしなかつただろうに」

と言いながら、煙草を啜って死体を踏みながらどこかへ足を向ける蒼夜。

「まったく同情していないでしょ」とツッコミながら、克己も後を追った。しばらく歩いていると、湯気が立ち上っている温泉が見える。

『梅の湯』と書かれている立て札がある。旅館の温泉なのだろう。蒼夜は「うーん、この辺りだったはずなんだが」と周囲を見回した。

その前に、ふとそれに気付いた克己が指を差す。

「あれじゃないですかぜよ？」

全身が破裂し、固体化した血液で針鼠と化した死体である。大柄

な身体つきをした男で、頭髪は血に染まっているが黄金のようである。

「……クロードか。」

ウラド・ツェベシコ・カーニバル

『串刺し公の処刑』。キリングゲート家の当主だけに伝えられる秘法だ。他者の肉体に自らの血を流し込み、その肉体が所有する血液の支配権を奪い取る。そして、末路は血液の暴走で締め括られる。「ああ、そうそう。あれだよ、あれ。すっげえ死体だろ？」

蒼夜は玩具を与えられた子どものように嬉々として話す。ひとしきり一人で笑い続け、やがて笑い飽きたのか退屈そうな顔をした。

「あれ、クロードってガキの仕業だろ」

ゾクリ　克己の背筋が震えた。その声はごく普通の日常会話的なニュアンスである。しかし、全身から滲み出る圧力が変わっていた。

「どうして」と口に出す前に、蒼夜は話し出す。

「魔法庁の情報収集能力を舐めるなっつーの。俺はな、『黎明の魔石』のことや『草壁涼二の襲撃事件』、『倉渕祐作の革命』、『朽葉悠斗の離反』まで、テメエらのことはほとんど知ってるんだよ。そうだな……『中島幽香との決闘』でさえ、俺の耳に入ってくるんだぜ」

「……………へえ……………そうなのかにやー」

「たがな、上司に報告してもマトモな対応はしてくれねえからな。だから草壁の考えも分からないことはない。俺だって魔法庁なんてぶっ潰れてしまえば良いんじゃないかねえかと思うこともある」

蒼夜はチツと舌打ちした。

「話が逸れたな。だから、クロードってガキがアレク・キリングゲートを殺したことも知ってるんだ。だが、これは追求しねえ。下手したらドイツの魔術カルテルが出てきて戦争になるからな。だが違う。入口の聖騎士どもの死体は、違うんだ」

「……………どう違う？」

急に真顔になった克己に、蒼夜がククツと笑う。

悪戯っ子が浮かべる笑みである。

「どうした？ 俺が朽葉悠斗に手を出すと思ったか？」

「……………いえ」

ハツタリだったのだろう。上手いことハメられた訳だ。

「心配するな。俺の方針では朽葉悠斗は泳がせることになってる。

あれは、色々面白い物呼び込んでくれるからな。その内、倉淵も釣り上げてくれるだろうよ」

克己は舌打ちし、踵を返した。背中にかけられた「今日はここに泊まっていきな」という言葉に抗うことはできなかった。

十

純白のリノリウムをスニーカーが叩いている。

地上十階建ての私立病院ではあるが、そこは市民に隠された地下空間だった。窓が見当たらないので多少薄暗く、空気も若干濁っているような気がする。無論、空気清浄機がフル稼働しているので感染症の予防には余念がない。

アリス・キリングゲートは静寂に包まれた病室で意識を取り戻した。

「……………ここは」

一輪の花も生けられていない花瓶が右横の戸棚に置かれている。一言でも声を出せば、途端に不安になりそうなほど静かな部屋だった。

そのとき、絶妙のタイミングでドアが開け放たれる。

「悠斗……………先輩か……………」

「先輩？ ああ、そう言えば名前で呼ばれるのは初めてだったか」
悠斗とアリスは苦笑した。初対面の頃から『お前』や『貴様』と

しか呼んでいなかったの、二人とも違和感があったのだ。

「無理して先輩って呼ばなくても良いぞ。元より尊称を使われるほど俺は出来た人間じゃないからな。それに、お前に敬語は似合わない」

「どう言うことだ、それは」

アリスはムスツと頬を膨らませる。それを見て、悠斗が「だから、その話し方が似合ってるってことだ」と気障っぽく微笑み、アリスの額を小突いた。

恥ずかしくて頬が熱くなるアリスである。

ふと、悠斗は真顔に戻った。

「……傷は、まだ痛むか？」

「いや、それほどでもないが」

痛み止めが効いているからだ、と悠斗は半ば脅迫するように釘を刺し、くれぐれも出回らないようにと伝えた。まるで看護師のようである。笑いそうになったアリスだったが、悠斗の真剣な剣幕に押しされて黙り込む。

「腹部に貫通痕、全治二ヶ月ってところか。肝臓に裂傷が見られたが肝臓は自己再生するから問題ないそうだ。破れた腸は縫合してある」

「重症だな」

「一歩間違えば死んでたらしいぞ」

「だろうな。しかし、全治二ヶ月か……」

アリスは自嘲的に笑う。まだ命があるだけ救いがある。しかし、己の無能が招き寄せたことだ。一族の者たちに申し分が立たないし、兄にはどのような顔をして会えば良いのか分からない。

「ところで、ここはどこだ？」

「郊外にある私立病院の地下だ。沙希先輩のツテで紹介して貰ったんだが、ここはいわゆる『訳アリ』の患者を治療するための施設らしい。闇医者に診てもらったってことだよ」

「……そう……か」

興味なさそうに呟くアリスに、悠斗は「あのなあ……」と嘆息した。

「折角拾った命じゃないか。もっと嬉しそうな顔をしろ。それでは助けに入ったクロードも浮かばれないぞ」

「……馬鹿兄が？」

「緋芽に聞いたが、あのヘタレ、珍しくキレてたらしいぞ。お前もアイツの戦い方を見ておけば良かったのにな」

「アレクを倒した？」

悠斗は頷いた。信じられない、とアリスは瞬きを繰り返す。

以前戦ったとき、アリスは兄の実力は己と同格だと確信した。それだけの手応えがあったのだ。お互い全力を出して、僅かの差でアリスが敗北したのである。

それだけに、アリスたちを赤子のように翻弄したアレクを倒したと言っことが信じられなかった。

「アイツと和解するのも、そう先のことではないかもしれないな」
悠斗は踵を返すと「気落ちしていたら治る怪我も治らないぞ」とアリスを労わる言葉を投げかけてから退室した。手土産の一つも持つてこないことに苦笑しながら、同時にあの少年らしいなと納得する。

「……鈍感」

アリスは天井を見上げ溜息を吐いた。

敗北したから気落ちしている　と悠斗は考えている。

……離れ離れになりたくない。

本当に、自分は本心を隠すのが上手くて困る。

40：道化は踊る

茜崎克己は翌日の昼休みにアカデミーに帰還した。死体が回収された旅館入口にタクシーを呼び寄せ、そこから二時間と数万円を費やしてしまった。経費として魔法庁に請求できるのだろうかと不安になる。

「……御剣か」

日本三大魔法一族『八神』『朽葉』『御剣』。

おそらく、長男は神喰いなのだろう。蒼夜は”普通”の魔法使いだと思っただが、悠斗のような例外もいる。何にせよあの歳で指揮官に納まっているので油断はできない。

鞆を肩に引っかけて教室に入ると、クロードが目線で挨拶した。

どうして戻ってきた？

克己は舌打ちし、席に着いた。周囲の者が奇異の視線を向けてくるが、それは「ああ、またアイツか」という確認のものだ。大遅刻しても、自分のことを気にかける者はいない。

「これ、三時間目の中級魔術理論で出された課題。こっちは四時間目の魔法史のプリントだから。課題は来週の月曜までに提出しろって。テストにも出すとか言ってたわよ」

いや、一人だけ……。

自分のことを気にかけてくれる者がいたようだ。

「ふーん、サンキューにゃん」

ふざけた感謝の言葉に、山岸雪子は眉根を寄せた。

「昨日、何してたの？」

「んー？ ダルかったからサボっただけだぜよ？」

「……じゃあ、今日の遅刻は？」

雪子の険悪な声色に、周囲の生徒たちがチラリと目を向ける。雪子やそんな彼らの様子に苦笑し「うわ、怖え」と気の抜けた返事を返した。

「今日もダルかったに決まってるじゃんよー、雪子ちゃん」

「……なら、昨日川崎先生に呼び出されてたのは？」

「そりゃ、おいらの素行不良の注意に決まってるぞなもし？」

嘘の上塗り。克己は薄っぺらな笑みを浮かべた。周りの誰もが自分の言葉を疑わないだろう。幼馴染の雪子でさえ、この軽い言葉に騙されているのだ。

そこまで徹底して奇人変人を演じたのは克己自身の意思である。

だが、悲しかった。

「つかよお、そんなに口煩く文句ばかり付けやがって、テメエは俺の嫁か？ 嫁なのかにゃー？」

「なっ、ばっ、馬鹿なことを言わないで！ 私は生徒会の一員として、学校の風紀を正すために……」

「ああ、もう良いって。俺なんかを説教しても、お互い得にならないぜよ」

克己は席を立った。

「次の授業、俺は移動教室なんよ。じゃー、ばいびー」

「まっ、待ちなさい！ もう、克己の馬鹿！」

最後の小言が、余計に昔を思い出させて悲しくなった。

十

レンタル期間が過ぎ去ったレンタカーが、山奥の松林の深部に停車した。温泉旅館から自動車で二時間、都心部からなら五時間はかかるだろう辺境の地にログハウスが建てられていた。

近隣には中規模の町があるので食料や生活用品には困らない。

「私が三つ持ちますから、悠斗君は二つ頼みます」

日持ちする食材とレトルト食品を大量に詰め込んだスーパーのビニール袋が合計五つ。草壁が率先してトランクを開き、三つの袋を片

手で持ち上げた。

車のキーをかけようかと提案しようとしていた悠斗は肩透かしにあった。時々、草壁の両腕が義手だと言うことを忘れそうになる。それだけ、違和感がないのである。

「大したものだな。何キロまで持ち上げられるんだ？」

「さて、どうでしょう？ 少なくともこの自動車程度なら持ち上げれそうですがね。となると、1、2トン前後でしょうか」

私生活で困っているところを見せてくれれば、草壁が身障者だと言うことを意識できるのだが。

そう言えば、温泉で困ってたか。風呂は不便なのだろう。

「この両腕の試運転をするときに、厚さ2センチの鉄板をぶち抜きましたよ。生身より義手の方が性能が良いんですね。でもそれも」

「

悠斗の脳裏に純白の少年が浮かんだ。

「倉渕祐作の身体能力の前では、兎戯に等しい」

滑らかに鼓動する黄金の肉体。鋼鉄を彷彿させる屈強なる筋肉。

人間の限界を超越し、さらなる高みに到達した物理的な暴力。あらゆる奇跡も神秘も、その力の前では陳腐に霞んで見える。

こと、殴り殺すという点で倉渕祐作ほど優れた人間はいない。

「……そもそも、倉渕家の魔法は治癒だったのですよ。しかし、どうしたことか私の甥は血系魔法を継承しなかった。甥は生者を癒すのではない。死者を癒す魔法を発現させたのです」

これが、悠斗と草壁の世間話である。

ログハウスの玄関にはカードキーの差込口があった。しかし、草壁はカードキーには見向きもせず扉を開ける。カードキーに触れた瞬間、ドアの向こう側に貼り付けられた指向性対地雷クレイモアが炸裂する仕組みだ。

続いて靴箱を開き、中の天井にあるボタンを押した。もし何もせず通り抜けようとするれば、壁の向こう側から蜂の巣にされるのである。AK47カラシニコフの中古品を改造した仕掛けらしい。

「物騒な屋敷」

「ええ、私もそう思いますが仕方がないことなのですよ。この館の主は、このように罾を設置することで自衛するしかないのですから」「分かり切ったことを説明するなよ」

「これは失礼しました」

道化じみた仕草で肩をすくめる草壁。

二人は七個目の罾を解除し、地下室に潜り込んだ。そろそろスパーの袋を持っている両腕が痛くなってきたのだが、これでようやく到着だ。

「遅かったわね。さあ、早く仕度しましょう」

現れたのは緑色のパジャマを着たセミロングの黒髪の女性。両足が失われており、電動式の車椅子に腰を下ろしている。草壁涼二の義手の製作者にして、このログハウスの主 九重香澄だった。

悠斗は袋を一度床に下ろすと腕まくりをした。さて、これから夕食の仕度をしなければならぬ。この居候集団で料理ができるのは自分だけなのだ。

十

温泉旅館で百人斬りの後。

悠斗とクロードはほとんど言葉なく、静かな時間を共有した。アカデミーの近くでクロードを下ろし、草壁の運転で悠斗たちはアリスの病院に向かう。

アリスとの面会は、悠斗一人だけだった。アリスは草壁のもとから去った経緯もあり「顔を合わせても気まずくなるだけですよ」と草壁は辞退。犬猿の仲の咲夜と会わせても良いことにはならぬだろうと思いい、悠斗は草壁に緋芽と咲夜を街に連れて行き衣服を調達するよう頼んだ。

姫川神社での生活の頃から、この二人には衣服不足という問題があった。仙石和希は緋芽の着物もあの世に持って行ってしまったし、家出同然の咲夜は制服を着たまま生活する訳にもいかず、姫川神社に残されていた衣服で日々を凌いだ。

「まあ、別に構いませんが……」

と安請け合いでする草壁にザアマミロと内心微笑む悠斗である。女の衣服にはとにかく金がかかるのだ。緋芽の着物なんて数十万円が吹き飛ぶのである。

ちなみに、幽香とはアリスと面会する前に別れた。親友の沙希のところに戻ったのだと草壁と緋芽は考えているようだが、悠斗には考えがあった。

アカデミーの動向を窺い、何かがあればすぐに動き出せるように見張りを頼んでおいたのだ。

悠斗は草壁の目が倉渕祐作に向いていることを見抜いていた。当面の敵は倉渕の魔術カルテルだ。だが、倉渕と内通していると思われる川崎美野里を無視するのは危険だ。

加えてアカデミーには戦力不足という問題がある。外部から見れば過剰な戦力だが、四面楚歌の状況では心もとない。健一郎、克己、クロード、ミハイルと層々たる顔ぶれだが、川崎美野里と朽葉海斗は確実に敵に回る。克己は誰側に付くのか怪しく、ミハイルは動き出すか分からない。

だから幽香には学園近くに寄宿している沙希のもとへ身を寄せさせたのである。

短冊切りにした牛蒡と人参を圧力鍋に放り込み、醤油味醂で味付けする。一味唐辛子を大量に投入し、キンピラ牛蒡を気取ってみる。我流だが、まあ悪くはない出来栄えだった。

ちなみに、九重香澄はと言うと。

機械が延々と吐き出す白いうどんを鍋に放り込んでいるだけであ

る。一時期この屋敷に身を寄せていた草壁が「毎日ざるうどんでした」と涙声に語っていたことがある。

「うどん、好きなのか？」

「いえ、それほどでは……。ですが、水と小麦粉だけで勝手に作ってくれるので。足りない栄養素はサプリメントで補えば良いだけですし、空腹を満たせば食事をするという目的を達成しているとは思えませんか？」

「思えません」

キツパリと断言する悠斗。香澄は不満げに眉根を寄せた。

念のためにカレーうどん用のルーを買っておいて正解だった。まさか、あの話が事実だとは思ってなかったのである。食事に口煩い草壁を黙らせるためには確実に必要になる。

「しかし、兵器開発とうどん製造機かよ。天地の差はあるぞ」

「発明が趣味ですから」

「と言いながら、香澄はうどんをすくい上げる。

「先ほど貴方に好きなのかと尋ねられて、それほどではないと答えましたね。あれ、訂正しておきます。本当はあまり好きではありません。うどんとは病気療養食にもなりますよね？ 私は昔から病弱で、母は毎日のようにうどんを作っていました。食べ飽きて、嫌いです」

「なら食うなって」

「習慣になってるんですね。それと、意地になっっているんですよ。意味も何もありませんけど、人間ってこんな詰まらないことを支えにしないと生きる気力さえ失われてしまいますからね」

その意地に巻き込まれる者のことを考えて欲しい。

「でもな、草壁は絶対に嫌がってるぞ。アンタが意地を張るのは結構だが、料理のできない女ってのはマイナスだな。前時代的な考え方もしれないが、男ってのは女の手料理が食べたいものだぞ」

「……涼二さんが？」

香澄はポツと頬を赤らめた。

……おいおい。

無表情というか冷徹。幽香と似ていると思っていたのだが、感情表現が苦手なだけらしい。十歳年上の女から惚気させられるのは勘弁して欲しい。

と、その様子を咲夜がジッと見ていたのだった。

「私が手料理を作ったら、悠斗さんは喜んでくれますか？」

「その前に食べれる物を作れるようになれよ」

咲夜は無言でキンピラをつまみ、半泣きになった。男が料理をできるなんてズルイということなのだろうが　本当に勘弁してくれ。

41：御剣流結界術

「まるで、水を得た魚のようだ　　って感じじゃねえか」
客の出入りが少ない寂れた釣堀。

御剣蒼夜は息絶える寸前のタイを池に放り込んだ。すると、それまで口をパクパクさせようとしたタイが優雅に泳ぎ始める。
「残酷なことをするなよ、馬鹿野郎」

「ふははっ、これのどこが残酷だ？　俺たち人間は生きてるだけで深い生き物なんだぜ？　大量の命を消費し、今の我々がある。同属殺しも結構。神殺しも結構。大量殺戮も結構。シエノサイド結局は、どれだけ命を消しても地球規模で鑑みればどうと言うことはないのだよ。分かったか、この愚民めが」

ミハイル・アレンスキー・ナザーロフは顔をしかめた。

蒼夜のあまりにも酷すぎる暴言に気分を害したようである。

「まあ、お前は善人だしなあ。やっぱ分かる必要はねえよ」

アカデミーの奴らでこの意見に同意するのは朽葉海斗と茜崎克己ぐらいだろう。朽葉悠斗や立花健一郎などは理解しつつも拒絶する暴論だし、その他の者は聞く耳さえ持たないはずだ。

「おっ、またかかった！」

嬉々として竿を引き上げる蒼夜。ミハイルが最後に釣り上げたのはもう二時間前である。段々と不機嫌になるミハイルとは対照的に、十分に一匹釣り上げている蒼夜は上機嫌だった。

「で、水を得た魚ってどう言うことだよ？」

横合いからのミハイルの声。

「だからなあ、と蒼夜は説明する。

「こうして釣り上げられた魚が草壁涼二ってことだ。俺が倉渕祐作か川崎美野里。魚の命は俺の一存で左右される。これが、ついこの間までも草壁涼二だ」

蒼夜はコイを池に投げ捨てた。

「で、この池の水が朽葉悠斗。それまで死にかけていた草壁が息を吹き返した。今では川崎美野里や倉渕祐作が危惧するほどの存在になっている。分かるか？ 朽葉悠斗という要素が、本来アカデミーファクターの襲撃に失敗して死亡するはずだった草壁涼二を大きくしゃがった」

アカデミーの襲撃事件 相手をしたのが悠斗でなければ、そのとき草壁の命はなかった。川崎美野里が時間稼ぎに徹し、朽葉海斗が駆け付けていたら 廊下ではなく部屋の中という状況から退路は失われ、海斗に斬られていたはずなのだ。

これが、蒼夜が予想していたシナリオである。

ところが、朽葉悠斗という不確定性因子が介入することにより。

運命が形を変えた。

蒼夜は釣り針を池に落としながら、クツクツと笑う。

「俺なあ、ミハイル。朽葉悠斗つてのは戦闘能力や頭脳だけで語るべき者ではないと思うんだ。何て言うのかね……。そう、あれは切り開く力を持っている。運命を絡め取り、都合良く操作しているのは奴の頭脳だが、あの悪運とも言つべき強運は正直今でも信じられないね」

ミハイルは舌打ちした。

「デメエ、悠斗をどうするつもりだ？」

威圧的な声。どんなに精神力を鍛えても、この長身の男に睨まれたら萎縮するだろう。野生的だが気品のある美丈夫。蒼夜は「流石は『北欧トルの守護者』、眼力だけで人を殺せそうだ」と嘲笑った。

「別に、何かするつもりはないさ。ただな、見守りたいんだ。アイツ、絶対面白いことを仕出かしてくれるぜ。そんなときや、俺たち大人が支えてやらねえといけないよな？」

朽葉悠斗は。

草壁涼二という神輿を得て。

徐々に『王佐の才』を發揮していた。

十

5月24日、そろそろ5月下旬に差しかかる。

九重香澄の本拠 悠斗たちにとっての隠れ家から最も近い駅前にあるビジネスホテル。五畳半にベッドが一つ、天井は低く部屋は薄暗い。

悠斗は将棋盤をベッドに並べ、黙考していた。

先手は左側の矢倉囲い。後手は左側に川崎美野里を仮想した美濃囲い、右側には倉淵祐作を仮想した穴熊囲い。王将は先手一枚、後手二枚。

「このような将棋、見たことも聞いたこともないぞ。しかも、先手が一方的に不利すぎる」

「なら、試してみるか？」

悠斗は右端の歩を掴み、盤に叩き付けた。

パチン、という音に緋芽はムツとして悠斗を睨み付ける。

「吾の時代に将棋はなかったと思うな。まだ現代の本将棋のように概念が確立されていなかったが、吾はそこその腕前だったのだ。

それに、現代将棋の打ち方もすでに覚えている」

「どこで覚えたんだ？」

「お主の将棋漫画だ」

悠斗は苦笑した。緋芽にとっては嘲笑とも取れる笑みである。

「さっきの台詞は勝ってから言うべきだったな」

緋芽は挑発に乗り、銀将で守りを固め始める。

将棋の序盤戦は飛車道か角道を切り開くことから始まる。駒の取り合いに入ると中盤戦だ。この頃になると囲みができて体勢が整っ

ている。駒の損得を読み違えると終盤戦で不利になるので重要な局面だ。

しかし、盤上では開始時からすでに先手不利の状況になっている。「俺の予想では」

悠斗は矢倉を作っていた銀を動かし、歩を犠牲にして役駒を得ていく。時に桂馬を利かせて防御を切り崩していく。先手側の悠斗の防御は薄くなっているのに、後手側の緋芽は苛烈な攻めに防戦に回らされて手が出せない。

「倉渚祐作と川崎美野里、この両方を相手にすれば被害が甚大なものになる。得策ではない。倉渚の魔法特性から、歩は無限にあると言えるからな」

悠斗は穴熊囲いを崩して一枚目の玉将を捕ると、寄せ手にかかった。終盤戦の総締めである。桂馬で前方に逃げたがる玉を防ぎ、横手から金銀をはがしていく。戦局が傾くにつれて緋芽の顔色が悪くなった。

「75手……予想外に手こずった」

「……負けました」

まだ52手目である。緋芽も先読みして投了したのだろう。

「っ……くっ、悔しいぞ、悠斗！ もう一度だ！」

「これで最後だからな」

悠斗は嘆息し、盤面を再構築した。今度は相手側の王将は一枚だけである。金銀などの役駒の数は変わっていないので、相変わらず先手不利なのだ。

「先ほどの手合いは倉渚祐作と川崎美野里を同時に相手にする場合、どれほどの損害が出るか確かめるためのものだ。やはり、正面から向き合うには大きすぎる相手だな」

「今度の一局は片方が相手と言うことが」

緋芽もこの盤面が仮想の戦場なのだと気付いたようだ。それまで悠斗との勝負を意識していたのが、冷静に最善の一手を狙ってくるようになった。

「なんだ、中々上手いじゃないか」

「吾を誰だと思ってる。姫様だからと言って侮るなよ。碁や将棋などはお手のもの。言い寄る男どもすべてを盤面で打ち倒したこともある」

「それは……痛快だっただろうな」

とんだじゃじゃ馬だ。古来日本では男が女の家を押しかけて求婚する訳だが、押し入った男も哀れである。逢瀬に胸を時めかせてやって来て、出されたのが将棋盤なのだから。

「勝負の行方に関わらず押し倒してくるような男は？」

「陰陽術の餌食じゃな」

「……やっぱりそうなるか」

悠斗は嘆息し、少しずつ攻め入った。

「なんだ？ 今になって勝ったら抱かせるなどと言うのではないだろうな？」

「抱いて良いのか？」

「なっ、何を言う！ こ、ここ、これは言葉のあやだ！」

「……その気がないなら口に出すな」

言葉にすると事実になると信じられていた時代に生きていたのだ。悠斗は苦笑いし、盤面を見詰めた。

今度はテンポがスローペースである。悠斗は無理に攻め入らずに、歩や桂馬、香車などからゆっくりと削り取っていく。

緋芽はやる気がないのかと考え苛烈に攻めようとするのだが、守りが意外に堅い。表情を見ると、悠斗の表情は先ほどより真剣になっていた。

「今度の手合いは？」

顔色を窺う緋芽に、悠斗は堅実な一手で答えた。

「どれだけ被害を出さずに倉渕祐作を制圧するか」

将棋の手合いなら下手になる。しかし、自分たちの戦いでは死者を出さないことが取り分け重要になってくる。

「素晴らしい一手だな」

「ありがとう……っと、王手だ」
緋芽は舌打ちした。

「皮肉だ、馬鹿者」
将棋盤がひっくり返された。

十

同ホテルのロビーには、金髪の青年が二人の部下を引き連れてフロントに押しかけていた。部下二人に入口と裏口を固めるよう指示し、青年は芝居じみた仕草で肩をすくめながらエレベータに乗り込んだ。

「さて、朽葉悠斗は俺の見込み通りの人物なのか」

御剣蒼夜は不敵の笑みを浮かべ、七階のボタンを押した。背広の内側に呑んだ小太刀の重みを確認する。接触まであと二分弱。蒼夜は戦闘行為に及ぶ確立は80%を上回ると当たりを付けていた。

黒スーツの胸ポケットから無線機を取り出し、別働隊に連絡する。
「Are You Ready 準備は良いか？」

「Oh, Yes 勿論です」

隊長補佐を務める部下が、蒼夜のノリに合わせて英語で答える。

「よし、対象区画は六階天井から七階床まで。くれぐれも破られることのないように、最高の術式で迎え撃つぞ」

このホテルを取り囲むように五人の部下を配置している。彼らは蒼夜の部隊で特に優秀な者たちで、今回の作戦の要である。

その陣形は五芒星。陰陽五行を司るペンタグラム。

『青神歳星、東方青龍』

『赤神螢惑、南方朱雀』

『白神太白、西方白虎』

『黒神辰星、北方玄武』

部下たちの詠唱。それは各人が使役する式神の守護色、守護星、守護包囲と御名を連ねたものだ。

『黄神填星、中央麒麟』

五人目が詠唱を終える。

蒼夜は小太刀を抜き取り、エレベータを降りた。

廊下が左右に広がり、オレンジ色のアップライトが薄っすらと闇を払っている。

コッソん……コッソんと靴音が響く。

やがて、ある部屋の前で音が鳴り止む。

『四神天帝破邪祈祷、急急如律令』

蒼夜の口元から、最後の呪文が唱えられる。

そして、世界が停止しホテルの七階が切り取られた。

42：秘剣、燕返し

障害者マークが貼られた車が路上駐車されている。巡回している交通課の警官はその車を見なかったことにする。他の車がレッカーされて行くのに、九重香澄の車は無視されていた。

「障害者とは心が澄んだ聖人のように思われているんですよ」
テレビのドキュメンタリーの構造はどれだけ視聴者を感動させるかにある。ただ普通の生活を送っているのに涙ぐましい努力だと持て囃す。

普通の生活を送ることだけで精一杯、温かく見守ってやろう。しかし同情とは、自分より弱い者を見下ろし、優位に立っている場合にしか適用されない感情である。香澄の声には諦観があった。どれだけ努力しても、一般人にとっての格下。

草壁が「いいえ、それは違いますよ」と呟いた。

「障害者を補導したことが職場仲間や親類縁者に知られたら軽蔑されそうじゃないですか。警察官は法の番人ではないのですよ。彼らはただの人間だ。保身と安全を優先する、薄汚い野良犬です」

「草壁さんらしい意見ですね」

咲夜が言う。彼女は車のドアを開けて運転席に滑り込む香澄を手伝っていた。

草壁は皮肉の笑みを浮かべた。

「悠斗君も同意権だと思えますがね」

「……卑怯な物言いです」

「これは失礼」

意味のないやり取りの後、三人は乗車した。

見上げられるのは少し大き目のビジネスホテル。一階に豪華なレストランが入っていて内装が凝っているのに、二階からの客室は貧相だと聞く。ある意味詐欺である。

ホテルには五人分の部屋を取っている。

「しかし、泊まっているのは悠斗君と緋芽さんだけですか」

「この行動には、どんな意味があるのですか？」

「そうですね……」

咲夜の質問に、草壁は皮肉の笑みを消して考える。

「私は魔法庁の情報収集能力を買っているのですよ。警察を上から支配していますし、他組織でも多くのスパイが活動していますからね。かつての私も、あの組織のスパイでしたから」

「私たちが偽名を使わずに部屋を取ったことも、向こうに知られている　と？」

「流石は物分りが早い。ええ、そうですね。朽葉悠斗と草壁涼二の名前があるだけで十分なのです。たった数人の魔法使いですが、『悠斗君の百人斬り』あのために私たちは警戒されている。おっと、お喋りが過ぎましたね」

草壁は話を切り上げた。

これは悠斗の作戦だ。その内容や目的は草壁にしか知らされていない。

悠斗は上手くいけばこの四面楚歌の状況を一変させられると語った。戦局を将棋盤一つで表現できるように、パワーバランスを改変させるのだと。

まずは魔法庁を　引き入れる。

「朽葉悠斗は博打を打たない。これは綿密な作戦なのですよ」

草壁が呟くと同時、香澄がアクセルを入れて車を走らせた。

御剣蒼夜は裏部隊、隠密班第五部隊の隊長を務めている。

第五部隊 御剣部隊 は、情報収集に特化した諜報員、結界形成などの能力に長けた魔術師、戦闘能力を重視した魔法使いを各五人ずつ集めている。合計十六人で、魔法庁隠密班の中でも少数部隊である。

御剣蒼夜に見初められた魔法使いの中で、佐々木流水は特別だった。

副隊長という立場もそうだが、彼は蒼夜が生まれたときから付き従ってきた御剣家の使用人なのである。もう五十代にも差しかかる年齢ながら、未だ現役で多くの魔法使いを屠ってきた。

白髪の紳士とも言うべき男性で、鼠色のスーツを着ている。背広姿が主の蒼夜よりも様になっているのは、やはり年の功だろう。

片手に竹刀袋を携えた銀縁眼鏡の初老の男に、ホテルの従業員は不審そうに視線を傾けながらも声をかけることはなかった。

魔法使いの二人は出入り口の閉鎖、残りの二人は結界を形成している魔術師の護衛を担当している。残った一人、流水はホテルの備品室に直行した。入口右隣では自家発電機が稼働している。

そこでは、十数人の男たちが銃器を点検していた。

「なんだ、アンタは？」

男たちは尋ねながら、拳銃を構えていた。引き金に指がかかっている。なるほど、見られたからには殺すしかない訳で、たとえ流水がホテルの従業員であっても殺すと言うことなのだ。

流水は紳士的に一礼し 抜刀した。

「魔術カルテルの薄汚い駄犬どもに、名乗る名など御座いません」
男たちが浮き足立つ。彼らも朽葉悠斗と草壁涼二の宿泊に気付き、ここで災いの芽を摘まんと準備していた連中である。

しかし、牙を研いでいる襲撃者たちが、ただの温厚そうな男性に圧倒されていた。

「野郎！」

一丁の拳銃が火を噴いた。

「備前長船長光、刃渡り三尺三寸（99センチ）。参ります」

黒鞘の日本刀が白く輝き、鉛色の弾丸が弾き返される。

野太刀を返しながら転進、縮地で間合いを詰め、剣先で男の顎骨を砕いた。

「紫炎となれ、灼熱の団塊！」

視線を右に向けると、こんな室内で火炎系の魔術を詠唱している者がいる。

流水は苦笑する。敵味方の区別が付かないという次元ではない。

これでは自滅してしまう。

流水は刀を脇構えに置き、円を描きながら上方に振り上げた。

「秘剣、燕返し」

剣閃が打ち出された火炎を消滅させ、術者の頭蓋が砕けた。

「ディストラクション・バンドラ空間破壊」、それは空間破壊の魔法だった。空間を破壊し、破壊された空間の向こうに斬撃を届かせただけだ。いかなる攻撃をも破壊し、その先にある敵を打ち倒す。

佐々木流水とは、かの佐々木小次郎の子孫だった。

「こちらは佐々木小次郎が剣術試合の褒美に得た刀、備前長船長光で御座いますれば。皆様もこの秘剣を味わってみますかな？ 当然ながら拒否権は御座いませんが」

襲撃する側がされる側に回った瞬間だった。

一人の修羅が、十数人を斬殺するのに一分もかからなかったと言った。

結界術でホテルは閉鎖され、どんな魔術を使っても床や壁は破壊されないようになっていた。逃げるには外にいる魔術師五人を倒すしかない。蒼夜一人を倒すか、魔術師五人を倒すかの二択である。御剣蒼夜はおもむろにドアを開け放った。

「よう、少年」

蒼夜が気さくに声をかけ、悠斗が刀の鯉口を切るのは同時だった。室内には悠斗一人。蒼夜は眉をくもらせ、周囲を見回す。五人分の部屋を取っているからと言って、素直に五人泊まっていると考えるのは浅はかである。

蒼夜はそこまで愚鈍ではないので、ホテルに泊まっている者は二、三人だと考えていた。ついでに、その二人か三人は一つの部屋に固まっている……と。

「……まさか！」

蒼夜の脳髓に電撃が走る。咄嗟に地面に手を付き、天井に足が届くほどの宙返りをした。足元を通り抜ける光線は、諜報員からの報告で知っていた。

「ハッ、あのお姫様も一緒ってことか！」

向かいの部屋のドアに大穴が開いている。

大照津姫　緋芽が向かいの部屋から顔を出した。

『斬斬斬、ダークプリンガー』

視線を背後に向けると、悠斗が多重詠唱しながら間合いを詰めてくる。

「舐めるなああああああ！」

蒼夜は半身になって漆黒の斬撃を掻い潜ると、小太刀を振り抜いた。

悠斗は刀を横一文字に沿って滑らせ、小太刀の間合いで戦わせない。上手い牽制だ、と舌打ちしながら蒼夜は後退した。

すぐさま緋芽の魔術。

『怨、黄龍！』

蒼夜は迎撃の魔術を放つ。

『貪れ、青龍』

迫りくる土色の壁を、植物の蔦が絡め取って砕いてしまった。緋芽のものとは赴きが異なるが、これは陰陽術である。

「陰陽師か。この世界で吾と同じ術師を始めて見たぞ。廃れてしまったのかと不安になったのだが、勘違いだったようじゃな」

「いや、勘違いじゃねえよ。事実、陰陽術は廃れてしまった」

戦後しばらくしてから設立された国立魔術アカデミーは主立って西洋魔術の思想を取り入れた。現在ではアリストテレスやバラケルススの火・水・地・風、四大元素説が魔術の根底に根付いてしまっている。

「五行思想の『金』を理解できない奴らばかりでな。陰陽術を教えるのが難しくなっちゃった。跡継ぎが育たねえんだよ。まったく、世知辛い世の中になってしまったもんだぜ」

蒼夜は溜息を吐き、小太刀を垂直に立てた。

「さて、関係ない話はここまでにして、戦いを再開しようや」

「いや、その前にアンタの目的を聞いておきたい」

「目的なんてねえよ。ただ、見極めに来ただけだ。テメエらの存在が、どれだけこの汚れた世界に影響を与えるのか、この腐った世界を矯正できるのか、それさえ知れるなら後はもうどうでも良い」

「魔法庁にアンタのような人材がいたとはな」

悠斗は苦笑し、刀を構えた。

刀身に炎が宿る。火之迦具土の力が働いているのだ。

「言っなって。俺自身そう思ってるんだからよ」

蒼夜も苦笑し、腕を捻って垂直に立てた刀を背中に回した。

43：刀剣の魔法使い

四発の炎弾が放たれる。火炎系の魔術で、かなり高度な芸当だった。

結界を張りながらこれだけ戦えるなら上出来だろう。草壁は半ば感心しながら、ただ右腕で殴り付けた。炎も人間も、ただ殴るだけですべてが終わった。

「さて、まずはこれで一人目ですね」

草壁はぐったりした術者に『魔封じの手枷』をかけると、九重香澄が運転する車のトランクに放り込んだ。

「次は貴方の番ですよ」

「……そうですね」

咲夜はホテルを見上げながら退屈そうに頷いた。

十

垂直に立てた刀を背中に回す　その異様な構えに悠斗は必殺を見たらしい。

悠斗の表情が真剣になる。八双に構えられた刀が、悠斗の感情と魔力に反応して燃え上がる。

緋芽は蒼夜の背中に魔術を放つべきか迷った。緋芽の攻撃が回避されれば、その攻撃はそのまま悠斗に向かう。奇襲用の布陣が仇となっていた。かと言って今さら立ち位置を変える訳にもいかず。

「では、私の相手をして頂けませんかな、お嬢さん？」

気配もなく背後に初老の剣士が現れる。

「なっ、貴様はどこから　！」

湧いて出てきたのか、と言おうとして絶句する。地上七階にある

部屋の窓が開け放たれていたのだ。外から侵入したのである。

「我が主に加勢は必要なさそうですし、少々手持ち無沙汰でしてな。この老木で宜しければ、お相手致しますぞ」

提案でありながら、有無を言わせぬ口調。

緋芽は苛立ちを抑え、両手に魔力を集めた。

「後悔するなよ、老人」

「ほほう、これは威勢の良い小娘ですな」

老人は異様に長い刀を抜刀した。以前に見た悠斗の胴田貫よりも長い野太刀である。備前長船長光三尺三寸だった。

「佐々木流水、参りますぞ！」

ゆっくりとした踏み込み、誘いをかける動きだった。

「楽、赤龍！」

緋芽の攻撃を潰して反撃に移る、後の先を取る戦い方だ。そこまですんだ緋芽はまず陰陽術を撃ってみた。遡る火炎が流水に襲いかかる。

「おお、これは珍しい。陰陽術ですか」

まずはどう躲すか、様子を見ていた緋芽は我が目を疑った。

老人が剣を振り下ろした瞬間、まるでそこには最初から何もなかったかのように火炎が消滅した。しかも、緋芽の着物が縦に裂けて下帯まで寸断されてしまったのである。

「貴様、今何をした？」

「それをお教えするほど私は耄碌しておりませんよ」

「抜かせ！ 哀、黒龍！」

続いて押し流す濁流が佐々木流水に襲いかかるが、またしても流水はそれを消滅させてしまう。が、今度は緋芽も予測していた。背後に飛びながら、左手で魔法を打ち込む。

「むっ」

床を転がり光線を回避する流水に右手で二撃目を打ち込んだ。三段構えの連続攻撃である。しかし、今回は刀が振られていないのに光線が消滅する。

「なるほどな。お主の魔法、段々と分かってきたぞ」

「さて、そのはずは御座いませんが……」

と言うが、流水は表情を隠しきれていない。

おそらく、空間をリセット、あるいは消滅させてしまうものだろう。流水の表情から見ると、刀を振らずに空間を消滅させるのは最後の手段だったはず。連続で使用するのは難しいのだと判断する。

刀を振り魔法を使って一度、刀を振らずに魔法を使って二度。

三度目は 攻撃が通る。

「これで終わらせるぞ、老人！」

両者は睨み合い、同時に動き出した。

『怒、白龍！』

流水の左方、壁から無数の刃が突き出す。無効化するために剣を振れば、正面からの緋芽の魔法を喰らってしまう。流水は右に移動するしかない。

流水には攻める余裕が残っている。

だが 攻めさせない。右手で魔法を打ち込み、五色の光線が流水を射抜こうとする。

光線が消滅し、振り下ろされた刀から伸びる斬撃が緋芽を襲った。

『怨、黄龍！』

それを、土色の壁で防ぎ。

同時に攻撃した。

「なんですと！」

防御に使った壁で、そのまま攻撃する。流水は魔法で消すしかない。

緋芽は不敵に微笑んだ。左手の主砲を流水に向ける。

「これで王手だな。魔法に頼りすぎるなよ、老人」

一度悠斗のように言ってみてみたかった緋芽である。

一人目の魔術師と遭遇した場所を元に、香澄がノートPCで五人の術者の位置を計算する。五芒星を基盤とした結界魔術で、中心がビジネスホテルだと分かっていたれば後は簡単だった。

二箇所目には結界を張る魔術師と護衛の魔法使いが待機していた。「魔法使いは私が潰しますから」

草壁はそう言い置くと、一人の黒服に立ちはだかった。

咲夜は嘆息し、一度ホテルを見上げてから魔術師と対峙する。

本音を言うなら悠斗と一緒に戦いたかった。だが、魔法を使えない咲夜では役不足だった。悠斗はすべてを語らないが、咲夜はそういう立場なのだ。

……まだ、あの人の隣は貴女に任せます。

心の中で着物の少女に語りかける。

「では、始めましょうか。『黒炎弑式、黒死蝶』」

咲夜は周囲に蝶々を展開し、魔術師に突撃させた。

十

御剣の向こうで戦闘に及んでいる緋芽を視界に納めながら、悠斗と蒼夜は無言の時を過ごした。このまま守勢に回るのは面白くない。この膠着状態を打ち崩せる策を、悠斗の思考は探し続ける。

「三大魔法一族の一つ、御剣家の歴史は平安まで遡る。だがまあ、戦国時代以前のは大した歴史じゃねえ。宮廷陰陽師の血脈を受け継ぐ八神ほど華々しくねえし、ひたすら戦闘術を研ぎ澄ませて暗殺業を営んでいた朽葉ほど薄汚くない。ただの在野の陰陽師の子孫だよ」

「……九州全土に渡って判図を広げたと聞くが」

「だからそれは、戦国時代以降なんだよ。平安貴族やらとは無関係

つてことだ。んで、俺の家は応仁の乱より先、急激に勢力を広げていった訳だ。つまり」

小太刀の剣先が、ピクリと動いた。

来る！

悠斗は床を蹴った。蒼夜は動かない。

「御剣は武士の一族と言うことだッ！！」

蒼夜は不動の体勢で、列迫の気合を発した。

二歩目で『爆ぜよ、破碎の力』と叫び足元を破壊する悠斗。衝撃波で空中に舞い上がり、宙返ししながら背後を取ろうとする。

刹那、部屋中の壁や床、天井から大量の剣が突き出した。

「これは！」

天井に触れるほど飛翔していた悠斗は背中を襲われることになった。

『防御、闇の盾！』

咄嗟に背後に防壁を展開する。

しかし、これで正面の防御がから空きになった。

「しまった！」

この展開を読んでいたのだろう。ここまで自分の戦い方を分析し、瞬時に攻守を計るとは思わなかった。事前に研究されていたのだと思ひ至る。

しかも。

「我に宿りし金山毘古神よ！ 天地開闢、此処に魔を断つ剣と成れ！」

蒼夜の持つ小太刀の刀身が伸び、全長四尺（120センチメートル）を超える大刀になる。刀身から紫電が迸り金色に輝いた。

『雷鳴閃！』

刀が振り下ろされ、空中の悠斗を断たんとする。

三重詠唱でも 防ぎ切れない。

「つ、『死守せよ、嫉妬の王！』」
レウイアタン

無数の鱗が展開し、長くなつた蒼夜の太刀を受け止めた。瞬間、脳髓に灼熱が流れ込む。シナプスが焼き切れ、赤熱した鉄を内臓に押し込まれる感覚。意識を失うほどの吐き気が悠斗に襲いかかった。

しかし、今はまだ倒れられない。時間稼ぎできる内に後退する。火花が迸り、鱗の壁が砕け散った。

「今を防ぐとはなあ。つたく、呆れるほどの悪運の強さだぜ」

「……お前、神喰いだつたのか」

「まあな。御剣家の長男は生まれつき病弱でな。神を受け入れた瞬間、精神よりも先に肉体が壊れるらしいってことだ。仕方なく次男の俺に矛先が向いたのさ。だがまあ、肩身が狭くなつて不便なものだぜ」

聞く者が聞けば贅沢な悩みである。だが、穢れていないとは言え神を取り込むのはかなりの精神を消耗する。海斗や蒼夜のように平然としている方が稀であつて、咲夜などは精神が不安定になつた所為で悠斗に依存しているのである（と悠斗は考えている）。

「……金山毘古神か」
カナヤマヒコノカミ
ホノカグツチノカミ

たしか火之迦具土神を生んだときの火傷で苦しんでいる伊邪那美イザナミ神が吐き出したヘドから生まれた神である。鉾山や陶器の神なのだが、御剣の魔法から見るに剣神と考えるべきだろう。

刀に電撃が走つたのは、神の力を引き出した魔術。

「魔法は、金属生成か？」

「ご名答。御剣家が秘術『白刃乱舞』ソード・オブ・カオスはどうかな？」

「大した切れ味だ。だが、二度は通じない」

蒼夜はニツと笑みを浮かべた。このときの悠斗と蒼夜の間には、敵意はなかつたのだろうと思う。

それでも戦いを止めないのは、互いの全力を見てみたいからだつた。

「次の一撃で終わらせたいのだが、どうだ？」

「良いぜ。来いよ。お前の全部を俺に見せてみる！」

蒼夜は四尺の太刀を正眼に、悠斗も二尺一寸の太刀を正眼に。お互いの全力を賭けて、最後の立合いが始まった。

蒼夜は片手を刀の柄から外し、小刀を作り出して投擲する。金属生成の魔法を持つなら、この程度のこととは造作もないだろう。

悠斗は首を捻って回避し、そのまま直進する。

『刺刺刺、ダークスナイプ！』

続いて放たれる『闇の矢』の三重詠唱。無数の鏃が蒼夜に襲いかかる。

しかし。

「まだだ！ まだお前の全力には足りねえ！」

蒼夜の全身から剣山のごとく刃が突き出し、すべての矢を弾き返した。

まるで針鼠だ。傍から見れば、みつともない格好。だが、悠斗は尊敬の念さえ覚えていた。目の前の青年は、もう全力を出し切っている。あとは自分だけだ。

「行くぜ！ 『雷鳴閃！』」

紫電を散らす刃が迫る。

蒼夜の顔に浮かぶのは勝利。雷鳴を帯びた剣撃が悠斗の頭部に叩き込まれる。

『跳躍せよ、色欲アスモテウスの王！』

死の直前、悠斗の姿が掻き消えた。現れるは蒼夜の背後。

「っ、小癩！」

蒼夜の背中から先ほどよりも大量の刃が突き出し、一枚の壁と化した。

隙間だらけだが鋼鉄の防御である。悠斗の刀は蒼夜に触れることすら敵わない。

しかし悠斗は 刀を振り下ろした。

「なんだと！」

一直線に振り下ろされた刃光が、無数に分裂したのである。

蛭子の持つ魔法、『刃桜繚乱』。

『魂滅』の剣こそ無いが、これだけでもかなりの威力である。無数に分かれた刃の光が蒼夜の剣を一枚一枚叩き壊していく。

金属の粉が大気に広がった。

「……俺の……負けか」

ズタズタになった背広を羽織った青年は、寂しそうに呟いた。

44：黄泉がえり

5月30日の茜坂克己の起床時間は午前4：30前後。

充電器に挿していた携帯電話を手に取り着信履歴を確認する。見知らぬ番号。携帯の番号のようである。非通知にもせず、無用心なことだ。あるいは、見せ付けたかったのかもしれない。

何を？

さて、何だろう。まあ、どのような意図があったとしても自分には無関係だ。

学習机に設置してあるタワー型PCを起動し、その隣にあるモニターの電源も入れる。やがてハードディスクが回り始め、OSが立ち上がる。

「さて、犯罪行為と洒落込みますかにやー」

電話会社にクラッキング、手ごろな社員のIDとパスを拝借し、顧客名簿を手当たり次第、面倒だが海外サーバにアップロードしておく。アクセスログを消すのも忘れない。

「……さてさて」

名簿をソートし、履歴の番号と照らし合わせる。

海外からの不法労働者が用意したプリペイド式携帯なら絶対に持ち主が割れないだろうが、それをするなら非通知にしてかけてくるだろう。まあ非通知にしても克己には無意味なのだが。

しかし。

「まさか……これは……」

深夜帯に克己に電話をかけた相手。

国立魔術アカデミー元生徒会長、大泉大悟。

魔法名は『^{グランド・マスター}最終戦争』。倉渕祐作や草壁涼二に匹敵する魔法使いである。

克己は我知らず、息を呑んだ。まさか、ただの悪戯だろう。笑い飛ばすような内容なのである。誰かが大悟会長の携帯で悪戯電話をかけたに違いない。そう思いたかった。

行方不明になって、死亡した大泉大悟が克己に電話をかけるはずがないのである。

死人が冥界から電話をかけたなんて、今時ホラー映画でも流行らない。生き返って生者に復讐するなんて、そんなものは生き残った者の罪悪感を体現しただけに過ぎない。

死者が……生き返る？

そもそも、どうして大泉大悟は命を落とすことになったのだろうか。たった一人で数百人の魔術師と対峙しても余力が残るほどである。比類なき戦闘能力で動乱巻き起こるアカデミーを統治したのだ。

見方によれば、暴力で押さえ付けたのである。

手が汗でびしょ濡れになる。生唾を飲み込んだとき、克己の携帯が震え出した。ディスプレイに表示されているのは、先ほど調べた大泉大悟の番号だ。

「……久しぶりだな、克己」

「まさか、本当に？」

生きていたのか　それは声にならなかった。

「そうだよ、俺だ。大泉大悟だ」

大泉大悟はククツと笑う。大柄で毛深くて熊のような男だった。同い年の連中の中で、ひときわ異彩を放っていたのである。それこそ少年とは言えないほどに、肉体的にも精神的にも成熟した人だった。

「なぜアンタが生きている？」

知らず、元の口調に戻っている克己。だが、大悟は豹変した克己のことを知っていない。違和など、覚えるはずがない。これが克己の標準なのである。

「生きている……か」

「いや、それよりもだ。聖先輩のことはどうしたんだよ。アンタた

ち、傍目から見ても良い関係だったじゃないか。それがどうして、他の男に寝取られてるんだよ」

大切な人を失って、心の傷を別のもので補う。それは分かる。感情では分かりたくないが、理性では分かる。他人が口を挟むことではないし、そっとしておくべきだと黙っていた。

しかし生きているのだ。大泉大悟はこうして克己と話している。

『聖には悪いと思ってる』

「なら態度で示せて言ってるんだよ！」

どうして放っているのか。来宮聖は落ち着いた物腰で、皆のお姉さんのな立場であった。決して目立つような人ではなかったが、些細な悩み事でも親身になって相談に乗ってくれる人だった。

あの悠斗をして「聖先輩には隠し事は出来そうにない」と言わせしめるほどである。

『だからなあ、克己。生きているって質問に、俺はまだ答えてないだろうが』

「え？」

電話口の向こうで、大悟が苦笑するのが分かった。

『厳密に言えば、俺は生きていない。つまり、死んでいる』

「は？ いや、え？ ちょっと待てよ!？」

『ほら、あれだ。イザナギって神さんが死んだイザナミに会いに行ったよな？ んで、ドロドロに腐ったイザナミを見て悲鳴を上げたんだ。気持ち悪いってな。ほら、昔から死人は気持ち悪いって相場が決まってるんだよ』

黄泉がえり。そう言えば、悠斗から聞いたことがある。

縄文時代の埋葬方式は当然ながら土葬なのだが、その方式は我々の想像も付かない形だったらしい。両腕と両足を縛り、まるで胎児のように丸まった姿で地面に埋められるのである。

母体回帰とも取れる。だが、それは死者が起き上がることを恐れたのではないだろうか。

『まあ、神話なんざ別にどうでも良いか。肝心なことは俺が死んで

いるってことだ』

「死んで……いる？　ならこの電話は何なんだ！」

『悠斗ならもう答えに行き着いているんだがなあ』

「良いから答えろよ！」

ガラではない。克己自身、そう思っていた。

だが、感情が抑えられなかった。

大悟は失望の溜息を吐く。

『死者を蘇らせる魔法があるだろうがボケ。俺は倉渕祐作に殺され、倉渕祐作の人形にされたって訳よ』

克己の腕から携帯が零れ落ちた。

十

両目を見開く。すでに朝日が上っていた。カーテンから風がそよぎ、木漏れ日が純白のシーツに降り注いでいる。枕元の時計には5月30日、午前8:24とある。

新緑の匂いと機械油の臭い。

ああそうか、と納得する。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

なぜか隣で寝ている咲夜は置いておいて　状況を確認する。

場所は九重香澄のログハウス。機械油は表でエンジンを温めているディーゼル車が原因だろう。たしか条例違反ではなかっただろうか。そろそろ電気自動車に買い換えるべきである。

それはともかく。

「昨晚の戦闘で疲労し、すべてを放り出して睡眠を優先した……つてところか」

悠斗の隣で横になっっている咲夜を見ながら、既成事実を作った訳

ではないと言いつ聞かせる。本当に、予想が付かない娘である。とは言えここで襲いかかっても、抵抗の一つもしないはずだ。それだけは予想できる。

……瑠璃。

馬鹿な考えだ。

過去に拘泥することも、早朝なのに性的なことでも思案するのも。

『俺たちは今日明日にでも命を落とすかもしれない。それは惚れた女も同じことだぜ。俺たちが派手に活躍すれば人質にされるだろうしな。んで、テメエの子どもがより良い魔法を継承するために、犯されることもある。分かるか？』

……分かりたくない。

『だからなあ、機会があれば抱いておけ。身体で繋がっていれば女は安心する。男は損得で動くが、女つてのは感情を優先する傾向にあるからな。あつ、これメモしておけよ』

「悠斗さん？」

「ああ、いや……。何でもない」

悠斗は立ち上がった。どうも、調子が出ない。

今頃になってあの人の言葉を思い出さなんて、悪趣味すぎる。死んだと聞いたときも、何一つ感慨を覚えなかったのに、どうして今頃……。

大悟会長の言葉を思い出したのだろう。

悠斗は頬を軽く叩き、上着を羽織って部屋を出た。

広々とした、迷路のような屋敷である。無数にある寝室と、料理店でも開けそうな台所、調度品だけで一ヶ月は生活できそうなトイレ、テニスでもできそうな居間。これらがすべて地下にあるのだから呆れて声も出ない。

御剣蒼夜が居間で煙草を吸っていた。

「おお、ようやくお目覚めか？ ったく、まだ学生気分でののかよ。社会人になったら朝六時には出勤しないといけないんだぜ？

まあ、そんなときゃ引越せよって話だけだな」

「御剣家の屋敷から出勤していたのか？」

「ああ、これがまた遠いんだよ。しかも満員電車。辞表出しても上司は受け取らねえし、毎日徹夜で働かせるし。職場に布団持ち込んで一ヶ月オフィスで生活したこともあるぜ」

魔法庁の職場がどこにあるのかは分からないが、朝六時起床なら通勤二、三時間だろうか。

まあ、そんなことは悠斗には毛ほども感心がない。

「じゃあ、本題に入るか」

そう言つと、蒼夜は嬉しそうに笑みを浮かべた。

ソファに腰を下ろし、蒼夜が啜っていた煙草を奪い取る。

「不愉快だ」

瞬間、蒼夜の笑みが消え失せる。

まずは対等に話し合える場を設ける。先ほどまで蒼夜は、明らかにこちらを年下と侮っていた。本人に自覚はなかっただろう。しかし、心のどこかで自分の方が優位に立っていると錯覚していたのは事実だ。

「アドバンテージはこちらにあると言つことを知っておいて貰いたい」

「……俺の部下か？」

「意外に……いや、やはりか。中々に聡いものだな」

昨日、結界を張っていた魔術師と護衛の魔法使い、合計七人を捕縛していた。

そのすべてが 人質だ。

「こちらの要求は二つ。聞き入れて貰うぞ」

「……おいおい」

蒼夜は口元を歪めた。

「そりゃちよつと横暴じゃねえか？ 一つだけならまだ納得できるがよ、二つって何だよ。欲張りはいけねえぜ。芥川の蜘蛛の糸を思い出せつっの」

「一つ、倉淵祐作の陣営を調査し、逐次こちらに情報を流すこと」

「おい、聞けよ。勝手に話を進めてるんじゃないよ」

「情報に齟齬が見られたとき、人質を一人殺害する」

蒼夜は絶句し、黙り込んだ。

部下の命が必要ないなら、断わることも可能だ。むしろ、この世の裏側で暗躍している組織なら、そちらの方が正しい選択である。

しかし、それでは部下が付いてこない。蒼夜は部下と信頼関係を築き、現場で功績を上げるような性格をしている。ここで部下を見捨てたら、その信頼関係に傷が付く。

「二つ」

「悠斗は無情に、二つ目の要求を言い放った。」

45：報われない想い

大泉大悟は無言で携帯電話を眺めていた。かつて、自分が生者だったときから愛用していた携帯電話。聖と一緒に選んだものだった。「たしか、これを選ぶだけで二時間もかかったんだよな」

その後、契約やら何やらで時間を取られ、結局は半日を浪費した。あの大悟は不機嫌顔を通り越して無表情の境地に達していたらしいが、今となってはしのび笑いでもしたくなる思い出だ。

「……だがまあ、高望みはしないでおう」

大悟は右手の指を覗き見る。人差し指の爪が腐って剥れかけていた。

……もう、あまり時間は残されていないか。

「克己君の調子はどうでしたか？」

「焦ってたよ。んで、キレてたなあ、あれは」

「でしょうね。まさか、貴方が生きていたとは思いませんまい」

倉渕祐作は純白のミラーシールドを外し、上気した息を整えた。

サンドバッグを二日間殴り続けていたのだ。正気の沙汰ではない。だが、これが祐作にとってのウォーミングアップなのである。ただの準備体操に過ぎないのだと、彼自身が語っていた。

「『ネクロ・フエウスト 輪廻転生』には二つの使い方がありません」

どちらとも死者を操る秘術なのだが、片方は自我のない奴隷。もう片方は自我を残した部下である。ただし、倉渕祐作の拳で殺害した者しか操れないという条件がある。

奴隷の場合、祐作自身が割く魔力は大したものではない。百人単位の聖騎士を従わせても、また祐作の魔力は余りある。

しかし部下にする場合、祐作の魔力では二人が限界だ。

ロボットの理論の一つに、ある程度の発達したAIを搭載した方が運用しやすいと言うものがある。死者を操るにしても、生前の人格を流用した方が性能が高い兵隊が出来上がった。

命令には絶対服従。

これは大悟の脳裏に刻み込まれたプログラムのようなものである。

「……で、準備運動したってことは、そろそろ打って出る訳か？」

「ええ、ちよつと厄介なことになりましたね。悠斗君が奇策を練ってくれたようで、川崎先生の立場が危うい。アカデミーを内部から切り崩すつもりでしたが、まだるっこしいことは止めじます」

「早くしてくれよ。もう、俺の身体も長くねえからな」

祐作は不気味に微笑んだ。

「ええ、今晚にでも始めようかと思っていますよ」

祐作は嗤う。

「さあ、宴を始めましょう」

両手を広げ、歓喜に震える。

十

九重香澄は大鍋に盛ったうどんを、人質になった蒼夜の部下たちに振舞った。

あまりにも適当な食事だったが、人質という立場から非難は上がらない。だがそれも、今日明日までの話だ。それ以降になると、奴らは人質という境遇に慣れて立場改善を要求してくる。

悠斗と草壁、咲夜と緋芽はもう屋敷を出ている。

蒼夜も不機嫌な顔で出て行った。

「……涼二さん」

香澄は人知れず、溜息を吐いた。

あれは台風が到来していた日。

例年のごとく河川が増水し、家屋が水浸しになり、飛行機のダイヤが乱れ、土砂崩れで死傷者が出る。今年最大の台風と言っても良

いほどで、しかし屋敷に籠っている香澄には無関係だった。

その頃から、香澄は密輸入した武器を改造して販売する、武器承認のようなことをしていた。トランクケース型のパンツァーファウストや携帯電話型のデリンジャー、外国車に戦車並みの強度を与えてみたり、摂取してから一カ月後に死亡する毒薬を開発してみたこともあった。

しかし、勝手に商売を始めたためか、縄張りを荒らされたと勘違いした暴力団に目を付けられた。国内で頭角を現し始めていた魔術カルテルと抗争しており、収入源が激減していた組だった。

屋敷への襲撃。

畏によって蜂の巣にされる任侠者たち。

しかし、その中に魔術師がいたのである。魔術カルテルと対等に渡り合うには、『目には目を、歯には歯を』。魔術師には魔術師を古臭い矜持を捨て切れない暴力団にしては、進んでいる組織だった。

「一般人の癖に、思いのほか手こずらされたな」

黒スーツの、他のヤクザ者と変わりない格好をした男だった。

元々ヤクザに生まれるべくして生まれてきたようである。少なくともオカルトの頂点、神秘学を実戦してきた魔術師には見えなかった。

「覚悟は出来いるだろうな？」

そう言って、男はニツと笑った。

大体、後のことは予想できた。

香澄を女として、痛め付けるのである。今までは懐に隠していたデリンジャーで何とかだったが、魔術師相手に銃弾が通用するとは思えない。

なら。

香澄は諦めた。なるべくして、この結果である。

なら、素直に受け入れるしかないだろう。

「ふむ、私としてはもう少し粘ってくれるかと期待していたのですが……」

「誰だ！」

突如、割って入った第三者の声。

「おやおや、知りませんか？ 私、これでも中々有名なのではと思っていたのですがね。もしかして自意識過剰でしたかね？ いえ、別に知らなくても取って食べたりはしませんよ。もつとも、ここ数日マトモなものは口にしていないのでカニバリズムに走りたくならないことはないのですがね」

否定の連続って、難しいですよ。

スーツを着た男は、自分の言葉に困惑しているらしい。

異様な男だった。ギラギラと怪しく光る瞳、落ち窪んだ眼窩、削げた頬。しかし、胃の腑が凍えそうな圧倒的な存在感を持った男である。

しかし、男は隻腕だった。左腕が無いのである。

「私、草壁涼二と申します。どうぞお見知りおきを」

「草壁……涼二……？」

香澄は無意識に男の名を紡いでいた。

とは言え、これから死ぬ人に教えても意味なんて有りはしません。

草壁涼二と暴力団の男との対決は、勝負にならなかった。

『冷たき水よ、刃となれ！』

軽く踏み込む草壁に、男が魔術を放つ。

薄い水の刃は、草壁に触れた瞬間霧散した。

「ダーティー・サンクチュアリ神域汚辱」です。便利でしょう？」

草壁は笑いながら、右腕で男の喉元を握り締めた。男は声帯が押さえ込まれ、発音ができなくなる。魔術の詠唱を封じ込め、そのまま気管を絞め殺した。

絞首刑の死因は酸欠ではない。

首吊り台を使い、高所より落下する衝撃で頸椎をへし折り確実に

殺すのである。苦しそうな殺し方だと思われがちだが、残酷な殺し方なら現代まで残っていないだろう。電気椅子に取り変わっているはずである。

「さて、死にましたかね？ まったく……片腕だと不便なものです。ところでその貴女、無事でしたか？ 私、貴女に仕事の依頼があるのですよ。いえいえ、今すぐにはないのですがね。それよりも、何か食べ物が欲しいのですが」

隻腕の男は矢継ぎ早に要求した。

草壁の依頼は義手の製作だった。私生活で困らない範囲で構わないということだった。だが、内心では期待していたのだろう。香澄に依頼するということは、つまりが兵器開発である。

そして香澄は草壁の期待以上の成果を収めた。

それはおそらく、認めて貰いたかったのだろう。香澄は全身全霊をかけて義手を製作した。最高の義手を提供することによって、草壁の身体に九重香澄という一人の女を刻み込むために。 。
報われない想い。

香澄自身、そう思っていた。

十

レンタカーの座席は六つ。

運転席に草壁、助手席は無人。それはまあ、仕方のないことだと思っ。

「なあ、緋芽」

「なんだ、悠斗？」

「せめて、移動時間だけでも休みたいという考えは贅沢なのか？」

咲夜と緋芽が悠斗の隣に座りたがるのは、車に乗る前から明白だった。その程度のこと、予測できない悠斗ではない。だから二人には中央の席を使って貰い、悠斗は最後尾の座席で横になるうと考えていた。

考えていた……のだが。

隣に座っているのは緋芽。

なんと、運転中に席を移動しやがったのである。

横になってまどろんでいた悠斗。その腹部に強烈な衝撃が襲いかかる。慌てて飛び上がる悠斗が見たものは、着物の裾を踏んで転んだらしい神様だった。

てへっ、と笑う緋芽に、怒りは湧かなかった。

このようなやり取りを楽しんでおくのも、悪くない。最悪、こうして些細なことに腹を立てることもできなくなるかもしれないのだ。この中の誰かがいなくなっても不思議ではない。

「……最終決戦だぞ」

ボソリと呟く。自嘲的な笑みがこみ上げてくる。

悠斗の心の動きを知ってか知らずか、緋芽は淡く微笑んだ。

「なんだ？ らしくないぞ。お主はいつものように皮肉っぽく笑っていれば良いのだ。さもないと、逆に吾らが安心できん。またあの傲慢な神が出てきては敵わんしな」

「流石に二度も同じ轍は踏みたくないな……」

悠斗は苦笑する。

「まあ、お主なら大丈夫じゃる。心を強く持てとは言わん。その代わり、誰かに頼れ。吾でも良いし、その小娘でも良い。そうじゃな……女を抱けば、覚悟が決まると聞くが、試してみればどうだ？」と、意地悪く笑う緋芽。

そう言う考え方も、あるのだろう。

「だが、抱いてから後悔することも、あるんだぞ」

愛さなければ良かった。

今でも悠斗はそう思う。自分なんかに関わらなければ、死ぬこと

はなかった。大悟会長の言葉通り、力を持つ者が惚れた女は人質にされる可能性が高いのである。咲夜か緋芽が人質に取られれば、悠斗は手も足も出なくなるだろう。

……どちらにせよ、先に倉渕祐作を始末しなければならぬか。

「もう止めよう。こんなことばかり考えていると憂鬱になる」

悠斗は景色を眺めた。過ぎ去るのは町並み。平穏に生きる住人たち。

ぼつと眺めていると、欠伸が出てきた。

「悪い。ちよつと膝、借りるぞ」

「ふむ、それも良からうて」

緋芽は苦笑し、悠斗に膝を預けた。

今はまだ、これが限界。

緋芽の膝枕で、悠斗は睡魔に身を任せた。

46：朽葉の秘術

銀色のロザリオが左右に揺れる。クリスチャンが首にかけるような、数珠繋ぎのシルバークロス。自己犠牲に塗れた殉教精神が詰まった、反吐が出るほど美しい神の象徴だった。

首からロザリオを吊った立花健一郎が廊下を歩いている。

夕日に包まれた校舎。生徒会室とは逆方向の教員棟へ向かっていた。

「お前がクリスチャンだったとは初耳だな」

「言った覚えはないからね。克己君が知らなくても当然だよ」 健一郎は、首から下げたロザリオとは別に、右手に剣を持っていた。

神聖な装飾を施された剣だった。ロンバルディアのドイツ騎士修道会の僧兵たちが愛用した十字剣^{テンブルソード}。騎士の誇りが込められた、両刃の大剣である。スラリとした刀身は切れ味鋭く、銀装飾は退魔の力を付与していた。

「立花家は明治期に台頭した華族でね。九州の薩摩藩、島津家に連なる一族だったらしい。第一次大戦時、日本は欧州に出て武器商人を営んでいたんだけど、立花家が商談の権限を委任されね。僕の曾祖父がそれに合わせて渡欧したんだ」

健一郎は肩をすくめた。

「当時の当主、曾祖父がキリスト教に傾倒してしまっただけで、日本国内で熱心に布教活動をしたらしくてね。この剣はその功績を讃え、教皇陛下から下賜された物なのさ」

自嘲的な健一郎の言葉を聞き流さないように、耳を傾けている克己。

しかし、健一郎は重要なことを話しているつもりではなかった。

最後になるかもしれない 言葉遊びのつもりだった。

「……詳しくは聞かないけどよお」

けれど、克己は口を開く。覚悟を湛えた真剣な顔。

「お前、川崎先生と決着を付けるつもりだろ？」

「……意外に鋭いね」

そう、意外だった。頭脳戦では悠斗の下に甘んじて、魔法戦では決してクロードに及ばない。有り体に言えば、陰が薄いのだ。

それは、魔術が使えないのもあるのだろう。

しかし、本当に評価すべきものは 情報収集能力ではないだろうか。

「倉淵祐作と合流されたら厄介なことになる。川崎先生の魔法は、1対1では絶対に突き崩せない壁だ。川崎先生が草壁涼二を抑え込み、倉淵祐作が悠斗君に止めを刺す。これが、僕が想像できる最悪の結末だよ」

「それについては同意だがな。なるほど。お前の覚悟は分かったよ、健一郎。それならもう俺が言うべきことはない。ただ一つ、餞別代わりにこれを持っていけ」

克己は胸ポケットから携帯電話を取り出し、健一郎に放り投げた。片手でキャッチする健一郎。疑問に思い顔を上げると、克己は背中を向けていた。

「……克己？」

「ピンチになったら警察だ。分かったか？」

そう言えば、先ほどから口調が元に戻っている。あまりに自然だったので思い至らなかつたのだが、克己なりに心境の変化でもあったのだろうか。

そして 小脇に抱えたノートPCである。

……戦いに、行くのか？

克己は振り返らず、意味不明な言葉を残して去って行った。

アカデミーの校舎裏を広がる雑木林。草壁涼二と仙石和希が襲撃時、逃走経路に使用した場所で、それだけ鬱蒼としている。迂闊に入り込めば迷いそうな森林。おそらく、魔術的な偽装が働いているのだろう。

「たしか、『オアシスの結界』だったか？」

克己の疑問。答えはなく、ただ無言が返ってくるだけだ。

腰に日本刀を佩いた青年、朽葉海斗は沈み行く夕日を見詰めていた。

恋焦がれる乙女のように真紅の空を眺める姿は、戦場で縦横無尽に走り回る修羅には似合わない。

「……例えば、太陽が燃え尽きる時」

詩人のように独語し、海斗は振り返った。白い鉢巻が風にたなびく。漆黒のロングコートが広がる様子は、さながら闇鳥が羽ばたいているようだった。

「……例えば、大地が血に塗れる時」

静かに、鞘走る。白刃が真紅に染まった。

海斗の体型に理想的な長さの刀だった。その刀に紫電が帯びる。

以前に見た、あの魔法である。三大魔法一族のお家芸 ジェラルミンの装甲さえ易々と切り裂く魔人の太刀。

「……例えば、世界が滅びる時」

「それが、どうかしたのか？」

海斗は静かに、両目を閉じた。

「青空が死んでいく瞬間、俺は思う。この赤は、さながら燃え尽きる寸前の蠟燭なのではないか。この赤は、地上で死した人々の怨嗟なのではないか。この赤は、キリスト教で言う終末 『神々の黄昏』なのではないか」

「虚言、あるいは戯言にしか聞こえないが」

海斗は微笑んだ。

克己の背後で『地を這う大海魚』が咆哮する。

「決着を付けなくてはならない。そう、傭兵としての朽葉海斗はそ

知らぬ顔で二度も依頼人を裏切れるほど傲岸不遜ではない。朽葉家の名が、俺を縛る。しかし俺は、今までこのやり方であらゆる魔法を屈服させてきた。分かるか、この意味が？」

微笑が消える。冷徹な無表情。海斗が戦う顔になった。

来る！

殺気を感じる暇もなく、克己は神速の攻撃を予測した。

おそらく、刀を使用する魔法の中では最速。そして最強の魔法。

雷光を散らしながら『真空迅雷』カッティング・ボルトが振り下ろされる。

「バハムート！」

咄嗟に巨大魚を突出させ、背後に隠れてやり過ごす。海斗の刀がバハムートを一刀両断に伏した。唐竹割りに叩き切られても、機械仕掛けの怪物は磁力の魔法で再び接合する。

「スカイフィッシュ！」

続いて袖口から飛び出した鋭利なナイフ。

ノートパソコンの操作で精密に誘導され、朽葉海斗に襲いかかる。『スカイフィッシュ切れき空魚』、それは未確認生命体 U M A の名を揆った異形の魚。風を切り高速で飛来する刃である。

先日幽香に上手く誘導され、同士討ちに利用された経験を生かし、多くの改良を加えている。

「今だ、エクスプロージョン！」

それは自爆機能。

元々は同士討ちする前に、自らの手で破壊してしまおうと言うコンセプトから生まれたオプションである。しかし、思わぬところで役に立った。

海斗は刀で迎撃するだろう。

スカイフィッシュは刀で叩き落されるはずだった。だが、銀の光同士が衝突する寸前、飛行する魚は物体の枠を飛び越え、衝撃波のベクトルに還元される。

「チィッ！」

強烈な舌打ち。それは端的に、海斗の苛立ちを表していた。

構わず、追い討ちをかける。残った二体のスカイフィッシュを飛ばし、体勢を崩した海斗を今度は物理的に切り裂こうとする。

「朽葉流殺法 円水」

しかし、弧を描いた刀が二つの刃を叩き落した。物理現象を超越した動きである。体勢を崩しながら、音速の領域で刀を振るうのだ。常人の枠組みから外れた、すでに規格外の怪物だった。

……あれが、朽葉の暗殺術か。

悠斗以上の剣士だからこそ使える秘技。おそらく海斗は何百年に一人という逸材なのだ。そうでないなら、今頃は朽葉家が天下を牛耳っていただろう。

「まだまだ行くぞ！」 バハムート。克己はPCを操作し、巨大魚に指示を送る。

『Change mode - Poseidon』

エンターキーを叩いた瞬間。

バハムートの巨躯が崩壊した。

機械仕掛けの怪物が、怪人に変貌する瞬間である。銀色のシルエツトが、歪な魚類のものから人型のものへと変化していく。

そして、最強の海神が誕生した。

「なるほどな。それが貴様の全力か」 海斗は嘲笑し、刀を立てる。

「さて、それはどうか？」

克己は今日、初めて微笑んだ。

そして二人は戦闘を再開する。

「どうした！？ 朽葉家の当主つてのはその程度なのか！？」

「まだ貴様は……分かっていない」

「分かっていない？」

巨人 『アトランティスの支配者』^{ポセイドン}は鋼鉄の両腕を振るう。全長五メートルの巨人である。その腕も、二メートル以上はある。た

だの一撃が、まるでミサイルのごとく大地を穿つのである。

海斗は奇跡的な見切りでどうにか躲していた。

直撃すれば死である。なるほど、物理的な暴力ほど恐ろしいものはないとは、このことだろう。

しかし、裏を返せばその巨体は 鈍重なのだ。

「貴様は見誤った。『真空迅雷』は対人魔法ではない。対軍魔法でもない」

その言葉に、克己は両目を見開いた。

朽葉悠斗の『刃桜繚乱』やクロード・キリングゲートの『血液水晶』、佐々木流水の『空間破壊』や百合原綾香の『風魔の魔眼』などは対人魔法。

立花健一郎の『岩窟魔獣』や御剣蒼夜の『白刃乱舞』、中島幽香の『火炎魔人』や仙石和希の『不視爆殺』などは対軍魔法。

茜崎克己の『電海竜王』や支倉沙希の『空飛死鳥』、草壁涼二の『神域汚辱』

や来宮聖の『久遠の空』などは上記のように区分できない例外である。

克己はてっきり、海斗の魔法は対人魔法だと考えていた。こう言う用語と語弊があるのだが、『真空迅雷』は斬撃の強化である。いくら射程が延びるにしても、それは単体を斬るのが限界のはずだ。

しかし、海斗の言葉は対人でも対軍でもない例外を示している。

「俺の魔法は、ただ威力を上げただけではない。たしかに、『真空迅雷』には物体の電子結合を切り離すという性質を持っている。この魔法の前では斬れない物は存在しない」

電子結合の切り離し これだけでも驚愕ものだった。

科学の世界では、たった一つの電子を切り離すだけで膨大なエネルギーが消費されるのである。それなら金剛石のような超硬度の物

体でも切り裂けるだろう。

「その極意は『その太刀筋、凡人には見えず、常人には見切れず、達人には躲せず』とある。……これを聞いて、何か気付かなかったのか？」

「……どう言うことだ？」

海斗は無表情に、言い放つ。

「『達人には躲せず』の部分に違和があるはずだ。剣術の完成形なら、どうしても達人が躲せない？ 剣術を極めた達人なら、俺の剣を避けることは可能なのだ。だが家伝書には『達人には躲せず』とある」

それを聞いても理解できない克己に、海斗は勿体ぶった言い回しで結論を口にした。

「……呪詛返しだ」

刹那、海斗の刀が煌き、ポセイドンを両断した。無駄だ、どれだけ斬られても磁力の力で接合できる。克己の思惑とは裏腹に、海斗は返す刃で再びポセイドンを叩き切る。

二度、三度。

ポセイドンが斬られ、修復した。

「だから無駄だと……」

そう、声に出した。

瞬間、克己は吐血した。

「え？ あれ？」

「だから、呪詛返しと言っただろう。朽葉の魔法は魔法殺した。あらゆる魔法を破壊し、術者に反動を与える邪法。これが朽葉家最強の暗殺術だ。分かったか？」

質問の答えを返すことはできず、克己は地面に倒れ伏した。

47：触れられない世界

立花健一郎は剣を振り下ろした。

激しい剣圧が唸り声を上げ、荒々しく大気を震わせる。日本刀では出せない、重量を上乘せした威力が川崎美野里に襲いかかった。

「流石だな、立花。剣士であることを隠していたとは、大した策士だ」

健一郎の受動的な魔法は、仕掛けられなければ反撃できない、言わばカウンター魔法だと考えていた。そこが盲点。攻撃手段は魔法だけとは限らない。

風が啼き、美野里の髪が一房、根元からごっそりと奪われる。

アカデミーの教員棟の入口で待ち構え、出会い頭に切りかかったのは五分前。

辺りは薄暗く、表情さえ窺うことはできない闇。時刻は午後七時。刀身が怪しく輝くときだけ明かりが灯る。

「……策士ですか。これは、痛烈な皮肉ですね」

吐き捨てる健一郎に、美野里は微笑む。

アカデミーでは成績優秀の健一郎だが、その智謀は大したものではない。暗記力と実践力が別物だ。暗記力が優秀＝天才という短絡的思考は、発想力が乏しい者の妄言である。

知恵と知識。

健一郎に期待できるのは知識だけだ。

「しかし解せないな。どうして今頃になって私に牙を向ける？」

「……もう、これ以上見ていられないからですよ」

みっともない。醜態を晒す。

美野里は平気でこれをやってくる。

「克己が海斗さんから黎明の魔石を回収し、貴女をアカデミーから追放する。これが、最も理想的な終わり方です」

「どうやら、私の見込み違いだったようだな。貴様の智謀など、所

詮はこの程度のものだ。まさか、私の魔法に敵うとは考えてはいないだろうに」

所詮は理想論。それは健一郎にも分かっている。

しかし、美野里の次の言葉が健一郎を動揺させた。

「朽葉悠斗が可哀想だ」

健一郎は眦を吊り上げた。

「茜崎克己と立花健一郎の敗退。応援に駆けつけた支倉沙希を私と海斗の二人で迎撃し、やがて倉渕祐作がアカデミーに到着する。後はやってきた朽葉悠斗を中心とする連中を全員で葬ると言うわけだ」
単純に考えるなら、倉渕祐作と立花美野里の方が、戦力に乏しい。アカデミーは粒揃いだし、悠斗は草壁や蒼夜を引き入れて戦力を増強している。

後は組み合わせの問題。

「朽葉海斗には遠距離での攻撃手段が存在しない。私に草壁をぶち当てることによって、二十四時間以上の足止めが可能となる。つまりだ。海斗に狙撃兵を二名ほど差し向けて時間を稼ぎ、草壁で私を止めている間に残った戦力で倉渕祐作を迎撃することができる」

これが、悠斗の描いた将棋盤の模様。

限りなく被害を抑えながら敵方を殲滅する方法。

「しかし、貴様らが先走った結果、朽葉悠斗は持ち駒を減らす。倉渕祐作を相手に、ハンデを背負わされるのだ。それはすべて、貴様の責任だ」

「……戯言だ！」

まだ健一郎は倒れていない。

現時点で美野里の言葉を受け止めることこそ、早計だと言えるだろう。

……しかし、まさか。

これが健一郎の心に不安と言うなの楔が差し込まれた瞬間だった。

「ッ、これ以上喋るな！」

健一郎は周囲に泥の壁を展開した。ドーム状の土壁。それはまるで世界を拒絶する殻のようである。

立花健一郎は優秀な生徒会長である。

生徒には分け隔てなく接し、教職員の覚えも良い。社交的でもあるし、健一郎という人間が純粹に好意を抱ける人物だったのだろう。……しかし、逆に言うなら。

健一郎の魅力は情に厚いという言葉で表される。

冷徹な判断を下し、時に味方に”死んでこい”と言える策士ではないのである。美野里が自分の教師で、多少なりとも恩義を感じているからこそ彼自身で止めを刺そうとした。

それが誤り。克己と海斗を戦わせることの愚かしさにも気付かぬ愚鈍な会長。

健一郎の土壁が展開し、触手のように広がりながら美野里に襲いかかる。先端は槍のように鋭利に尖り、紙のように地面に穴を穿つ。

「『グラン・ベヒモス岩窟魔獣』か」

たしかに、大した威力だろう。しかし、使い方を誤っている。

この魔法は防御に使うからこそ真価を発揮するのである。

「馬鹿者が」

美野里は舌打ちした。教え子が牙を剥くことに苛立っていることもある。だが、それ以上に情けなかった。自分の指導はこの程度のものであったのだろうか。

『アフソリユート・ラグナロク
絶望魔界』

彼女は泥炭を認識する。色形から質量まで、大半をイメージで補いながら情報の欠損を埋めていく。

そして、泥を対象に設定した。

「せいっ！」

健一郎が剣を振りかぶる。美野里はついでに剣も脳内にインプットしておく。形や色を頭に留めておき、常に戦闘中意識しておくのである。

「私の魔法は、1対1ではほぼ無敵だ」

淡々と語りながら。

美野里は健一郎の剣に身体を投げ出した。

「なにっ!？」

自殺行為にしか見えない暴拳に健一郎の剣筋が鈍る。だが、超重の剣は多少の勢いを失っただけで、風を切りながら地面に落下する。

落下………する？

美野里は剣を受け止めていなかった。回避もしていない。

刀身が、美野里の身体をすり抜けたのだ。

美野里は憮然と言い放つ。

「私の魔法は、対象物の限定的消失だ」

その言葉が、嫌に耳に残った。

48：鋼鉄の意志

自動車が、停車する。

国立魔術アカデミーまで残り数キロ。車を走らせられたなら、あと十五分ほどで到着していただろう。しかし、草壁はブレーキを踏んだ。

悠斗は顔を上げた。

視界を覆い尽くすのは有象無象の屍兵士。

「合計で二百ほどですか。ご苦労なことです。完全に包囲されていますね」

「……降りるぞ」

このまま車内にいれば、兵士たちに距離を詰められて身動きが取れなくなったところで魔術の砲撃を受けて、一斉に殲滅される。

あの倉淵祐作のことだから、おそらく指揮官を用意しているはずだ。

「足止めか、悠斗？」

「だろうな」

緋芽は確信を以って訊ねたようだった。

「こんな場所で俺たちを襲撃する理由が、それ以外にないからな。でもまあ、これで大まかな状況が把握できる。おそらく、もうアカデミーでは戦闘が始まっているはずだ」

「だからこそ、私たちを足止めする必要があるのですか」

「嫌な性格ですね、その倉淵というお方も」

咲夜の皮肉に、草壁が肩をすくめる。

「自慢の甥ですから」

「……なるほど、大体分かりました」

草壁が自慢する物なんてロクなものではない。咲夜はそう思ったのだらう。肩眉を上げて、溜息を吐いた。

……さて、どうしたものか。

悠斗は腰に佩いた刀に目を落とす、続いて屍兵を見回した。

敵兵の数は続々と増え続けている。これだけの死体をかき集めた倉瀬祐作の妄執にゾツとしながら、悠斗は思考していた。

「……吾が残ろう。あと、この小娘も置いていけ」

緋芽が咲夜を示しながら呟く。

「それで良いのか？」

「良いも何も、貴様らが吾らの主体ではないか。お主や草壁が残っても仕方がないと言うものだ。それに、吾ほどの術者が死体ごときにやられるとも思うのか？」

「いや、それはないか。お前なら大丈夫だな」

「ああ、当然だ」

不敵に微笑む緋芽に、悠斗は頷いた。

十

何度電話をかけても繋がらない。山岸雪子は発信履歴が溜まった自分の携帯を眺め、大きく嘆息した。

放課後の生徒会室。窓の外は暗く、校内で明かり点っている部屋はここぐらいだろう。

いつもならこんな時間まで、書類を整理する必要はない。

この日は生徒会長の立花健一郎まで不在だった。連絡の一つもしないとは健一郎らしくない。

……まあ、克己の場合はいつものことなただけだ。

今日提出しなければならぬはずだった中級魔術理論の課題を、あの馬鹿はいつものように仕上げなかつたらしい。雪子は学級委員でもないのだが、生徒会副会長という肩書きから教師に呼び出され、あの馬鹿の尻を叩いてくれと懇願されていた。

「……仕方がないか」

雪子は電気を消し、部屋を施錠すると、職員室に向かった。不意に、視界の片隅で蒼白い光が散った。銀色の巨人と戦っているのは稲妻の剣士。

「あれは、あの時の……」

先月の草壁涼二の襲撃時、雪子を攫おうとしていた傭兵だった。再び稲妻が散る。巨人の右腕が空に飛んだ。

「ッ、克己！」

気が付くと、雪子は走り出していた。

十

呪詛返し　それは呪術を見抜き、破壊し、そのエネルギーを逆探知して術者の身体を破壊する秘術。

鋼鉄の巨人兵という全身全霊の魔法を破壊されて、吐血で済んだのなら安いものだった。

だが、それはここが戦場でない場合に限ったことだ。

「残念だったな」

克己を絶望させるためだろう。海斗は『アトランティスの支配者』^{ドク}を完膚なきまでに破壊する。原型を留めないように細切れに、刀でミキサーにかけている。

「貴様の魔法は評価に値する。魔術が使えないという欠陥がなければ、俺を追い詰めることもあったかもしれない」

要は運がなかったのだ。

海斗は無造作に歩み寄り、刀を振りかぶる。

……ッチ、ここまでか。

克己は舌打ちした。

思い出されるのは幼馴染の泣き顔だった。自分が死んだら泣いてくれるのだろうか。

……どうして俺は魔術が使えないのかねえ。

茜崎克己はただの中流家庭の出である。父親は普通のサラリーマン、母親はスーパーでパートをしている。家計が火の車なのは子ども心に感じていて、その内離婚するだろうことは分かっていた。

魔術なんて非日常が介在する余地はない。

そう、それだけなのだ。

何もなかった。有るのは普通の日々、平凡な日常だけ。

隔世遺伝ですね。

ある日突然茜崎家に現れた魔法庁とやらの役人はこう言った。

話を聞くと、どうやら克己の先祖に魔法使いがいたらしい。しかしその子どもには魔法使いとしての資質が現れなかったのだと。

克己は先祖帰りだった。

「なんだ、結局は俺が怠け者だっただけじゃないか」

アカデミーの友人たちは幼少の頃から魔術の英才教育を受けてきた者ばかりだった。今さら自分が頑張っても、十数年というハンデは想像以上の壁がある。スタート地点が彼らより離れていた克己は、魔法を工夫することで魔術の空白を埋めようとした。

「魔術を使えない魔法使い……。ハッ、なんて皮肉なあだ名だ」

それは蔑称。魔術を切り捨てた克己への嫉妬。

「なあ、朽葉の。俺の『電海竜王』^{エレク・リヴァイアサン}の特性は知っているよな？」

磁力を操り、鋼鉄の塊を繋ぎ合わせて神界と深海の獣を意のままに従わせる魔法。

周囲には海斗によって細切れにされた鉄がひしめいている。

「……刺し違えてやるよ、『神雷』」

「……何を言っている？」

海斗は口の端から血を流しながら呟く克己に不審な目を向ける。

次の瞬間、周囲の鉄塊が浮き上がった。
一つ一つの鉄にS極とN極を設定したのである。
その中央には克己と海斗の姿があった。

「まさか！」

……自爆。

これで終わり。茜坂克己という道化の幕を下ろすには、ちょうど良い。

「鋼舞え！」

『アイアン・フレイリコード 鋼鉄の狂想曲』！

二人に金属の竜巻が襲いかかり、その戦いに終焉が訪れた。

49：燃える絶望

右腕がおかしな方向に曲がっていた。左腕の肘から先の感覚が、まったくなくなかった。腰から下の感覚もない。脇腹がビクンビクンと痙攣している。肋骨が肺に刺さったのか、呼吸する度に激痛が襲いかかる。

……あ、ヤバ。

おれ、死にそうだ。

「か、克己！」

ちよつとこれは、洒落にならない。革命の時は上手く生き残れたのだが、今回は相手を間違ったらしい。

「……まつ、たく」

上手くいかない。

自嘲的に笑いながら、健一郎は生き残れただろうか、と空に問いかけた。

「克己！ねえ、克己！」

心残りなのは大悟会長のことを、誰にも伝えていないこと。

悠斗は御剣蒼夜に探索を依頼していたようだが、おそらくまだ見付けていないだろう。大悟会長の存在は、徹底的に秘匿されていた。それとも倉渕祐作は、克己がこうなることを知って、大悟会長に電話をさせたのだろうか。

十

衝撃が胸を抜ける。魔力を使った発頸だと気付いたのは、肋骨を二本奪われてからだった。

つまり、立て続けに入れられた左右の連撃。

「ぐっ」

これで二本で済んだのだから僥倖と言うもの。
しかし、戦局は依然不利なままだった。

健一郎は思索する。美野里の台詞「私の魔法は、対象物の限定的消失だ」と言うのは、要約すると彼女が攻撃を受ける瞬間だけ、自己の存在をこの世から消し去ると言うことになる。

いや、別の可能性もある。

それは健一郎の攻撃を消した場合だ。しかし、その可能性はあまり高くないはずだった。それでは草壁の魔法とほとんど変わらない、と言うことになる。

外の世界を消す草壁涼二。

内の世界を消す川崎美野里。

この二人は同一でありながら対極であった。

「どうした、立花。岩盤の獣グラン・ベヒモス『岩窟魔獣』たる貴様が、よもやこの程度で万策尽きたとは言わないだろうか？」

「流石にそれはいいですよ」

健一郎は後退しながら、地面を指でなぞった。

美野里の体術から逃れるように、傍目には逃げているようにしか見えないだろうが走り続ける。

時折体勢を崩して地面に手を付くことがあった。

果たして美野里は見抜いているだろうか。

「私は草壁とほとんど同じだな。草壁の場合はまったく魔術が使えないのだが、私も魔術は苦手なんだ。だから、魔力を使用した体術を体得している」

健一郎が『岩窟魔獣』で壁を形成しても、美野里の貫手は易々と壁を貫き健一郎に襲いかかる。

なるほど、たしかにこれは脅威。

しかし、こうするとどうなるだろう。

「……………今！」

健一郎は両手を組み合わせ、地面を叩いた。

「なにっ?」

足場の崩壊。周囲の地面すべてが泥沼と化し、美野里の身体を沈めていく。

グラン・ベヒモス

『岩窟魔獣』の本領は屋外で発揮される。土のある場所すべてが彼の味方だった。それが地の属性、立花健一郎の戦場である。

「そのまま沈め!」

「くそっ、小癩な! ……とでも言うと思ったのか?」

沈まない。

そう、沈まないのだ。

「だから、対象物の限定的消失と言ったはずだろう。この言葉の意味を考えておくべきだったな、立花。私が消失させたのは自分の存在。今私が消失させているのは私の質量だ」

「まさか、そこまで応用できるのか!」

健一郎の驚愕した表情を退屈そうに眺め、美野里は大きく嘆息した。

「失望させるな、立花。お前は魔法使いの中でも比較的マシンだと思っていたんだよ。私はな、本当は朽葉も茜崎もキリングゲートも、すべて評価しているんだ。革命で命を落とした者も、私の誇りだ」
だから、期待は裏切るな。

美野里は底なし沼を”歩き”距離を詰めていく。

「なら、なら何故! どうして裏切った!」

「それが、必要なことだったからだ」

「分からない! 僕には分からない!」

「分からなくて結構」

美野里は腰を落とす、拳を構えた。距離五メートル。これが、体術の深淵にある”遠当て”だと知る者は少ない。

「分からなくて結構。理解できないものを、無理して理解する必要はどこにもない。それは大切な教え子でも例外ではない」

「……嘘ばかり」

その声は、健一郎の遙か後方から聞こえてきた。

「貴女はずっと、誰かに理解して欲しかった。その理解者が倉淵だっただけ。さっきの台詞はね、胸を張って言うことじゃないよ」

それは小太陽。

荒ぶる灼熱を従えし、火の国の女王。

「悠斗に聞いた。貴女、黎明の魔石で”穢れ”を取り払えると思っただったってね」

「……中島幽香」

「コップに墨を落とせば黒く染まる。でも、大海に墨を落としても、海全体にとっては何もなかったことになる」

「……」

魔力の中に混じった”穢れ”という魔力を、より大きな魔力の中に放り込むことで浄化させる。自然の浄化作用と何ら変わらない理論。

川崎美野里の目的は、かつて巫女を取り仕切っていた神社 今となっては”穢れ”てしまった神社を再興させることだった。

「貴女なら気付いていたはず。倉淵祐作が、そんなことのために黎明の魔石を使うかな？ 多分あの悪魔が魔石を手に入れば、もっと大勢の人を犠牲に思うと思う」

「……うるさい」

いつもより饒舌なのは、解説だからだろうか。

「世界は、残酷なんだよ。まずはそれに気付こう、先生」

「うるさいうるさいうるさい！！ 貴様に何が分かる！」

「何も分からない。でも、貴女はさっき、理解する必要があると言っていたよね。まるで子ども。感情ばかりの矛盾した言葉には、何の重みもないよ」

幽香は右手をわめき散らす女に向ける。

これは対草壁用に考案した戦術。

「……結局は、悠斗の理論」

でも、これしか効かない。

『フレア・ギガンテス』
『火炎魔人』は太陽を大地に落としたり。

広がる灼熱を、美野里は『絶望魔界』、自己の存在を希薄にして無効化する。身体をすり抜ける炎に、美野里は勝ち誇ったように微笑んだ。

「浅はか」

それはどちらの台詞だったか。

美野里は幽香の攻撃を浅はかと判断した。

幽香は美野里の防御を浅はかと判断した。

「その炎、消えないから」

「……は？」

「正確には、私の魔力がなくなるまで攻撃を止めるつもりはないってこと」

小太陽は赤く赤く燃え続ける。

幽香の強さは、その底なしの魔力にある。彼女の魔法は炎を生み出すだけと言う、言葉だけならまったく脅威に思えないものだった。しかしそれは、武器と兵器を履き違えた者の暴論だ。

中島幽香の炎は、核兵器だった。

「普段人間は酸素濃度21%の環境で生活している。酸素欠乏症とは酸素濃度18%の環境にあった場合に生じる症状。それはね、呼吸を止めることで防げるものではないんだよ」

人間の呼吸を簡潔に表すと、このようになる。

大気21%の酸素 交換 人体16%の酸素。

重要なのは呼吸とは”交換”で、一回でも酸素16%以下の空気を吸うと肺泡毛細血管中の酸素が逆に肺胞腔へ濃度勾配に従って引っ張り出されてしまうと言うことだ。

「先生は自分の存在を消すことで、酸欠まで防げるの？」

思えば、美野里は魔法を攻撃を受ける瞬間しか使っていない。それは即ち、彼女の魔法が思いのほか燃費が悪いと言うことではない

か。

「……もう貴女は終わり」

幽香は溜息を吐き、炎を引き上げた。

そこには気を失って横たわる女性教員の姿が残されていた。

十

血が地面に滴る。

朽葉海斗は刀を杖に逃げていた。

思い出すだけで脳が沸騰しそうだった。彼の齒軋りの荒んだ音色が、その憎悪を雄弁に語っている。

「おやおや、『神雷』とあるうお方が随分と無様な姿になったじゃないか」

黒いロングコートは原型を留めていなかった。生地にある無数の隙間から鮮血が零れ落ち、黄土色の地面を染め上げている。

「貴様は……滝川隆太！」

「ふふん、正解」

小柄な少年は得意げに胸を張った。

国立魔術アカデミーの元生徒会書記。革命の後、何処となく姿を晦ませた異名持ちの魔法使い。

「これはちよつと想定外^{イレギュラー}だったかな。まあ、それだけ克己の奴も成長しているってことか。俺様の予想では、アンタは『破魔』の草壁涼二に倒されていたんだぜ？」

大番狂わせも良い所だ、と滝川隆太は嗤う。

「何をしにきた、『瞬刃』」

「ちよつと漁夫の利を得ようかと思ってね。なに、心配することは無い。満身創痍になった朽葉の神喰いを殺れば俺様の名前も売れるだろうが、今回はアウトオブ眼中だぜ」

「……黎明の魔石か」

「またまた正解！」

隆太は両手を広げて大笑いすると、懐から匕首を抜いた。

刃渡り二十センチ前後の、悠斗が使っている小太刀よりも短い刃物。しかしそれが、滝川隆太の”兵器”だった。

「六月初旬なのに寒いねえ。血を流しすぎると死んじゃうかもねえ」
つまりその台詞は、命が惜しくば従えという命令。

負傷した海斗に断わる理由はない。

「何が知りたい？」

「流石は魔法使い三大一族の一角、朽葉のボス。話が早くて助かるよ」

隆太は歪な笑みをさらに深めた。

「俺様が知りたいのはさ、どうしてアンタが魔術も使えない小物にそれだけの傷を負ったのかってことだよ。不安要素はできるだけ潰しておかないと、後々奴らと対立したときに怖いからさあ」

力を持っているのに臆病。

それはどれだけ恐ろしい資質なのだろう。海斗は自分の義弟よりたった一つ年上なだけの少年に、初めて恐怖した。

50：死者たちの饗宴

朽葉悠斗はアカデミーと道路を挟んで位置する雑居ビルを見上げていた。

それまで半ば全速力で走っていた草壁が眉をひそめる。

「どうかしたのですか？」

「いや、多分ここだろう……と思ってな」

「と言うのは？」

「革命の時、倉漕が最後に逃げ込んだのが此処だったからだ」

草壁はああ、と頷いた。

良く観察するとビルは焼け焦げ、外からでも内部の鉄筋がむき出しになっているのが見て取れた。幽香の炎の爪あとである。

「ですが、ここにいる確証は」

「いや、確証ならあるぜ」

トツ、トツ、とビルの内部から響いている。硬質な靴音が、段々と近付いているのだ。

草壁は額に汗を流していた。

「これは、少しばかり計算が狂いましたか」

悠斗と草壁の契約は、倉漕祐作打倒への助力である。それは今までの行動で十分果たしていたと言えるのだが、意外と義理堅い草壁に悠斗は苦笑する。

「俺が足止めしても構わないぞ」

「いいえ、私の甥が真に望んでいるのは悠斗君、貴方ですよ。私なんぞが顔を出しても、相手にされないでしょうからね」

「謙遜するな、アンタは強い」

草壁が肩をすくめたとき、ビルの入口から影が現れた。

胡麻塩頭の大柄の青年が、二人を見下ろしている。

漂うのは腐臭。

「俺がここにいる。すなわち、倉漕がここにいる……ってことにな

らないか？」

「ああ、確かにそうだな」

しかし、倉淵も悪趣味なことをする。

どうして死したはずの元生徒会長、大泉大悟がここにいるのか。

それは倉淵祐作が生き返らせたからだった。

『グランド・マスター最終戦争』ですか」

世界は残酷だ。

草壁は一步、進み出た。

「これ”の相手は私がします。悠斗君には甥を頼みましたよ」

「死体で返しても良いのか？」

「元よりそのつもりです」

悠斗は口の端に笑みを浮かべた。初対面の時なら、このような台詞を吐けただろうか。あの時なら、草壁は甥を養護したはずだ。倉淵を魔術カルテルに紹介したのは彼なのだから。

「アンタ、変わったよ。良い意味で」

「ありがとうございます」

でも、言葉のすべてが皮肉に聞こえるのはどうしてだろうな。

悠斗は苦笑し、地面を蹴った。

風が吹き抜ける。

大悟は手を出さなかった。

十

『黒炎式式、黒死蝶！』

『……楽、赤龍！』

赤色と黒色、二つの炎が宵闇を照らし、射線上の屍人たちを焼き尽くしていく。果たしてそれは地獄の業火か浄化の炎か。不気味な

呻き声を上げて滅びていく屍は何も答ええない。

「　っ、まるで甘いもの集る蟻だな！」

緋芽は唾棄すると、右手から紅色の光を飛ばし屍兵を一掃した。身体からごっそりと抜け落ちる魔力に、一瞬意識が遠退く。

だが、ここで倒れると言うことは、目の前の人外にその肉を喰い与えると言うことに他ならない。

「厄介なのは槍を持っているゾンビですかね」

黒炎の魔術で応戦していた咲夜は、丸腰の屍人を盾にして突撃してくる槍持ちの屍人に目を向けた。

魔法庁の実戦部隊、聖騎士。その正式武装である『ミストルティン神殺槍』の恐ろしさは、“魔力の破壊”にある。

「吾のような存在、いわゆる神には不完全ながら不死という概念が備わっており。下位の神である吾は頭や心の臓を潰されれば消滅するが、腕の一つなら修復できる」

神の肉体は魔力によって造られている。脳髓や心臓が急所なのは、その臓器に死という概念が与えられているからだ。しかし、高位の神はほぼ完成した不死を持っている。

だからこそ、その肉体を取り込むという発想が生まれたのかもしれない。

神を殺す槍、ミストルティン。

それは神が肉体を維持している魔力を破壊することによって、与えた傷を修復させないようにする武器だった。その槍で突かれれば、いかに神とはいえ無事とは言えなくなる。

『黒炎壱式、夜燕！』

鋭い速度で飛来する黒炎の雀を、屍兵はその槍で無造作に薙ぎ払う。すると、魔術を形成していた魔力が破壊され、魔術自体が消滅する。

草壁の魔法『ダイテイー・サンクチュアリ神域汚辱』のようだった。

「たしかに、これほど厄介な相手はおらん！」

咲夜に槍が届く直前、緋芽が横から魔法で槍持ちの屍兵を始末す

る。

「……すみません」

「気にするな。お互いさまじゃ」

それでも咲夜は申し訳なさそうな顔がする。大方、不甲斐なさに自分を責めているのだろう。

これでは悠斗の傍らに立っている資格はない……と。

「だから気にするなと言っておるに」

「で、でも……！」

「そうね。悠斗は、貴女に戦えと指図したのかしら？」

食い下がる咲夜に、意外なところから声がかかった。

赤いパラソルだった。彼女は重力の法則を無視し、傘で空を飛んでいた。

元生徒会副会長、支倉沙希。

彼女はセミロングの黒髪を傘を持っていない方の手で押さえ付けながら、ゆっくりと着地する。

「ちょ、ちよつとー、もう少しマシな飛び方はないんですか!？」

「これは、金髪の兄ではないか」

「クロードです。金髪って何ですか……」

「まあまあ」

クロード・キリングゲートは沙希と緋芽に疲れたような顔を見せた。

沙希はにっこりと微笑み、クロードの愚痴を軽く聞き流している。

そして二人は同時に周囲を見回し、

「うわ、これは凄い数ですね」

「一人頭二十五体で、合計百体ぐらいかしら？」

言葉こそ悲観的だったが、口調はいたって明るい。何気ない世間話をしているようである。

それでも、二人は魔法使いの顔をしていた。

「じゃ、軽く片しますか」

クロードは『濁り重たき水刃!』と唱え、二体の屍兵を葬った。

死体の傷口から黒々とした血液が零れ出す。

「なんだ、量は少ないね。やっぱり死体は乾燥するのかな？」

その死体から流れ落ちた血液が凝固し、鋭い刃物に変貌する。刃物は目にも留まらぬ速さで周囲の死体を突き刺した。

ウラド・ツェベシユ・カーニバル
『串刺し公の処刑』

爆音、破裂。アスファルトに血潮が広がる。

「意外と過激なのが好きなのね、クロードは」

「縁起でもないことを言わないで下さいよ。スプラッタは苦手です」

「あれだけやっておいて良く言うわよ」

沙希は苦笑すると、赤いパラソルを閉じた。

フェンシングのようにパラソルの先端を屍に向ける。

そして、傘の先で屍を突いた。

「えっ？」

緋芽は何が起こったのか、まったく分からなかった。それは咲夜も同じらしい。目を擦って何事かと呟いている。

傘を突いた相手が、消え去っているのだ。

重力操作の魔法『グラビティ・フレズベルク空飛死鳥』。

沙希はただ、屍人の持つ重力を無効化しただけだった。地球という惑星は常に高速回転しており、我々人間を含むすべての物質は重力という楔によって大地に穿たれている。

そこから開放されると言うことは、すなわち外宇宙への回帰を表す。

優雅に舞い、パラソルで屍兵士を消していく。圧倒的という言葉ではかえって陳腐に聞こえるほど、そこには彼我の戦力差があった。

「血沸き肉踊るってこのことじゃない？」

「先輩、台無しですよ」

死体が破裂し、空に飛ばされる。

クロードの溜息が虚しく響いた。

月のない夜だった。

倉渕祐作は雑居ビルの屋上から大空を見上げ、柔らかな笑みを浮かべて景色を愛でていた。悪魔のような戦いぶりを知っている者がこの表情を見ていたなら、

すぐさま己が目を疑っていただろう。

それほど、倉渕祐作という人間に似つかわしくない表情だった。

「今夜が僕たちの終焉です、朽葉君」

涼しげな風が、二人の間を通り抜ける。

思い出されるのは去年の入学式。入学式の抜き打ち試験の合格者が、祐作と悠斗だった。

『なるほど、死神のような顔をしている』

『貴方だけに言われたくない台詞です』

二人の間の会話はたったそれだけ。

クラスは別で、特に用事もなかったので、ほぼ半年ほどの時間を空ける。

次に顔を合わせたのは、十二月の終わり。祐作が扇動した生徒たちが、次々に討たれていると言う報告を受け、慌てて駆け付けたとこのことだ。

そこには二十人分の灰が転がっていた。

斬殺され、焼却されたようである。工場で廃棄物を処理するような、一切の尊厳を許さずに行われた殺人に、祐作は震えた。

己に匹敵する魔法使いへの歓喜。

生涯の宿敵を見付けたような気分だった。

元々はアカデミーを乗っ取ることで事態、祐作にとっては退屈しすぎだったのだ。他の奴ら（外部の組織）から唆されただけで、簡単に動かされるほど祐作は浅はかではない。

「この一年は僕にとって貴重なものになりました。僕は慢心するこ

とへの恐怖を知り、殺人を遊戯とすることへの愚かさを知り、己の存在意義を見失ったのです。魔法を志す者として、世界の法を解き明かす欲求さえ失せました」

祐作は遠い思い出を語るように、目を細めた。

「原因は君……いえ、『嘲笑する虐殺者』に敗北したからです」

その意味が分かりますか、と口元を歪めて見せる祐作に、悠斗は無言で肩をすくめただけだった。

祐作はそんな悠斗の態度さえ関係ないと言った様子である。

「自信を砕かれた僕は、しかし君によって救われました」

「それは、今の貴様の野望のことか？」

「野望ですか。いえ、それほどのものではありませんよ」

僕はただ。

「朽葉悠斗という存在を滅すのみ。それが僕の現在の行動指針であり、残りはすべてオマケのようなものなのですよ」

国立魔術アカデミーへの攻撃や陰謀も、魔術カルテルを利用したことも、川崎美野里を調略したのも、二人が戦うに相応しい舞台をあつらえるため。

「しかし、結局は上手く行きませんでした」

祐作は最初、悠斗の仲間すべてを殺害しようと目論んでいた。悠斗の内なる怪物を目覚めさせるため、真の絶望を与える必要があったのだ。

「まあ、どちらにしてもここで君と殺り合うことは変わらないのですがね。さあ、戯言はここまでにして、そろそろ始めましょうか」

「どちらにしる、ここで俺が貴様のどちらが死ぬ　と言うことか」

悠斗は頷き、抜刀する。

火神の加護を受けた怨刀が、幽かに赤く揺らめいた。

「行くぞ」

「行きましょう」

祐作は両腕を持ち上げた。大陸の武術、螳螂拳のようである。
神速の太刀と鋼鉄の拳が交差し。
ここに最後の戦いが始まった。

「考えたことはないか？」

風のように横切った少年の背中を一瞥し、大泉大悟は語りかけた。

「魔術とは何か、魔法とは何なのか？」

「その質問に、意味などがあるのでしょいか？」

ふに落ちない顔色の草壁に、死したはずの少年は自嘲的に話す。

「当然、”ない”に決まっている」

魔術、魔法という不思議な力に対する疑念。

その真実を得るために、古来より魔を研究する者がいた。しかし、未だ純然たる解答は得られていない。

「アンタも答えなど得られないと諦めた口か？」

そう、何千年と積み重ねた歴史が”無駄”だと証明しているのだ。

魔術や魔法が発動する原因、構造、真相、本質、何れも人間程度の英知では届かないものなのだ。

「どうしてこんな話をしたのか、分かるか？」

大泉大悟は嘲笑う。

魔術師は”智”を追求する限り、魔術師になれる。

よって、自己の魔術・魔法に対する分析でさえ、常に考察しなければならぬ。敵の魔術・魔法も同様である。

「なあ、草壁涼二。俺はアンタの魔法を知っているんだ。だが、それでは不公平だよな？ これでも俺は相対する武人には礼儀を払わなければならぬって教え込まれているんでね」

「その言い方だと、貴方が武士もののふのように聞こえるのですが」

「ああ、そうさ」

笑いながら、大悟は右腕を天に翳した。

腐食した肉体が、最後の輝きを放つ。最早、この戦に意味などなく、されど双方ともに求められる結末は、片方の滅びである。

「だから、俺の魔法も教えておいてやる」

暗闇に眩い閃光が走る。光が晴れたとき、その右手には一筋の槍が握られていた。

一本だけではない。

周囲の至る所に、槍が現れていた。重力を無視し、宙に浮く槍の穂先が、悉く草壁を狙っている。

「……これが『最終戦争』^{グランド・マスター}ですか」

「ハッ、驚いたか!? 俺の魔法は『あらゆる物質の構造を解析し、情報を保存。あらゆる物質を創造し、保存された情報を基に再現する』というものだ。他にも『低級重力操作』や『物質強化』などの特典も付いているけどな。要約すると物質のコピー&ペーストってことになる」

¥”つまり、アンタの天敵ってことだ”

あらゆる魔術魔法を無効化する魔法の死角 物理的攻撃。

大泉大悟は、最初から草壁涼二を足止めするために用意された駒だった。

「なるほど、それが貴方の魔法ですか。いやはや、これは驚いた。まさしく最終戦争。魔術戦を想定した我々が、最も苦手とする相手ですね」

しかし、草壁の口調には僅かばかりの動揺さえ見られない。

それどころか、口元には微笑みさえ見られた。

「ふふっ、馬鹿らしい。元生徒会長と言うから期待してみれば、この程度でしたか。これでは悠斗君が決着を付ける前に、片付いてしまいますよ」

「 試してみるか? 」

「どうぞ、ご随意に」

大泉大悟はその手の槍を投擲した。それが合図になり、周囲の槍その数五十本を超えた針の集団が、草壁に襲いかかる。

絶対に逃れられない、死角という死角を潰した攻撃。

刹那、地面が壊れ、爆炎が拡散した。
アスファルトの破片が周囲に飛び散り、巻き起こった砂煙で視界が覆われる。

指向性を持った槍の大群は、あっさりと破壊され砕け散った。

「この程度で私を倒せると なっ！」

視界が回復したとき、そこには大悟の姿がなかった。

「強さつてのは慢心に繋がる。それは俺もお前も例外ではない」

代わりに、五千丁のアサルトライフルの銃口が草壁を取り囲んでいた。

「お前の失敗は三つある。俺の得物を槍と決め付け、その数を百以下だと決め付け、自分で視界を潰した。情けないな。これが『破魔』か」

「……………これが本物の『ブランド・マスター最終戦争』ですか？」

「気付いたところでもう遅い」

大泉大悟は軍楽隊の指揮者のように右手を振り上げた。

そして、数億の銃声が漆黒の背広を切り裂いた。

十

気迫が込められた初太刀を、ガントレットを装着した拳が弾き返した。

悠斗は押ししては引く波のように返す刀で喉を抉る。その意図を見破った祐作は、片足で地面を蹴って宙返りし、左足で下から刃を蹴り上げた。

祐作はそのまま腰を捻り、空中回転蹴りを放つ。

頭蓋を狙ったその凶襲。

「爆ぜよ、破碎の力！」

魔術を組み込んだバックステップを入れて衝撃を緩和する。しか

し威力は殺し切れず、ビルの転落防止柵に軽く背中を打ちつけた。

「これで、20%」

その咳きが悠斗の耳に届いた瞬間、敵の拳がすでに眼前に迫っていた。

古武術の縮地。それと気付く前に、悠斗の身体は経験と直感で、首を右にずらし寝かせた刀を祐作の胴体に突き込んだ。

祐作は左手で刀を掴み、左の肘を悠斗の顎に叩き込む。

「これで、40%」

一瞬意識が飛びそうになったが、歯を食い縛り現実に留まる。

まだ倒れられない。祐作は実力の半分も出していないのだ。

『両断、闇の斧』

振り下ろされる漆黒の斬撃。剣よりも射程が短く、その分威力が大きい闇の魔術が祐作に襲いかかる。

「……ふむ」

祐作は顎に手を当てて思案し、煩わしそうに左の裏拳を振り抜いた。

斬撃は方向性を歪められ、地面に落下する。衝撃で少しの粉塵が舞い上がる。

『貫貫貫、ダークランス』

体勢を崩し、刺し貫く。体勢が崩れているなら、それも成功していただろう。

しかし、祐作の体勢はまったく崩れていなかった。

祐作は余裕の笑顔を浮かべ、片足で”とん”と地面を叩き。

20メートル上空まで浮き上がった。

祐作は右手を床に付いて着地し、背転。

「これで、60%」

と、無為に咳く。

これが序戦。倉淵祐作がお遊戯気分で繰り広げた戦闘であった。

化物　　そう呼ばれても仕方がないような身体能力。倉淵祐作の真の恐ろしさは、その圧倒的は白兵戦闘能力にある。一切の魔術魔法を用いず、また、戦場においては一切の策略も用いず、その身一つで軍隊クラスの先頭集団を撃破する。

倉淵祐作の肉体は、すでに人間を超越していた。

あらゆる余計なものを省いた身体は、種として完成しているのである。

「魔術とは何か、魔法とは何か。多くの魔法使いたちが、この命題に取り組んできました。ですが、未だ解答は得られていません。当然です。これは、これは術者自身を取り組まなければならない命題なのですから」

祐作は微笑み、右肘を引いた。

「僕は魔術を不要なもの、魔法を取るに足りないもの排除するものと定義しました。僕は本当に邪魔なものは、この肉体で取り除けば良いと思っています」

倉淵祐作には、それを実現させるだけの能力がある。

次に来る一撃は”遠当て”。

身構える悠斗に、右拳が打ち抜かれた。

「これで、80%」

52：黙示の闇

茜坂克己は鼻につく消毒液の臭いに顔をしかめた。薄く目を開くと、蛍光灯の白い灯りが普段よりも眩しく感じ、次に襲いかかる全身の激痛にこれが夢ではないのだと思い知らされる。

つまるどころ。

「まーた生き残ったのかにやー」

どうやらアカデミーの保健室のようだが……。

身体を起こしてみると、ベッドの周囲に朱色の線で魔方陣が描かれていた。

医療技術の発達ではなく、魔術的な蘇生術を施されたのだろう。本当に、技術の発展に泣きたくなってくる。

魂留の秘術。一回につき250万円かかると言われている魔術だった。

「ようやくお目覚めか、少年」

首をめぐらせ、思いもよらない人物に目を瞬く。

どうしてアンタが、の言葉を呑み込み、

「朽葉海斗は？」

と確認を取る。

現状、最も優先すべきなのは倉渕祐作の排除だった。しかし、海斗や美野里が祐作を護衛しているので、祐作一人を誘き寄せるのは難しい。克己と健一郎で二人を誘き寄せ、あわよくば排除してしまおうと言う作戦だった。

力不足で失敗したのだが。

「俺はその場に居合わせていなかったが、多分アイツも無事じゃないだろ。つーか、最初に言うことがそれか？ ったく、ふざけんなつての。若者は自分のことだけを考えてるよボケ」

御剣蒼夜は肩をすくめ、克己が横たわるベッドの足を蹴飛ばした。傍らに控えている佐々木流水が視線で嗜めた。

「草壁が大泉大悟、悠斗が倉渕祐作と戦ってるのにグースカ寝やがって。しかも女連れだと？ ふざけんかったの」

「でも、これは……」

。 克己が頬を引き攣らせて腹部に感じる圧迫感を確かめてみると

山岸雪子が寝息を立てているではないか。

寝ずの看病と思えてくるが、時間的にそれはない。

「この魔術、まさか雪子が？」

魂留の秘術はそれほど難しいものではない。倦厭される理由は、朱色の線が五百年物の人の血液を粉末にしたもので、それが目が飛び出るほど高価だからだった。

しかし、難しくないとと言っても、アカデミーの学生が使えるような難易度ではない。この魔術だけでアカデミーの卒業論文が書けるはずだ。

「魔力の過剰消費でちよつと危なくなっておりましたので、坊ちゃんと私めで影ながら多少は手助けしましたが……」

と控えめに話す佐々木の言葉に、克己は頷くしかなかった。

十

数え切れない弾丸が音速となって襲いかかった はずだった。

弾丸でむしり取られたアスファルトの粉塵の中から現れた草壁涼二は、衣服こそ無事ではなかったが、その身はまったくの無傷。

足元には大量の銃弾が散らばっているのに 。

一切の外傷は見られなかった。

「なん……だと？」

喉の奥から搾り出すような声だった。

大泉大悟の驚愕を、草壁は腹の底から笑ってやりたい衝動に駆ら

れる。

「貴方は一つ、思い違いをしているようです。物理的な攻撃が有効だから、槍や銃弾なら私を殺せると思ったのですね？」

「違うの、か？」

「当たり前でしょう」

草壁は肩をすくめた。失望しているという態度を、これ見よがしにアピールする。それがさらに、大泉大悟の冷静さを奪うと分かっ
ていてやっていることだった。

「考えてもみなさい。『ダーティ・サンクチュアリ神域汚辱』はどんな魔術を使われても”その全て”を無効化するのですよ。例えば炎の魔術を身体で受け止めたとします。すると、無効化されるのは”熱”、”衝撃”、”燃焼（現象）”ですね」

”衝撃”とは運動エネルギーの消去である。

水の魔術なら”衝撃”を無効化し、さらに水を消滅。土の魔術ならやはり”衝撃”を無効化し、土や石を解体して大地に返す。

肌に触れた魔法を無効化するとは、そう言うことだ。

言わば、『ダーティ・サンクチュアリ神域汚辱』はあらゆる分野に精通した解体者だった。

「貴方が作ったのは、たしかに物理法則に従っています。ですが、生み出したのは魔法であり、根本的には魔法から離れられないのですよ。つまり私は、銃弾の運動エネルギーを消し去ることが可能なのです。まあ、流石に鉄を消し去るのにはできないらしいのですが」
草壁は右腕を構えた。

すべてを凍て付かせる絶対零度、『テイルフィンゲアールヴの魔剣』が牙を剥く。喰らえば生体活動が停止するだろう、必殺の拳。それを向けられた大泉大悟は唇を奮わせた。

「……ククッ」

絶望の笑いではない。なぜなら彼はもう死んでいるのだから、今さら恐怖することはないのだ。

「神なんてクソ喰らえだと思っていたが、今回ばかりは感謝するぜ。もう一度、この俺に最後の勝負をさせてくれるってことか。これほ

ど素晴らしい一世一代の見せ場つてのは、生きていた頃に経験できなかったんだよな」

大悟は右手を広げた。

「さて、アンタの魔法はどれだけ俺の攻撃を凌げるのか、試してみるのもまた一興。……そう簡単に壊れるなよ」

「なっ！」

刹那に大悟が地を弾き、一瞬で草壁に肉薄し、広げた右手で草壁の顔面を捉えた。

草壁は反射的に大悟の右手を掴み。

「ぐっ、あああああああああッ！！」

喉の奥から絶叫した。

大悟は小さく微笑み、回し蹴りで草壁を蹴り飛ばす。

「ハッ、何が起こったのか不思議そうだな」

その顔に浮かぶのは強者の余裕だった。

「言ったよな？ 俺はこの世に存在する全ての物質を創造できると」

「今のは……電気ですか？」

電池とは……分かり易いようにレモン電池で説明すると、正極の銅版と負極の亜鉛版、レモンの酸を組み合わせるにより亜鉛がイオン化して電流が流れる　と言う装置だ。

大悟は自己の体内に、電池を作り上げたのだった。

「正気じゃないと思うか？　だが、俺の身体はすでに俺の物ではないからな」

「どのように使っても、身体が壊れても平気と言っことですか」

草壁は齒噛みする。

創造した物質で直接触れれば無効化できるが、創造した物質から生み出した物質は無効化できないらしい。

「これが、セキュリティホールって奴だ！」

大悟の恫喝と一緒に、両拳が迫っていた。

……しかし、それでも足りないのだ。

「えっ？」

草壁の左拳が、大悟の腹に風穴を開けていた。

電撃という攻撃手段を手に入れたとしても、それは子どもがナイフを持って大人に立ち向かうことと大差ない。

大局に影響を及ぼすほどの力にはなれないのだ。

大悟は最初、自分と草壁との相性は最悪と言ったが、それは大悟がアドバンテージを握っていると言う意味での最悪ではない。

「クハツ……なるほど……俺じゃ足りなかったか……」

「いえ、貴方は強い。それは保証します。悠斗君ならもつと苦戦していたでしょう。ただ、貴方の魔法より私の魔法の方が、運命に選ばれていたと言うだけの話です」

「同情までされてやがる。まったく、やってられねえな」

大悟の身体が崩れ落ちる。

身体は腐食して悪臭を放っていた。しかし、大悟の嗅覚はすでに失われ、視力や聴力もかなり低下している。

「はぁ……隆太、聖のこと、頼んだぜ……」

アイツは元から、死にたがりだからな……。

そして、この世の理に逆らっていた生が、あるべき形に戻った。

草壁は動かぬ屍に目を落とし、溜息を吐く。そしてビルの屋上を見上げ、ひとりごちた。

「本当に、この世界は残酷だ……」

悠斗君……貴方はどこまで戦い続ける気持ちなのですか？

衝撃波が全身を突き抜け、幾つかの臓器が破損する。朽葉悠斗は口の端から血を流しながらも、刀を手放さなかった。

『爆ぜよ、破碎の力』

瞬時に接近し、

『斬斬斬、ダークブリンガー』

三重詠唱の魔術を放つ。

「はあっ！」

だが、ただの拳の一振りですべてが壊される。

「往生際が悪いですね。いつまでも隠しておけるものではないでしょう。ほら、前回のように『嘲笑する虐殺者』ニースヘッケを身体に宿せばどうですか？」

左右のコンビネーションに悠斗は翻弄されていた。

ボクシングのワンツォ。それが、遠距離から放たれるのだ。

「出し惜しみしては、また彼女のように手遅れになるかもしれませんよ」

「言うなっ！」

悠斗はわが身を省みず、物体破壊の魔術を用い、倉渕祐作に高速で斬りかかる。だが、その言葉は止まらない。

「清水瑠璃は貴方が殺した」

「倉渕いいい　っ！！」

「それが貴方のブロックワードですか、悠斗君」

十

「これでラスト！」

最後のナイフが投げ撃たれる。

死体が弾け、血潮がアスファルトを染めた。

「こっちは終わりましたよ、先輩」

「うん、私の方も終了。思ったよりも楽だったわね」

支倉沙希は手を団扇にして顔を扇ぎ、クロードの方に振り返った。

「しかし、やっぱりアンタの魔法は派手よねー」

片方は地獄。ブラッド血液と言う名の破壊シエノサイドによって生み出された世界。

片方は虚無。クラヒテイ重力と言う名の暴力バイオレンスによって生み出された世界。

「さて、悠斗の方はもう終わったかしら？」

倉渕祐作はかつてない強敵だ。単純すぎるがための最強。戦闘用ではない魔法に絶望せず、健気に肉体を信じ続けた結果だった。あれほど完成された肉体は、沙希は生まれてこの方、他に見たことがない。

「大丈夫なんですかね？ 悠斗が魔法を使っているところを見たことがないんですけど……」

「そう言えば、クロードはまだ悠斗の魔法を見たことがないのよね？ まあ、私も話にしかな聞いてないんだけど」

「おい、ちよつと待て」

その時、二人の戦いを観戦していた緋芽が口を挟んだ。

「悠斗の魔法は『刃桜繚乱』ではないのか？」

「……たしか、『嘲笑する虐殺者』の状態の時に使っている？」

「ああ、そうだ。あの魔法と『魂滅』の剣の組み合わせが悠斗の最強なのではないのか？」

「……あのねえ」

沙希は緋芽の目を見ながら嘆息した。

「そっち方面の話は貴女の方が詳しいでしょう？ あの魔法は、あくまでも穢れた神の魔法なのよ」

「悠斗が朽葉家に引き取られることになった経緯に、朽葉家が悠斗の魔法に目を付けたからと聞いたことがあります。三大魔法一族の一つが目をかけるほどの魔法を、悠斗が持っていると言っことです

ね

十

「さあ、早く！ 『嘲笑する虐殺者』^{ニースヘッケ}を呼んで下さい！」
「……倉淵祐作」

悠斗は刀から手を離した。

胸のポケットに手をつ突っ込み、新たに取り出したのは小太刀。

「それほど死にたいなら、さっさと逝け」

朽葉流殺法、破月。

悠斗の身体が闇に解けた。

次、現れたのは祐作の正面。

小太刀をただ、その心臓に突き刺した。

「ガッ、こ、これは……！」

「蛭子の瞬間移動の魔術ではない」

「では何故、このようなことに」

朽葉流殺法、華月。

再び悠斗の身体が闇に解ける。

祐作の右側に現れ、小太刀で頸動脈を絶つ。

「俺は朽葉に引き取られてから、ひたすら暗殺術を叩き込まれてきた。剣術の才能が伸びなかったのではない。剣術の才能は伸ばす暇がなかったただけだ」

「そんな馬鹿なことが……！」

祐作は驚愕しながらも、右腕を振りぬく。

だが、そこに悠斗の姿はない。

「前回、お前と戦ったのは昼間だったよな？」

朽葉流殺法、禍月。

再び、正面からの斬り落としが、倉淵祐作の左肩を浅く裂いた。気配など、微塵もない。そこにあるのは、身も凍えそうな殺意である。

「三重詠唱の『ダイク・ケルベロス三重詠唱』、ニースヘッグ嘲笑する虐殺者』蛭子の『刃桜繚乱』

。それが俺の全てだと思っていたのか？」

「その言葉……貴方に返しましょう……！」

祐作は両手を広げた。

自分が世界の中心であると、神に知らしめようとしているようだった。

『斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬……！！』

それは倉淵祐作の全力。言葉を発する余裕すら失われた状態100%の力である。

そしてそれは、太古の神でも為しえぬ偉業、十三重詠唱だった。天を覆い尽くす光の剣が、悠斗に狙いを定める。

「『クラウ・ソフス十三の神剣』、受けてみる……！」

祐作の一声で剣が落下した。眩い光輪が螺旋状に回転しながら、コンクリートと鉄筋の足場を紙切れのように切り裂いていく。ビルが崩壊するのは、誰の目から見ても明らかだった。

「よし、これで！」

勝ち誇った顔をして、鼻で笑おうとした刹那。

朽葉流殺法、闇月。

背後から両肩にかけて、刃が突き抜ける。ゴトリ、と音を立てて崩壊寸前のビルの亀裂から、死蝻のような二本の物体が落下していく。倉淵祐作の両肩から赤黒い鮮血が吹き出す音色は、夕暮れに現れる野鳥の鳴き声のようだった。

「なぜだあああああああああああああ！　なぜお前がそこにいる！！！」

一切の死角を取り払った十三重詠唱。超弩級魔術を掻い潜り、悠斗は生きていた。

悠斗は血に濡れた小太刀をダラリと構え、幽鬼のように不気味に接近する。倉淵祐作は蒼紫色に変色した唇を震わせながら後退した。

「……………これで終わりだ」

朽葉流殺法、終月。

闇の魔法『ラスト・ダイクネス黙示の闇』。

その謎は、祐作が命を落としても明かされることはなかった。

53：闇から見出す光

「はっ？ 何だっつて？」

「耳が悪いのかよ、オッサン。いや、この場合は爺さんか？ いや、クソジジイってのもアリだな。まあ何でもいいや、ハゲ。もう一度説明してやるから耳をかつぽじってよく聞きやがれ」

王聖魔術学園の学園長室。重厚なテーブルに足を乗せた御剣蒼夜が、年長者をまったく敬わない不遜な態度で吐き捨てた。

「分かんねえのか？ アンタらの学校は俺が買収したってことさ」

「正確には御剣家と八神家のお二つですが……」

「るせえよ、流水。働きかけたのは俺なんだから、もっと俺を敬え。ひれ伏して泣き叫べ、このド阿呆が」

泣き叫ぶ必要はないだろう。それに、提案したのは朽葉悠斗である。だが、流水は特に指摘しなかった。言っても無駄だからである。

十

立花健一郎はPC上に踊る数字に頭が痛めていた。

国立魔術アカデミーが抱えている最大の問題に、魔法庁の支援を受けられないと言うものがある。おそらく、魔法庁の思惑は国立魔術アカデミーの吸収なのだろう。泣きついてくるのを待っている状態なのだ。

研究機関と権力は結び付くべきではない。

それは自ずと研究の視野を狭めることになる。

「しかし、この情報の量は……」

王聖魔術学園の買収に関わったのは八神と御剣だったが、その中身はアカデミーとの併合である。

少人数のアカデミーが格下に見られるのは仕方のないことだった。しかし、人数を増やせば魔法庁も無下にはできなくなる。

さらに、戦力の過剰保有の問題も解決できる。いや、これは誤魔化しているだけなのだが、少数精鋭という図式を崩すことができた。「そのしわ寄せが、すべてこちらに回ってくる」と……」

膨大な学生名簿に、健一郎は再び溜息を吐く。

美野里に敗北しそうになっていた自分には、この程度の役目しかないのだろう。縁の下の力持ちと言えば少しは気が紛れるか。まあ、どんな言い方をしても所詮は裏方なのだが。

……ところで、どうして中島先輩があの場合に？

健一郎は小首を傾げた。

タイミングが良すぎたのは気のせいではないだろう。そう言えば、直前に克己から携帯を投げ渡されていたが……。

ピンチになったら警察だ。

「警察……ね」

無意識に110を押していた。

『どーもー、克己さんだにやー！ まったく、不甲斐ないぜ健一郎

！ 困ったときに神頼みする奴は蛆虫なりー！』

「……………」

バキッ。

「あの野郎……！」

健一郎は知らない。砕け散った携帯電話の中には発信機や盗聴器が仕込まれていたことを。それら情報を幽香が受け取っていたことを。

十

「うわっ、寒気がした……」

部屋に入ると、茜崎克己が窓を閉める窓を　と看護婦に命じていた。

傲岸不遜な態度である。雪子は「アンタは何様よ」と嘆息し、病室に入った。

「おう、雪子つちじゃねーですか」

何の変哲もない一般の病棟である。闇医者にかかるほど身体が壊れていなかったたので（雪子が修復したからだが）、普通の医者にかかっているのだ。

「アンタねえ、その口調はどうにかならないの？」

「こればかりはポリシーですからにゃー」

雪子は再び嘆息する。

「ったくよお、溜息を吐きてえのはこつちですよ!?!　治療費25

0万円って何事ですかー!?!」

「命あつての物だねでしょ？」

全身を血塗れにして倒れていた時の克己は、もう虫の息だったのだ。それこそ、一秒後には息を引き取っていたかもしれないほどに。

「保健室に朱色の粉がなかったら、死んでたのよ？」

「へーへー、感謝してますにゃー」

「あとこれ、昨日先生が克己だけに追加で出した課題。これをやっておけば、今学期の単位は数ミリだけ安心できるらしいわよ」
「数ミリって何ですか!?!」

十

「……………うるせえ」

悠斗はカーテンの向こう側から聞こえてくる雑音に顔をしかめた。おそらく、もう退院しても大丈夫な具合の克己と、クラスメート

の山岸雪子なのだろう。いつの間にか仲良くなっていることに最初こそ微笑ましく思えたが、罵り合いになってからはいつ殴りこみに行こうかと考えている。

「まあまあ、悠斗。ここは落ち着け」

「そうですね、まだ体調が芳しくないのでから」

米神をピクピクと痙攣させ始めた悠斗に、緋芽と咲夜が止めにかかると。

「取り合えず、これをどうぞ」

「ふごっ、ふおお……」

咲夜は歪な形の林檎を悠斗の口に押し込んだ。

ナイフの扱いがぞんざいすぎる。口の中で林檎が刺さった。

「あっ、すいません」

「ったく、お前は俺を殺す気が……？」

悠斗は咳き込み「もう少し優しくしろ」と涙声で訴える。

「ほっほっ、吾らは普段から優しいぞ？ お主が気付いておらんだけじゃ」

緋芽は口元に手を当て、貴族のお嬢様のように笑った。

「お前らいつの間にか仲良くなってないか？」

ジト目で二人に視線を向ける。

「はあ……しかし、やっぱり入院か」

体調はそれほど悪くない。が、良くはない。そう言う意味では、入院はそれほど間違った選択ではないのだが、こればかりは時間が経つまで回復しないだろう。

蛭子の力が精神を蝕むのに対し、倉淵祐作に使った魔法は悠斗の肉体を蝕むものなのだ。

身体を維持するための栄養素がゴツソリと抜け落ち、重度の栄養失調に陥るのである。おそらく、あの魔法を発動するための魔力量が膨大で、悠斗が持つ魔力だけでは足りないから、体内の栄養素で代用しているのだろう。

……2、3日で回復するんだけどな。

悠斗は溜息を吐き、布団に身体を投げ出した。

「ご苦労じゃったな」

「……ああ」

緋芽が優しい瞳で、静かにこちらを眺めている。

「お疲れ様です、悠斗さん」

「お前からこそ、良くやってくれたよ」

咲夜が感情の見えない顔をこちらに向けている。

「何だかさ、色々な物を失ったよ。自分の心だったり、超えなければならぬ人だったり、淡々とした平和だったり、相容れない宿敵だったり、俺の回りには色々な物があつた。でも、そのすべてがもう失われている」

でも、後悔はしていない。

「悪くないな、これは。失われた物は多々あるけど、ここにあるのは俺の命よりも価値のある物ばかりだ」

例えば、緋芽や咲夜とか。

悠斗の視線に気付いたのか、二人は微笑みながらも顔を赤らめた。

「アンタはこんなことにも気付けなかつたんだな、倉淵」

十

「ば、買収だと？」

「ああ、そう言うこと。八神の石頭は中々納得しなかつたけどなー」
蒼夜は席を立ち、窓を開けた。

校庭では実戦魔術の授業が行われている。どこか懐かしい光景だ、
と思いつながら蒼夜は”元学園長”の本間弥一郎へと振り返る。

「この学園が抱えている負債を転がして、株買占めて、んで押しかけたんだ。さあ、今日からこの部屋はアンタの物じゃねえ。誰に断

わって、ここに居座ってるんだ、テメエは？」

「ひっ、ひいひい！！」

ガタガタ喚いてるんじゃねーよ、と蒼夜が呟いて机を蹴り飛ばそうとしたとき、ポケットの中の携帯が震えた。

「空気ぐらい読みやがれてんだ、畜生」

「は？」

「いや、こつちの話。で、何が起こった？」

蒼夜は部下に黎明の魔石の回収を命じていた。海斗が持っていたのはレプリカで、本物は美野里が祐作に渡しているはずである。だが、祐作の死体からは魔石は回収されなかった。

「見付かったのか？」

「いえ、魔石は倉渕祐作が潜伏していた魔術カルテルの倉庫街にあつたらしいのですが、そこは既に壊滅していました」

蒼夜は眉間に皺を寄せた。

「生き残っていた者の証言ですが、義手の男が襲撃をかけ魔石を奪つていったとのことです」

「……………」

「隊長？」

「ハッ、そうかよ！　そうかそうかそうか！！　義手の男がねえ！

！」

「あの、私たちはどうすれば？」

蒼夜は喉の奥から笑った。こんなに笑ったのは久しぶりだ。

「さっさと家に帰って身体を休めとけ。これから忙しくなるぞ」

54：番外編「遊園地」

六月中旬。梅雨まつしぐらの今日この頃、二週間後は期末試験が控えているにも関わらず、生徒たちの間にはどこか弛緩した雰囲気 が漂っていた。じつとりとした湿気と、初夏に差しかかり高まりつ つある気温が、彼らから勤勉さを奪い取っているのかもしれない。

とクロードは愚考する。

実際のところ、それほど勤勉な者はこの学校にはいないのである。勉強とはテスト前になってからするものであり、普段はあくまで” それなりの努力” でこと足りるはずなのだ。

その最も顕著な例が、目の前に寝転がっていた。

「校則は破つたらいけないよ」

「……それはお前の価値観だろ」

テメエの考えを押し付けるなよ、と朽葉悠斗はつまらなそうに呟 き寝返りを打つ。

「でも、今朝のホームルームに出てないんでしょ？」

「ああ、そうだが？」

それがどうしたとばかりに平然と言い張る悠斗に、クロードは言 うべき言葉が見つからなかった。

国立魔術アカデミーの男子寮は基本的に相部屋なのだが、この友人は上手く立ち回って相部屋を一人（現在は緋芽がいるので語弊があるか？）で使用しているのである。

大変厚かましい。が、それは別にどうでも良い。

「ねえ悠斗。君の今学期の単位の合計は？」

「えつと……月曜は魔法史、錬金学。で、水曜は魔術経済学、数学

B、現代国語だから、合計で十二単位か？」

「はあ！？　じゅ、十二単位！？」

ちなみに、時間割表のひとマスが二単位である。

この学校は上級魔術理論と上級魔術実戦を所得すれば卒業できる

ので、悠斗のしていることに問題がある訳ではない。始業と終了のホームルームに出てさえいれば、担任は何も言わないのだから。

とは言え、最低でも二十単位は取っておくべきだろう。

これでは何のために学生をやっているのか分からない。

「……あのなあ」

悠斗はクロードの悲鳴じみた声に耳を押さえた。

「お前だつて一年の頃に”上級”取っておけば、今頃は楽ができたんだぞ。克己はともかく、お前にはそれだけの頭脳と技術があるだろ」

「そ、そんなこと……できたかもしれないけど」

でも、そんなやり方は邪道だとクロードは思った。

どちらかと言えば、クロードは努力型で悠斗は天才型である。元々非凡な才能を持つ二人であるが、取るべき手段は人それぞれで、悠斗は最短距離を突き進むのに対し、クロードは積み木を重ねるがごとく物事を進める。

石橋を叩く　　と言えば聞こえは良いが、実際のところクロードには自分に自信がないのである。おそらく幼少の頃のトラウマが原因だろう。

こればかりは追求されては堪らないので、クロードは話の矛先を変えた。

「悠斗は姫川さんのこと、どう思ってるの？」

クロードは最近通学路で見かける少女のことを思い浮かべる。長い黒髪の楚々とした美少女で、どこか儂げな雰囲気醸し出している姫川咲夜。

アカデミーと学園が合併したことで、学園の優秀な生徒がアカデミーに編入してきた。そのどさくさに紛れさせ、彼女を編入させたと悠斗は語っていた。色々と根回ししたのだろう。

「イマイチ理解できないのだが、お前は何を言いたい？」

「いや、えと……その、ねえ？」

「ん、どうしたものか」

咲夜の名前を聞き、悠斗の視線が鋭く細められる。どうやら何か思案しているようだ。これは悠斗が思索するときの表情なのだが、見ている方は咎められているようで肝が縮む。

それが、女受けするらしいのだが。

この点が、鈍感なクロードにはあまり良く分からない。

「規則に始まり、単位、咲夜のことね……」

「どうしたの？」

「……ああ、なるほど。そう言うことか」

ふと、悠斗の視線が緩んだ。

敵わないなとクロードは思う。この友人はどんなことでもあつという間に見抜いてしまう。クロードは生涯、彼に隠し事はできないだろう。

クロードは悠斗を”心配”しているだけだった。

「俺の周りの奴らは口を揃えて俺のことを”優しい”と持てはやすけどな。どうしてお前の優しさは話題に上らないのか、まったく理解できんよ」

「と言われましても……」

「そうだな。何なら適当な女をデートに誘ってみるか？」

理解者がいないなら、作れば良い。

悠斗は自分の意見を名案だと自賛しながら、ベッドから身体を起こした。

本が積み上げられた机の引き出しを開け、古ぼけた本を取り出す。それは、と訊ねようとするクロードを制して、悠斗は本を開いた。

どうやら琴にしていた紙片を抜き取ったらしい。

それは、二人用の遊園地のチケットだった。それも、二枚もある。

「そんな優しいクロード君に感謝し、これを進呈しよう」

悠斗は気恥ずかしそうに笑い、一枚をクロードに渡した。

「カップルを対象に販売されているチケットらしい。普通の入場券よりも少しオトクなんだとさ。商売上手な遊園地だと感心させられたが、不景気だからな。こうまでしないと経営を支えられないのだ

るっ」

「これ、どうしたの？」

「克己に貰った。御剣の次男坊から何枚かせしめたらしい」

どうして御剣蒼夜が出てくるのだ、と言うクロードの質問を受け、悠斗は「魔法庁もお役所なんだよ。聞き込みを円滑にするため

賄賂みたいな使い方をしたり、取引先の顔覚えを良くするときに使
うらしい」と脱力して答えた。

「それにしても、克己がどうして？」

「さあ？ 副会長でも誘うのかね？」

悠斗は特に興味なさそうに呟くと、ベッドに寝転がった。

先ほどの古ぼけた本を開き、大きな欠伸をする。

もうそろそろ、潮時のようだ。クロードは頃合を見計らい、悠斗
の部屋を辞した。

「このチケツト、どうしよう……」

手に残った薄い紙を天上に向け、意味もなく光に透かしてみる。
溜息しか出てこなかった。

……誰を誘えと！？

十

クロード・キリングゲートは途方に暮れていた。

無難なところで妹か？ いや、だが兄を毛嫌いしているあの妹が
「うん」と頷く光景を思い浮かべてみる。果たして生きて帰れるだ
ろうか？ 水魔術をぶっ放されるのは目に見えている。

遊園地……と言うことは、やはりデートなのだろう。

克己は いや、男を誘うのはチケツトの仕組みからNGである。
しかし、悲しいことにクロードの身近には女性がいないもので…

…。
姫川さんは悠斗の……何なんだろう？ あのお姫様はなんだか苦手だな。まあ、誘える訳ないけどさ。えーっと、幽香先輩と沙希先輩はどうだろう？

中島幽香。あの無言で敵を焼き滅ぼす。

……いやいやいや。

並々ならぬ恐怖もあるが、彼女は元々悠斗を敬愛（信仰？）している。クロードのことなんて道の脇に生えた雑草ぐらいにしか考えていないだろう。

どうしてあの友人はあんなにモテるのか、納得できないものがあった。

しかし、沙希はどうだろう？

彼女が悠斗と会話しているところを、クロードはほとんど目撃したことがない。お互いの実力こそ認め合っているようだが、それ以上は何もないのではないだろうか。あれは一線を引いた関係のような気がする。

それに……。

……沙希先輩かあ。

クロードは去年の頃から、ずっと沙希に憧れに似た感情を抱いていた。

それが恋愛感情なのか、自分でも良く分からない。だが、彼女のことを考えると不思議と胸が高まるのだ。

「でもなあ」

沙希はもうアカデミーを辞めている。

探して……どうするのか。デートしましょうとチケットを渡せと言うのか。

恥ずかしすぎる。考えただけで、穴があいたら入りたくなってくる。

「……はあ」

クロードは溜息を吐いた。

授業中だった。悠斗も選択している魔法史の授業で、担当の教師が黒板に描いた地図を示している。ギリシア神話の成立について説明しているところだった。

……悠斗は、誰を誘うんだろう？

残りの一枚は、悠斗が使わず。だとすると、緋芽か咲夜か、大穴狙いで幽香だろう。だが、あの面倒臭がりの友人が身近にいない幽香を誘うために身を削るだろうか。そうは思えない。

「朽葉君、アキレウスを魔術的な解釈で分析して下さい」

「はい。ギリシア神話系魔術師が書いた本によると、アキレウスには俊足と鉄壁の属性を持つようです。俊足は日本神道の韋駄天と似たようなもので、下半身の運動能力の加速を助けます。風のエレメントと相性が良いとされています」

「では、鉄壁とは？」

「魔術を扱うときの心構えのようなものです。アキレウスは不死の身体を持っていました。不死は鉄壁。あらゆる軍勢を跳ね返す盾になります。しかし、アキレウス腱……アキレス腱の部分だけが不死ではなかった。つまり、結界を張るときはわざと一点だけ脆い部分を用意する。すると、敵は脆い部分を狙って攻撃するので守りやすい」

担当の教師は満足気に頷いた。

この教師は良く悠斗を当てる。悠斗もこの授業はあまりサボらない。こうして質問されるのも満更ではないようだった。好きな授業なら真面目に取り組むと言うことなのだろう。

……心配する必要、なかったかな？

クロードは苦笑した。どうも、自分はお節介でいけない。こんなのを、最近の言葉ではウザイと言うのだろう。だから妹に嫌われているかもしれない。

「おっと、そろそろ時間ですね。では、今日はここまでにしましょう。来週はアキレウス繋がりでゼノンのパラドックスにしようと思います。皆さんにはぜひ、知っておいて貰いたいので……朽葉、サ

ボるなよ」

「……と言われましても」

「朽葉は前回サボったから『アキレスと亀』について調べとけ」
朽葉なら調べる必要がないかもしれないが、と担当の教師は苦笑いしながら教室を出て行く。同時にチャイムが鳴り、昼食を用意していない生徒が購買や食堂へ流れて行った。

昼休みだ。

クロードは自分の教室に戻ることにした（さっきの授業は移動教室なのだ）。

ちょうど、その時である。

「クロード先輩！」

聞き覚えがあるような……でも、誰のものだったか思い出せない声。

振り返ると同時、クロードの鼻先に一枚の紙が突き付けられる。

「わ、わわっわ、私と遊園地に行きませんか!？」

「ええええええええええっ!!!」

件のペアチケットを突き付けているのは百合原綾香だった。

……だから僕にどうしろと!？

十

時は少し遡る。

梅雨空の一日、百合原綾香は退屈そうにアカデミーの授業をこなしていた。学生生活とは、ともすれば作業的になりがちである。部活などの勉強とは方向性を異にする活動があつてこそ、色付くもの。それが学校生活であり、恥ずかしい言い方をすれば青春である。

綾香は一枚のチケットを眺め、溜息を吐いた。

自分の教科書に挟まれていた物なのだが、まったく身に覚えがな

い。となると、誰かの持ち物なのだろう。しかし、持ち主を探そうにもカップル用のペアチケットとなると誤解されそうで渡せない。世の中には落し物を口実に、デートに誘う馬鹿な男子がいるのである。

現に、昨日から綾香は何人も男子と「ゆ、ゆゆゆ、遊園地に……」「ごめんなさい」と言う会話を繰り返しているのだ。

チケットが何十枚も出回っていると考えるべきだろう。

「あの……百合原さん？」
「なに？」

クラス委員の坂上美優が、恐縮しながら話しかける。

草壁涼二の襲撃事件に巻き込まれた彼女は、綾香が悠斗たちの知り合いだと分かると態度を硬化させてしまった。触らぬ神に何とやら、である。たしかに、悠斗たちに関わると……巻き込まれる。

でも、綾香はその点は不満ではない。

先に関わろうとしたのは自分からだったし、むしろ、倉淵祐作の事件で除け者にされたのが気に入らなかった。

「えっと……これを、渡して欲しいって皆が……」

と言つて、彼女が机に落としたのは十五枚ほどの封筒だった。

「ら、らぶれたあ？」

「そ、そうみたい……」

素っ頓狂な声を上げてしまったのを後悔し、綾香は手紙を拾い上げる。

宛先はクロード・キリングゲートや立花健一郎。どうやら、自分は”悠斗たちご一行”と親密だと思われるようだった。綾香は猛烈に頭痛がした。

「そ、それじゃあ渡したからねっ!？」と去っていくクラス委員。

綾香は手紙を光に透かしてみた。

……チケットが入っている。

「出回ってるなあ、これ」

発信源は一体誰なのだろう。綾香は首を捻った。

それにしても、クロードである。彼は金髪碧眼の西洋人的風貌から、黙っていればそれなりに絵になる少年だった。だが、クールそうな見た目に反して、内面はかなり”甘い”。

克己の貫いているような信念。

健一郎の持つ影のような苦悩。

悠斗の鋭利な刃のような頭脳。

どれも、クロードには欠けている。戦闘力を別問題とすると、あのメンバーの中で、クロードの人格は至って平凡なのだ。

「クロード……先輩」

でも、その”甘さ”こそクロードの最大の長所だった。

人を殺すしたのは初めてでしょ？

ちよつと休んでおいた方がよいよ。

必要ないよ。僕は戦うつつもりはないからね。

これはただの兄妹喧嘩さ。

アリスとの決戦の時、それでも綾香への気遣いを忘れなかった。

「……クロード先輩」

綾香は梅雨空を見上げ、溜息を吐いた。

……誘ってみようかな。

十

「わ、わわっわ、私と遊園地に行きませんか!？」

「えええええええええつ!!」

「い、嫌なら別に構いませんけど……」

「……」

「えっと、その……私なんかではクロード先輩も迷惑ですよ……？」

「いや、そんなことはない!!」

「そ、それでは!？」

「あ……うん。分かったよ」

茜崎克己はヘッドフォンから流れている声を、ニヤニヤと笑いながら観賞していた。克己のデスクに並ぶ三つのディスプレイには、アカデミーに仕掛けられた隠しカメラの映像が映っている。

無論、三つの画面ではすべての範囲をカバーできないので、クリック操作で観賞場所を切り替えられるようにプログラムしている。なお、容量の問題もあり、映像の保存期間は一週間である。

「ふむ……これは意外な展開だにゃー」

克己は遊園地のチケットを百数枚持っていた。

これにはひとつの仕掛けがある。そもそも、これだけのチケットをあのケチそうな御剣蒼夜がタダで譲るはずがないのだ。しかし、それが期限切れ寸前のものだったなら話は違う。

チケットは来週末までには使えなくなる。

そんな面白そうな物を、机の中に眠らせておく克己ではない。克己はあらゆる知り合いに、このチケットを配りまわったのだ。手違いで悠斗に二枚分渡してしまったのは誤算だったが。

クロードは誘われる側だろうから、チケットを渡す必要はないと考えていた。

どうせ最後には溜息を吐いて、自分から渡すのは断念するに決まっている。あの少年にはその手の甲斐性が決定的に欠けているのだ。

人はそれを、ヘタレと呼ぶ。

梅雨明けを待ち、各人は行動に移った。

休暇の土曜日の早朝。クロードは何度も天気予報を確認し、最後に新聞の株価を調べて、閉園になる気配がないか確認する。

「って、分かる訳ないよ！」

遊園地の株を調べても、クロードの知識では何も分からない。天気予報を調べようとしたのに、どうしてここまでテンパってるのだろう。

そう、デートなのである。

シャワーを浴びた方が良いのか、変な格好をしていないか、口臭は大丈夫だろうか、財布の中は潤っているか、携帯を忘れていないか、色々とチェックする。

と、ドアがノックされる。

「は、はいいつ？」

思いつき裏返った声で返事をする、ドアを開けて悠斗が現れた。

こんな季節なのに長袖の黒革ジャケットを羽織り、膝の辺りが少し破けた紺色のジーンズを穿いている。腰の辺りに上着の上から金属質なベルトを巻いていた。暑そうな格好だが、様になっている。

悠斗は珍獣を見るような顔をしていた。

「……………おい」

「な、ななな、なに？」

「正直に言わせて貰うが、その格好は何だ？」

と言って、クロードの服装を指摘する。ねめつけるような視線に、クロードの身体が堅くなった。

変である。と言うか、気色悪い。ブレザーのような服を着ているのは、まあ置いておこう。それより髪型である。どうしてオールバックにする必要があるのだろう、と悠斗は疲れた顔で言った。

上ずった声で「ど、どどど、どこか変かな!？」と答えるクロード

ドに、悠斗は溜息を吐いて。

「……変以外の何物でもないな」

朽葉流殺法 闇月。

突然背後に現れた悠斗が、後頭部に手刀を放った。当たり所が悪ければ脳震盪を通り越して死に至ると言う暗殺術である。

「……ぐへえっ」

と、間の抜けた悲鳴を出して床に崩れるクロード。

クロードが意識を取り戻すと、すでに時計の長針が二周していた。

「あれ？」

身体を起こし、周囲を見回す。自分の部屋である。どこも違和感はないのだが、なんだろう、この頭に残る鈍痛は。

鏡で確かめるが、どこにも瘤は残っていない。

「あれ？ 僕ってこんな格好してたっけ？」

Tシャツに薄手の青い上着を羽織っているのだが、そもそもこんな服を持っていたかも定かではない。髪が少し濡れているのも気になった。

おっと。

そろそろ待ち合わせの時間だ。

クロードは爆発しそうな心臓を片手で押さえながら、部屋を後にした。

悠斗が部屋の外で溜息を吐いていたのは余談である。

普通と快速を電車を乗り継いで目的地に到着する。駅の入口にあり、地方に密着した遊園地ながら、規模はそれなりに広いところだと聞いたことがあった。やはり不況の時代に生き残るのは大変なの

だろう。様々な企画で顧客の維持（増加ではない）を狙っているよ
うだ。

クロードは待ち合わせ場所にした駅の入口で突っ立っていた。
まだ時間まで三十分もある。ウォークマンを持ってくれば良かった
かな、と後悔していると、ピンク色のカーディガンを肩にかけた
少女が姿を現した。

「あ、あ、あああ、あの！」

「や、やあ……」

「おはようございますっ、先輩！」

どうやら彼女も相当緊張しているらしい。地震などでパニックに
なっている人を見ると、自分だけ冷静になる　　と言うエピソ
ードをテレビで聞いたことがあるが、そんな心境かもしれない。

クロードは予想外に冷静になっている自分に苦笑した。

「早かったね。僕もさ、こんなのは初めてだから到着時間を計算す
るの、ミスしたみたい」

「そっ、そうですね!？」

お互い様だね、と笑いかけると綾香は身を堅くした。

どうも、違和感が拭いきれない。百合原綾香と言う少女はもつと
強気で他人のことなんて気にかけないタイプだと思っていた。クロ
ードのことなんて雑草のように　　って、この表現はもう何度目に
なるだろう。

「まだ開園してないけど、混雑するだろうから先に並んでおこうか
？」

クロードはそう提案すると、綾香の手を取って受付に並んだ。

手を握られたからか、綾香は顔を赤くする。そんな初々しい反応
に朴念仁の少年はまったく気付かず、学校の授業の話などをして一
人で笑っていた。

55：平穩と凶報

薄暗い部屋の中、一人の少女が虹色の水晶体を見詰めていた。

七歳前後の少女である。きちんと手入れしていれば綺麗に見えるはずのプラチナブロンドの髪を床まで届くほど伸ばしていることから、容姿には頓着しない性格なのだろう。それもそのはず、黒い口―ブを頭から被っている辺り、お洒落には無縁のようである。と、それまでジツと動かなかった少女がピクリと動いた。

細い指を水晶体の上に置き、何も映らない水晶を覗き込む。

「……『ラスト・ダークネス 黙示の闇』の使用を確認」

少女は『セレブリック・アイ 千里の魔眼』の保持者だった。この魔眼は千里眼の亜種で、水面やガラス、水晶などの透明な物体を通して、対象を監視することができる。

魔眼は血系で遺伝するので、魔法とほぼ同じ扱いを受けている。厳密には魔法は精神面に依存するのに対し、魔眼は眼球という肉体に依存して行使されるのであって実際には多少異なるのだが、ここでは言及しない。

加えて、魔眼の保持者と魔法の継承者が子を成せば、必ず魔眼の保持者が生まれて、魔法の方は継承されない。

この事実によって、魔眼は魔法より上位のものとする風潮がある。

「……場所は、極東の島国」

少女の声を聞く者はいない。

だが、少女は自らに真実を伝えるかのように、黙々と情報を取得する。

「魔法特性は不明。継承者は朽葉悠斗。魔法の覚醒段階は血系魔法ではなく覚醒遺伝と思われる。ただし多くの覚醒遺伝魔法使いが魔術を使えないという事実に反し、幼少より魔術師としての教育を受けていたため魔術師としても優れている」

少女は水晶体から手を離れた。

ボロボロの木の椅子から飛び降り、薄暗い部屋の中を歩き回る。
「始まつちやったね。いよいよ『深淵の闇』^{アビス}が動き出すよ。黙示よりも深い闇が。うふふつ、貴方も大変ね、ニーズヘッグ」

十

七月十五日、期末試験の二日目。

「花火大会？」

悠斗はあまり授業を取っていないので、試験数もそれだけ少なかった。かと言って、男子寮の部屋でたらだと過ごすのも非生産的なので、図書室で自習している連中に混じっていた。

することは自習ではない。

魔法庁の部署のひとつ、全国高校魔法連合が主催している『夏休み学生論文大会』に提出するレポートを仕上げていた。

このイベントは自由研究や読書感想文などの、単なる夏休みの宿題的なものではない。魔法について専門的に研究している学生を対象にしていて、優秀者には多額の賞金が出る。全国高校魔法連合は研究者としての肩書きを持たない学生たちに、魔法の研究を推奨する機関である。

悠斗の場合は賞金が生活費になっているので、あまり褒められたものではない。が、それだけに真剣に取り組む必要があった。

クロード・キリングゲートに話しかけられて、鬱陶しそうに返事をしたのは仕方のないことだった。

「僕の話をちゃんと聞いてた？」

「いや、さっぱり」

花火大会のフレーズに反応しただけだった。それまでクロードが何を話していたのか、さっぱり記憶に残っていない。右耳から左耳へと抜けていったのだろう。

クロードは悠斗のレポートを覗き込み、肩をすくめた。

「仮想空間における魔力の位相転移？ えっと、これは哲学かな……？」

「無理に理解しようとするな。そうだな。テーマは『魔力永久機関』だ。これは俺たちのいる三次元世界とは別の並行世界から、魔力というエネルギーを取り出せるか否か、それについて論じている」

「……えっと」

「理論的には五十年ほど前に可能だと証明されているのだが、転移の際に生じるズレが大きくて実用的ではないんだ。これを改善できれば、後世の学問に影響を与えられよう」

「え、え？ それは……」

「魔術学の世界では、成功すれば億万長者になれる命題が三つあつてな。一つ目は『三つ首の龍』。量子力学とは元素の最小単位を観測することから始まるんだが、魔術量子力学は目に見えない魔力を扱い、魔力は術者・術式・発動した魔術から観測されると理論立てられている。だが、これについて証明はまったくされていない。二つ目は『ライブニッツ予想』。これは数学的な視点から、魔力の消費量と威力は複素数 N を基にした直線状に存在するという定理だ。だが、これは計算を無限に続けなければならず、どこかで計算が狂っている可能性もある。三つ目は『魔力の超流動』。魔力は流動性が高まると別位相に転移することがある。だが、その法則性は解明されていない。流動体部分がボース濃縮しているのは分かっているんだがな。俺の研究は三つ目の超流動と密接に関わっているんだ」

クロードはしばらく黙り込み、やがて重苦しく呟いた。

「ごめん、まったく分からない」

「……だろうな」

悠斗はかなり残念そうな顔をした。

この図書室は試験期間中なのにまったく人がいない。国立魔術アカデミーには二つの図書室があつて、片方は冷暖房完備、蔵書も新

書ばかり集められていて、常に図書委員二人が待機しており、図書の貸し出しを行っている。

しかし、もう片方は冷暖房不完備、蔵書もホコリ臭い古書ばかり集められていて、図書委員の姿はどこにもない。借りたい本があれば、設置されている用紙にクラスと名前を記入すれば良いので多少気軽ではあるのだが。

クロードは下敷きを団扇にしていた。

何もしていなくても汗が流れるほど、この図書室は熱気が籠っている。

「じゃあ、最初から話すね」

パタパタと下敷きが揺れる。

「今度の夏季休暇で、百合原さんの家が所有している別荘に招待されてね。なんか広々としたところらしくて、どうせなら他のみんなも誘ってしまおうかってことになったんだ」

「百合原の別荘？」

そこに招待されたのだとクロードは言う。

もしかして、この鈍感でへっぽこな友人と、あの大人しそうに見えるて実は好戦的な後輩は上手く行っているのだろうか。クロードは空気を読まないところがある。肝心なところで押しが弱い。二人が仲良く話している光景が、まったく想像できないだけあって本当に大丈夫なのだろうかと心配になる。

それに、元々こいつは支倉沙希のことが好きだったのではないかと百合原家つて名門だったのかな？」

「いや、聞いたことはないが、魔眼持ちの一族だから、魔法使いの世界でもそれなりに名が売れているはずだろ。しかし、お前と百合原が？」

「なんだよ？」

「いや、なんでも」

まあ、沙希とはまったく脈がなさそうだし、ちょうど良い組み合わせに思えてきた。収まるべくして収まったと言っただけである。ど

ちらにしろ、悠斗が口を挟むことではないが。

「それにしても、夏休みに別荘に誘われるほどだとは」

この学校には別荘を持つている家柄の者がそれなりにいる。魔法使いは代々地元の名士であることが多く、綾香がそれだけの家に生まれていてもおかしくない。

「で、俺の他には誰を誘ったんだ？」

「克己は面倒だからパスらしいよ。会長も角が立たないように言ってくれたけど同じような理由で行かないみたい。姫川さんは悠斗が行くなら付いて行ってくて言った。そう言えば、百合原さんはアリスを誘うみたい」

百合原さんとは　これはまた他人行儀な呼び方だ。

「俺が言うのもなんだが、お前らって友達いないのな？」

「余計なお世話だよ！」

悠斗のあまりにも失礼な言葉にクロードは膝を上げた。

まあまあ、とクロードを落ち着かせ、悠斗は考える。別に誘いを断わる理由はないが、行く理由もない。克己の面倒だと言う発言は、言い方はともかく至極単純で納得できる。

わざわざ馬に蹴られに行くような馬鹿はいない。

「そう言えば、花火とか言っていたよな？」

「ああ、そうそう。それを忘れてた。たしか別荘がある地域にはちようど大きな祭りがあって、盆踊りの後に花火大会があるんだって」
「……祭りか」

悠斗はその種のイベントを疲れただけの無用なものと思っているが、祭事だけは別だった。出店や人混みの喧騒は置いておき、祭りにある独特の一瞬、あの静まり返るような瞬間は結構好きだった。

神の息吹を感じられるあの空気に触れるのも、やぶさかではない。クロードは悠斗の表情の変化を見抜いたのか、しきりに誘いをかけた。無理矢理ひねり出したような勧誘文句を悠斗は苦笑しながら聞いていたが、その中の一言に悠斗の脊髄に電撃が走った。

「七福神のえびすを祭ってるんだってさ。なんか縁起が良い感じが

するよね」

「恵比寿」とは「蛭子」と混同・同一視されることがある神だった。

十

茜崎克己の部屋は、いつ見ても酷い有様である。クギやネジ、材質不明の金属板やらが散乱していて足の踏み場がない。靴下を履いているだけでは心もとないので、克己の知り合いは大抵スリッパを持参する。

「なるほど、悠斗の様子がおかしかったって？」

克己は細長い金属を長方形の箱に詰め込んでいる。赤や青のコードが箱から飛び出し、テレビのリモコンのような物体に接続されている。

着物を着た少女は初めて入った克己の部屋で、勝手知ったる何とやらとばかりにずけずけとベッドを占領している。この時代では漫画がお気に入りなようで、部屋の本棚から気に入った物を紙袋に詰め込んでいた。

「溜まつてるだけかもしれないにゃー。にゃーにゃーと盛りの付いた猫みたいになつてるだけにゃー」

「そのふざけた喋り方、せめて吾の前では改めよ。燃やすぞ」

緋芽は鉄板を拾い上げて克己に投げ付けた。

背後からの強襲を、克己は振り返らずに片手で受け止める。

「って言われても、これは習慣だからどうにもならんぜよ。で、最近起こったことから悠斗の異変を探ろうにも、本当に何も起こっていないからにゃー。物珍しかったのはクロードの阿呆が百合原の別荘に誘ってきたことぐらいか」

「あの金色の小僧か」

「そうそう、その小僧だにやー。空気を読まない阿呆だから、また迂闊なことでも口走ったのかもしれないね。まあ、俺には関係ないけど」

「分かってはいたが、お主は冷徹な男よのう」

「それも今さらだぜよ。悠斗はとっくにこの俺の性格を見抜いてる」
「それもそうだと緋芽は納得した。

先日の倉渕祐作のときも、悠斗は最後まで克己をアテにしていなかった。が、それでも克己は”男”だったらしい。海斗と潰し合ったのは、張り合うだけの矜持があったからだ。

「まあ、悠斗ならどんなことがあっても切り抜けるだろうって信頼もあるんだけどにやー。進んで関わったら、どんな厄介事に巻き込まれるか分からないって理由もある。我ながら矛盾してるにやー、あっはっは」

信頼と倦厭が同居している。克己自身、悠斗のことについてとなると感情を持て余してしまうらしい。

緋芽は漫画を放り込んだ紙袋を持ち上げると部屋を後にした。

「って、おいおい。それって俺のだぜよー！」

克己の悲鳴はこの際だから無視することにする。

男子寮の廊下を平然と歩くのもどうかと思うが、時間帯は深夜である。もう寮長も寝静まっている時刻だ。この寮は設備が良いので部屋にトイレが備え付けられており、夜中に部屋を出て行く者なんてほとんどいない。

緋芽は悠斗の部屋に戻り。

紙袋を床に落とした。愛蔵版の漫画が床に転がり、表紙が折れ曲がる。

悠斗は緋芽がベッドを占領してからは、床に布団を敷いて寝ている。その布団がもぬけの空になっていた。姫川神社の刀も持ち出されている。

部屋のカーテンが静かに風で揺れていた。

56：教皇庁の騎士

終末の日に翼に死者を乗せて飛翔する黒き龍、ニーズヘッグ。北欧神話の出身で、古エツダ（古エツダ」詩のエツダ。エツダには散文のエツダなど、色々な種類があるが、こちらは王の写本から引用されている）の詩で最も知られた部分『巫女の予言』では死者の血を啜ると書かれている。ユグドラシルの三つ目の根を齧る蛇である。嘲笑する虐殺者の異名を持つ、邪神にして蛇神。

それが『嘲笑する虐殺者』^{ニーズヘッグ}だった。

キングがひとつ、盤上の中央に据えられている。

国立魔術アカデミーから直線距離で五キロ離れた場所にある、王聖魔術学園の敷地内では妖しげな魔方陣が光り輝いていた。グランドの隅に植えられた桜の木の根元である。一辺五メートルの正方形と、その中に三角形を二つ組み合わせた六芒星が石灰の粉で描かれている。

「釣れた」

魔方陣の中央にチェス盤を置いて、その正面に向かっていた少年はボソリと呟いた。山高帽を頭に寄せ、漆黒のローブを羽織った、童話に出てくる魔法使いのような格好をしている。

子どもっぽい顔をしているが、その表情は悪意に満ちていた。幼年代特有の際限のない邪気ではない。ギラギラと闇夜に揺れる瞳をよぎるのは、底知れない憎悪である。

「どうやら僕のメッセージが届いたようだね、ニーズヘッグ」

少年は三日ほど前からある魔術儀式を行っていた。寝食を断って丑三刻の呪詛よりも過酷な境遇を作り出し、魔術の効果を最大限に引き出し、その対象を”呪い殺す”ために準備を重ねてきた。

本来なら五日をかけて行われる魔術なのだが、どうやら先に気付

かかれてしまったようだ。伊達で北欧の邪神を名乗っている訳ではないと言うことか。

内なる神を暴走させるがための術式。

あからさまな挑発だ。少年ほどの技量になると、端から成功するとは思っていなかった。誘き寄せれば少年の目的はほぼ完遂したことになる。しかし、まったく成功しない魔術なら三日も重ねて準備を行わない。少しでも勝算があるから最大限の努力を重ねて成功率を引き上げる。それが、実力のある魔術師の責任だ。

「この時期、多数の神社で恵比寿関係の祭事が行われる。」信仰」という力を集めた蛭子は、ニーズヘッグの内部で侵食力を高め、僕の魔術を手伝ってくれる。外部的要因を味方に付けたこの魔術、そう簡単に破れるものではないと思っていたんだけど……」

チェス盤のキングはニーズヘッグを示している。日本風な言い方なら、わら人形のようなものになる。残念ながら少年はニーズヘッグ縁の物を持っていないので、こうして見立てるしか方法がない。

少年は月を見上げ、頬をつり上げた。

「ちょうど満月だよ、ニーズヘッグ。僕が仕事をする日はさ、いつも今宵のような月が出ていた気がするんだよ。満月とは狂気の象徴きつと君が狂うペースが速まるだろうね」

「うるちよると蠅のように飛び回ってたのはお前か」

「蠅とは心外だな。僕は長老会から崇高なる目的を与えられた神の使徒だ。病原菌を運び込む害虫と同じ扱いをしないで欲しいね」

「同じようなものだ。なるほどな。教会の犬がどうしてこんな極東の地にいるのかと思ってみれば、ただの邪魔者の排除か」

ニーズヘッグは肩をすくめた。自らを邪魔者と呼ばれても、まったく気にしていない様子である。ただ、抜き身の日本刀が満月の光に照らされ、眩しすぎるほど輝いているだけだった。

「すごい殺気だね。そんなに気に入らなかったのかな、僕の魔術は」呪術なんてものには口クなものはない。嫌いに決まってる」

「そう。じゃあ、さっさと始めようか　　と言いたいところだけど、

君を殺して前に聞いておくよ。彼女はどこにいるのかな？」

「意味が分からん」

「なら、それでも良いよ。僕は君を殺すだけだから」

少年は山高帽を取り払った。

そこから現れたのは赤毛の髪と金色の瞳。

「教皇騎士団、ヘルマン・ガーランド。勅命により御身の命、貰い受ける」

ドイツ系の西洋人、ヘルマンは剣を抜いて飛びかかった。

十

どうして教皇庁の騎士がこのような場所にいるのか、悠斗にはサッパリ分からなかったが、今はその疑問を解明するよりヘルマンをどうにかしなければならぬ。

細身のレイピアに近い形状をした細剣が直線的な軌道を描いて悠斗の喉元に襲いかかる。頸動脈を狙った暗殺技のような剣筋に、悠斗は手元の刀を合わせた。

ガキツと音を鳴らして火花が散る。

『斬撃、闇の剣』

『斬撃、光の剣』

同時に発動した魔術が衝突し、光と闇が拡散する。細剣と日本刀がすれ違ふ一瞬、ヘルマンは歪な笑みを浮かべた。悠斗は驚愕に目を見開きながら、身体を捻って蹴りを入れた。

体重を背後に移動させて衝撃を緩和し、猫のように着地したヘルマンはダメージを受けたようには見えない。

「驚いたみたいだね。ニーズヘッグの魔術について、あらかじめ調べておいたんだよ。術式さえ分かれば、僕ほどの実力があれば再現は可能だ。まあ、元々の属性が光だから、こればかりはどうにもな

らないけど」

「ッ！ 『突貫、闇の槍！』」

「無駄さ。『突貫、光の槍』」

またしても光芒が衝突し、お互いの魔術が相殺される。

悠斗は齒軋りした。まさか、己の魔術を盗まれるとは。しかも、

その魔術を使っているも、悠斗と互角に渡り合うとは。

模倣品コピーが正規品オリジナルに匹敵することなど、あつてはならないことである。

「クソッ！ 『断断断、ダークハルバード！』」

「まだ分からないのかい！ ほら、『断断断、ライトハルバード！』」

三重詠唱で威力が革新的に引き上げられた魔術さえも真似されている。二つの魔術は再び衝突し、霧散していった。

悠斗はその隙に前進していた。火之迦具土神ホノカグツチノカミの加護を受けた刀が

燃え盛りながら大気を切り裂く。その剣先が細剣の切っ先で流され、今度は悠斗が蹴りを喰らった。

「魔術も二流、剣術に至っては三流以下。北欧神の最高峰、『嘲笑イースヘッグする虐殺者』の異名を持っていると言っからそれなりに楽しみにしていたんだけど、これは飛んだ期待外れだったな」

「るせえよ」

「どうして長老会が君ごときを始末するために僕を寄越したのかな。彼女を匿っているという情報もガゼだったかもしれないと思えてきたよ。まあ、命令には絶対服従が騎士の職分だから、不服は申し立てないけどさ」

ヘルマンは刀を構える悠斗を見据えて舌打ちした。

ローブという動き辛そうな格好をしているのに、その動きは俊敏の一言に尽きた。幼顔と小柄な外見からは想像も付かないほど力もある。先ほどの蹴りのダメージがまだ身体に残っていた。

この少年は強い。

今まで戦った誰よりも　あの草壁涼二や御剣蒼夜、倉渕祐作よ

りも強い。

「手加減はしないよ。僕はね、偉大なる主以外の神は認めていないのさ。存在自体が許せないね。黄色い猿どもの信仰なんて、打ち砕いてしまえば良い。僕はそのために教皇庁に所属しているのだからね」

「黙れよ。さつきからベラベラと煩い野郎だ」

瞳に憎悪を垣間見せたヘルマンに、悠斗は刀を突きつけた。

まだ悠斗の眼から意思が消え失せていないのを確認し、ヘルマンはさらに苛立ちを増したらしい。細剣を持つ手が軽く震え、しっかりと構え直された。少なくともこの態度に多少は動揺してくれたようだ。

「その傲慢を　打ち砕いてやるよ」

「囀るな、ニーズヘッグ！」

悠斗は地面を蹴った。地面の爆ぜ方から、無詠唱で物体破壊の魔術を使用したことが察せられる。だがヘルマンにとってそれは強襲でも何でもないのだろう。冷静に剣先で攻撃を受け流し。

『刺刺刺、ライトスナイプ』

大量の矢を悠斗の周囲に展開させた。必勝の展開。このままヘルマンが命じれば、光の矢はことごとく飛翔し悠斗を突き刺していただろう。

剣術の腕が勝っているのが何だ。

少し魔術を真似できるのが何だ。

「さあ、光の矢よ！　偉大なる主の敵を貫きたまえ！」

ヘルマンが勝ち誇った笑みを浮かべるのが分かった。

しかし、二秒後。その顔が驚愕で彩られる。

『跳躍せよ、色欲の王』
アスモテウス

大量の矢に取り囲まれていたはずの悠斗が、いつの間にか背後に回っていたのだ。

「なっ、なんだと！　その魔術はあの蛭子のもの！　まだ使えないはずでは！」

「使えない？ 勝手に決め付けるなよ、狂信者」

ヘルマンは細剣を振りかぶりながら、魔術の詠唱を始める。

「クソツ、『斬斬斬、ライトプリンガー！』」

『拒絶せよ、怠惰の王』

光の刃が霧散の魔術の煽りを受けて消滅する。

「馬鹿め！」

その隙にヘルマンの斬撃が襲いかかった。先ほどとは立場が逆転していることに、果たしてこの少年は気付いていただろうか。すでに悠斗の術数に載せられていることに、気付いていただろうか。

『死守せよ、嫉妬の王』

あらゆる攻撃を防ぐ鱗が展開し、斬撃を受け止めた。

悠斗の左手人差し指が、ヘルマンの額に焦点を定める。

『断罪せよ、憤怒の王』

十字の暗黒刃が虚空から出現し、闇夜の空気を滑りながら疾走する。

必殺の一撃だった。鱗の防御壁が解けた間隙を縫っての奇襲である。ヘルマンに回避する術はないはずだ。悠斗はこれで止めだと思気込んだ。

57：真夏の夜の夢

静寂が場を占める。悠斗は地面に転がっている四分割されたチェスの駒を拾い上げた。両手で繋ぎ合わせてみると、黒のポーンのようにである。それを確認すると、駒を地面に投げ捨てた。

バラバラと落下する駒から視線を外し、悠斗は先ほどの現象について思案をめぐらせる。たしかに暗黒十字の斬撃はヘルマンに到達したはずだ。しかし、死体はどこにも残っていない。

かたしる
形代か。

腕の立つ呪術師が使用する身代わりの術 いや、この場合は分身か。となると、先ほど戦ったのはヘルマンの魔力を込めたチェスの駒を、第三者の呪術師が加工して作り上げられた戦闘兵器と言うことになる。

あるいは、ヘルマン自身が呪術師の可能性もある。

とりあえず、魔方陣を破壊しておくか。

今も自分を呪い続けている魔方陣に目を向ける。

「ッ

瞬間、悠斗の中の魔力が暴れ狂った。

「がっ は」

咄嗟に胸元を押さえる。肺の中身が空っぽになるほど息を吐き出し、悠斗は地面に倒れ伏した。頭蓋骨を金槌で叩かれているような気分だ。全身の筋肉が収縮し、痙攣を始める。視界がブラックアウトする。眼球が裏返っているのかもしれない。あるいは貧血の症状か。

「あ……あっ、あ」

何分ほど苦しんでいただろう。

悠斗は魔方陣に右手を叩き付けた。皮が裂けて血が流れる。石灰の線が朱色に染まり、輝きを失っていく。

ははっ、無様だな。我が宿主。

「出てくるな、ちくしょう」

悠斗は上体を起こした。

まだ頭の奥が痛むが、場所を変えなければならない。ここは王聖魔術学園の敷地内だ。どうしてヘルマンはこんな場所を合戦場にしたのか、さっぱり理解できないが、そんなことを考える余裕はない。

その魔術はあの蛭子のもの！ まだ使えないはずでは！

「使えないに決まってるだろうが、クソ野郎」

そう、悠斗は蛭子の魔術をモノにした訳ではない。一度や二度な問題は無いが、さっきのように多様できるものではないのだ。呪詛を受けて蛭子の力が増幅し、どうにか使えるようになっていただけである。

しかし、それも諸刃の剣でしかない。

使えば使うほど、内なる神に侵食される魔術なのだから。

悠斗は満月を見上げた。祭事と満月、その両方を味方にした呪術は、冗談ではないほど悠斗を蝕んでいた。クロードの発言で蛭子の力が増していることに気付いていなければ、数日後に悠斗は発狂していただろう。

問題はまだある。ヘルマンが形代を用いていたとなると、その本当の実力は先ほどのものとは比べものにならないと言うことだ。分身は本物の劣化品である。

もう一度ヘルマンと戦えば、おそらく負ける。

蛭子の魔術も、もう使えない。アドバンテージは全て失われた。

「憎悪すら沸くほどほど美しい満月だ」

悠斗は刀を拾い上げ、刀身を収めた鞘ごとベルトに突っ込むと、学園の壁づたいに歩き始めた。

真夏の風が熱風となって吹き付ける。

昼間とほとんど変わらない気温。今宵は熱帯夜だった。

最大級の呪詛を受け、肉体がボロボロになっているのに、まだ五キロ以上の距離を歩かなければならない。タクシーを捕まえられ

ば僥倖なのだが、この時間の道路はまったく車が通らなかつた。

体力の限界が来るのも、当然のことだった。

どたん、と身体がアスファルトに激突する。痛みはほとんどなかった。これが自分の身体とは思えないほど疲労している。

「たの」

耳鳴りが酷い。

血が足りなくて、視界に薄もやがかかっていた。

「ど たの？」

悠斗は顔だけを緩慢に動かした。

セミロングのプラチナブロンドの髪が月光に照らされている。

「ばか な」

その視線が捉えたのは、鮮明に焼き付いた記憶に残っている少女の顔。

涼しげな顔立ちをした美女が、氷のような冷たい眼差しで悠斗を見下ろしていた。あの幼馴染の少女の顔とどこまでも似ているが、あまりにその目が冷たすぎる。

馬鹿な。それこそ馬鹿な考えだ。どれだけ似ていても別物だ。アイツはこんなに冷たい表情はしないし、清水瑠璃はいつから西洋人になった。おかしすぎて笑いが止まらない。

「どうしたの？」

「……見てのとおり、臨終する間際だ」

「そう。お大事に」

悠斗が恨めしげに見上げると、女性はあからさまに溜息を吐いた。満月の夜、二人は出会った。これが、今回の物語のすべての始まり。『黙示の闇』と『終焉の炎』の運命が交差した瞬間だった。

開幕の火蓋は切って落とされた。真夏の夜の夢はまだ終わらない。

紅蓮の炎が辺り一面に広がっている。燃える物は何ひとつ残さな
いと言わんばかりに有機物が食い尽くされて行く。遠方の樹木でも
高熱に炙られて自然発火するほどの業火である。雑草は根まで炭に
なり、土さえも焦げ付き、そこはまさに焦土と言つに相応しい地獄
と化していた。

狩衣のような着物を身にまとい、刀や弓矢を手にしている、時代
がかった格好をした集団が神社の本堂を取り囲んでいた。

非常に統率された集団である。この集団を統率している指揮官は、
よほど人徳があるのだろう。死に怯えるどころか、隊のためなら自
分が犠牲になつても構わないと言いつつ出しそうな顔をしている。

集団の指揮官の名は 朽葉北斗と言った。

三十代後半の男性で、口ひげを蓄えている。身体つきは屈強で、
温和そうな面構えをしているが、今回ばかりは眉を曇らせていた。

「……化物めが」
北斗は刀の鐔に親指を当てた。いつでも抜刀できるように身構え
る。

本堂の梁が落下し、ギリギリと壁が軋んでいく。まるで木材が悲
鳴を上げているようだった。これほどの火災となれば消防車がか
けても不思議ではないが、ここは朽葉の領域だ。官憲の入り込む
余地はない。

「来るぞ！」

集団の誰かがボソリと呟いた。

それと同時に第一射が放たれる。十数本の矢が焼け落ちる本堂に
吸い込まれていった。すかさず二射目の準備に入る。二兎を射る者
一兎を得ずとあるが、ここに至つてはそのようなことは関係ない。

この敵は数本の矢で射られても、意に介した様子はなく、ゆらり
ゆらりと本堂から出てきた。

その身体は……無傷である。

「ッ！」

敵影を確認するや、刀を持った数人が前進した。

弓隊が矢で仕留め切れなければ、後方から刀剣で武装した第二陣が打って出る寸法になっている。訓練された兵士の動きで敵を取り囲んで刀を振り下ろす戦法は、かの新撰組の剣術のようであった。

敵は 子どもだった。

中学生ぐらいの年齢の少年だった。

五人の兵士たちは、一瞬 ほんの一瞬 攻撃するのを躊躇った。

少年はニタリと嗤い、

『虐殺せよ、傲慢の王^{ルシフェル}』

災厄の暗黒魔術を詠唱した。

さあつ、とそよ風が吹き抜ける。

瞬間、少年を取り囲んでいた連中が”溶解”した。

文字通りの溶解である。皮膚がとろけ、リンパ液を滴らせながら筋繊維が崩壊し、骨が白煙を上げながら崩れていく。

あとに残ったのは五人分の水溜りと五振りの刀だけだった。

「お久しぶりです、父上」

「異なことを言う。私はお前のような息子を持ったつもりはない」

「はははっ、流星は父上。捨て駒の暗殺者などにかける情けはないと言っことですか。この悠斗の心は深く傷付きました」

少年はケラケラと嗤い、やがて笑みを引っ込めた。

道化じみた言動はなりを潜める。

「妙なことだ。最初は子ども肉体に宿ってしまったことを悲観して運命を呪ったものだが、存外に使いやすい身体である。よもや我の暗黒魔術『七つの大罪』まで行使できるとはな」

「化物め……」

「心外だな。我は流浪の王、百桁の神族が束になっても葬れぬ神である」

「貴様こそ真の邪神だ！ 私たちの祖先が封印した理由がよう分かった！」

朽葉北斗の怒鳴り声に、少年の哄笑が止まった。

見ると、口元が微かに震えている。

「貴様 蛇の子孫か」

朽葉とは蛇の刃から蛇刃に転じ、朽葉に落ち着いた名前である。

古の時代では蛇の暗殺術を会得した一族として恐れられた。家系図は消失していて真偽は定かではないが、忍者であったのではないかと考えられている。

古代、三人の英雄が手を取り合ってひとつの神を封印した。

「左様。私は朽葉北斗。今代の朽葉家の当主だ」

三人の英雄は卓越した戦闘術を会得していた。神を封印した後、三人はその戦闘術に因んだ名前を朝廷から授かっている。

八卦を紙に印して戦った陰陽術師 八神（八紙）、光輝く刀で神を貫いた剣士 御剣（光剣）、蛇の刀術を体得した暗殺者

朽葉（蛇刃）。

「されば僥倖。ここでの忌々しい一族を根絶やしにしてくれる」
かつて己を封じ込めた子孫を前に、少年 いや、邪神は怒りに血走った目を向ける。その視線だけで呪詛になるほどの圧力。並大抵の者なら即座に呪い殺されていただろう。

現に、弓をつがえていた数人が血を吐いて倒れた。

「おのれ！ よくも私の同朋を！」

北斗は怒気を押し出し、刀を振りかぶった。

朽葉流殺法、円水。

湖面に浮かぶ月が揺れるごとく、変幻自在に歪曲した太刀筋が少年に襲いかかる。祖先の技を昇華させた朽葉の剣術だった。この少年が叩き込まれた純粹な暗殺術ではない。

さらに、刀身が稲妻を帯びていた。

「『真空迅雷』、まだ現存していたか。かつて我もその術を浴びたことがある。なるほど。呪詛返しを剣術にってしまうとは考えたものだ。と当時は感心したものだ。が」

朽葉家の魔法『真空迅雷』カッティング・ホルトである。

少年は素早く後退した。ここで迂闊に魔術を使い、それを斬られでもしたらこの肉体が死んでしまう。神に死の概念は存在しないが、最悪存在ごと消滅させられるかもしれない。

「ふむ、ならば『六つの魔眼』が使えるか試してみるか」

少年は斬撃を回避しながら嘲笑した。先ほど試した魔術『七つの大罪』には跳躍、叛乱、拒絶、咀嚼、死守、断罪、虐殺の七種類があり、それぞれ最上級の暗黒魔術とされていた。

それほどの魔術だったが、七つの魔術だけで覇権が握れるほど、かつて彼が存在していた時代は甘くなかった。さらに凡用性の高い六つの魔術を用意し、ようやく三人の英雄と互角に渡り合ったのである。

『認識せよ、アスタロト運命の王』

邪神は己の眼球に懐かしい力が宿るのを感じていた。

「我が秘術、受けてみよ」

「何を言っている？」

北斗はそれとは気付かず二の太刀を放つ。

朽葉流殺法、水葉。

水面に落ち葉が舞い落ちるような連続した剣捌き。

しかし、邪神にはすべての斬撃を躲す術があった。

「なっ　なんだと！」

まるでどのように剣が動くのか、あらかじめ知っていたかのように紙一重で回避する。

それは未来視の魔眼。血により継承したのではなく、神が自ら創造した魔術だった。その威力たるや人ごときにたどり着ける境地ではない。あらゆる刃の太刀筋が手に取るように分かるのである。

「ははっ、やはり素晴らしい身体だ！　ならば、これならどうか！

『理解せよ、ハアル知識の王！』」

再び邪神の眼球に別の魔力が宿った。未来視の魔眼は効果を失い、北斗の太刀筋が読めなくなる。

その代わりに。

（次は山水を使う　！）

北斗の刀がピクリと揺れた。

（今だ！）

朽葉流殺法、山水。

邪神は脳内に響く声に反応し、ヒラリと宙に身を躍らせた。切りかかるタイミングさえ分かれば、後はどうにでもなる。

そう、それは読心の魔眼だった。

『自刃せよ、混沌^{ラハブ}の王』

さらに魔眼が切り替わる。

北斗は邪神と視線を合わせた。

何をもって悪夢と定義するのか　。

それは自害の魔眼であった。

58・奇襲と刺殺

寝起きは最悪だった。夢見が悪すぎる。どうして今頃になってあの頃の夢を見たのだろう。あの悪夢は朽葉悠斗が人生を踏み外すことになった第一歩で、この身に焼き付けられた烙印を否が応でも思い知らされる。

寝汗で服が気持ち悪いことになっている。

「……ここは」

悠斗は上体を起こして視線をめぐらせた。明かりの灯っていない傘のあるランプがベッドの脇に立てられている。両開きのクローゼットがひとつ、丸テーブルの上にはピンク色の胡蝶蘭が花瓶に生けられている。

そして、部屋に流れる旋律。

パッフェルベルのカノン。

穏やかな弦楽器の音色が、静謐な朝を演出している。

「目が覚めたようね。おはよう……いいえ、こんにちは。随分とうなされていたようだけど、どんな悪夢を見ていたのかしら？」

「自分が魔王になった夢」

「それはそれで面白そうじゃない。徹底的な悪の象徴たる魔王は、幻想と偽善だけの勇者よりよほど意義のある存在なのでしょうね」

金髪の美女が、シャツにジーンズという飾り気のない格好をして悠斗を見下ろしていた。

彼女は丸テーブルの傍に椅子を引き寄せ、湯気が揺れているカップを小さな口に運んだ。ポットから淹れていたので、飲んでいるのは紅茶のようだ。

相変わらず冷たい目をしている。幽香のように感情を押し殺しているのではなく、あらゆるものを拒絶しているように感じた。

悠斗のことなど意識の片隅にも置かれていないのだろう。

軽口を叩きながらも、その視線は悠斗の刀に注がれている。

「強力な炎神の加護を受けた業物のようね。聞くまでもないことだけど、このような物は魔術師にしか持ち得ないものよ。昨晚はどうしてあんな所に倒れていたのか、私は追及するつもりはないけど、せめて厄介事には巻き込まないで欲しいわね」

「……善処する」

取り付く島もない。悠斗は嘆息すると、ベッドから這い出た。

何はともあれ助けてもらったのだ。

「まあ、何と言うか……ありがとう」

慣れない感謝を苦笑いしながら告げると、彼女は目を点にした。

ようやくこちらに振り向き、意外なものを見たかのように戸惑った。

「何だよ、その泡を食ったような態度は」

「い、いえ……ちょっと、その、あまりに意外だったから」

そんなに意外な顔をされると、なぜか虚しくなる。そんなに自分に”ありがとう”の言葉は似合わないのだろうか。

「じゃあ、そろそろお暇させてもらう。邪魔したな」

「ええ。もう二度と私たちの運命が変わらないように祈っているわ」

「随分と嫌われたものだが、それには同意するよ」

目元などの細かなところは異なるが、瑠璃と似た女といつまでも世間話ができるほど悠斗の心の傷は癒えていない。

カノンも胡蝶蘭も　瑠璃が好んでいたものだ。

悠斗は刀を引き寄せた。当面の問題は教皇庁の騎士だ。どうして悠斗が狙われるのか、まったく心当たりはないが、向こうは誤解だとしても一向に構わないと言った態度を取っている。

「どれだけ弁明しても、行き着くところは殺し合いになる。」

「餞別代わりに教えておくわ。私はクリス・リンディアよ」

「朽葉悠斗」

背中に視線を感じながら部屋を後にすると、どうやらここは十階建てマンションの九階だったらしい。ここからアカデミーまで結構距離がある。帰宅するのが面倒になってきた。

エレベーターがちょうどこの階に昇ってくる。

「ビンゴ。当たりだったね。やっぱり君は彼女と繋がっていた」

「朝からテンションが高いな、教皇庁の犬」

エレベーターから現れたヘルマン・ガーランドはレイピアの切っ先を悠斗に向けた。

日本では魔法庁という組織が幅を利かせているが、西洋では独自の魔術組織が裏世界を統治している。日本の魔法庁は平安時代から形を変えて受け継がれてきた陰陽庁が組織の原型である。西洋ではヴァンパイアやワーウルフなどの、今となっては絶滅寸前の魔の者を狩ってきた、エクソシストたちが集まって組織を作り上げた。

しかし、イタリア周辺だけは例外であった。そこはヴァチカンの教会によって統治されている。キリスト教の教義に則って、あらゆる魔を狩り滅ぼすのが彼らの使命だ。それは他国の神として例外ではない。

その尖兵となったのが教皇庁が抱える騎士たち。指示を出すのは教会幹部の司祭たち長老会であった。

十

悠斗は刀を部屋に放り込み、小太刀を抜いた。それを見たヘルマンは愚か者を見るように嘲笑する。短刀ごときでは自分には敵わないと誇示しているようだった。

朽葉流殺法、華月。

しかし、今の悠斗は剣士ではない。暗殺者だ。

その歩法から間積もり、攻め込み方まですべてが異なる。悠斗は細剣を振りかぶって突撃するヘルマンの右側に身体を潜り込ませ、小太刀の切っ先を跳ね上げる。

朽葉流殺法、禍月。

流れる動作で太刀を返し、正面から腹部を抉る。

「ぐっ 斬斬」

「日の出ている内から魔術か」

その言葉がヘルマンの判断を迷わせた。

実践的な魔術を習ったものは本能的に魔術を使うのは夜だと覚え込まされている。これはそれを利用した下策だ。

朽葉流殺法、闇月。

背面に周り込み、心の臓を貫いた。

すると、ヘルマンの身体が消滅しチェスの駒が廊下に落下する。

またポーンだった。将棋の歩と同価値の駒だが、最初だけニマス働ける。

もしかすると、あまり手応えを感じなかったのは、この駒の動きに影響しているのかもしれない。

幸い目撃者はいないようだ。

悠斗は刀を回収するために部屋に戻ろうとした。

瞬間、扉から灼熱の炎があふれ出した。

「しまった！」

さっきのヘルマンは囷。本命はこっちだ。悠斗に力を回す必要がなかったから、形代の性能が低く設定されていたのだ。

「クリス！」

悠斗は火の手が収まるのを待ち、部屋に飛び込んだ。

まだ焦げ臭い異臭が残っている。家具はほとんど炭になっていた。

そんな中、クリスは炎を上げるブロードソードを片手に、三人の刺客と剣舞を踊っていた。

投擲されるダークナイフを紙一重で見切り、一気に踏み込んで刺客の一人と鏝迫り合いに持ち込むと、開いた左手を刺客の腹に当てる。

「燃えなさい」

ドンツと左手から炎が奔出する。刺客は火勢に押されて吹き飛ばされた。

その隙に別の刺客がダガーで斬りかかる。

クリスは剣を合わせ、ダガーを弾き飛ばすと剣を横薙ぎに払った。最後の一人も同様に斬り殺される。

圧倒的だった。ヘルマンには及ばないが、それぞれ一流の実力を持つ刺客たちが、一分に満たない時間で全滅させられた。

「……私は厄介事に巻き込まないでと言ったはずだけど」

「どちらかと言えば、俺が巻き込まれたみたいだけどな」

「巻き込まれた？」

悠斗は刀を拾い上げた。

クリスはそれを見ると、二歩下がって間合いを取った。

「貴方も敵の一味なの？」

「まさか。自分より強いと分かっている相手に挑むほど、俺は愚かじゃない」

「それは賢明ね。それなら、さっきの話をもう少し聞かせて欲しいんだけど」

「簡単なことだ。俺には教皇庁の騎士に狙われる理由がない」

狙われる理由があるならクリスの方だ。

クリスは剣を降ろした。納得していない顔だが、とりあえず悠斗に剣を向ける気はなくなっただけらしい。疑われるのは良い気分ではないから、とりあえず良かった。

「ごめんなさい、疑ったりし」

その声が途中で途切れる。

クリスの左胸から 刃が飛び出していた。ヘルマン・ガーランドがクリスの背後で嬉しそうに微笑んでいる。

何てことだ。あの刺客たちも囷なのだろう。彼らは形代になるチエスの駒をこの部屋に運び込むための鉄砲玉だ。

「死ね！ 悪魔リリスの烙印を押された娼婦！」

「 貴様！」

瞬間、脳が沸騰した。

ヘルマンに刀を抜いて斬りかかる。だが、騎士の少年はそれに見

向きもせずにはランダから飛び降りた。階下を見下ろすと、ヘルマンは空挺部隊のような着地術を見せていた。

「くそっ！」

追いかけるのを諦め、急いで左胸を貫かれたクリスに駆け寄る。

出血がおびただしい。心臓を貫かれればもう助からない。悠斗は肩を落とした。ここでは現代医療も魔術的な治療もできない。絶望的な結末しか見えなかった。

また、守れなかった。

悠斗はクリスのことを大切に思っていなかった。だが、目の前でみすみす殺されたのは事実だ。己の力不足が、またこの結果を呼び込んだ。

「……なんて顔してるのよ。私たち、さっき会ったばかりじゃない」

「！ 大丈夫なのか！」

クリスは苦笑しながら身体を起こした。

「私の心臓は右にあるの。特殊な体質ってこと。すべての臓器が普通の人と対照的になってるのよ」

「生きてる？」

「……だから、私ぐらいの命でそんなに泣きそうな顔をしない。いつ死んでも誰も悲しむことなんてないんだから、私もこの世に未練なんかないわよ。まあ、結局は生き残ることになりそうだけど、ね」

クリスは傷口を片手で押さえ、顔をしかめた。

悠斗はようやく我に返った。これが致命傷ではなくても、急いで治療する必要があるのは確かだ。放っておけば出血多量で危なくなる。

それに。

派手に焼かれたこの部屋で暮らすのはもう無理だろう。さっさと撤退しないと警察や消防車が駆けつけてしまう。

悠斗は急いで応急処置を施すと、クリスを背負った。服を脱がせることになったが、男として意識されていないのか、それとも自分

に無頓着なのか、クリスは顔色ひとつ変えなかった。

「ちょ、ちょっと！ 何をするのよ！」

「黙ってる。走るから舌を噛むなよ」

悠斗はクリスを背負ったままベランダに出た。

「まさか、飛び降りる気じゃないわよね！？」

「さあ、どうだろ？」

悪戯っぽく微笑むと、悠斗はベランダの柵に手をかける。クリスが背中で抵抗を始めた。まだ死にたくないと言っている。さっきこの世に未練はないと言っていたのは何だったのだろうか。

そして、壁を足蹴りに、一気に飛び降りた。

「きゃああああああ」

「るせえよ　つと、『跳躍せよ、色欲アスモテウスの王』」

瞬間移動の魔術を使用し、マンションの駐車場に降り立った。

思いつきり悲鳴を上げていたことを嘲笑ってやると、クリスは顔をうつむかせて赤面した。

59：六人の騎士

黒いローブと山高帽を被った少年、ヘルマン・ガーランドは他人から妙な目で見られていることに舌打ちしながら、駅前のも『霞ビルディング』と言うひと昔風の名前をした雑居ビルに入っていた。

ここが、教皇騎士団の仮の拠点だ。

三階の貿易商社に入ると、入口近くのソファで煙草を吸っていた男性がヘルマンに気付いて声をかけてきた。

「副団長さんじゃないか。どうしたんだよ、朝っぱらから」

「ハインリヒか。暇そうにしているね」

”副団長の部分に若干の含みを感じたが、あえて追求する気はないので軽く聞き流しておいた。十二歳の子どもが上司では、やっぱりのひとつぐらい言いたくなるだろう。

「ランスロット団長は？」

「今日はまだ見てないな。あの人の悪癖も困ったもんだ。俺たち騎士は教会の汚れ仕事を押し付けられるだけだっつーのに、マジで騎士気取りでいやがる。ドン・キホーテかよ」

「……また決闘か」

「酒飲んで喧嘩してた奴らの仲裁に入って、余計にややこしくするんだから」

「それは、あの人らしいね」

ヘルマンは苦笑すると椅子に腰を下ろした。

貿易商社の看板があるが、その会社は倒産していて、ここは空きテナントになっている。人がやってくることなんて滅多にないし、もしやってきたとしても催眠の魔術を使って追い返せば良い。

「で、リリースの心臓はぶっ壊したのかよ？」

「まあね。何人が捨て駒にしてみましたけど、どうにか僕の剣で貫いてきたよ。これでようやく帰国できそうだ」

「俺や団長の出る幕はなかったってことか」

ハインリヒは退屈そうに眩き、煙草を灰皿に押し付けた。街頭で配られているポケットティッシュにぺつと痰を吐き出し、思いつきり顔をしかめる。

「さつさとオサラバするべきだな。ここの煙草は舌に合わない」

「これを期に禁煙すれば？」

「副団長どのが去勢するなら考えてやるよ」

ヘルマンはレイピアを砥ぎながら、ハインリヒを睨み付けた。肺ガンで死ねば良いのに。

ハインリヒ・ベッケンバウアー。教皇騎士団のランスロット部隊では最年長の三十八歳。粗野な顔をした大男である。驚くべきは三回の離婚暦。この男こそ去勢するべきだろうとヘルマンは考えている。

自分が入念に呪術を組み上げていたときに女を口説いていたと思うと殺したくなってくるが、取り合えずその怒りは置いておく。

電話が鳴っていた。

この国で手に入れたプリペイド式の携帯だ。

『もしもし、ヘルマンの愛するミースですよ』

「……………頭は大丈夫？」

『うわっ、ひつどい！』

電話口からの大声に、咄嗟に耳元から携帯を離す。

ミース・ミューゼルは今日も絶好調のようだ。

『ランス兄様から伝言。ヴィルとジークの馬鹿と一緒に今から帰るだっ』

「分かったよ。伝言はそれだけかな？」

『うん、それだけ』

それぐらいで電話をするなど言うべきか迷ったが、それより先に電話が切れた。結局ランスロット団長は二人に決闘をさせたのだからか。どこか釈然としないまま、携帯を仕舞おうとして。

「ん？ また電話……いや、メールか」

またミースからかと思っでディスプレイに目を落とす。

『クリス・リンディア 未だ生存中』

ヘルマンは表情を引き締めた。この国で雇った情報屋からもたらされた情報に、動揺を隠しつつ確認のための返信を送る。

数分後、帰ってきたメールには朽葉悠斗がクリスを背負ってどこかに走っている写真が添付されていた。ヘルマンはレイピアを鞘に納めると、不味そうな顔をして煙草を吸っている男に声をかけた。

「ハインリヒ、出番だ」

ヘルマンの父親ほどの年齢の男は、壮絶に顔をしかめながら煙を吐き出した。

十

「これは手術が必要になるね」

奥村孝彦はクリスの傷を見るなり断言した。駅前にある小さな診療所で、とても手術をするような設備は整っていない。だが、悠斗は孝彦に現代医療を求めている訳ではない。

闇医者としての奥村孝彦を頼っているのだ。

「では、後はお任せします」

「うん。失敗したら死ぬってことはないから安心してくれて良いよ。でも、魔術で造血させるから、ちょっと値は高く付く。保険も利かないしね」

「金に糸目は付けませんって」

悠斗は知り合いの医者にクリスを預けると、邪魔になるだけなので外に出た。

この医者はアカデミーのOBで、アカデミーを卒業してからは医学部のある大学に進学し、卒業後に診療所を開いた。この近辺では最高の名医なのだが、惜しいことにあまり有名ではない。普通の医者に紛れ込んでいるので、魔術の世界からも知られていなかった。

「……はあ」

今日は期末試験の最終日。どうして真昼間からこのような場所で溜息を吐いているのだろう。それもこれも、あの忌々しいドイツ人の所為だ。

駅前の人気のない商店街に目を向ける。近所にできたショッピンモールに客を取られ、すっかり寂れてしまった。不況のため都市開発は停滞しているが、それでも最近はずつビルが建ち始めている。皮肉にも商店街が寂れたおかげで土地の値段が下がり、企業が進出しやすくなっているのだ。

「……………」

視線を感じて周囲を見回す。

商店街から出てきた、白ネギが飛び出たビニル袋を手に提げている金髪の少女が悠斗を見ていた。自然と溜息が出る。悠斗は人種にこだわりがある訳ではないが……また外人だと思わざるを得ない。

「ねえ、お兄さん？」

しかも、声をかけてきやがった。

無駄に甘ったるい声である。うぜえ。

「霞ビルディングってどちらにあるのかしら？」

無言で指をさすと、少女はニツコリと微笑んで頭を下げた。

「ランス兄様〜！ こっちですって〜！」

「助かった。このまま遭難してしまうかと思っていたぞ」

そう言いながら商店街から現れたのは、二十歳ぐらいの青年だった。西洋人らしく背が高く、黄金の長い髪を白い紐で束ねている。が、驚くべきはそこではない。

青年はボロ布のように痛めつけられた男二人を背負っていた。

背負っているのは悠斗と同年代か少し年上のようで、やはり西洋人だった。

「もう、お兄様が決闘のついでにお昼ご飯の買い物しようって言い出したから迷ったんですよ〜」

「そう言うなよ、ミス。昼飯の食材が調達できて結果的には良か

「ただろ」

「この親切なお方がいなければ、遭難してましたけどね」

少女の皮肉に青年は「……困ったな」と頭を掻いた。片手が開き、背中の青年二人がアスファルトに落下する。どうやら失神しているらしく、痛みに声を上げることもしないらしい。

青年は苦笑しながら二人を背負い上げる。

「では親切な日本人のお方、私たちはこの辺りで失礼させて頂きませう」

「私はミス。また会えると良いね」

こうして二人……いや、四人は去って行った。

……一体何だったんだ？

悠斗は空を見上げ、三度目の溜息を吐いた。

十

ランスロット・ミューゼルは貿易商社に入ると、背負っていた二人の青年を床に投げ捨てた。ヘルマンはPCで調べものでもしているのか、二人を一瞥しただけで何も言わなかった。ハインリヒは呆れた目を向けてくる。

「やれやれ……ヴィルヘルムもジークベルトも今日は使い物にならないな。どうしますかね、副団長」

「僕とハインリヒだけで十分だよ」

「でも、心臓貫かれても死ななかつたんだろ？」

「今度は全身を解体して焼却処分するだけさ」

ハインリヒは納得したのかそれ以上追及しなかった。新しい煙草に火を付けると、ヘルマンが顔をしかめながら「十五本目」と呟いた。ランスロットもニコチン中毒の騎士に思うところはあがあるが、それより先に副団長から報告を受けなければならぬ。

PCに目を向けるランスロットに、ヘルマンは説明する。

「メールですよ。こっちの方が入力速度が速いので」

「滝川隆太と言う情報屋か？ たしか、『瞬刃』って呼ばれている」

「ええ。直接の面識はないですけど腕利きらしいですね」

ヘルマンはPCから顔を上げた。

左手の中にチェスの駒を握り込んでいる。

「ビショップか」

「ええ。『呪詛のキング』は手間がかかりすぎますし、『形代のポーン』だと弱すぎる。ちよつと本腰を入れてみようと思ひましてね」

「『召喚のビショップ』を使わなければならないほどなのか？」

「念には念を入れていただけですよ」

ヘルマンは面白くなさそうに呟いた。本気を出さなければならぬことに苛立っているようだ。天才が持つ感情の脆さが浮き出ている。

十二歳で副団長と言う異例の抜擢を受けたヘルマンは、文字通りの天才だ。彼が創作した魔術『王の精兵』はそれぞれ魔法に匹敵するほどである。言わば、チェスの駒の数だけ魔法を持っているのだ。

「さすがヘルくん、男らしい」

「茶化すな、ミース。それで、ハインリヒだけで問題ないか？」

「そうですね。ヴィルヘルムを貸して下さい。朽葉悠斗の抑えにしたい」

ランスロットは思い出す。たしか、クリス・リンディアの協力者だったか。

聞くところによると、ただの魔術を嗜んだ学生だと言う。それがランスロットには信じられなかった。得することなど何もないと言うのに、どうして協力するのだろうか。

人は利害関係で動くものだ。まさか、クリスに惚れたと言うのか。「ところでミース。さっきは何であんなことを言ったんだ？」

ミースは首を傾げた。急に話題が変わったので、付いて行けないのだ。

また会えると良いね。

通りすがりの人間にかける言葉ではない。

そう言うと、ミスは「なんだそんなことか」と意外なことを聞かれたように、間延びした声で言った。

「だってあの人、魔術師だったじゃない」

60：リリスの涙

二時間ほど時間を潰してから診療所に戻ると、『臨時休業』と書かれたドアプレートがかけられていた。中に入ると奥村孝彦が人のいない受付でコーヒーを飲んでいる。簡単な手術と言っていたが、さすがに疲労しているようだった。

「もう終わったよ。彼女はベッドに寝かせている」

悠斗は銀行から引き出してきた五十枚の万札を孝彦に手渡し、シヤワーを借りることにした。この診療所の二階は休憩室になっており、泊り込めるようになっていた。

問題なのは、これからどうするのかと言うことだ。

その指針を決めるためには教皇騎士団がクリス・リンディアを付け狙う理由を知る必要がある。だが、クリスが悠斗にその理由を打ち明けてくれるだろうか。まだ初対面に等しい間柄で、そこまで踏み込んで構わないのだろうか。

ヘルマン・ガーランドのこともある。

悠斗の魔術を完璧に再現した実力や、悠斗を三流以下と評した剣術。さらに、あのヘルマンが本人の分身で、本体よりもワンランク性能が低いという事実。チェスの駒を利用した奇抜な魔術も忘れられない。

考えごとをしていた悠斗は、ガチャリとシャワールームのドアが開いたことに気が付かなかった。

「え？」

その、不思議そうな声に恐る恐る振り返る。

そこには、タオルで前を隠しているのど肝心な部分は見えていないけれど、ほぼ全裸と言える格好をしたクリスがいた。

「いやっ、やだ！ 変態！」

悲鳴を上げながら逃げていくクリス。この場合、悠斗はどうすれば良いのだろうか。

誰が入っているとは思わなかったと言うことはないだろう。電気が点いていたし、シャワーの音も耳に入っていたはずだ。それすら見逃し、聞き逃すほど思考が磨り減っていたと言うことだろう。

何が彼女をそこまで疲労させたのか。

「考えるまでもないか」

悠斗は心の中にひとつの決意を宿すと、着替えてから一階に下りた。

クリスはソファに腰を下ろし、恨めしげにこちら見上げてくる。どこで着替えたのか気になったが、とても聞ける雰囲気ではない。

……気まずい。非常に気まずい。

クリスの性格は冷徹だったのではないだろうか。こんな顔をするなんて、正直信じられなかった。他人のことなど歯牙にもかけないクールビューティーだったのではないか。

「あ、あの……さつきはごめんなさい」

それに、どうして悠斗が謝られるのだろう。見たのはこっちだと言うのに。

クリスは顔を赤らめながら、ボソリと一言。

「見た……わよね？」

「見たけど……って、だから何だよこれ。この雰囲気は。俺にどうしろと？」

若干逆ギレしてみると、クリスは泣きそうな顔をする。

訳が分からない。とても、今朝見た彼女と同一人物とは思えない。まさか、人格が入れ替わっているのではないだろうかと疑い始めているこちらの心を知らないクリスは、悠斗に恥ずかしそうに微笑んでくる。

「ごめんなさい。変態だなんて叫んじゃって」

誰だコイツ。

「ごめんなさい。貴方のこと、敵かもしれないって思ってた。ただ私を助けてくれただけなのに」

「いや、俺も疑われても仕方がない立場だったし、先に助けてくれ

たのはそつちだろ。お前に助けて貰わなかつたら、俺は騎士に殺されていたかもしれない。恩を恩で返すのは当然のことだ」

「……ごめんなさい」

「いや、だからさ……」

謝る必要はない、と言いそうになったが、どちらかが折れないとこの話は終わらないと思つてやめておいた。

「それで、どうして教皇庁の騎士なんて物騒な連中に狙われているんだ？」

「えつと、それは……」

クリスは悠斗を見上げ、迷いを見せた。悠斗に心を開いていない訳ではない。こちらに累が及ぶことを心配している。どれだけ心配しても、もう二度も襲われているので今さらなのだが、それすら考え付かないほど悠斗のことを案じているようだった。

「話せないのか？」

「……そんなことはないわ。そうね、話しておくべきかもしれないわね」

クリスは哀しそうに話し始めた。

「私は悪魔リリスの加護を受けているらしいの」
それは最初の乙女の話。

十

リリス。それはメソポタミアの夜の魔女。アッカド神話の女の妖怪、キスキル・リラと同一視され、悪魔学などからも新生児や妊婦を狩る吸血鬼のような妖精だと信じられていた。

中世の文献『ベン・シラのアルファベット』^{エデン}にはアダムの最初の妻として描かれ、やがてアダムと仲違いして楽園から去って行った。紅海沿岸でアスモダイなどの悪魔たちと関係を持ちリリン（サキユ

バスのような悪魔)を生み、最終的にはサタンの花嫁になった。

この背景や目的が掴めない文献の重要な部分だけを要約すると『悪魔リリスはアダムとエヴァ(イヴのこと)の子どもを害する』と言うことだ。

「つまりあれか。リリスは最初から穢れた神ってことか」

「そうね。貴方たち東洋系の魔術師には、そう言った方が理解しやすいでしょうね」

「厳密には違うような言い方だな」

「地域によつては悪魔を神として信仰していることもあるから、穢れているかいないのか定義できないのよ。いずれにせよ、その力の使い方で善悪を判断するしかないのよ」

「そうか」

大体分かったが、納得できないことがある。

穢れた神に憑かれているだけなら、国外に逃亡したクリスに追っ手を差し向けるだろうか。騎士たちの追撃はあまりに執拗である。あくまで騎士たちは教会の利益を実現する団体だ。反宗教団体を潰した方が、信者の獲得が見込めるだろう。

「最近、ヨーロッパで勢力を伸ばしている魔術結社があるの」

急に話が飛び、途惑いながら情報を整理する。

悪魔リリスと魔術結社に何か関係があると言うことか？

「その名は『失墮した神々』。早い話が悪魔信仰者の集まりね」

「おい、それは　！？」

悠斗の耳元に嫌な汗が流れる。

クリスがリリスの神憑きなら、他の神憑きも存在することになる。リリスは神と言うより悪魔である。もしかすると、海の向こうには悪魔を身体に宿した連中がいるのではないか。

「そう。失墮した神々は悪魔憑きが作った組織よ。それで、敵対組織の教皇騎士団がリリスの加護を受けている私を疑いを持った。騎士たちはキリスト教徒だし、たとえ私が失墮した神々と内通していなくても、始末するつもりってこと。否定しても聞き入れるような

連中ではないから、逃げるしかなかったのよね」

「自分も神憑きと言うより悪魔憑きのようなものなのだ。そんな奴らがいたとしても不思議ではない。」

「それに、失墮した神々も私のことを欲しているみたい。伝承ではリリスは何人もの悪魔と関係を持っていたらしいから、さもありませんって話よね」

「同族意識ではなさそうだな。もっと俗物的な欲望ってことか。それで、失墮した神々にはどんな奴らがいるんだ」

「顔は見たことがないけどアスモダイとメフィストフェレスの名前は聞いたことがあるわね」

「アスモダイ……。アモデウスのことか」

悠斗は愕然とした。

蛭子の魔術『七つの大罪』にある空間移動の魔術。詠唱文は『跳躍せよ、色欲の王』^{アスモデウス}である。どうして自分が……いや、あの邪神が西洋の悪魔の名前が入った魔術を使っているのか、考えたことはある。

「私の話はこれぐらいよ。それで、どうかしら？ 思ったよりも面倒なお荷物でしょ、私って」

「たしかに、こいつは厄介だな」

クリスが悲しそうな顔をしたことに気付かず、悠斗は思案しながらソファに腰かけた。クリスの隣に座っていることになる。

「教皇騎士団を退けても、失墮した神々が残ってる。悪魔憑きのお前をスカウトしに来る可能性がかなり高い。今回は草壁や幽香たち一流の魔法使いが味方にいないし、果たして俺たちだけでどれだけ頑張れるか」

「……え？」

悠斗は二人だけで戦うことを決めていた。クリスが厄介事を抱えていたからと言って放り出すこともせず、もう作戦を練り始めている。

それが当然の行為だと疑いもせず、ただこれからのことを考えて

いる。

「私たちだけでって　悠斗、貴方は何を考えてるの!？」

「何って言われてもな。ヘルマンの倒し方とか戦場の場所とか作戦とか?」

「そうじゃなくて、貴方、私と一緒にいると死ぬかもしれないのよ!？」

たしかに、そうなるかもしれない。

だが、それが何だと言うのだ。今まで何度も死ぬような目に遭ってきたが、それでも生きている。その行動に後悔したことはない。悠斗が後悔するのは、いつも守れなかったときだけだ。

「お前と一緒にいなければ、俺の知らないところでお前が死んでいくかもしれないだろ」

今クリスを見捨てれば、必ず後悔する。ならば、考えるまでもないだろう。

シャワーを浴びている最中に呟いた「考えるまでもないか」の言葉と決意。

ああ、そうか。

さっきまでクリスのことが分からなくなっていたけど、ようやく少しだけ理解できた。

「……不器用な女だな、お前って」

「そうよ!　不器用で悪かったわね!」

人と距離を取るのも相手を想いすぎるため。傷付いてしまった者たちを見てきたからこそ出せた悲しい結論。つまるところ、クリスと悠斗は似たもの同士だった。

まあ、そんな不器用さも悪くないか。

「守ってやるよ。こんな不甲斐ないガキで構わないならな」

「本当に?　貴方は私を見捨てないの?」

「……急に甘えるなよ、泣き虫」

クリスは悠斗の胸に飛び込んだ。長い金髪が波打つように揺れる。

ああ、何だかなあ。

アカデミーにいる咲夜にどう弁解しよう。悠斗はクリスが泣き止むまで悶々と悩むことになる。

61：十六夜の開戦

滝川隆太は小さく笑った。

「やはり、悠斗ならこうするか」

すべて作戦通りに進んでいる。悠斗がクリスに協力しない訳はない。清水瑠璃の面影を持つ彼女を見捨てるなどと言う選択肢は存在しないのである。トラウマを利用したため、多少は良心が痛んだが背に腹は変えられない。

何のために教皇庁の連中と接触し、悠斗を誘導させたのか。

「ククツ、ここからは俺の時間だ」

滝川隆太は小さく笑った。喉の奥から漏れる、不自然な哄笑。

それは狂気の微笑みだった。

十

クリス・リンディアは鼻歌混じりにフライパンを振るっていた。自分の機嫌が良いことを、彼女は十分に理解している。まさか、ここまで舞い上がってしまうとは驚愕に値することだった。しかし、無表情を取り繕おうとしても、すぐに頬が緩んでしまう。駄目だと思っただが、顔の筋肉は言うことを聞いてくれない。きっと、今まであまり使わなかったからだろう。なんて、無意味なことを考えている。

朽葉悠斗。

今までクリスがここまで心を許した者なんていなかった。

クリスはフランスの田舎に根を張った魔術師の娘として生を受けた。西洋は魔術の発祥地で、政府が介入する前に、組織の枠組みを作り上げてしまった地域である。魔術結社は政府からの援助金を受

け取る代わりに、政府の指示に”ある程度”従うことになっている。魔術師の大半が魔術結社に所属しており、クリスの父親は有名な魔術結社で活躍していた。

魔術結社には大抵、人材の教育施設が存在しているのだが、クリスの父親は普通の教育では満足できず、自ら指導を行った。このため、クリスは幼年代に友達を作れなかったと言える。十五歳で魔術結社の活動に参加させられたときも、誰もがクリスの父親の偉業に怯えて近付こうとしなかった。クリス自身、マトモな教育を受けていないだけあって、自分がどのように見られているかなんて気にしなかった。

そして、失墮した神々への疑いである。友人のひとりもいなかった彼女を弁護する者なんてどこにもいなかったし、彼女の父親までもが娘を倒せば手柄になると言い出すほどだった。

でも、悠斗は違う。

クリスの境遇を聞いても、手を引くことはせずに自分を受け入れてくれた。巻き込まれても文句の一つも言わずに、逆に自分を心配してくれた。守ってやると言ってくれた。

クリスの心の中で、大きな位置を占めるようになった青年。

今でも、ずっと意識している。その一挙一動に反応してしまう。

「お前って、料理ができるんだな」

「それってかなり失礼な質問よ。そんなに意外だった？」

そっけなく返事をしながらも、クリスは心拍数が上がっているのを感じた。

二人はまだ診療所にいた。時刻はそろそろ午後八時になる。奥村孝彦はもう自宅に帰ってしまったている。と言っても、孝彦の自宅は診療所のすぐ隣にあるのだが。

「意外と言っより、物珍しく感じたかな」

「物珍しく？」

「俺の周りには料理のできる奴なんていないから」

そう言っって、悠斗は肩をすくめると刀を手に取った。鞘から抜き

放ち、刀身を舐めるように見つめている。刃毀れていないか確認しているようだ。日本刀は繊細なのだと言ったことがある。

「クリスって西洋剣を使ってるんだよね？」

「ええ、そうよ。二世紀前の魔術師が作った骨董品だけだね」

刃渡り八十センチの幅広の剣で、”叩き斬る”ことを主眼にしているので切れ味は悪い。魔術的な恩恵もほとんどなく、物的な価値もない。ただ、実家の倉庫に転がっていたで何となく使っているだけだった。

「愛着は……ないと言いつれないけど、大した物ではないから」

「そうか。なら、この刀を使ってみるか？」

「いいの？」

「武器もないのにどうやって自分の身を守るつもりだ？ 遠慮はいらないぞ」

悠斗は小さく笑うと、刀身を鞘に仕舞った。目釘が刺さっているか確かめ（これが緩んでいると刀身がすっぽ抜けることもある）、ソファに立てかける。

たしか、クリスが使っていた剣はマンションに忘れていたはずだ。拾いにいくのは危険だった。あの場所は、ほぼ百パーセント敵方の目が光っているだろう。

「あとで手入れの仕方を教えるから」

「え、ええ……」

刀の手入れの仕方なんてどうでも良いものなのに、悠斗が教えてくれると言うことに、胸の内から嬉しさがこみ上げてくる。

クリスは完全に自分の気持ちを持って余していた。フライパンの中身を焦がさないように、必死に意識を向けている。普段なら食べ物に焦がすなんて簡単な失敗はしないはずなのに、今日は何度作っても失敗してしまいそうだ。

料理を皿に上げ、サラダと一緒にテーブルに運ぶと悠斗は目を丸くした。

「何だこれは？」

「えっと、豚肉をソテーにしてオレンジのソースで和えてみたんだけど……」

ただ驚いただけなのだろうが、咎められているような気がして不安になる。

「いや、責めてないって。だから泣きそうな顔をするな」

「でも、口に合わなかったら残しても構わないから」

「焦げてない、変な臭いがしない、変な形をしていない、変な色をしていない料理を作れるなんて凄いことだ。何度でもお代わりしてやるよ」

悠斗は物凄く上機嫌だった。「美味い！」と一々感動して涙まで浮かべている。

「それで、これからどうするの？」

クリスは聞くべきか迷ったが、避けては通れない話題である。

「騎士のことか？」

「ええ。おそらく、今晚にでも襲いかかってくるはずよ。私が生きていることは、もう奴らにも知れ渡っているでしょうし」

クリスの心はもう悠斗と運命を共にする気である。

「向こう側には情報のバックアップがあると考えるべきね」

「俺もそう思う。情報屋を雇ってる可能性が高いだろうな」

「どうしてそう思うの？」

「学生の俺のことを、この国で地盤を固めていない教皇騎士団が、どうしてあそこまで調べ上げることができたのか説明が付かないからな。敵の持つ情報網はかなり優れているはずだ。この診療所に潜伏していることも、もう知られているかもしれない」

悠斗はまくし立てるように言った。その双眸はクリスの方を向いていたが、意識はどこか別のところに向いているようだった。

思考に没頭している。その思い詰めたような様子を見て、クリスは心が締め付けられた。

「……守るんだ、絶対に」

その呟きの意味は、悠斗自身も分かっていない。

十六夜の月が煌々と光を湛えている。ヘルマン・ガーランドは磨かれたレイピアの刀身に、月光の光を浴びさせた。この剣で左胸を突き刺したはずなのに、どうしてあの女は死んでいないのか。そんな些細なことなど、もうどうでも良い。

「ニーズヘッグ。君と戦り合いたいのは山々だけど……」

ハインリヒ・ベッケンバウアーがヘルマンを一瞥すると、作戦通りに裏口を塞ぎに行く。逃走するとは思えないが、念のためだ。朽葉悠斗ほどの者となると多人数で襲撃されることは予想しているだろうし、あえて逃げの一手を打ったり、二手に分かれるとは考え難い。

戦力集中の一転突破が最善の策と言うことだ。

最善の策　だからこそ、予想しやすいのである。ヘルマンは微笑んだ。

「あー、やな笑い方。ガキっぽくねえっすね」

「ガキって言うな」

「はいはい、サーセンでしたね副団長」

ヴィルヘルム・ツヴァイクは心の籠っていない謝罪を送ると、大きな欠伸をした。そうすると、長身が仰け反って海老のように見える。

ランスロット団長にボコボコにされたときの傷が完全に癒えていないのか、ヴィルヘルムは顔をしかめた。だが、このようなことは日常茶飯事だ。戦闘に支障はないだろう。

「で、その朽葉悠斗ってガキは本当に強いんすか？」

と、図太い質問をするほどである。心配するだけ損だった。

「まあ、それなりにね」

「魔術は二流、剣術は三流なんすよね？　そのどこが強いんすか。意味分かんねっす」

「ヴィルヘルムはどっちだと思っ？」

「どっちでも良いっすよ。強くても弱くても関係ねえっす。勝つつもりはないっすから。俺の魔法って、”一対一なら絶対に負けない”っすからね」

ヴィルヘルムが気だるげに欠伸をしたとき、診療所の扉が開いた。……待っていたよ、ニーズヘッグ。

「ただ君はお呼びではない。」

「しつこい奴らだな。……それほどクリスの命が欲しいのか？」

「僕たちも生活がかかってるからね。宮仕えの辛いところさ」

「本心では殺したくない？」

「ハッ、馬鹿馬鹿しい。死にそんな目にあって耄碌した？　希望的観測にすぎりたくなるのも分かるけどさ、もうちょっと冷静になりなよ」

「……交渉するまでもなく決裂って感じだな」

朽葉悠斗は溜息を吐き、小刀を抜いた。闇夜に銀色が冴え渡る。

その背後ではクリス・リンディアが凍りのような瞳をヘルマンたちに向けていた。相変わらぬ冷徹な視線だったが、悠斗を見ているときだけ表情から険しさがなくなる。

……そう言うことか。

「なるほどね。てつきり逆だと思っってた」

悠斗がクリスに惚れたのではなく　その逆。あの他人に小指の先ほども関心も寄せなかったクリスがこのような顔をするとは、意外すぎて笑い転げそうだ。

でも残念。惚れた女を目の前で殺してやろうと思っていたのに、これでは悠斗の情けない顔を見ることができないようだ。ヘルマンは面白さと残念さがない交ぜになった、複雑な気分のまま細剣の切っ先をクリスに注いだ。

「ヴィルヘルム！　作戦通りに行くぞ！」

「了解つす」

ヴェルヘルムはポケットに両手を突っ込んだまま、
気だるそうに答えた。

62：封じ込める魔法

他者の目には、二人の立ち位置が入れ替わっただけのようにしか見えなかっただろう。

それほど朽葉悠斗とヘルマン・ガーランドの斬撃は素早かった。悠斗が振り抜いた小太刀は縦に一閃、返す刃で横に一閃。ヘルマンは五連続の突きを放っていた。刃同士が衝突して、停止した瞬間に反射した光だけが斬撃の証明である。両者とも神速の域に達していると言っても過言ではない。

ヘルマンには意外だったらしい。

「小太刀の方が上手に使うんだね」

「……何のつもりだ？」

悠斗は声に怒気を込めて言う。

たった数回剣を合わせただけで分かった。ヘルマンの剣術は昨日と”同じ”なのである。今晚のヘルマンは形代ではないはずだ。性能の劣る身代わりで襲撃をかけるほど、悠斗とクリスは舐められているのだろうか。

「それは　こう言うことっすよ！」

「　っ！」

背後からの声に、咄嗟に身体が反応して、悠斗は飛びずさった。

だが、もう遅い。地面がスケートリンクのように凍り付き、周囲に分厚い氷の壁が立ち塞がる。

……嵌められた。最初から、こうするつもりだったのだろう。ヘルマンの目的は悠斗とクリスを引き離すことだった。だから本気で剣を打ち合わずに、悠斗の立ち位置を誘導したのだ。

「ヴィルヘルム・ツヴァイク。ドイツのドレスデン出身、二十三歳。よろしくっす」

「誰が自己紹介しろと言った？」

「いや、これが騎士の作法なんすよ。仕方ねえでしょ？」

氷の内側には何も無い。しかし、人の声がしていた。

この声の主がヘルマンの背後にいた青年なのだろう。

『斬撃、闇の剣』

「無駄っすよ」

闇色の刃が縦に振り下ろされ 氷の壁に衝突した瞬間、その方向性が捻じ曲げられた。

結論から言うと、悠斗の魔術が反射したのである。咄嗟に身を捻って回避するが、刃は背後の壁にぶつかって再び悠斗に襲いかかる。どうやらこの壁は魔術を反射するようだ。

「！？ 『斬撃、闇の剣！』」

同じ魔術で闇の刃を相殺する。

「賢明な判断っす」

「……褒められても嬉しくない」

やや疲れた顔をした悠斗を、見えているのかいないのか、ヴィルヘルムはケラケラと笑う。

「もう分かったっすよね？ 俺のスペシャルな魔法『氷鏡世界』ミラー・ワールドはあらゆる魔術・魔法を跳ね返す氷壁っす。ちなみに、空間転移の魔術は使えないっすよ。ちゃんと調べてあるっす。アンタの転移魔術の範囲は”見える”範囲の二十メートル以内っす」

悠斗は舌打ちした。氷の壁だからと言って、透き通っている訳ではない。

白く濁っていて、とても壁の外に転移できる状態ではない。下手に魔術を使えば壁にめり込んであえなく”死亡”することもあり得る。

「氷つてのはミネラル分や二酸化炭素を含んでいると白く固まるっすよ。俺は学者じゃないっすから関係あるのか分からないっすけど、ドライアイスは真っ白っす」

「なら 物理的衝撃はどうだ！」

悠斗は思いつき氷壁を蹴り付けてみた。

だが、やはりビクともしない。

「無駄つすよ、無駄。その壁の厚さは三十センチつす。ぶっ壊した
いならアサルトライフルでも持ってきやがれって感じっす」

「くそっ！ どうすれば」
こうしている間も、クリスに危険が及んでいる。ヘルマンは悠斗
と戦うつもりはなかったのだ。

守ると決めたのに。約束したのに。どうして、こんなことになる
。

「ちくしょう。また守れないのかよ」

もし自分がクリスと関わっていなければ、こんな事態にはなつて
いなかったのではないか。悠斗は小太刀を壁に叩き付けた。何が守
るだ。結局自分はいつも空回りしているだけじゃないか。

力があれば。
もつと俺に力があれば。

十

レイピアと刀が交差する。

クリスは冷静な表情を取り繕って、動揺しているのを悟られない
ようにしていた。

「ハハッ、そんなにニーズヘッグのことが心配なのかな？」

悠斗は突如現れた氷のドームに覆い隠されてしまった。クリスは
いつまで正気でいられるか自分自身でも分からなかった。悠斗の無
事確かめられないまま、こうしてヘルマンと剣を交えているが、
その剣は普段より格段に遅くなっている。

ヘルマンは高笑いしながら細剣を引き絞り、放たれる弓矢のよう
に刺突を打ち込む。

冷静に剣先を逸らしながら、クリスはヘルマンの懐に飛び込んだ。
その気配を察したヘルマンは機敏に背後に飛びずさる。敵ながら流

石である。あのまま攻撃を止めていなければ、右腕が宙を舞っていたらう。

「さつきからニーズヘッグって言うてるけど、それって悠斗のことなの？」

「おやおや、知らなかったのか？ そうさ。それが朽葉悠斗の異名だよ。西洋の一部にも広まってるんだけど、まだ悪魔リリスの耳には入っていなかったと見える」

「どう言う意味なの？」

「『嘲笑する虐殺者』たる所以は、国立魔術アカデミーで起こったある事件にある。ある男が学生たちに狂信的な思想を植え付けて叛乱を起こし、選ばれた十人の学生がその鎮圧にあたった。その中で最も活躍したのが朽葉悠斗。その彼はたった一夜で二十人以上の学生を殺害したらしいよ。それも、嘲笑しながらね」

「……………」

「どうかな？ 失望した？ それとも嘘だと否定する？」

クリスは刀をヘルマンに向けた。何て笑い方をする少年だろう。

悠斗よりもヘルマンの方が、よほど似合っている異名だとクリスは思った。もし悠斗が嘲笑していたとするなら、それは自虐の笑みだったはずだ。

「失望しない。嘘だとも思えないから否定もしない。だけど、覚悟は決まったわ」

「……………うるさいな」

「貴方の話を聞いても、私の心は変わらない。それどころか、もつと悠斗を想う心が強くなった。同じ学校の仲間を殺さないといけなかった悠斗の境遇は、決して『虐殺者』として軽蔑されるべきものではないと思う」

いつの間にか、肝が据わっていた。

「……………るさい」

「貴方こそ黙りなさい！ 貴方に悠斗を否定する資格はない！」

「うるさいっつってんだらうがッ ……！！」

二つの怒気が激突する。

クリスの刀とヘルマンの細剣が鏢迫り合いに持ち込まれた。二本の剣は火花を散らしながら、互いの額のわずか数センチまで刃を進める。

その均衡が、片方に傾いた瞬間。

『光の使徒　斬撃、光の剣！』

『嵐の奔流と化して飲み込め、紅竜！』

三本の光の剣が出現し、クリスに襲いかかる。そして、クリスの周囲の地面から広がった炎は竜巻のように回転しながら光の剣を迎撃した。

しかし、これはただの光の剣ではない。

「甘いんだよ！」

炎の竜巻に激突する瞬間、光の剣は進行方向を転じた。

この剣はヘルマンの意思によって操作されている。クリスはそう判断すると、新たな魔術を練り始めた。その間も剣はクリスに直進しているが、火柱もヘルマンに向かっている。

『光の暴徒　断断断、ライトハルバード！』

『竜の咆哮と化して噛み砕け、紅竜！』

鞭のような変幻自在の炎が曲がりくねって光の剣を叩き落とす。

ヘルマンの方では出現した巨大な斧が炎の竜巻を両断していた。

光の使徒が魔術の操作、光の暴徒が魔術の強化。

事前に悠斗からかなり強力な魔術師と聞いていたが、想像以上だ。「ふざけやがって　偉そうに説教垂れてるんじゃねえよクソが！人ひとり殺せば殺人鬼だろうがボケ！　そこに善悪を持ち込むな！　主観を持ち込むんじゃねえ！」

「人殺しはすべからく悪者のような言い草ね。なら、貴方の場合はどうなの？」

「俺はキリスト教徒だから許されるんだよ！　全部！　何もかも！　あの教会の十字架が肩代わりしてくれるのさ！　ハハハッ、それがイエス様の贖罪だろうが！」

クリスは呆れ果てた。どのように成長すればこのような傲慢な考えが育まれるのだろう。まったく共感できない考え方だ。理解したくもない。いずれにせよ狂っている。

そうでもなければ、本物のキリスト教徒がぶち切れるようなことを臆面切つて言える訳がない。

「……貴方、根本的に十字教徒ではないよね」

「だから、うるせえって言ってるだろうが！」

こうなると、猪を相手にしているようなものだった。

クリスはレイピアと刀を合わせながら、魔術を詠唱する。

『嵐の奔流と化し　！』

しまった　と驚愕の顔をするヘルマン。

しかし、もう決着は付いていた。

そのとき、クリスは思わず口を押さえ込んだ。

声が出ない！？

魔術の詠唱が停止する。その隙にヘルマンは剣を払って脱出した。「熱くなりすぎだ、副隊長」

金髪の中年男が、少年に軽蔑の視線を注いでいた。

「騎士の礼儀により名乗らせて頂く。俺はハインリヒ・ベッケンバウアー。『サイレント・ワールド無音世界』によりあらゆる魔術を拒絶する魔法使いだ」

63：刃桜繚乱

気だるげに煙草を蒸かしている恰幅の良い中年男からは、さほどの脅威は感じられなかった。縁側で日向ぼっこでもしているような、倦怠的な空気をまとっているのである。

「あー、クソ不味い。つか気持ち悪い」

ハインリヒは青色の煙草の箱を握り潰した。

握り潰したのに、音がしない。そして、クリスはハインリヒの気配が消え失せたように感じた。

一瞬でクリスの目前に現れたハインリヒは、丸太のような胴体を見た目よりも機敏に動かし、両腕で円を描きながら掌底を打ち込んだ。それはクリスの刀を掻い潜り、腹部に命中。あの緩やかな動きのどこに、これほどのパワーが込められていたのか、クリスは十メートルも後退させられたことに、さらに驚愕した。

「……太極拳」

「分かるか？ うつむ、やっぱり似合わないよな」

クリスに返事をする余裕はない。それどころか、声を出すことから許されていないようである。

どうやらハインリヒは声を聞いた瞬間に魔法を発動しているらしい。最初の一文字だけは発音できるのだが、それ以降は言葉にならない。^{サイレント}

消音の魔術は存在しているが、それほど使い勝手の良いものではなかった。^{サイレント}

相手が魔術の詠唱を始めてから、消音の魔術を詠唱した場合、相手が黙るのは魔術を発動した頃なのである。しかも、持続時間が数秒という短さだった。しかし、消音の魔法は持続時間こそ短いものの、発動のタイミングを押さえ込むことにより、魔術の詠唱を中断させてしまう。

「俺は身体動かすのは好きじゃないから、副団長みたいな無様な戦

い方はしない。さつさと終わらせることだけを考へてる。……だから煙草を吸うことにしよう」

「どうし」

……どうして煙草が出てくる!?

反射的にツツコミを入れようとして、音が奪われていることに気付いた。

クリスの背筋に寒気が走った。振り返りざまに刀を抜き打つ。ほとんど当てずっぽうの太刀筋だったが、背後から奇襲をかけようとしていたヘルマンは退いた。失敗に終わったが、先ほどの脈絡のない発言は、意識の空白を作り出すものだったらしい。

背後からの波が引くと、今度は前方からの波が押し寄せる。

瞬時に間合いを詰めたハインリヒが円の動きで力を蓄えた両腕を振り抜いた。

やはり、気配がしない。

足音がしないため、いつ襲いかかってくるのか分からないのである。

「！」

咄嗟に刀で受け止めようとするが、ハインリヒの両手は鋼鉄ごときでは怯まない。それどころか、蛇のように湾曲し、器用に刀の腹を打ち抜いた。

あっ、と思った。クリスの両手から刀が弾き飛ばされ、遠くの方に転がっていく。

刀を失っただけではなく両腕が激しく痺れ、刹那の間、棒立ちになつていた。そこを、追撃のハインリヒの蹴りが襲いかかる。

頭頂を狙い定めたハイキックには、中国拳法の気迫が込められていた。命中していれば、頭蓋骨が陥没していただろう。

「躲したか。だが……」

背後からヘルマンが細剣を突き入れる。

クリスに為す術はなかった。

いや。

そんな訳は。

そんな訳はない。

この程度の窮地、今まで何度も潜り抜けてきた。フランスの地から極東の日本に逃れるまでに、どれだけの刺客に襲われたか、最早数え切れなくなっている。

魔術が詠唱できないだけで勝敗が決してしまうほど、クリス・リンディアは弱くない。

あの朽葉悠斗が『自分よりも強い』と断言したのである。相手の実力を計算することでは横に並ぶ者がいない智者が、そう判断したのだ。だからこそ、クリスの意外な精神面の脆さに驚愕したのである。

魔術が使えない。……ならば、魔法があるではないか。

クリス・リンディアは毅然とした目を二つの敵影に向けた。

「……潮時か」

ハインリヒ・ベッケンバウアーは口中で舌打ちした。

十

一方、氷壁の内側では。

ヴィルヘルム・ツヴァイクが呆然と立ち望む悠斗にしきりに話しかけていた。

「おやおや、君の彼女は苦戦しているみたいですよ」

集中力を乱すためにまくし立てているのだろう。

朽葉悠斗の頭脳についても事前に調べ上げられているはずだ。激昂させてマトモな思考力を奪い、状況を打開する奇策を封じ込めんとしている。しかし、ヴィルヘルムは気付いていない。その思考の動きが声の強弱や高低、その言葉を用いた理由、文脈のアクセントの位置などから思考をトレースされていることに。

悠斗にはヴィルヘルムの感情の動きが手に取るように分かった。
「どうしたんすか？ もしもーし？」

その心の中にあるのは 焦り。

悠斗が返事をしなくなったことから、状況を打開する策が練られたのではないかと疑っているようだ。しかし、ヴィルヘルムは外にいる。氷を透明にすれば、空間転移の魔術でみすみす脱出させてしまう。この場合、敵方に為す術はないのだ。

「あらら、副団長がキレてるっすね。ちょっと彼女の方が優勢っぽいつすよ」

待っていればクリスが助けてくれる と思わせるための甘言だ。魔術を反射する氷壁とは厄介なものだ。氷壁を破壊するために魔術を使えないのである。ならば、物理的な方法を取ればどうだろう。小太刀でガリガリと氷の壁を削ってみれば、やがて光が見えてくるはずだ。

……… どの遭難者だ。

結局、この氷壁は魔術的にも物理的にもほぼ無敵である。例外は本人が語ったように『アサルトライフル』のような現代兵器を持ち込まれた場合だけだ。魔力がなくなれば壁もなくなるだろうが、その選択はクリスを見捨てることになる。

「……なるほど」

悠斗はひとつ頷いた。この壁の攻略法は三つある

氷壁の破壊、氷壁の向こう側への攻撃、他者からの救援である。

後者二つに共通していることは、術者のヴィルヘルムに直接攻撃を加えると言うものだ。しかし、悠斗には後者二つを選択することは状況的に不可能である。

ならば、この壁を破壊するしか他にない。

悠斗は両目を閉じた。凄まじい集中力である。

ヴィルヘルムの声など、耳に入らなかつた。

濃密な霧が広がっていた。足元を見下ろしてみると、つま先さえ定かではない。それは背筋が凍えるほどの恐怖を呼び込んだ。一メートル先に落とし穴があるかもしれないのだ。最初の一步を踏み出すための精神力は、尋常なものではない。

『ここで動き出すのは得策ではない。霧が晴れるのを待つべきだ』

『

その声は、耳から入ってくる音声ではなさそうだった。思念のような、耳ではなく感性で受信するような声である。その声は頭の中を侵略するかにように広がっていった。

……まさか、これが俺の思念なのか？

「馬鹿な。もし周囲に敵がいれば格好の餌食じゃないか。危険を承知で踏み出すべきだ」

危険に遭遇する可能性など、ここでは考えるべきではない。立ち止まっても、襲われるときは襲われる。歩き回ればそれだけ情報が入り、正しい判断が下せるようになる。朽葉悠斗は情報がゼロの状態で立ち止まると言う選択肢を取るほど愚かではない。

『ここで動かなければ苦しむこともなかったものを』

「苦痛を受けることになったとしても、選択肢さえ選べずに死ぬよりはマシだ」

『強情だな、朽葉の者よ。だが、貴様には力がない。霧の中で敵と遭遇すれば、確実に死ぬと分かっている、それでも動き回れるのか？』

『

「俺に力がないのは確かだ。だが、俺の心まで弱いと決め付けるな！」

強敵を前にして萎えてしまうほど悠斗の覚悟は脆くない。悠斗は生唾を飲み込み、最初の一步を踏み出した。

『……愚かなり』

そこに、もうひとりの悠斗がいた。

『言ったであろう。霧の中で敵と遭遇すれば、確実に死ぬと……』

白哲の面立ちは朽葉悠斗そのものだったが、その雰囲気はまるで別人のようだった。両目は吹雪のように冷えていて、口元には自嘲的な笑みが貼り付いている。どこか、人生に疲れた世捨人のような風情が漂っていた。

「お前は……」

『我は流浪の王、百桁の神族が束になっても葬れぬ神である』

悠斗に憑いた穢れし神が、クツクツと喉を鳴らして嗤う。

「なぜ、お前がここに！」

『咆えるな、我が宿主。しかし妙なことだな。ここは我の意識が創り出した心象世界。我の許可なくして立ち入った者など過去におらぬと言うのに』

「……俺から入ってきた？」

『左様である。異国の呪詛の干渉を受けていた所為かもしれないがな、最終的にこの場に足を運んだのは貴様の意思だ』

悠斗は周囲を見回してみた。やはり、見えるのは霧ばかりである。

「これがアンタの世界か」

何と言つべきか思い浮かばない。それほど何も無い。

『虚無。それが、この世界の全容である』

あの蛭子の心が創り出した世界である。もっと、血とか死体とかでドロドロしているかと思っていた。

「そう言えば、アンタの魔法つて『刃桜繚乱』なんだよな？」

『ようやく気付いたか、我が宿主。貴様ほどの智慧があれば、若しかすると解に至るやもと思っていたが、これは面白い。ククツ、ハハハツ、ハハハハハツ』

「気付いたのは御剣蒼夜を『刃桜繚乱』で倒したときなんだけどな
神の魔法にしては、力不足に思えた。その答えがここにあった。」

悠斗はここに何をしに来たのか、自分でも良く分からなかったが、それを聞けただけでも十分な収穫だった。しかし、用事はこれだけ

である。帰りたいたと考えたのが原因なのだろうか。霧が濃密になり、蛭子の姿が見えなくなった。

『餞別だ。受け取れ』

紅い光がキラリと瞬き、悠斗の胸を熱いものが貫いた。

見下ろすと、真紅の剣が心臓に刺さっている。

しかし、痛みはなかった。出血もまったく見られない。それどころか、不思議と癒されていた。剣が悠斗の血液に溶け込んでいくような感覚がする。

『魂を傷付ける剣である。大切に扱えよ』

「……礼は言わないぞ」

霧がすべてを覆い尽くし、やがて意識が朦朧としてくる。

蛭子は皮肉げに嗤い、背を向けた。

十

頭脳が冴え渡っていくような、清々しい気分だった。

どうやら自分とはんでもない勘違いをしていたらしい。蛭子の『刃桜繚乱』は斬撃を無数に作成させる魔法のように見える。だが、それはただの副産物だったのだ。仮にも神たる存在の魔法が、その程度のものとは思えない。

『刃桜繚乱』は無数に存在する並行世界から魔力を取り出し、斬撃という形にして放出してただけに過ぎないのである。

その本質は”魔力の吸収”。

あまりに強力なため、他の世界まで影響を及ぼすほどの魔法。

悠斗は右手に握り締めた、意外に軽い剣を見て微笑した。ここままでしてくれと頼んでいないのに、世話好きな虐殺者だ。あまりに娯楽に飢えているのだろう。時々顔を見せに行つてやろうかと本気で心配になってくる。

『滅魂 紅霸』は爛々と光り輝いている。命を吸いたいと啼いているようだ。

「餓別か。有り難く使わせて貰う……」

悠斗は居合構えに腰を屈めた。

柄に左手を添えて、神経を集中させる。失敗は許されない。蛭子の力を使えば、悠斗は精神力を一気に削り取られる。一撃目は問題なくとも、二撃目を撃ったあとは魔力が残っていても足腰が立たない状態になるかもしれない。一撃目でもそうなる可能性は十分にある。壁を抜け出させても、力を使い果たしたところを狙い打たれることもあるだろう。

それでも 行かなければならない。

守ると誓った彼女が待っている。もしかすると、泣いているかもしれない。

「……俺に従え！ この空間に存在しているあらゆる魔力よ！」

居合から抜き撃たれた剣は、紅い筋と化して氷壁に吸い込まれた。その刃はあらゆる魔力を吸収する。氷壁を構築していた魔力が、滅魂の剣に触れられただけで刀身に流れ込んでくる。氷が崩壊すると刃は壁に滑り込んでいった。

「なっ、どう言うことっすか!？」

ようやく状況に気付いたヴィルヘルムが焦燥を露にする。

さらに、氷を形成していた魔力と、並行世界から奪ってきた魔力から、無数に生成された刃がどんどん壁を削り取っていく。

そして、返す刃で完全に氷壁を打ち砕いた。

「蛭子曰く、魔力で形成された物なら斬れぬ物はなし」

それが本当の『刃桜繚乱』の魔法。

クラストエッジ・ステイラー

『刃桜繚乱』である。

64：劫火の乙女

「……ふむ。真理は此処にあつた。そう言うことか」

ランスロット・ミューゼルは双眼鏡で戦場を見下ろしていた。

その口元にあるのは小さな笑み。意識しなければ気付かないほどの、些細な表情の変化だった。

「ヴィルの氷櫃が破られましたね。何が”負けることはない”ですか。あれほど油断するなと念を押しておいたのに愚鈍すぎます」

「お前の友だろ。そんな言い方をしてやるなよ」

「どれだけ言いつくろつても事實は変わりませんよ。どんな堅固な要塞でも、必ずどこかに弱点がある。落ちない城は存在しない。ヴィルはその程度のことさえ分らなかったのです。どこに弁護する余地があるのでしょうか？」

ランスロットの隣では、金髪の西洋人が忌々しげに舌打ちしていた。

青年の名前はジークフリート・フォン・ストラウス。

「誉れある騎士で、我が片翼であるからこそ、その傲慢を許すべきではないのです」

ジークフリートは言葉を切ると、あとは何も語らなかつた。

ヴィルヘルムのことを友として認めているからこそ、無様に敗北したことを許すべきではないと言っているのである。厳しい友情だ。ランスロットは苦笑した。

「さて、それでは我々も仕事を始めようか」

「……了解です」

二人の騎士は物語の裏側で動いていた。

クリス・リンディアに目を付けていたのは教会だけではない。

二人はこれから失墮した神々に牙を剥く。クリスを監視していた連中を捕らえ、そのアジトを吐かせて一網打尽にする予定だった。

ヘルマンは幾度も斬撃を重ねながら、焦燥を募らせていった。

何度もクリスを斬り付け、細剣を避けられても当身や蹴りを打ち込み、確実にダメージを蓄積させているはずなのだ。ヘルマンの卓越した剣術だけではない。ハインリヒの達人の域に達した太極拳は、一発だけで意識を昇天させてしまうほどの威力がある。

なのに、どうして倒れない？

なぜ、ここまで立ち上がってくるんだ！？

「……糞ッ、いい加減に落ちやがれ！」

細剣で神速の突きを放ち、剣筋を突きから斬撃へと変化させる。

しかし、当たらない。かろうじて蹴りだけを浴びて、クリスは後退した。

その背中をハインリヒが強襲する。

「芸がないわね」

打ちのめされて、なす術がないはずなのに、まだボソリと嘲笑う気力が残っている。

それが許せない。ここまで打ちのめされれば、まず精神が折れる。ヘルマンとの一対一で勝機を見出したからこそ、二対一になって敗北を予感し、通常以上の絶望を味わったはずなのだ。なのに、どうして立ち上がる。

ヘルマンは瞬間的に脳が沸騰し、どうして音を遮断しなかったのかとハインリヒを睨みつける。

そして気付いた。ハインリヒが予想以上に消耗しているのだ。

……何てことだ！

俺は馬鹿か、とヘルマンは己を罵倒する。

「……………」

クリスはずっと魔術を詠唱していた。『サイレント・ワールド 無音世界』の効果で魔術

を発動できないのに、その唇は絶え間なく動き続けている。それが何を意味しているのか、理解できないヘルマンではない。

ハインリヒに魔法を使わせているのだ。

それも、もう数え切れないほどの回数を。

「……ハインリヒ？」

声をシャットアウトしなかったのは、『サイレント・ワールド無音世界』の対象を魔術の詠唱だけに絞り込んだからだ。

魔力がそろそろ底を尽きかけているのである。

……ここに、圧倒的優位が崩された。

大した策士だ。朽葉悠斗並み、いや、それ以上の策士かもしれない。

「ようやく自覚したようね、狂信者。貴方って根本的に指揮官に向いてないわよ」

「……ああ、僕もそう思ったよ」

随分と素直になったヘルマンに、嘲笑おうとしていたクリスは笑みを引つ込めた。

警戒心が首をもたげたようだ。狙ってやったことではないが、これは利用できる。

ヘルマンはローブのポケットに右手を突っ込んだ。無数のゴロゴロとした感触が、まだこの戦いは終わっていないことを教えてくれる。ビシヨップ、ルーク、ナイト、そしてクイーン。まだ見せたことのない駒が残されている。ここで諦めるのはまだ早い。

さあ、始めようではないか、悪魔リリース！

『行くよ、瀑布ダイタロスの龍！』

それは召喚の魔術。

太古より存在している究極の攻撃魔術だった。

使い手があまりにも少ないため、今や文献を紐解いてもその知識を得るのはほとんど不可能になっている。さらに、召喚の魔術の難易度は半端ではなく、最低でも数百年の修行を要すると、実しやかにささやかれている。

おそらく、召喚の魔術は人間のものではないのだろう。
妖精や天使、魔族や魔王、そして神々。
それら超越的存在がヒトに裁きを下すための魔術なのだろう。
ヘルマンはビシヨップの駒を地面に放り投げた。
直後、瞬時に魔方陣が展開。ヘキサグラムが濃密な魔力を帯び、
プレッシャーを放ち出す。

そして、大質量の水が世界に溢れ出した。
水が一塊になり、海の龍が形作られる。
シードラゴン。そう呼ぶのが適切に思われた。

「……これって！ まさか、召喚！？」
クリスが驚愕するのも当然のことだった。
もう使い手の存在しない魔術を、たった十数年しか生きていない
少年が使いこなしているのだ。

その秘密はヘルマン・ガーランドの眼球にある。ヘルマンの眼球
は魔力の流れを”視る”ことができる。その構造や仕組みを理解す
ることができる。すべての魔術を”視た”だけで再現できるのも、
このためだ。

それは魔眼。精神ではなく肉体に依存する神秘である。

知識の魔眼 『パーフェクト・アイズ』
賢者の慧眼』。

ヘルマンは龍の尾を蹴り、水龍の背に降り立った。

十

シードラゴンは巨体を波打たせ、その牙をクリスに振り下ろした。
水龍は図体の大きさからは想像できない速度でクリスに襲いかか
る。

「……これは、ちょっとヤバイかもしれないわね」

笑いごとではないのに、口元に笑みが浮かんでくる。

クリスの身体は寒さに震えているようだった。

捨てられた子犬って、こんな惨めな気持ちになるのかしら？
ここまで粘って、ようやく勝機が見え始めたところだった。相手に握られた主導権を、奪い返せるところだった。僅かな希望のためにもがいていた者は、その光を失っただけで生きる力さえ抜け落ちてしまうと言う。

クリスの心は、それに近い状態になっていた。

……せつかく魔法を使わないように、戦っていたのに。

虚ろな瞳で水龍のアギトを見上げた。

「失望させるなよ、クリス・リンディア」

「……………え？」

その声が届いた瞬間、力なくうな垂れていた身体から活力が溢れてきた。

身体に覚え込まされた体捌きで、どうにか水龍の牙を回避する。

「なんてザマだ。この程度のことですれまうほど、お前の心つてのは弱いのか？」

「悠斗！ 無事だったの！？」

血塗れた剣 いや、ルビーのように輝く剣を携えた剣士が、クリスを見て冷笑していた。

悠斗の無事を喜ぼうとしたクリスは、その威圧的な視線にひるんだ。

心配で胸が張り裂けそうだった。

もしあの氷櫃の中で死んでいたらと思うと、目の前が真暗になりそうだった。

だから、それがどうした？

悠斗の視線はそう語っている。人の心配をするなら、まず自分の心配をしる。

そう言っているようだった。

「……怖いかな？」

まるで、睨み付けているようだった。

どうしてこんな目をしているのだろう。

まったく身に覚えがない。

本当に、そうなのだろうか？

「そんなに人を殺すのが怖ろしいか、クリス」

「そ、それは……」

どうして自分より弱い悠斗に、ここまで怯えているのだろう。

……怯えている？

そう、恐怖だ。クリスは怯えている。人を殺すのが怖ろしくて仕方がない。自分が魔法を使えば必ず誰かが死んだ。そのほとんどが顔見知りの者だった。昨日まで味方だと思っていた者たちが、向きを変えて襲いかかる。それが、自分を取り巻く現状だった。

それでも、だまされだまし生きてきたのである。

殺人の罪悪感をごまかし、襲われなかったため、そして人を殺さないで済むため、色んな国に逃げ回ってきた。どうしても必要になったときだけ魔法を使い、何とか生き延びてきた。人を殺すのは怖ろしかったが、自分が死ぬのはもっと怖ろしかった。

それなのに。

悠斗と出合って、堪えていた想いが堰を切って溢れ出した。

もう誰も殺したくない。

もう疲れた……。

そして何より。

悠斗から嫌われるのが怖かった。

悠斗は溜息を吐き、断固として言った。

「……甘えるなよ、クリス・リンディア」

「ちがう！ わ、わたしはそんなこと……!!」

動揺して心が揺さぶられる。容赦のない追求は、クリスの弱さを

適格に突いてくる。

どうしてこんなことを言うの……？

私はただ、貴方のそばに居たいだけなのに……。

悠斗は真紅の剣を水龍に向かつて正眼に構えた。

ヘルマン・ガールランドと対峙した瞬間、悠斗はたしかに微笑んだ。

「俺は依存してくるだけの女には惚れないぞ？」

「……………！」

そうか。ようやく分かった。

好きだから。

彼が愛おしいから、自分の汚いところを見て欲しくないのだ。

「何を笑っている？」

「ううん。何でもないわ」

だから、こんな無様な有様になってしまったのだ。

クリスは自分の滑稽な感情に、無意識に苦笑していた。

不快な感情ではない。むしろ、心地良いものだった。

「そうね。ようやく分かった。これが恋というものなのね」

たかが、この程度のことです。我を忘れるとは情けない。

炎の専門家なのに、心が恋に燃やされていることにさえ気付けないなんて。

『炎帝召喚！ 出てきなさい、イフリート！』

それは、召喚の魔法。

奔出するのは地獄の劫火だった。この世を焼き尽くす火焰が溢れかえり、その中から巨大な魔神が姿を現す。鬼神の形相をした魔神イフリートは、灼熱の息を吐きながら、大砲のような両腕を水龍に叩き付けた。

そして真夏の夜の夢は幕を下ろす。

物語の主演は『インフェル・フレイム終焉の炎』と謳われた劫火の乙女。

ここに交差した運命が、完全に繋がった。

65：星空と花火

七筋の光が、刃と化して襲いかかる。

「……乱心したか！ 瞬刃！」

血に濡れた匕首を翻し、猟犬のような獣の動きで刃先を突き刺す。光が五筋、同時に煌いた。

ミハイル・アレンスキー・ナザーロフは割かれた左肩を見下ろした。

「おっかねえ魔法だな」

「そうでもないさ、『北欧の守護者』」

滝川隆太は匕首の血を振り落とし、

「それで、校長はどこにいる？」

「……会ってどうする？」

「殺す」

隆太はごく自然に、昨日見たテレビ番組の内容を話すような気軽さで、そう言った。

国立魔術アカデミーの校長、弥栄玄一は校内のどこか 隠し部屋のような場所で日々を送っているらしい。しかし、それ以上探りを入れた情報屋は、ことごとく消されてしまった。隆太は校長の懐刀のミハイルを襲撃し、校長の居場所を吐かせようとしていた。

「アカデミーの校舎にいる。だが、それ以上は教えられねえ」

「……そうか」

やはり、悠斗を学外におびき出したのは間違いではなかったらしい。悠斗をアカデミーから遠ざけたのは、隆太は悠斗とだけは敵対したくなかったからである。

悠斗以外なら、どうにでもなる。健一郎や克己、クロードぐらいで退くような隆太ではない。

しかし、これからの行動次第では、せっかくお膳立てした今までの成果が水泡に帰してしまうこともある。

ミハイルは大型拳銃　デザートイーグルを構えた。

「で、お前はなぜ校長を殺したいんだ？」

「殺人に理由を求めめるのか？」

ミハイルは意外そうに目を見張り、小さく笑った。

「それもそうだな。だが、今回ばかりは意味のない殺人じゃなさそうだと思つてな」

「……………分かつてるじゃないか。そう、今回の俺はただのシリアルキラーではない」

「……………？」

「弥栄玄一の考えていることが分かつてしまったただけだ」

どうしてアカデミーの校長が倉淵祐作を止めなかったのか　と
考え始めたのが発端。

百人の学生が暴徒と化すのを、どうして黙って見ていたのか。どうして倉淵祐作の暴拳を黙認していたのか。どうして、たった十人の”生徒”にその鎮圧を任せただのか。

その答えは結果を見れば一目瞭然だ。

結果、悠斗たちはこの平和すぎる国で戦場を体験し、卓越した戦闘技術を身に付けた。一部の者はアカデミーを去ったが、支倉沙希や中島幽香のようにまだ悠斗と繋がっている者もいる。さらに、『^{ニースヘッケ}嘲笑する虐殺者』の名前は海外の一部にも広まっている。アカデミーは過剰すぎる戦力を手に入れ、ネームバリューも高まった。

弥栄玄一はそこで魔法庁から横槍が入ることを予想した。これ以上、力を蓄えられると魔法庁の屋台骨が揺るがされる可能性がある。だからだ。そこで、事前に『黎明の魔石』という餌を用意し、草壁涼二を釣り上げて、さらに悠斗たちにぶつけた。これにより、悠斗たちはさらに戦闘経験を積み、魔術の技量を高めていく。

王聖魔術学園を吸収し発言力を高めたことも無視できない。

「草壁涼二が魔法庁に喧嘩を売ってるらしいな。それも、アンタたちの思惑にあるのか？」

「さあ、俺は何も知らないが」

「弥栄玄一は魔法庁を潰し、アカデミーをその後釜に据えるつもりだ。違うか？」

「……………さあな」

ミハイルは黙り込んだ。

隆太は匕首を振るう。光が走り、闇夜を切り裂いた。

「えげつない魔法だ」

ミハイルの拳銃が火を噴く。魔力で構成された火焰弾が、隆太に襲いかかった。

引き金が引かれたとき、隆太の姿はもうそこにはない。

「後ろか！」

ミハイルは背後に拳銃を向けた。

「逆だ、馬鹿」

隆太は最初から一步も動いていない。トリックを使っているのだが、ミハイルにはそのことを看破するほどの器はない。

斬撃の光が、また煌いた。

ミハイルの肩に風穴が開く。

「止めだ！」

隆太は勝利を確信した。匕首を振りかぶり、背中を向けているミハイルに飛びかかる。

瞬間、ミハイルの口元が吊り上がった。

「……………！」

本能的な危機感を覚え、無意識の内に攻撃を止めてしまった。

ミハイルの身体から膨大なエネルギーが溢れ出している。

それは、純粋な電力。絶縁体のゴムさえも蒸発させてしまう熱量。

『トルハンマー
雷槌砲車』の、戦車の砲撃。

圧倒的な力が、隆太に向けられた。

隆太は一目で理解した。おそらく、あれは幽香の炎のような、特殊な力が備わっていない代わりに、威力だけは馬鹿みたいに巨大な

魔法だ。小細工を弄した卑怯な戦法を得意とする自分にとって、最も相性の悪い連中である。

判断は素早かった。

三十六計逃げるに如かず。

……失敗だ。

だが、確信は持てた。

弥栄玄一は 消さなければならぬ。

十

ウロボロスの輪。尾を食う蛇。

それは、自らの尾を食う一匹の蛇ではなく、お互いの尾を齧っている二匹の蛇だった。

「ふむ、ニーズヘッグの運命が変わったようじゃな」

漆黒の空を見上げていた老人が、低い声で呟いた。

都会のスモッグで夜空は薄汚れ、星を見ることすら叶わない。

それなのに、老人は星を読んでいた。

厳密には聞いていると言うべきか。

『星の声を受け取る御子』

老人を深く知る者は、その特異体質に畏敬の念を払い、そう呼んでいる。

この老人は教皇庁執政機関『長老会』の幹部である。

名前を知っている者は、どこにも存在しない。ただ、大老と呼ばれている。

「今までは食われているだけであつた。内なる神から侵略され、自我を蹂躪され、やがて麻薬常習者のような有様になるだろうと思つておつたが……」

朽葉悠斗は……ほんの少し、わずか一歩だけだが蛭子の侵略から

抗った。

神憑きは神喰いとは異なる。神憑きはいつ爆発するか定かではない爆弾のようなものだ。手駒として扱っていても、いつ牙を剥いてくるか分かったものではない。

「そして、リリスと運命を繋げおったわ。…… ホッホッホ」

老人は手帳を取り出した。

挟んであったペンで流麗なアルファベットを刻み込んでいく。

「これを、ミューゼルの兄に渡しておくれ」

すると、一陣の風が吹き抜け、老人の手から紙を奪い取っていった。

まるで風自らが進んで力を貸してきたような、奇妙な現象だった。『速やかに日本から撤収し、本国に帰還せよ。その際に現地に滞在していた証拠は一切残さず抹消すること。なお、朽葉悠斗とクリス・リンディアに一名の監視を付けて置くこと』

十

焼け落ちる社殿を前にしながら、朽葉北斗は無言で腰を下ろした。座禅を組み、読経でも始めるような落ち着き払った仕草で 刀を腹に当てた。

邪神の両目に射すくめられて、死ぬことに筆舌し難いほどの魅力を感じるのだ。今の北斗にとって”死”とは砂漠で見付けた一滴の水のようなものだった。北斗はそうすることが当然のように死に手を伸ばしていた。

言葉も残さず逝こう。そう思っていた。

だが、血の繋がっていない息子の顔を見ていると、何とも言えない悲しみが込み上げてくる。

「……すまなかった」

厳格で通っていた朽葉家の当主が、初めて洩らした本音だった。

「お前は分家の者。朽葉本家のことさえ知らなかったな。魔術の才能があつたのが不幸の始まりか、大人の勝手でお前のことを振り回してしまった。お前は何も言わなかったが、本当は幼馴染の女の子とずっと一緒に遊んでいたかつただろう」

邪神 朽葉悠斗は顔を背けた。

「お前の九歳の誕生日に、私はたしかこんなことを言った。『これで一人前の暗殺者だ。これからの朽葉家を裏側から支えてくれよ』とな。だが、忘れる。もうお前は朽葉とは何の縁もない」

朽葉北斗は刀を腹に押し込んだ。

ぐっ、と声が零れる。だが、苦痛は表情に出さない。あくまで穏やかに微笑んでいた。

「この愚かな父を許してくれ。父親らしいことなんて、何一つできなかったが、いつか、お前に剣術を教えてやるうと思っていたのだが、それも叶わない……か……」

横一文字に腹が切り裂かれ、どろっとした臓腑が溢れ出す。前かがみになって動かなくなった朽葉北斗に、もう生命の炎は灯っていない。そこにあるのは、ただの物体。タンパク質などで構成された、魂の欠けた存在だった。

「愚かな。貴様たちの教育でこやつが精神が蝕んでいなければ、この童が我が招きに応じることはなかったのだ。貴様たちがこやつを魔術師にしていなければ、この童に宿った我とてこれほどの力は発揮しなかつただろう」

邪神は苦笑した。

そして、新たな乱入者が現れる。

「おのれ！ よくも父上を！」

邪神は稲妻の太刀を奮う義兄を迎え撃った。

「久しいな、建御雷神！^{タケミカヅチ} そうか！ お主は朽葉に組したのか！」

邪神は両手を広げた。最早、度重なる戦闘で魔力が残っていないかった。

屠った数は百に上る。邪神に未練はない。今回の宴はいつもより楽しかった。

それぐらいの感想しか抱けないのである。

「ハハハッ、ハハハッ、アーハッハッハ！」

朽ち果てる社殿。蛇の刃、朽葉。それは朽ち果ての朽果だった。

十

花火が打ちあがる。虹色の花弁が開花し、極彩色の調べを奏でている。絶妙なイルミネーションと、小気味のいい破裂音が、見た目の派手さとは裏腹に寂しさを彷彿させてくる。

「……綺麗」

そこは小高い丘だった。

神聖な空気が漂っている不思議な空間。

かつて、ここには神社が建っていた。今となっては鳥居しか残っておらず、付近の住民さえここに何があったのか魔術で忘れさせられている。もう、ここを訪れる者は自分たち以外に誰もいないはずだった。

この寺社仏閣にある独特の空気が、記憶の海に仕舞いこんだはずの悪夢を引き出してくる。

悠斗は花火に心を奪われている咲夜の横顔を眺めていた。

「……お前の方が綺麗だけだな。」

そのような、齒の浮くような台詞を悠斗は持ち合わせていない。こう言うときはどうするべきなのだろう。モテる割には恋愛諸事情に疎い悠斗は、こんなときは困惑する一方だった。百戦錬磨の頭脳も、ここに至っては何の役にも立ちはしない。こんなことになるなら草壁から大人の口説き文句を教えて貰うべきだった。

「……手を握っても良いのか？」

悠斗の思考はグルグルと回転して、無限ループに突入する。

嫌がられないだろうか。でも、そこまで消極的だと……。でも、それだと逆に嫌われるかも……。

「どうしたんですか？」

「あつ、いや……えっと、そうだな……」

「……………」

咲夜は普段通りの無感動な瞳で、静かに悠斗を見つめている。

彼女は何も要求していない。だが、無言で、無表情で、でも心の奥底では悠斗に期待している。悠斗のことを想っている。自分には勿体ないほどの純粋な心を持っていて、見ているだけで眩しくなってくる。

だから、もう諦めた。

色々と、くだらないしがらみとか、隠していること。

「……なんかもう、泥沼だよな」

自嘲的に呟き、星空を見上げた。

「なあ、咲夜」

「はい、なんですか？」

「俺の手には一つだけ餌があるでしょう。で、俺の周りには何匹も犬がいるんだ。このとき、俺はどうするべきだろうな？」

咲夜たちのことを犬にたとえた酷い話だった。

口クでもない男だな、俺って　　と思ひ、もう苦笑いするしかなかった。

「……そうですね」

咲夜は数分ほど思索した。

悠斗にとっては数時間にも感じられる、地獄の時間である。

「悠斗さんの好きなようになされば良いと思います」

「本当にそれで良いのか？　犬が飢えることになっても、そう言えるのか？」

「その時はその時です。私たち与えられる側は、飼い主に過剰な要求を抱くべきではないですから。私たちは見返りを求めて、貴方を

慕っている訳ではないんですよ?」

たとえ話なのに見抜かれてる。

「そうか。お前は俺には勿体ないぐらい良い女だよ」

「それも今さらですね」

見くびらないで下さいと、咲夜はクスリと微笑んだ。

悪戯っぽい微笑みに、悠斗は堪らなく愛らしさを感じてしまう。

「ここで父親が死んだんだ。自慢ではないけど最低な父親だったよ」

「本当に自慢ではないですね」

「そう、本当に最低な奴だった。でも、死ぬときだけは立派な父親

になりやがった。アイツはクソ兄貴だけを見ていたよ。血の繋がっ

ていない養子のことなんて、目もくれなかった」

「嫌いなんですか? そのお父さんのこと」

「ああ、大嫌いだ」

悠斗はうつんと背伸びした。空を見上げるのも飽きてしまった。

花火はすっかり終わっている。

「でも、責任があるからな。アイツは俺が殺した。せめて、あの夏

の地獄の日に供養してやらないと、あの親父に呪い殺されてしまう」

悠斗は肩をすくめた。

その背後から細い腕が飛び付き、悠斗の首に巻き付いた。

咲夜が無表情を崩し、ムスツと頬を膨らませた。

「お互い因果なものを背負ったものよね」

「……父殺しのことか?」

クリスは返事をせず、悠斗の首筋に頬を擦り付けた。

その過剰すぎるスキンシップを見せられるたびに、咲夜の機嫌が

どんどん悪化していく。

「マーキングのつもりですか、メス犬」

「あら、もしかして妬いてるの?」

「妬いてませんから! さっさと悠斗さんから離れなさい!」

「やだ。悔しかったら貴女も抱きついてみれば?」

クリスは挑発的に微笑むと、悠斗の耳に息を吹きかけた。ゾクゾ

クゾクツと背筋に快樂のような震えが走り抜ける。やばい。これはやばい。

……と言うか咲夜さん。貴女全然受け入れてないじゃないですか。

「まあ、貴女が後ろから抱き着いてもその胸だとね……」

「……一度死んでみますか」

「貴女にできるものなら、やってみなさい」

悠斗は二人の言い争いの間に立たされながら考えた。

……俺はどこで選択を誤った？

朽葉悠斗の人生の岐路は幾つも存在する。清水瑠璃との出会い。

朽葉本家への養子縁組。神憑きの覚醒。朽葉家からの離反。川崎美

野里との遭遇。そして、アカデミーへの入学。

清水瑠璃との出会いが悪夢の始まりなら、神憑きの覚醒は悪夢の佳境に入ったところだ。

あの地獄の日。

人々の記憶から消え失せた、神社焼失の日に。

本来行われていなかったはずの夏祭りが行われるようになった。

「あの花火。まるで供養の花だな……」

「どうしたの、悠斗？」

咲夜とクリスが喧嘩を止めて、急に黙り込んだ悠斗を不思議そうに眺めている。

二人とも神妙な顔をしていて、悠斗は思わず苦笑した。ここで、

二人とも同じ顔をしているぞと言えば、また喧嘩が始まってしまっただろう。

「ああ、いや……。何でもない」

悠斗は花火が枯れた夜空を見上げた。

66：番外編「不死者」

波間に純白の光が揺らめいている。水面に映る月は確固たる姿形を成していない。夜中の海には魔物が住んでいると言われれば、納得できるほどの薄気味悪さが漂っていた。昔の日本人が『板子一枚下は地獄』と評したのも頷ける。

日本語の”ことわざ”や”慣用句”、”駄洒落”などに造詣はないが、どこことなく、そこに含まれている国民性のようなものを理解することはできる。

ロシアのジョークは時事的出来事を皮肉ったものが多い。それは農奴時代を経て共産制を導入しても、依然ポリシェヴィキの特権的支配から逃れられなかった民衆の、ささやかな抵抗だ。

アメリカのジョークはブラックジョークが多いような気がする。とは言え、あのジョークを言った後に「クッククク…」と無意味に笑うのはなぜなのだろう。アメリカ人の知り合いでもいれば理由を教えてくれるかもしれないが。

「日本の場合はジョークと言うより、駄洒落から”駄”を取って”洒落”ね。”お洒落”と言うように、そこには気品があるのでしよう。そして、和歌や短歌を継承した国民性は、総じて趣を重視する傾向にあるようだわ」

自分……ミース・ミューゼルは日本文化研究者ではないので、自信を持って断言してもあまり信憑性は見られないだろう。普段の自分の言動『……だよ〜』と言う、間の抜けた言葉遣いもあって、ミースの言葉は狼少年よろしく、半分以上が聞き流されることだろう。

「はあ……自分を偽って敵を油断させるなんて、三流のやることよね……」

それを言ってしまうと、国立魔術アカデミーの学生、磁力と金属の術者も三流になってしまうのだが、そのところをミースは理解

していなかった。

まあ、自分の同類がいたことを知っても、何の慰めにもならないのだが。結局ミースは非生産的な溜息を量産するしかないのだ。

「お兄様もヘルくんも、ジークとヴィル、ハインリヒおじさんも…」

皆、帰国してしまった。

ただひとり、ミースだけが煉獄の乙女『インフェルノ・フレイム終焉の炎』の監視のために日本に残されたのである。

ミースの同僚は総じて能力が高い。それは動かしがたい事実だ。

天才型にして万能型のヘルマン・ガーランド。

音声に介入して魔術発動を阻止する補助型にして、自身も高い格闘能力を持つハインリヒ・ベッケンバウアー。

対魔術師戦闘において、要塞堅固・絶対防御の氷壁結界を持つヴイルヘルム・ツヴァイク。

幻覚症状を誘発する幻影を操り、変幻自在の奇襲攻撃を得意とする槍騎士、ジークフリート・フォン・ストラウス。

そして、ミースの兄 最強の誇り高き騎士、ランスロット・ミーゼル。

彼らと一対一で戦っても、自分では万が一にも勝機はないのだろう。それがミース・ミーゼルだ。だから、意地を張って勝利をものぎ取るうとは思わなかった。それでも、悔しいものは悔しいのだ。

「はあ……って、何度目の溜息になるのよ」

黙々と海を眺める。煉獄の乙女の監視体制は今のところ何の問題もない。

彼女は夏季休暇を満喫している朽葉悠斗にひたすら依存している。見ているだけでお腹がいっぱいになりそうな光景を、それこそ毎日見せられている。今のところ、何の問題も起こっていない。強いて言えば、姫川咲夜と呼ばれる少女とくだらない争いを起こす程度だった。

実に平和だった。

朽葉悠斗にとっては女性二人に板挟みにされて平和ではなかったようだが……。

あまりに単調な任務内容に、ミースはすっかりウンザリしていた。不意に水面から飛沫が吹き飛んだ。

目を細めて黒々とした海に視線を投じる。ここから身を投げても、テトラポットに衝突して骨折するだけだろう。ミースは投身するならこんな汚い海はやめておくべきだ……と、あまり意味のないことを考えていた。

「グツ……ゲホツ、ゲホツ！ うあ……」

何事か、といきり立とうとして、自分のしていることの不毛さに気付き、結局ミースはそこから動かない。教皇騎士団の中ではただの凡人でしかないミースだが、規格外の魔法使いでない限り、軽く片手であらう程度の実力はある。

平均的な能力を持つ魔法使いに先制攻撃をかけられても、敵対行動に出た対象を五秒以内で殺害できる自信はある。それは過信や慢心とは無縁のものだ。経験に裏打ちされた確信である。

あえて言おう。皮肉なことに、ミースはそれだけの実力があつたからこそ、“逃走”と言う選択肢を考慮もせず切り捨ててしまったのである。それがどれだけ愚かしい行為であったのか。それは数分後に発覚することになるのだが、このときのミースはまだそのことは知らなかった。

まさか規格外の魔法使いが接近しているとは、普通なら考えもしないだろう。

身体が冷たい。冷え切っている。口の中が塩辛い。衣服が全身に張り付いて気持ち悪い。

だが、そのようなことは大した問題ではない。

最初に考えたのは、自身のコンディションだった。全身の筋力は平常以下、リハビリを必要とする。特に腕力と握力の低下が著しい。そこまで考えて苦笑する。

周囲の状況を確認するよりも、まず自己の健康状態を確認している。その行為によって得られた特に重要な情報は、まだ自分から冷静な判断力が失われていないことだった。

「……僕は……えっと、記憶が混濁しているようですね。記憶欠損率が40%を超えているなんて、まったく……僕は何をしたのでしよう。ひたすら自己嫌悪するしかないですよ。しかし、自己嫌悪とは我々の専売特許のようなものですかね。ええ、そう……。そうです」

海面に浮かんだ青年は、ただひとり、孤独を埋めるように言葉を費やしている。

「『倉瀨家』の血筋はダウンナーを輩出する傾向にあるようですからね」

青年　倉瀨祐作は陶酔する。嗚呼、自虐とは何と甘美な行為なのだろう。我々は命を修復する一族。助けられなかった命は数知れず、助けられなかった魂から憎悪を浴び、助けられなかった命の友人から敵視される。

患者を治療できない医者は無能。助けられた命の数は決して少なくないのに、彼らの行く道に後ろ指を差す者たちが後を絶たない。そのために、倉瀨の者は性格が歪んでしまった者が多かった。

治療魔法の完成を目指す。それは魔法使いとして、当然の行為である。真理の探究は魔法使いの義務であり、その好奇心に抗うことのできる魔法使いは存在しない。少なくとも、倉瀨祐作の知識にある魔法使いたちは、常に真理を渴望していた。

倉瀨家は古来より、ただ”死”を克服するために活動してきた。

「こんばんわ、流れ人さん。今宵は良い夜ね」

こんな場所に人が？

いや、そのような詮索は無意味。しかし、面白そうな人物である。金髪蒼眼の西洋人が三日月を背後に背負い、艶美な笑みを頬に乗せている。その幻想的な光景は、倉瀨祐作をして思わず破壊したくなるほどだった。

「これは異なことを仰られる。良い夜は今宵だけではなく、明日も明後日も続くことでしょう。すべての夜は我らの味方。魔術師にとって、夜は最大の味方なのですよ。もつとも、夜の概念そのものを味方にしてしまう化物が相手なら、ここにある夜も我らに牙をむくのでしょうかね」

「やっぱり魔術師なのね。で、あんたは何者？」

「これはこれはこれは……。予想外に詰まらない質問ですね。ですが、あえて答えましょう。答えてみせましょう。僕は魔術師にして魔法使い。傀儡師にして死霊使い。治癒魔法を昇華させた倉瀨家の偉人にして輪廻を超越した不死者。ふふふつ、これで満足ですか？」

「まさか、『輪廻転生』ネクロ・ファウストなの！　で、でも、あんたは闇の神憑きに殺されたはずなのに！」

「またまた詰まらない質問ですね。ふむ……貴女も魔術師なら培った経験と知識で推測して見せなさい。その程度の実力がなければ、ここで僕がこの右腕を奮うまでです」

彼女とて、祐作の右腕がどのような結果を生み出すか、理解できないはずがない。祐作の魔法名を知っていたと言うことは、その戦闘スタイルも把握していて然るべきである。現在の祐作は筋力が衰えているとは言え、純粋な殴り合いなら刀を持った朽葉悠斗を圧倒できるだろう。

祐作の武器は筋力だけではない。テクニックだけでも人を殺せるのだ。

それを証明するかのように、遠当てを一発、地面にお見舞いする。

「なっ　！」

すると少女の表情がサツと青ざめた。

「おやおや、恐怖しましたか？」

「……うるさい。ちよつと黙ってなさい」

「考え中ですか。……なら、制限時間を追加しましょう」

「つて、ちよつと！　勝手に条件を増やさないでよ！」

「この戦闘が終わるまでに正解が出せなければ、貴女にも”死”をプレゼントしましょう」

祐作の言葉に、少女の眉が訝しげに吊り上げられた。そして彼女も気付いた。この場に満ちる異常な殺気に。気配を押し殺しているが、一歩でも動く確実に命を狩りにくる敵が、随所に潜伏している場所を監視していることに。

「僕の客人です。丁重に死んで貰いましょう」

祐作は小さく微笑むと、左のジャブを二発、右のストレートを一発、ワン・ツリーのコンビネーションで放った。何れも遠当てだ。三連撃。肉と骨が潰れる音と、耳に残る断末魔の悲鳴に少女は身を震わせた。

規格外。少女の視線はそう語っているようだった。

それに気にせず祐作は遠当て五連撃を打ち込んだ。どうせ魔力ルテルの犬どもだろう。ちよつと良いリハビリ相手だ。いくらでも殺してやる。

……我知れず、祐作の口元に笑みが浮かんだ。

この場で中距離戦を制覇してしまった祐作に、敵側はとうとう痺れを切らした。このまま遠くから様子を窺っていても、味方の数が減らされるだけだと言うことに、遅まきながらも敵側は理解したのだろう。してくれたのだろう。

これでようやく、殴り合いの始まりだ。

脳裏でゴングが鳴り響く。祐作の戦闘技術はボクシングを基本にしている。そこに中国拳法の内気孔と外気孔、空手の蹴り、ムエタイからは肘や膝の使い方を学び、状況に合わせてサンボの柔術を使

用する。無数の格闘技を無節操に組み合わせたものが、現在の祐作の近接格闘技術だ。

祐作の拳は決して割れない。それは外気孔で骨格自体を強化しているからだ。

祐作の肉体は常人離れた機動力を發揮する。それは内気孔で筋力を増幅しているからだ。

「……凄い。何よこれ。圧倒的……と言うより、ただの虐殺じゃない」

「此処は僕の虐殺空間、殺戮空間なのですよ」

二十三人が一方的に殴り殺される。そして二十四人目、祐作は敵の腹部に右手を当てた。

発頸。

中国拳法でも失われつつある気孔術。その奥義に至る、衝撃貫通と内部破壊の秘拳。

炎の塊を拳圧だけで爆散させ、水の刃をただの蹴りで無力化する。常識では測れない戦闘方法。それは魔法使いの戦い方ではない。あれは死にたがりの戦い方だ。

「あつ、そっか……」

ミースの眩きに、祐作は笑みを深める。自分は道化。『破魔』の叔父よりも、よほど『The Fool（愚者）』のアルカナが似合っている。存在しないゼロ番の、夢想・愚行・極端・熱狂を意味するタロットのカード。

倉淵祐作は狂言師。これほど愚者が似合う配役は他にない。

「ああ、最初の前提条件を間違っていたのね。『ネクロ・ファウスト輪廻転生』の死者蘇生魔法を自分に使っているとは、理屈では理解できるけど、感情では理解したくないわ。つまり、あんたはすでに死んでいるってことでしょう？」

「ふふっ、ふふふっ。仕方のない方ですね。折角のプレゼントをふいにしてしまわれるとは……」

「死”を貰って喜ぶなんて、よほどの変態か狂人だけよ。あんた

には常識を知ってもらいたいところね……あつ、しまった。やつち
やった……」

祐作は血に塗れた両手を衣服で拭いながら、やってしまったと顔を
しかめる少女に目を向ける。

「えつとお……私はミス・ミューゼルって言います」

「……………ああ、なるほど」

慌てて口調を取り繕い始めた少女に、一瞬呆気に取られた祐作で
あった。

無論、手遅れであることは言うまでもない。

十

倉淵祐作生存の理由を推測することは、それほど難しいことでは
ない。死者を生き返らせる魔法の対象は、自分以外の第三者に限っ
たことではないからだ。

だが、そんなことよりも、ミースの推測を埋めたのは『なぜ昨年、
朽葉悠斗は倉淵祐作を殺さなかったのか？』と言うことである。

朽葉悠斗は最初から見抜いていたのではないだろうか。

最初から、倉淵を殺してもどうにもならないと。それに、”死”
と言う概念を所有していない倉淵祐作は、戦えば戦うほど倒し難く
なっていく。魔法を見せてしまえば、その対策方法を考案されてか
ら再戦を挑まれる。死なない相手と何度も戦うと言うことは、自ら
の手の内をさらけ出してしまうと言うことだ。

だから、朽葉悠斗は倉淵祐作をアカデミーから遠ざけることを選
んだ。

そのことを他者に公言しなかったのは『不死者』の不興を買って、
彼を敵に回してしまっても何のメリットもないことを、悠斗自身が
知っていたからだろう。それに、そんな突拍子もないことを他者に

説明しても理解を得ることができるとは思えない。

祐作が『黎明の魔石』を求めたのは、キャパシティの改善のためだ。

祐作は常時自分に『ネクロ・ファウスト輪廻転生』を使用することで、魔法容量の70%以上を消費している。肉体の腐敗を抑え込むだけで手一杯だった。有象無象の魔法庁・聖騎士部隊や大泉大悟は、祐作側に他者の肉体を維持したまま支配するほどの容量がなかったため、倒されなくても最終的には腐敗して風化したことだろう。

今の状態では腐らない死体人形を手に入れることができない。

つまり、祐作は『ネクロ・ファウスト輪廻転生』を使いたくとも自由に行使できない状態にあったのだ。

それを改善するのが『黎明の魔石』だ。少なくとも、事前情報ではそうなるはずだった。

『黎明の魔石』は古代の魔王が封印された石である。……と言うのは建前で、有り体に言ってしまうとそれは御神体のようなものだ。

神を祭る神器。

それが意味するところは、たったひとつしかないだろう。

肉体が『黎明の魔石』に適合すれば、神憑きか神喰いになれると言っことだ。

そうすることで、祐作の『ネクロ・ファウスト輪廻転生』の容量が増築されるはずだったのだ。

……だが、『黎明の魔石』は祐作に何の恩恵もたらさなかった。祐作にとってはいつまで経っても膨大な魔力を蓄えただけのただの石ころ。いつそ売り払ってしまった方が建設的なのかもしれないが、なぜか未練があつて手放せなかった。

「さて、草壁の叔父上は神喰いになれたのですかね……」

その独白を知り得る者はどこにもいない。

区画整理され始めている商店街から徒歩五分の距離にある。立地条件は駅から遠過ぎることはないが、近過ぎることもない。良くもないが悪くもない土地と言ったところだ。

「なるほど、倒産した貿易商社のオフィスですか。考えたものですが、これほどの場所を用意すると、相当強力な催眠魔術を使用したのでしょうか」

「教皇騎士団ランスロット部隊には、そっち方面の魔術に特化した人がいましたからね」

「その口調、どうにかなりませんか？ うっかり殺してしまいそうになるんですけど……」

真剣に首を捻っている祐作に、ミースは笑みを引きつらせた。それが冗談でないことぐらいは、彼女なりに理解しているのだろう。

とりあえず三十人ほど虐殺したお陰で、殺戮欲求はある程度満足できたので、しばらくの間は無意味に他人を攻撃することはないだろうが……と、そこまで考えたところで、自分の壊れっぷりを改めて自覚することになった。今さら自己嫌悪することではないのだが、「あゝ、潰したい壊したい殺したい」

「物騒なことを言わないでよ。と言うかね、あんたって去年からそんなに狂ってたの？」

「記憶が欠損しているお陰で、理性が磨り減っているのですよ。楽しい思い出、幼き日に注がれた両親からの愛情……それらが僕の“人格”を形成してきたのですが、それらが失われて、現在は脳のリミッターが外れた状態にあるのです」

「ちょ　！　それって危なくない？」

「極めて危険ですが何か？」

「……そんなにサラツと言わないでよ」

オフィスのソファに身体を沈めると、無意識に頬が緩んでしまった。それで、からかわれていると勘違いしたのだろう。ミースはムツと虫の居所が悪そうな顔をする。

「魔法で肉体を修復するのに時間がかかりすぎたのでしょね。脳は簡単にダメージを受けてしまう、人体でも非常に脆弱な臓器です。まあ、実際には記憶は忘却された訳ではないので、落ち着いてゆっくりと記憶を埋めていけば元に戻りますよ」

記憶には記録・保持・再生の三つのプロセスがあり、祐作の記憶の欠損は再生ができなくなっている状態なのだ。記憶全体の40%が再生不能になっているのに、まだ自分の足で立っていられる時点で、どれだけ祐作が異常なのかが分かる。

まあ、祐作の場合は、日常生活に影響を及ぼさない記憶を優先的に忘却するように、あらかじめプログラミングしておいたのだが。そのお陰で、性格的にはぶっ壊れてはいても、それなりに対人コミュニケーション能力が機能しているのだろう。

最悪の場合、本能だけで動き回る戦闘人形になっていたのだし、この結果は上々なのだ。

そう思おう。そう思わないとやってられない。

「ふ〜ん、厄介なのね。よく分からないけど」

「分からないのに理解した振りをするのは止めた方がよろしいかと。ソクラテスの弁を借りるなら、無知を自覚した者こそ、真の優れた知者であると言えるのです。それが、無知故の知ですよ」

「細かいことを言わないでよ。鬱陶しいから」

「ふむ、ちよつと貴女の泣き声が聞きたくなくなってきましたよ」

「……………冗談に聞こえないから本当に止めて」

「無論、冗談のつもりはありませんが」

ミースは疲れたように溜息を吐いた。そう言えば、この建物に入ってからずっと目を合わせてくれないのだが、どうしたのだろうか。祐作に落ち度があるとは思えない…………と、この青年は本気で思っ

いるので性質が悪いのだが……。

考えるのが面倒になってきたので、月に一度のあの日ってことにしておこう。

かなり失礼なことを考えながら、祐作は自販機の紙パックコーヒをすすってみた。

「さて、そろそろ本題に入りましょうか」

「ビジネスの話ですね。よろしい。僕もその話を待っていました」

一々芝居がかった台詞を乱発する祐作に、ミースは苛立ち混じりの視線をぶつけてくる。「黙れ」と言いたいところなのだが、祐作が「ではその代わりに死んでくれませんか？」と返答するかもしれないので、どうすれば良いのか分からないのだらう。

うん、何だか楽しいな。楽しすぎる。

「あんたが魔術カルテルの連中に狙われている理由は？」

「連中の思惑が、僕を鉄砲玉にしてアカデミー戦力を目減りさせることでしたので。こうして僕が生き残っていること事態、彼らにとっては想定外の事態なのですよ」

「……今のおんたって生きていえるのかしらね」

「さあ、生命の定義なんてどうでもいいです。それですね、僕は本来ならば死んでいるはずの人間なので、彼らは冥土の土産とばかりに話す必要のないことを話してしまっただけですよ。アカデミーに突入する僕を支援するための武器庫の位置や、幹部の顔、その居場所など、連中にとっての最高機密事項がこの頭脳に入っていますからね。ですが、記憶が欠損しているのです、その記憶を掘り出すには半年ほどかかりますけど」

至極単純。あの三十人の襲撃者は、ただ邪魔者を消すために送り込まれたのだ。

聖騎士百人を単騎で殲滅してしまう祐作にたった三十人とは笑わせられる。

「それで、貴女は僕をどうするつもりなのです？」

「そこで取引よ。とりあえず、私の庇護下にいる限り、魔術カルテ

ルからの火の粉を払ってあげる。その代わりと言っては何だけど、あんたの戦闘能力を私に貸してくれないかしら？」

「もう少し具体的な話をお願いします」

「……仕方ないわね」

祐作の理解力が足りない訳ではない。だが、これが取引として成立すると、ミースが本気で考えているのか疑問に思えたので説明を求めたのだ。

「ほら、私ってこれでも教皇騎士団の単独任務に就いているのよ。でも、最近はどの勢力でも慢性的な人手不足だから、日本で任務に就いているのは私だけなの。それって、不測の事態が起きたとき、かなり不安になるでしょう？」

「教皇騎士団に所属していない。公式記録では死亡扱いになっていいる。そんな僕を私兵として飼って置きたい……ですか？　しかし、僕を使えるのは重に国内だけではないでしょうか？　果たして貴女のご同僚たちが僕を受け入れるのでしょうか？」

受け入れられないはずだ。組織的視野から見ると、内乱を起こした前科のある人間を、歓迎するほど能天気な組織なんて終わっている。

教皇騎士団の目から逃れられるのは日本だけだ。

ミースだって何年も日本にいる訳ではないはずだ。この土地にたった一人しか人員が派遣されていないことから、この国が西洋ではどれだけ重要視されていないのかが窺える。なのに、日本でしか動員できない祐作を手駒にしようとする理由が分からない。

まさか、そこまで自分が安いものと思われているのだろうか。

魔術カルテルの連中なんて、何人集まっても敵ではない。定期的に襲撃されるにしても、記憶が整理されるまで、殺戮欲求を満たすのに役立つはずだ。これでも祐作は罪のない一般人を殺すことだけは抵抗があるのだから。

「……そうですね。実際、僕が得られるメリットがあまりにも小さいのですが」

「やっぱり不満？ …… まあ、そう言うと思ってたわよ」
「まあ、本音としては面白くなさそう、だから乗り気ではないので
すがね」

祐作は紙パックを握り潰し、ゴミ箱に放り投げた。

放物線を描きつつ、ゴミ箱に吸い込まれる紙パックを眺め、不意に祐作は笑みを浮かべた。

「ああ、そうですね。そう、これが良い。こうなれば面白い。ふふ
ふっ、我ながら傑作です」

ひとり、不気味に笑いながら、祐作はミースに向き直った。

「選択肢を三つ用意しましたので、お好きなものを選んで下さい。

尚、何も選ばなければ、僕はこの場で貴女を殺害することをここに
明言しておきます」

「ちよ、ちよっと！ 急に何なのよ!？」

「選択肢1 貴女の生殺与奪の権利を僕に譲渡する。

選択肢2 僕の魔法で絶対服従の死体人形になる。

選択肢3 契約期間内、貴女の”女”を僕に提供する。

さて、どれにしますか？」

「…………… 失敗したわね」

苦々しく呟いたミースに、内心で祐作は同意した。祐作と遭遇し
なければ、こんな理不尽な選択を強いられることはなかっただろう。

「お兄様…………… 助けて……………」

「ふふふっ、ははははははっ …… !」

人の泣き顔とは、甘美なものだ…………… と、祐作はひたすら鬼畜な考
えを抱いていた。

十

朽葉悠斗が魔法庁主催の『夏休み学生論文大会』で最優秀賞を受

賞し、賞金の五百万円を受け取りに魔法庁に外出したのが夏季休暇の中頃のこと。なぜか神代の姫君や黒炎の巫女、煉獄の乙女も一緒のようである。

監視とはその対象によって任務の難易度が劇的に変わってくる。朽葉悠斗への監視は、プロの諜報員を尾行するよりは簡単だったが、一般人を監視するよりは圧倒的に難しい。難易度的には上の下と言ったところだ。

だからミースは任務中は常に神経を張り詰めさせなければならぬ。しかし、ミースの場合はこの手の任務にある休憩がまったく存在していないのである。孤立無援の任務で、どんどん精神的疲労が蓄積し、パンクするのも時間の問題だったのだ。

結局、ミースは倉渕祐作を引き込むしか選択肢がなかった。

そのために、大切な物を失ってしまったのだが……。ああ、どうしてあのとき真っ先に逃げなかったのだろう。ひたすら後悔する。どうせ逃げたところで後ろから遠当てで殺されていたのだろうが、どうしても考えてしまう。

そもそも、どうしてあんな夜更けに海岸で黄昏ていたのかと、自分を罵りたくなる。

「ふむ、元気そうですね。あんな平和ボケした『嘲笑する虐殺者』^{ニースヘッケ}を見るのは初めてですよ。うん、彼はこの一年で随分と丸くなったようですね。結構結構」

「……そう。良かったわね」

「どうしたんですか？ まだ凹んでいるんですか？」

嘲笑うような祐作の口ぶりにウンザリする。

「ふふふつ、目が死んだ魚のように濁りかけていますよ。良いですね良いですね。人が絶望する過程を観察するのは、僕の唯一の趣味ですからね。いやはや、これは愉快だ」

祐作は不気味なことを呟くと、不意にミースの身体を背後から抱きしめた。

「今晚も可愛がってあげますよ。では、僕は少しこの場を離れます

から」

「どこに行くの？」

「悠斗君には僕たち以外の監視員が付けられているようですよ。邪魔になる前に消しておきます」

証拠もないのに断言する祐作を若干頼もしく思ってしまった、ミースはまた自己嫌悪した。それに、任務中に勝手に持ち場を離れようとするのは良くないことだ。

ミースが許可を出したのなら問題ない。しかし、上下関係が重視される組織では、今の行為は許されてはならないのである。

「罰則を与えるとか……いや、それって殺してくれと言っているよ
うなものよね」

「いえいえ、僕はそれほど残虐ではないですよ」

二十秒も経っていないのだが、もう監視員を消してしまったのだろう。左手が微妙に血で濡れている。次元が違いすぎる強さに、ぐうの音も出ないミースである。

「所属は魔法庁のようでした。御剣の息がかかっているのかと思っただのですが、それはないようです。どうも、八神家が独自に監視を進めているようですね」

「朽葉じゃないの？」

「あの家はほぼ壊滅しているので。それに、朽葉海斗がとりあえず放置しているのです。朽葉家が直接あの虐殺者を手にかけることはないでしょうし、アカデミーに所属している限りは監視する理由もありません」

「あんたが虐殺者と言つと、どんな皮肉なのよって思ってしまったわね」

ミースの諦観を含んだ独り言に、祐作は肩をすくめて答える。その仕草が日々様になっていて苛々する。こんなに人格が歪んだ狂人なのに、立ち振る舞いは洗練されていて、触れる物すべてを切り裂くような鋭い空気をまとっている。

有り体に言えば、格好良いのだ。

ミースの絶対者は兄のランスロットだったはずなのだ。あまり大声では言えないが、血の繋がった兄妹なのに、自分は兄にそのような感情を抱いてしまっていると思っていた。なのに、最近では兄のことを考えても、それほど心は動揺しない。

それほど倉渕祐作は魅力的な人間なのだ。

なるほど、これが倉渕祐作のカリスマか。百人規模の集団を扇動してアカデミーで内乱を起こしてしまえるほどの魅力に、明らかにミースは影響されていた。

と言うより、每晚恋人以上に優しくされて、本気で彼に惚れそうになっている。

怖いのは祐作が、ミースがそうなるように狙って接していることだ。依存対象を兄から己へと置き換える。その程度のこと、倉渕祐作にとっては片手間程度の労力で行えるのだろう。

……駄目だ。このままでは駄目だ。

この青年に依存することがどれだけ危険なのか。それが分からないミースではない。

そのはずなのに、どうしても離れられない。これが洗脳なのかと、どこか冷静なところから事態を傍観している自分が、納得しているような気がした。

十

正義は嫌いだ。正義なんてクソ喰らえ。

それが、倉渕祐作の父の座右の銘だった。そんな歪な教育を幼少時代から受けていた祐作は、当然ながら同年代の子どもよりも、物事を穿って見るようになっていた。

集団は異端を排除しようとする。

祐作が目を付けられたのは、ある意味当然のことだった。

イラッとした。イジメの首謀者ひとり半殺しにしてみた。結果、祐作はますます孤立したが、彼にイジメを吹っかけようとするほど愚かな子どもは二度と現れなかった。

ちょうど目の前の公園で、イジメられている子どもがいた。五人がかりで一人を取り囲んで罵声を浴びせている。時々拳骨が飛んでくる。イジメる側にとっては最高の娯楽だが、イジメられる側にとっては地獄に等しい光景だ。

祐作は舌打ちした。殺戮欲求が膨れ上がる。

「……駄目」

ミースが祐作の腕を押さえつける。

「殺さないで」

上目遣いで懇願され、祐作はもう一度舌打ちした。

拳を握り締める。この少女の頭蓋骨を砕いてみたらどうなるだろうと興味が沸いた。

……だが、できなかった。

理性が復旧し始めている。

自覚できるほど理性が修復され、ようやく祐作は安堵した。ミースと親交を深めたことにより、欠損した記憶がある程度埋まって、殺戮欲求がなりを潜め始めている。

祐作にとっての最大の問題は、誰かと暖かい記憶を共有することにあつた。

ここで人殺しばかりしていたら、欠損した脳の領域に殺戮欲求ばかりが刻み込まれ、ただ人を殺すだけの戦闘機械になっていただろう。ミースはそのための生け贄のようなものだった。彼女との接触は、祐作にとっては渡りに船だったのだ。

溜息を吐く。

すると、意外なものを見たような、奇異の視線を隣の彼女から向けられる。

「……この世界は地獄なんですよ」

祐作はもう二度とマトモな状況で死ぬことができない。最終的には老衰してから蘇生し、また老衰すると言つ生き地獄を味わうことになるのだろう。

「……すみませんね」

どうにもならない。人生はそんなことばかりだ。

やってられない。だから、朽葉悠斗との死闘に生きる意義を見出そうとした。結果はあまり芳しくなかった。倉渕祐作が朽葉悠斗よりも格下だと分かっただけ。何度も戦えば勝てるかもしれないが、その戦いには緊張感が持ち込めない。

それがどれほど不毛な行為なのか分からないほど、祐作はガキではない。

視線を公園に戻すと、教師らしき人物が子どもたちを叱責しているところだった。

安堵する。その心の隙に、敵意の声が入り込んだ。

「……ミース、これはどう言うことですか？」

気配はとつくに気付いていた。この公園に入る前からずっと、視線のようなものを感じていた。

薄気味悪い気配。慣れ親しんだ戦場の空気。それらが祐作の意識を覚醒させる。

「教皇騎士団の方ですか？」

「肯定します。私はジークフリート・フォン・ストラウス」

金髪碧眼の西洋人だった。ドイツ系の名前で、貴族の血脈のフォンを名乗っているからなのか、かなりプライドが高そうな青年だ。

「傀儡師。何ためにミースに近付いたのです？」

「僕のためにですよ。それ以外の返答が必要ですか？」

「否。私は貴様を殲滅するだけです。ミースを害そうとする輩を排除すると、隊長から仰せつかっていますので」

祐作は吹き出した。ミースを害そうとする輩？

それが自分か。なるほど、正義とは真逆。しかし、祐作にとって

はこの立ち位置こそが心地良い。

「ジークフリートとやらにひとつ言っておきましょう。彼女はすでに僕の女にしていまいました。ふふふっ、はははっ。僕が愚者なら、差し詰めあなたは道化ですかね」

「　　ッ！　　貴様！」

「やめて！　ジーク！」

「ミース！　まさか、本当に！？」

ジークフリートは驚愕する。隙あると言いたいところだが、まだまだ油断はできない。いつの間にか、彼の右手には短めの槍が握られている。投擲にも使える手槍だ。

「貴方が正道を行くなら、僕は喜んで邪道を進みましょう。さて、殺し合いますようか」

「あんたも止めなさいよ！　　どうして二人が戦わないといけないの！？」

「勿論、そちらの方が面白そうだからですよ」

その言葉に絶句したのはミースだけではない。

ジークフリートは我を失い、すぐさま怒りに頬を染めて突撃した。鋭く研ぎ澄まされた槍が狙いも定められずに祐作に襲いかかる。と、急に槍の穂先が無数に分裂した。

「　　！」

拳で迎撃する……不可。現在所持している武器……該当なし。

最良の選択肢は自ら槍の群れに飛び込むことだった。

「グッ　　！　　……なるほど、幻覚に長じた魔法使いとは貴方のことでしたか」

心臓のある部分を槍に貫かれているのに、祐作は不敵に笑う。

そして、空いた右手をジークフリートの腹部に押し当てた。

「何、殺しはしませんよ。不毛ですし、ミースを悲しませてしまいませんからね」

瞬間、衝撃がジークフリートの腹部で炸裂。ゼロコンマ数秒で消化器内部から溶液がせり上がり、秀麗な西洋人は地面に吐瀉物を撒

き散らすことになった。

祐作は自らの手で心臓部を貫通している槍を抜き、大袈裟に溜息を吐いてみせた。

「まったく……これではまた死んでしまいますよ。マトモに死ねないのは分かりきったことですけど、もう少し痛くない死に方はないのですかね」

「ゆ、祐作!？」

大丈夫なの、と声をかけるミースに返事をしようとしたところで、急に膝から力が抜けた。

……ああ、駄目だ。ちよつと、もう無理。

「ようやく名前で呼んでくれましたね、ミース」

「祐作……! 死んじゃやだよ! ねえ祐作!」

泣きじゃくる少女の顔に、自分の壊れた部分が満足している。だが、そんなことは、今となってはどうでも良い。理性が回復した今、自分の狂気はなりを潜めているのだから。

と言うか、彼女をこんな風にしてしまった自分に途轍もない嫌悪感を抱いてしまう。申し訳なさで心の中が一杯になる。必要だったとは言え、責任を取らなければならないことをしているのだ。罪悪感で胸が溢れかえりそうだ。

「ああ、心配しないで下さいよ。ミースに関する記憶は優先保存しておきますから。さて、次に目覚めるのは何時になるのでしょうかね」

また退屈な死体生活だ。やってられない。

ああ、せめて朽葉悠斗と戦っておきたかった。悠斗の倒し方を考えているだけで、亡者生活の退屈が大分楽になる。殺し合いではなくて、命のやり取りのない決闘でも良いのだ。まあ、今さら向こうは自分を受け入れないのだろうが。

あつ、何か唇に暖かいものが触れたような気がしたのだが……。

初めてそつちからキスしてくれたんだな。つかもう無理。意識が墮ち。

倉淵祐作の身体が停止した。

十

ままならないこと。世の中の大半が、そのようなもので構成されていると、彼は言っていた。

あと「僕は普通よりもかなり穿った物の見方をしていますから、あまり参考にしない方が良いでしょう」と言っていた。

ちなみに自分の座右の銘は「楽しくない人生をどれだけ楽しく生きるか」だと笑いながら語っていた。あとは「親父の座右の銘は『正義なんてクソ喰らえ』ですが、僕にとっては正義か悪なんて大した意味がないんですよ。面白ければ良いじゃないですか」とも。

享楽主義者。あるいはただの馬鹿とも言う。

格闘戦の天才で、圧倒的なカリスマを持ち、座学でも優秀な成績を収めている。ただし、アカデミーから追放されたので研究者として身を立てる術がなくなった。

そのようなことを、枕元で語っていた。

それが彼……倉淵祐作だ。

彼は人間的に終わっていると思う。でも、彼の行動にはいつも筋が通っていた。面白いか否か。彼の行動はただそれだけに収束する。人殺しでさえも娯楽にしてしまう真の虐殺者なのだ。本当に、ウンザリするほどの馬鹿者だ。

真っ白な病室でミースは物思いに耽っている。

そう言えば、彼の好きな色は純白だったか。髪も真っ白だ。趣味と言っには偏執的過ぎるので、正直最初は面食らっていたのだが、「殺す殺す」と言われ続けて、そんな特徴を見過ごしてしまった。情けないことに、あのときの自分はパニックかヒステリー状態だっ

たのдарろう。

「……………はあ、早く起きてくれないかなあ」

現在、朽葉悠斗の監視はジークフリートが行っている。

挑発されたとは言え、彼はほとんど考えなしに祐作を殺してしまった。これぐらいの苦労は背負って貰わないと割りに合わない。しかし、反省して「彼は予想外に良い人のようですね。勿論、人殺しの理論を理解してやるつもりはありませんが」と語れるほど視野の広い人物であるはずのジークが、どうしてあれほどキレていたのだろうか。

分からない。まさかミースに惚れていた？

いや、それはない。絶対にない。100%ない。あの堅物のジークが、普段は猫を被っていてだらしないミースに惹かれることなんて、万に一つありはしない。

そう考えている辺り、彼女はかなり鈍感なのだろうが。

どれだけ時間が経ったのだろうか。日が傾いて、空は真紅に染まり始めている。

そろそろ帰ろうと、ミースは椅子から立ち上がった。最後にベッドに横たわっている青年に口付けをして……………。

鞆に荷物をまとめていると。

「キスで目覚めるなんて、どこに白雪姫ですか」

呆れ果てたような声が、ミースの耳に届いていた。

……………え、嘘？

……………聞き間違い……………じゃないのよね……………？

「おはようございます、ミース」

「あ……………うあ……………」

前回は彼の人格が壊れていたため、マトモな恋愛ができなかった。それでも愛してくれたのは事実なのだが、ここにいる彼は、今まで見てきた中で、最も慈愛に溢れていた。

「さて、今回は面白い人生のために、真正面から貴女を愛してみますか」

「ゆ、祐作！　そ、そんなこと……」

「迷惑でしたか？」

「そ、そんなことない！　そんなことはないわよ！」

「ミースは必死で言い繕う。彼が目覚めたら言おうと思っていたことが沢山あるのに、いざとなったらまったく言葉が出てこない。

でも、これだけは言っておこう。

「ねえ、祐作？」

「何ですか？」

「好き……だから。私は祐作が好き」

彼は一瞬だけ啞然と口を開き……。

良く言った、と満足気に微笑んだ。

66：番外編「不死者」（後書き）

一ヶ月ぶりに更新。長らく音信普通になっていて大変申し訳ないです。本編の続きがあまりしっくりこなくてUPできないんですよね。と言う訳で、期待してくれていた人には申し訳ないんですけど番外編です。

今回の番外は倉渕祐作×ミス・ミューゼル

なんか のカップリングって完全に予想外www
自分でも何を書いているのかと笑いました。つか、やっぱり恋愛っぽい場面を書いていると、恥ずかしさからキーボードの前で身もたえしてしまいます。

これからも、少しずつ番外編を書いていきます。登場させて欲しい人物のリクエストは感想やメッセージ等で受け付けている……かも？

この小説の主要登場人物をリスト化してみると物凄いことになりました（笑）

朽葉悠斗（蛭子） 緋芽（大照津姫）

姫川咲夜（火之迦具土神）

クリス・リンディア（リリス）

朽葉海斗（？）

クロード・キリングゲート

アリス・キリングゲート

百合原綾香

茜崎克己 山岸雪子 立花健一郎

草壁涼二 仙石和希（死亡） 九重香澄

ミハイル・アレンスキー・ナザール
御剣蒼夜(金山毘古神) 佐々木流水
滝川隆太 来宮聖 大泉大悟(死亡)
立花健一郎 支倉沙希 中島幽香
倉渕祐作(死亡 蘇生) 川崎美野里(死亡)
弥栄玄一 ランスロット・ミューゼル
ミス・ミューゼル ヘルマン・ガーランド
ハインリヒ・ベッケンバウアー
ヴィルヘルム・ツヴァイク
ジークフリート・フォン・ストラウス

69：終焉の始まり

all prologues of the Last Darknes

終焉の闇 失墮の花園

死骸を火葬にして灰を川に投ぜよ【エンゲ

ルス - 遺言】

私たちは未だ、統率者たる者を迎え入れていない。失墮した神々
は個々の戦闘能力には秀でてているが、連携などを知らぬ悪魔憑きば
かり。世界への憎悪と欲望を満たすために、とりあえず手を結んで
いるといった状態だった。

私は考える。本当に、我々がこの世界を統べることが可能なのか。
欧州の魔術結社の支配体制は揺るがせた。それは、魔術結社側も連
携という概念を取り入れていなかったからだ。魔術師の旧来の体勢
は、各々の領地を各々で統轄するやり方で維持されてきた。その考
えが、魔術結社側から抜け切っていなかったのである。

だが、これからは、そう甘くいくとは思えない。

半分以上の戦力を壊滅させられた魔術結社は、全戦力を集結させ、
ひとつの組織として動き出すだろう。裏から支配していた領地を併
合し、面世界のEUのような魔術師連盟が完成する。それが、必然
と思われる流れだった。

イギリスの魔術結社 ニュー・ブリテン王国騎士団。

フランスの魔術結社 薔薇十字結社。

ドイツの魔術結社　　神聖プロイセン同盟。

ドイツの魔術カルテル　　キリングゲート家。

イタリアの武装宗教集団　　法王庁教皇騎士団。

ポーランドの魔術カルテル　　シャミール家。

これら大勢力が同盟を結ぶ用意をしているとの情報が、私の情報網に引つかかったのは先月中頃のことだった。もう、奴らはお互いの情報交換と戦力補充を終え、万全の体制を整えているだろう。対するこちら側の悪魔憑きは八十六。戦力を集中させて確固撃破するのが最善の策なのだが、こちら側が連携してひとつずつ敵を倒していけるかは、甚だ不安にさせてくれる。

私はこの組織に足りないと感じているものがある。
総てを統べる悪魔の王。

何処かに居るはずだ。七つの大罪を支配し、六つの魔王を配下に置く魔王が　　。

虐殺の王にして傲慢の王　　ルシフェルが　　。

十

御剣蒼夜はふと、薄青の空に目を向けた。

「どうなさいました、坊ちゃん？」

小脇に控えていた執事、佐々木流水が蒼夜の目の前で立ち止まる。流水は老齢ながら未だに頑強な体躯を持っていて、平均的な体格の蒼夜よりひと回りも大きい。陽射しが遮られ、黒い影が自分にかか

る。

「いや……」

言葉を濁す。蒼夜が手にした小太刀は血に濡れていた。流水が手にした野太刀も血に濡れていた。お互いに返り血を浴びて、鬼面と化しているのは言うまでもない。それでも、敵は一向に減る気配を見せない。

真昼間からの襲撃。

一体何者が、と思った。だが、その名前を聞いて妙に納得した。「失墮した神々、か……」

有象無象の黒い影は、敵側の使い魔なのだろう。およそ五十体。性能を切り捨てて、個体数を増やした雑兵だった。これが、悪魔の持つ基本能力『軍団の王』なのだ。

蒼夜は小太刀を順手に持ち帰る。雷鳴閃を発動させ、プラズマの刃を刃先の延長に出現させた。ひと薙ぎで十二体の影が蒸発。さすが足元に金属の針を出現させる。味方を盾にして突撃してきた影は、数百の針に穿たれて消滅した。

流水が野太刀を振り回す。対象領域そのものを破壊する出鱈目な剣術が、雑魚どもに襲いかかる。射程の概念そのものを延長された斬撃が、影を両断する。

蒼夜はひたすら、ただ作業的に敵を葬っていく。

「そついえば、今日はお前の孫の誕生日だったんじゃないのか？」
「……いえ」

流水は押し黙る。

戦闘中に交わすべき会話ではないから、流水は黙ったのだ。蒼夜はそう思った。

「あのようなクソガキに、佐々木を名乗る資格はありません。あれは開祖の遺訓を破り、ただ己の強さだけを求道する馬鹿者ですからな」

「喧嘩したのか……」

年甲斐もなく、五十歳も年下のガキと喧嘩したらしい。そんな執

事を見て、蒼夜は戦闘中なのに頭痛がした。

十

蒸し暑い一日だった。

背後からたらたらと垂れ流されるブリーイングが、いちいち作業の流れを止めてしまい、佐々木秋水はしゅうすいどうにも居た堪れない気持ちになって、つい刀の鍔口を切ってしまった。

「おい！ 何をする気だにゃー！」

「いや、ウザイから叩き斬ろうかなーと思ったからさ」

あんまりなストレートな物言いに、ヘンテコな口調の友人、茜崎克己が涙目で抗議する。

くたびれたワイシャツ、砂ぼこりで煤けたスラックス、ゆるゆるに巻きつけられたネクタイなど、もう色々と諦めているのではないかと思われる格好をしている。髪を染めるのも面倒になってしまったのか、克己の髪には黒と茶色が入り混じっていた。

彼の幼馴染が今の姿を見れば、迷うことなく拳骨を落とすはずだ。だが、現在、山岸雪子は実家の方に戻っていて、夏休み中に帰宅する見通しは立っていない。彼女も寮生活で溜まった鬱屈から解放されたい学生の一人だったらしい。まあ、まだ同じクラスになって半年も経っていないし、雪子とはそれほど親密な付き合いをしていないので、詳しい事情は分からないのだが。

「さて、問4に入るうか」

「むー、なにになに……？ 火属性魔術の三つの概念を答えよ？」

「典型的な基礎魔術理論の問題だね」

「むにゃー、わかんねー！」

頭をかきむしる克己を放置して、秋水はルーズリーフにペンを走らせる。祖父から贈られた万年筆が、黒いインクを紙に乗せる。意

味もなく、『紙』は『神』だ、と語った祖父の言葉を思い出した。

火属性基本概念は『燃烧・放熱・変化』である。物は燃え、熱を放ち、形を変えらる。複雑な定理を暗記しても、すぐに実戦簿記で役に立つことはないように、この基本概念も暗記したからと言って何か得する訳でもない。だから、典型的な基礎魔術理論なのだ。

部屋のドアが開け放たれた。

「ごめん、遅れた！」

「おせえぞクロード！ 罰ゲームとして今日一日はノーパンで過ごしたまえー！」

「どうしても言うなら、克己が僕のパンツを脱がしなよ」

「にやんだとー！？ 誰がすき好んで男のパンツを脱がさにやならんのかにやー！？」

秋水は「ウザイ」と一言呟いて、万年筆を克己の腕に突き刺した。「うぎゃああああ」と耳をつんざく悲鳴が響き渡り、クロードが痛そうに顔をしかめる。秋水は知らぬ顔で、広げたノートに文字を書き連ねていく。

「顔に似合わずエグイことをするね、佐々木君は」

「秋水で良いぞ、串刺し公」

「串刺しって……えつ、それって僕のあだ名なの！？」

「ああ、すまん。『朱剣』だったか」

「……そこまで知ってるんだ？ 流石は佐々木家の嫡子。ただ者じゃないみたいだね」

「……………」

取り合つのも面倒なので、秋水は二人を放置する。

ただ、佐々木と呼ばれることに抵抗があった。祖父の言葉が……「お前には佐々木を継ぐ資格はない」……が記憶から蘇える。苦々しい思いが胸中に広がり、そんな思考をかき消すかのように、課題に没頭する。

「無駄話はそろそろやめようか」

「だな」

「えー、もつとお話したいにゃー」

こうして三人で夏季休講中の課題を消化することになった。

「って無視!? 無視ですかにゃー!?」

「……………」

無言の時間が過ぎる。

午後六時を示す時計の鐘が、男子寮内に鳴り響いた。

「克己は、さ……………」

ボソリと、か細い声でクロードが呟いた。

「山岸さんとは、どうなの?」

「むにゃ!? ど、どどど、どうして雪子っちが出てくるのかにゃー!?」

「……………」

「まだみたいだね」

溜息を吐く金髪に、克己は「クソッ、それが彼女持ちの余裕って奴かよ!」と叫んだ。

初耳だった。あの林念仁のクロードから、まさかこのような色恋沙汰について聞かされるとは。オマケに彼女持ちとは恐れ入る。朽葉悠斗が退学した先輩や、新しく入ってきた後輩と妖しい関係になっているのは、風の噂で聞いたことがあったのだが。

そうか。

「この金髪には彼女がいるのか。」

「って、秋水君!? どうして刀を抜いているの!?!」

「いや、ウザイなーって思っただけ」

「”つい”じゃないよ!」

妙に平和な、そんな時間だった。

そんな時間も、不意に終わりを告げる。

「そう言えば、失墮した神々のことを聞いたことがある?」

空気を読まないクロードが、すべてをぶち壊しにしたのである。

さらさら、さらさらと……。

山林の中、水深の浅い川が流れている。僻地にある山林。その奥地に山寺があった。

「陰陽五行、水の理」

何気なく、呟いてみる。その行為にどれだけの意味があったのか、本人にも分かっていない。ただ、このような景色を見ると、無意識に意識してしまう。この世界の法則を解読する自分たちの矮小さと罪深さを。

山寺の境内。ホウキで砂ぼこりをかき集めてからバケツで水をぶちまける。

八月。暦では初秋に入るのだが、まだまだ真夏真っ盛りと言ったところだ。

「……さて、修行でもするかな」

狩衣を着た青年　八神真治は眠たげにぼやいた。

無人の寺で時間の感覚を忘れて、修行僧か世捨人同然の生活を送ってきている。特にやらなければならぬと言っことは無い。縁側で日向ぼっこしながら昼寝するのも魅力的である。

それとも、そろそろ山を降りてみるか。

クロードをからかうのも楽しそうだし、克己と喧嘩するのも一興である。悠斗と将棋を指すのも良いかもしれない。百合は……まだアカデミーに在籍しているのかは分からないが、彼女を口説くのも面白そうだ。

……でもまあ、すべてが幻想なのだが。

真治の存在は皆を苦しめる。三男とは言え八神家の嫡流に生まれた真治は、どのように動いても政治的影響力を持ってしまっているのである。あのままアカデミーに籍を置いていたならば、悠斗やクロード

たちが八神派だと誤解されてしまう。

八神家の魔法庁への影響力は、思いのほか大きい。友達を勢力争いに巻き込むのは忍びない。

さあつと、風がそよぐ。

真治は目を細めた。

「侵入者、か……」

先ほど、山の全域に張られた結界が 破られた。

結界としての防御力はさほどのものではないが、侵入者を探知することに長けた結界である。侵入者にとって、これほど都合の悪い結界は存在しない。おそらく侵入者は探知されるのを恐れて結界を破壊したのだろう。

これを破壊するためには『御剣流結界術』を破れるほどの実力が求められる。

真治は狩衣の袖口から、短冊型の紙を取り出した。

『祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり』

結界からこの山寺までの距離はおよそ五百メートル。

最低でも一分の時間的猶予がある。

『娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕す』

その詠唱は二十秒。

超一流の魔術師が二十秒も詠唱を行う魔術である。

『驕れる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し』

それは、高次元展開型結界魔術だった。

指定領域に侵入した者の魔力をワンランク、ダウンさせる効力を持つ、八神家の中でも真治にしか使えない結界魔術である。

八神家の三男でしかない真治は、良くこう呼ばれることがある。八神の神童。八神の麒麟児。八神家初代当主、八神元春の再来と。

『たけき者も遂には滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ』

八神家の陰陽術は、紙に八卦を書いた、特殊な符を使用する。八卦とは乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤の八つの文字とその組み合わせで物事の吉凶を判断する占術である。真治はこの八文字の中から状況に合わせて最適なものを選択する。

このため、八神の魔術は魔力消費が異常に少ない。

どんな魔術でも最善・最短の工程で構成されるのだ。占いにより魔術作成の過程が最適化され、構成速度と消費熱量が自動的に調整される。

そして、結界が完成する。

『八神流結界術、六十四卦祇園精舎』

発動。

十

街中のオープンテラス付きのカフェでは、二人の女性がコーヒードレイクを楽しんでいた。一人は背が高めで身体が引き締まっている若い女性、支倉沙希。そしてもう一人が髪をポニーテールにしている小柄な少女、三條百合である。

百合は空を見上げていた。

冴え渡った蒼穹のスカイブルー。曇りひとつない大空に、ふと違和感を覚えたのだ。

「……真治……君？」

「どうしたの？」

沙希が首を傾げながら問いかけると、百合の瞳が揺れた。ただごとではない気配がする。これはもう、沙希の直感だった。

「そんな……そんなことって……！」

「ちよっと、落ち着きなさいよ。さあ、深呼吸をして……」

百合は首を横に振った。

「真治君が……死んだ……？」

沙希は手からティーカップを落とす。

十

最近西洋で勢力を伸ばしている魔術結社、失墮した神々。

その実体は悪魔憑き（神憑き）の集団である。彼らは世界に散在する悪魔憑きを仲間に取り込み、組織の力を拡大して、魔術の世界を自らの手で牛耳るために活動している。

「楽しかった……な」

年のほどは二十五歳前後の青年だった。くせつけのある茶髪、頬にはそばかすが目立っていて、大人しそう……と言うより気弱そうな青年である。

青年は右手の血に濡れた剣を見下ろした。

「また、やつちゃった……」

足元の死体を見下ろす。よく分からない日本の衣服を着た、自分よりもひと回りも年下の青年だ。幼さを残した顔は、まだ少年と言っても通用するだろう。

「どうした、バアル？」

背中にかけられた声は、少し音程が外れていた。

振り返る。

「どうしたって、何が？」

「い、いや、何でもない」

自分を見る目に恐怖が宿っていた。それが、青年には理解できない。

同行者はラテン系の青年で、自分と同年代だったのだが、彼はなぜか自分に話しかけてこない。ラテン系は陽気だと聞いているのだ

が、彼だけ例外なのだろうか。

「仕事も終わったし、さっさと帰ろうか、ハルファス」

「ああ、分かった」

ラテン系の青年は頷き返すが、そこから動かない。

「どうも、自分に背中を見せたくないらしい。仲間なのに、どうしてそこまで警戒するのだろうか。」

「お、おい、バアル」

「……ん？」

「帰らないのか？」

「そう言われて、ごもつともなことだと納得する。」

「だが、まあ……。」

「帰るよ。でも、その前にやることがあるから」

「え？」

「君みたいな弱虫は、ちょっと嫌いかな？　じゃあね」

「まさか　おい！　やめ　っ」

ゴツ、と音がした。首の骨が叩き切られたのだ。目視さえ許さぬ瞬速の剣戟である。おそらく彼は、苦痛も感じずに逝けたはずだ。

そう、彼は弱虫だった。力がなくとも自分に誇りを持って胸を張っている者もいるだろうに、彼はその程度の自信すら持てないのだ。だから、先ほどの戦闘でも怯えて遠くから眺めていただけだった。

最低でも敵の逃走経路を防ぐ程度はやっておくべきなのに……。

そのような者が、失墮した神々に所属しているのだ。

許せるのか？　いいや、許せないに決まっている。

だから殺した。彼は自分たちには必要ない。

「リリースも、そのところが分かってなかったからね。アモデウスには悪いけど、やっぱり僕は勇気のある人と友達になりたいなあ」

青年はぼうっと視線を彷徨わせた。

この国にはどんな悪魔憑きがいるのだろう。せめて、自分に怯えない者が欲しい。できればそんな人と友達になれたら良いと思う。

青年はクスリと笑うと、剣を鞘に収めて山寺から去って行った。

指先に焰が燈る。腰の軸を捻り、回転を加えて投擲された蠟燭サイズの炎は、銃弾の速度で飛翔する間に、五十センチまで膨れ上がった。

炎はそのまま一つの人影を呑み込み、あっと言う間に一つの命を滅ぼした。

中島幽香は無表情に、五本の指先に炎を生み出す。

敵側から悲鳴が上がる。小規模の魔術カルテル『黒錬』の構成員たちが、我先に逃げ出そうとしていた。幽香は逃げる者には構わず、前方の四角い建物を見上げた。

三階建てで、こちら側からは六つの窓が見えている。一階は入口だけで、窓は取り付けられていない。二階に三つ、三階に三つの窓があった。そこから、六つの銃口が幽香を狙い定めている。

距離は五十メートル。

魔法による攻撃では、建物が消滅してしまう。幽香の魔法は威力は凄まじいのだが、精度に欠けているのだ。幽香は狙撃手を一人づつ”砲撃”することはできても”狙撃”することはできない。

すかさず魔術を詠唱。

『赤く赤く、爛々と』

三発の火炎球が、天頂から三階の窓を爆撃する。炎は三階の床を突き抜け、二階を灼熱地獄に代えると、一階で燃え広がった。六人の狙撃手のみならず、その他大勢まで焼死したことだろう。

だが、幽香は何の感慨も抱かない。

価値のある命、価値のない命を語るつもりはない。中島幽香の人生は”朽葉悠斗”のためにある。ただ、それだけだ。その他大勢の、悠斗に関わらない者が死んでも、何とも思わない。思えないに決ま

っている。

その生き方は、どこか歪だった。

朱色に近い色をした茶髪の少女は、ゆっくりと歩を進める。彼女の周囲の空気に触れ、金属製の入口が勝手に熔解した。入口で待ち構えていた魔術師たちは、それを見ただけで戦意を失い、及び腰になっっている。

「どうして『フレア・ギガンテス 火炎魔人』が我々を襲撃するのだ!？」

「……お前は？」

「『黒鍊』の主力、安川刑だ。どうせ知らんだろうが『消魔』と呼ばれている」

小振りな眼鏡をかけた、三十代に入る前の男性だった。剃り跡の残った顎は青々としている。どうやら『異名持ち』のようである。ならば、中々の実力を持っているのだろう。

それでも、その程度では『フレア・ギガンテス 火炎魔人』には敵わない。

『悠久の凍土を切り開け、白き刃よ』

刑が右手を軽く振ると、虚空から白い刃がその手に現れた。

「……そう。やっぱり抵抗するんだ」

「抵抗しなければ死ぬのだからな。当然だろう？」

「嘘」

「ッ!」

ボソリと呟いた幽香に、気圧された刑はわずかに後退りする。

「お前が魔術カルテルの主力？」

「ああ、そうだが……」

「安川刑。失墮した神々の構成員。アマイモンって呼ばれている。

間違いない？」

「……ふふっ」

安川は刃を構えた。

「なるほど。すでに其処まで知っていたか。ならば話は早い。早々に始末させて貰うぞ!」

「……化けの皮が剥がれたね、悪魔憑き」

「貴様の灼熱は通じん！」

刃を振りかぶる刑に、幽香は左腕を向ける。手の平から拳大の炎が生み出され、高速で射出される。同時に右腕で地面を焼き払う。部屋中を覆い隠す炎が、煙幕の役割を果たした。さらに、この炎で相手の酸欠を目論む。

「効かんぞ！」

だが、炎は幽香の意識を離れ、瞬時に収束する。

やがて炎は安らかに立ち消えた。

「ふははっ！ どうだ、私の『デッド・エリア統制支配』は！ あらゆる魔法の支配権を奪い、我が物のように操る秘法！ これが、あらゆる魔法を越えた魔法なのだ！」

大量の炎は刑の左手に集められている。支配権を篡奪する魔法。刑が命じれば、その炎はすぐさま幽香に襲いかかることだろう。

「……なるほどね。悠斗の『七つの大罪』と同じ性質を持つてるんだ？」

幽香は苦笑した。

問題ない。どれだけ幽香の炎を集めたところで、幽香に炎は効かないのだから。

幽香は一度、魔法を解除した。周囲に立ち込めていた火の粉や、刑の左手に集められた炎は魔力の供給源を失い、自然消滅する。

「おやおや、何をするつもりだ？」

「本気モードに入っただけ」

右手を宙に向ける。

そこに、炎が生まれた。

クリムゾンの炎ではない。

蒼い炎。

オリエンタルブルーの炎だ。

「こっ、これは！？」

「赤い炎は燃えていない。小学生でも知ってるよ」
幽香は蒼い炎を振り下ろした。

支配権を奪う暇もなく、安川刑は蒸発した。

十

水面が陽の光を照り返し、キラキラと輝いている。見る者の姿勢や角度、波の揺れなどで光の加減が変わってくる。そんな些細なことでも面白いと感じることができる。

来宮聖は縁側に腰を下ろし、屋敷の庭を流れる川を眺めていた。女性としては平均的な体格でありながら、彼女は少しやつれていた。痩せ細っていると言える。だが、これでも先月よりは大分良くなっている。数年前までは持病のため、入退院を繰り返していたのである。

「体調は？」

「今週はまだマシかな。大丈夫だよ、隆太君。私なんか心配なんて要らないから」

「そうか……」

自分を卑下する聖に溜息を吐きつつ、隆太は彼女の隣に座る。無言で川の流れを見詰めながら、この前のことを考える。

先日の対ミハイル戦で、隆太はわずかながら手傷を負っていた。あのときは、とりあえずカマをかけてみただけなのだが、ミハイルの反応からして大体は予想通りのことになっているのだろう。校長の陰謀説は、まだ想像の範疇から抜け出せていない。

これから少しずつ、証拠を固めていくしかないだろう。悠斗を納得させられるだけの証拠があれば、他の者も自然と彼に従うはずだ。ミハイル・アレンスキー・ナザーロフ。あれには勝てる気がしない。中島幽香の火炎並みの大火力である。隆太には荷が重すぎる。

「隆太君は……えっと、その……」

「何だ？」

「……あの、その、ね」

隆太は言いよどむ聖を、時間をかけて見守った。

「……いつになれば戦いが終わるのかな、って思ったの」

「終わり、か」

果たして、魔法使いの戦いに終わりはあるのだろうか。いつまでも争い続けるだけなのではないか、と隆太は思う。目の前の敵を倒しても、また新しい敵が湧いてくる。だから隆太は敵を殺して、殺して、殺し尽くしてきた。

それが先の革命で『瞬刃』と呼ばれた隆太であり。

アカデミーを退学してから『殺戮の光』と呼ばれた隆太である。

「終わりがあるなら、俺は救われるよ」

刃物は斬るために存在する。それが隆太の存在意義だ。

「隆太……君……？」

「ああ、いや、すまん。ちょっと頭冷やしてくる」

「あ……うん」

だが、時に考える。聖と一緒に、誰にも干渉されない場所で、平和な一時を過ごしても良いのではないかと。たしかに、一理ある。だが、それでも隆太は敵を斬り続ける。敵を探して敵を斬る。その考えを捨てきれないほど、隆太は人の命を奪い過ぎた。

もう、戻れないのだ。

だから、敵を殺す。『瞬刃』は血を求めて彷徨い出す。

隆太は懐の匕首を確認し、屋敷の外に足を運ぶ。二人の様子を窺っていた影が離れていく。二人きりで話したいと言うことなのだろう。

幸いまだ聖は気付いていない。

「これが噂の悪魔憑きって奴なのかね……？」

たった一人で敵陣に攻め込んだ気概は評価しよう。

だが、『瞬刃』を相手取るなら、最低でも十五人は用意しやがれ、

と言いたい。

「どちらさんかな。新聞勧誘はお断りだぜ？」

「いえいえ、すぐに終わりますから」

陰湿な男だった。草壁涼二もどちらかと言えば陰湿な顔をしていたが、こちらの男には草壁にあるような信念のようなものが感じられない。ただ、ひたすら深いだけの闇がそこにあつた。

できることなら、お近づきになりたくない相手だ。

アカデミー校長、弥栄玄一の陰謀には、コイツらも関わっているのか？

「……悪魔ベルゼブブが使徒、グリード・ボテツキアと申します」

イタリア系の名前である。

グリードは懐から短剣を取り出した。

「遅い」

その手首を、隆太の刃が切断する。

瞬間、グリードの頬がにいと吊り上がった。同時に隆太も両目を見開く。斬られた腕が瞬時に再生したのだ。傷痕ひとつ残さない見事な治療である。

「痛いですねえ……」

「……段々と気持ちよくなるさ」

宣言と同時に、七条の銀の光が大気を切断する。

滝川隆太の魔法『プラチナ・カッター銀河斬光』である。その仕掛けは『斬撃』の概念を付与した光を飛ばす……というところにある。刃を飛ばすのではない。光に触れた対象に”斬られた”と言う概念を与えるのである。

この魔法が通用しない例外は、草壁涼二の魔術・魔法無効化か、今は亡き川崎美野里の存在率の操作である。他にもミハイルのように膨大な雷を展開し、光が届かないようにすれば、斬撃概念を回避することもできる。同様に、幽香の炎でも回避ができるだろう。

だから、最強の魔法ではない。

いくら光の速度で敵を切れるとは言え、その光が届かなければど

うにもならないのだ。

だが、ほとんどの状況で、この魔法は必殺になる。

隆太はひたすらグリードを斬り続ける。斬られ続ける度に、グリードが即座に傷口を回復させるが、その度にまた光が煌き、血飛沫が舞った。

「……悪魔憑きと言っても、所詮はこの程度か」

「何がです？」

「いや、そろそろ分かるだろ」

グリードは短剣を片手に隆太を斬り付けようとしているが、動きがまるで素人同然だ。

「……ただ、傷が回復するだけの雑魚じゃねーか。」

「なにっ……！？こ、これは！」

やがて、グリードの膝が折れる。隆太は特に意外でもなかった。

まさか、ここまで阿呆とは思ってなかったので、その点については驚きだが。

「超回復って知ってるか？」

切れた筋繊維が修復されると、以前よりも筋繊維が太くなる。それが、肉体を鍛えるということだ。隆太は何度もグリードの肉体を切り刻み、超回復を促進させていた。超回復自体は魔法で行えるはいえ、鍛えられた筋肉を動かすのは、体内のエネルギーである。そんな状態で戦闘を続ければ、栄養失調に陥るのは必然だった。

さらに、血を流しすぎて貧血になっていることも、体力の消耗を加速させている。

「貴様は無敵ではなかった。そう言うことだ」

「ひっ、や、やめ……！」

「喚くな。大人しく消えろ」

隆太は匕首を振りかぶる。

その時、甲高い男の声が響き渡った。

「その必要はないよ」

「ッ！何者だ！」

咄嗟に背後に飛び下がる。黒い影が、隆太の視界を過ぎつた。ドツ、と血柱が立ち上る。グリードの首が叩き落されていた。なんて速さだ。自分の目では追いつけなかった。隆太は冷や汗を流した。

「バアルって言えば分かるのかな？ まあ、そんな感じだよ」
そこには、剣を携えた茶髪の西洋人が立っていた。

悪魔バアル。

ソロモン七十二柱の魔神の一柱で、東方を支配する魔王アマイモン第一の配下にして、六十六の軍団を率いている、剣術の達人である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7370c/>

LastDarkness

2010年10月13日13時09分発行